

---

# 最高の日々！

せいせん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最高の日々！

### 【Nコード】

N3036G

### 【作者名】

せいせん

### 【あらすじ】

女の子のような顔立ち故にイジメを受けた過去を持つ彼は自分に自信が持てないネガティブボーイ……。ただ。ヘタレだってやる時はやる！そんな彼がつくり出すドタバタ学園ラブコメディー。

## 第01話 コンプレックスと始まり

相変わらず向けられる奇異の視線。“普通”とは僅かに異なった何かを感じた人は、無意識の内にその違和感の答えを探して視線をこちらへ向ける。

ほぼ反射に近いと言っても差し障りのないこの行動だが、物珍しそうに様子を窺われている側の人間にとっては、望んでもいないのに見世物になった気がして、とてもじゃないが良い気分とは言い難い。もちろん、全ての人がこの無遠慮な視線をぶつけてくる訳じゃないし、俺自身が自意識過剰なだけなのかもしれない。

小さい頃からこんな状態なのだから、良い加減慣れてしまった部分もある。正直、普段の何気ない生活の中では気にならなくなったと言ってもいいし、それに加えて自分で言うのも何だが、俺の頭は中々に愉快的構造をしているらしく、今日まで結構楽しく過ごせている。

だけど。

その要因となっている部分が自分のコンプレックスに大きく関連している——それが、面白くない。

今更ウジウジ言っても仕方の無いことだと理解しつつも、この“顔”の所為で謂われも無い罵りを受けた過去を簡単に忘れられそうにないのもまた、事実。

他人よりも女の子に近い顔立ちをしていて何が悪い？

それで俺が何か迷惑を掛けたのか？

——自分から望んでこの顔に生まれて来た訳じゃないんだから勘弁して……。

そんな台詞を昔に吐いた自分を殴り飛ばしてやりたい。それが、父さんと母さんをどれだけ悲しませるのか分からないはずもない。

「フフ、昔の俺は馬鹿だったんだ……」

幼き頃の自分を思い返し、クールさと大人の雰囲気醸し出しながら小さな溜息を吐く。この数年で大きく成長したのだ、俺は。いわゆる、イジメというやつは本人が気にしていなくても、その大小に関わらず心の中に傷を残しているのだと思う。特に、心が未発達な時期においてのイジメというやつは性質が悪い。

それが友人の何気ない言動だったり、とある夜に見た追憶の夢によつて意図も簡単に開いてしまう。きっかけは些細なこと。されど、一度開いた傷を再び閉じるには、途方も無い時間か、大きな転機が必要になる。

そして、俺の場合は。

「ふむ、安心しろ。現在進行形でお前は馬鹿継続中だ。おめでとう」「あ、どうも、ありがとう——ってオイ！ 誰が馬鹿継続中だ。この天才に向かつて失礼だろ」

「ほほう、お前如きが天才を名乗るか。それも、この俺を前に。恥知らずも甚だしいものだ」

「ぬ、ぬう……」

目の前の男子、藍田<sup>あいだ</sup> 修<sup>しゅう</sup>が不敵に笑うのと同時に、俺は言葉を失った。

道行く人々の多くが、俺とはまた異なつた視線を修へと浴びせる。しかも、その大半が女性ばかり。180を少し越える長身に加えてサラサラの髪と甘いマスク。さらには少し色白であることから、一言で形容するならば王子様といったところだ。15歳と、まだ幼さの残る年頃ではあるが、どこか達観している雰囲気のある素敵王子様は不思議と同年代よりも大人びた印象を受ける。

朝日のスポットライトの下、もしハニかんでもみようものなら王子様に憧れを抱く女性は卒倒必至。性格に少々難ありだが、困った人を放っておけないボランティア精神も持ち合わせていやがる。

それだけならまだいい。これだけのルックスを持っていながら“それだけ”というのも変な気はするが、今は置いておき俺が言いたいこと。それは、中学卒業時に成績優秀者として表彰されたことと所属していた部活の最後の大会で県下ベスト4まで勝ち進んだことである。後者は団体競技なのだが、主将であつた修の活躍は一目瞭然であり、その容姿もあつてか雑誌に載せられた上に、そのプレイは高い評価を受けていた。即ち、王子様は文武両道でもあるのだ。

と、まあ、ここまで完璧に仕上がってしまったのが、世の男子諸君の宿敵ともいえる藍田 修なのだ。

そして、俺はこいつに大きな転機をもらった、と。

大分、というより端折過ぎて何がどうなったのか理解して頂けないかもしれないが、こいつと出会つたことによって、俺の世界が変わつた。ただそれだけである。

今もこうして歩いていると、俺を視界に入れるまでも無く、修が注目的になつてくれる。女性から常に熱い視線を浴びるその光景は、見ていて殺意を覚えないことも無いのだが、こんなものは慣れだ。拳をぐつと握り締めて心の中で一言『いてこまずぞ』と呟いて終了。……フフ、負け犬根性バンザイ。

「凄い人だなオイ……さすがは栄稜」

「それにしても、今だに信じられん。お前がよく此処に入れたものだ」

「ですよー……」

私立栄稜高校。県下でも指折りの進学校……という訳ではなく、偏差値を見ても平凡から少し毛が生えた程度。これだけ修が感心しているのは、ただ単に俺の学力が致命的なだけで、修に関しては入試前日に軽く勉強をした程度だと抜かしていた。

素敵王子様ほどの学力ならば県下トップの高校でも難なく突破出来そうなものだが、修曰く、大学入試で実力を発揮すれば何の問題も無いそうだ。

こっちは死に物狂いでようやく栄稜への入学を果たしたというのに、修はぬるま湯に浸かっていたいとの理由でこの高校を選んだらしい。まったくもって腹立たしい。

「ん……？　なるほど。あれがクラス分けということか」

修が指す方向にあったのは、新入生らしき生徒でこった返す掲示板。その光景を目にして近付くことを躊躇ったが、それに反して修はさっさと掲示板へと向かって行った。

「……おお。王子様のお通りって訳ね」

掲示板に群がる女子生徒の一人が、後ろから近付く修の存在に気付いて固まったのも数瞬の間だけ。頬を染めながら恥ずかしそうに

修へと道を譲った。

当然それは一人だけに留まらず、連鎖して次々と修へと道を譲る顔の紅い女子生徒達。そして、それに圧倒されて事態のイマイチ呑み込めていない男子生徒達も何となしに道を譲る。まさかのリアルモーゼの十戒だ。

俺はその開いた道を軽く会釈しながら修に続いて進んで行くのだが、時折俺を女子と勘違いした女子生徒達が尋常じゃない殺気の籠った眼でこちらを睨んでいた。

そんな視線に晒されて短く『ひっ！』と悲鳴を上げながらも、俺が男子の制服を身に纏っているのに気付くやいなや、元の恍惚とした表情に戻して修の後ろ姿を追っていた。

「どうした？ 随分と疲れた顔をしているが」

「……絶対寿命縮んだ。何年か絶対縮んだ」

「……？ まあ、いい。それよりも見る。クラス分けだ」

気だるさを感じつつも、修に促されて掲示板へと目をやる。知らない名前がずらずらと並び、これだけの数があれば自分の名前を探すのも一苦労だ。

A組、B組、と見落としの無いように順番に探していき、C組の先頭に藍田 修の文字を確認する。

何となく、このクラスだけは勘弁して欲しいなー、なんて思いながら引き続き自分の名前を探すのだが、その願いも虚しく同じC組に俺の名前である、加住 涼かすみ りょうの文字を発見。

呆然とする俺の隣で、修が不敵に笑みを浮かべていた。

「ほう、奇遇だな。また宜しく頼むぞ、涼」

「……へいへい」

ほんの少しだけ、唯一の知り合いである修が同じクラスにいるの

は心強い。

しかし、修が“また”と言った通り、俺達2人は小学校で知り合ってからというものの毎年同じクラス。この無駄に凄い偶然を別のところで活かせばどれだけ幸せになれただろうか。

まあ、素敵王子様が同じクラスにいれば自然と注目はそちらへと向くわけで、俺の容姿に興味を示す風変わりな連中がいなくなるのは正直嬉しい。折角だから、今年も隠れ蓑みのに使わせてもらおう。

「今年で何回目だろなー、お前と同じクラスになるの——っていないし！」

これっぽちも感慨深く無い思い出の数々を思い出しながら、隣にいるはずの修の方へと向くが、肝心の本人が忽然と姿を消していて思わず周囲を見渡した。

いつの間にか周りは来た時と同じように生徒で溢れ、その場では身動きが取り辛いほどだ。

体を隙間へと滑らせながら人の垣根を抜けて何とか離脱に成功した俺は、消えた修を探すべく、再び辺りを見渡す。

「……あ、いた」

その視線の先には、クラス分けを確認しようとする集団とはまた別集団の中心で、顎に手を当てながら何やらお悩みの王子様が突っ立っていた。

しかも、どうやらその別集団は全員が女子らしく、中心にいる修が羨ましくて仕方がない。

「ふむ……む？ おお、涼。すまんがモテる男は忙しいのだ。先に教室へ行ってくれて構わんぞ」

嫌味？ 嫌味っすか！

周りを取り囲んでいる女子の方々を虜にするあの爽やかな笑みは詐欺としか言い様がない。

俺はその悪意を確かに感じ取りながら、大袈裟に地団駄を踏んでぺべつと唾を吐いてから教室へと向かうのだった。

「あんな奴、もう友達でもなんでもないやいつ」

ふんふんつと鼻を鳴らしながら教室へと歩みを進める。どうやら1年生の教室は1階らしく、昇降口から廊下に出て手前から順番にA組、B組、C組——と教室が並んでいる。

1-Cは昇降口から3番目に近いということもあり、思いの外すぐに辿り着くことが出来た。

緊張と共に教室の扉を開くと、数人がそれに反応してこちらを見たが、興味を失ったかのようにすぐ視線を逸らした。

どこに座つてよいの分からず、辺りをキョロキョロと見渡していたが、よく見るとごく丁寧なことに机の右端にそれぞれ出席番号と名前の書かれた紙が張られており、俺はそれを頼りに自分の席を見つけてさつさと席に着いた。

窓際の1番後ろ。春の木漏れ日が差し込むこの席は当たりに違いない。んゝグッ。

「ふっふっふゝんゝゝ」

陽気に誘われて、何の恥じらいもなく下手くそな鼻歌が自然と零れる。ああ、もう、気持ち良いから伸びまでしちゃう！ はい、せーの！

「ぶわっ！」

勢い良く両腕を天井に向けて突き上げながら大きな伸びをする。突然俺がそんな行動に出た為か、隣の住人が驚いて筆箱を落としていたが、ごめんねーと心の中で謝罪してから伸びに欠伸をプラス。悪びれる様子を感じられないかもしれないが、一応は反省しているつもりだ。

「ふわあ〜あ」

人目もはばからず盛大な欠伸をひとつ。  
しかし、その欠伸の最中に違和感を感じた。

隣の席から注がれる何とも言えない視線。俺は正面を向いているが、それでも気付いてしまう。隣の住人は間違はなくこっちを見ているのだ。それもチラチラ見るのではなく、凝視だ。

あれか、お前の所為で筆箱が落ちたのに謝罪も無いのはどういう了見だこの野郎ってか。……ごめんなさい。せめてもの償いとして今から静かにするからそれで許して下さいお願いします。

「……………」

「……………」

「  
……………」

……あなたも中々しつこいですね。

まさかとは思うが、もしかして俺に一目惚れ！？ ……ないな。

ああ、ない。しかも、もし隣が男子だったらそれこそ危険過ぎる。

依然として凝視を止めようとしないう隣の住人の確かな嫌がらせに、  
どんどん委縮して気が気でない。

その場の空気に耐えきれなくなつた俺は、なけなしの勇気を振り  
絞つて意を決して話しかけてみることにした。

「な……何？」

自分でも笑えるぐらい小さな声しか出なかった。そして、振り向  
いた先にいたのは、これまたとんでもなく可愛い女子。

一心不乱にこちらを見てくれるのは嬉しいが、それはそれで何だ  
か居心地が悪い。

少しずつ変化していく女子の表情を見つつ、相手の出方を窺った。

「あっ！」

「あっ！」

相手が突然声を上げたことに驚いて、何となく釣られて思わずオ  
ウム返しをする間抜けな俺。

小心者の俺としては、びっくりするからあまり驚かさないで欲し  
いと思う今日この頃。

「あ、あの」

緊張した面持ちで口を開いた女子に、何となく身構える。別にと  
って喰われる訳でもないのだから、もっとリラックスして余裕のあ  
る態度で振る舞いたかったのだが、相手の緊張がこちらにまで伝わ  
って来てついついその雰囲気呑まれてしまった。

「なつ 名前は……えと、その……何、ですか……？」

これだけ緊張しているのだから一瞬何を言われるのかとドキドキ  
したが、聞いてみれば何てことのない、ただのコミュニケーション  
だった。

同じクラスの上に、隣の席になったんだから仲良くしよー、って  
いう感じかな？ 同感だ。この緊張は彼女が人見知りする性格か何  
かだからだろう。うん、納得。そうと分かればこちらももっとフレ  
ンドリーに接することが出来そうだ。

「加住、加住 涼だよ、よろしく。見た目はこんなんだけど男だよ、  
たぶん。それで君は？」

「加住、涼……くん。涼、くん………そっか」

何ともユーモアに欠ける手抜きของตัวเอง紹介だったが、何度か俺の  
名前を反芻した後、どこか嬉しそうな彼女は柔和な笑みを浮かべた。  
それを見て、はて？ と首を傾げていた俺だったが、そんな俺の  
様子に気付いた彼女が今度は照れ臭そうに微笑んだ。

「私は高西<sup>たかにし</sup> 桃<sup>もも</sup>です。よろしくお願いします。えと……見た目はこ  
んなですけど、一応女の子です？」

聞かれても困ります！ というか、あなたはどこからどう見ても  
女の子だから！ とびつきり可愛いから！

どこか抜けていそうな雰囲気醸し出している桃ちゃんは、少し茶色掛かったミディアムヘアで小さな顔のぱっちり二重さん。ぷりぷりの桜色の唇と透き通るような白い肌はシミなんても見つからず、綺麗で、触ったらきつと吸いつくような感じなんだろうなー、なんて密かに思ってしまう。俺の主観だけでなく、客観的にも可愛い言える自信がある。

「ハハ、桃ちゃん面白いな。まあ、隣になったのも何かの縁だから、仲良くしような」

「うんつ。ちゃんと仲良くしてくださいね？」

もちろん、と余裕ぶって笑う俺が、目の前の女子に内心デレデレしていたのはここだけの話だ。

## 第02話 からかいからかわれ

ここ、栄稜高校も例外では無く校長の話は無駄に長かった。

『入学おめでとうございます』から始まり、話す事が無くなれば徐々に話は脱線。終いには『校長の1日』なるただの私生活を聞かされる羽目になった。

その時間、およそ1時間。しかも、新入生は立ちっぱなしだった。途中、教頭らしき頭の寒そうな教師が止めに入ったが、校長は華麗にスルー。『教頭頑張れ』という俺達の心の声も虚しく、あっさり引き下がってしまう教頭に対して新入生はさぞかしがっかりしたことだろう。

「えーそれでは、これをもちまして入学式を終了致します。起立——礼」

司会の教師がそう告げると、新入生及び教職員、来賓といった全員が舞台へ向って一斉に礼をする。

これでようやく開放されると思うと、これ以上ないくらいに嬉しく感じるのは、きっと俺だけではないはずだ。

「やっと終わった」

「やっと終わったな」

「やっと終わったね」

体育館から教室へと帰る道中、俺と修、それから桃ちゃんの3人で肩を並べていた。

「もう足がパンパンだ」

「私もだよー……それに、最後の方はフラフラだったもん」

「貧血か？ これから何かある度にあの校長の話を聞かされると思うとぞっとするな」

「あはは、そうだね……」

やっぱり、何もせずに1時間立ちっぱなしというのは結構辛い。実際桃ちゃんのように貧血に陥り、それで倒れていた生徒もいたぐらいだ。本当ならそこで話を止めるべきだろうが、あの校長はそれすらもスルー。いやまったく恐ろしい。

「……ところで涼よ」

「ん？」

桃ちゃんとしみじみしながら苦労話に花を咲かせていると、不意に修が怪訝な表情をしながら立ち止まった。

そんな修を前に、俺と桃ちゃんは何かと首を傾げる。

「先程から気になっていたのだが……一体この子は誰だ？ 初めて見る顔なのだが」

至極当然のようにこの場にいる桃ちゃん存在に違和感を覚えた修が、探るような目で桃ちゃんの頭から足先までを見渡した。

もつとも、修が桃ちゃん存在を知らないのは当然で、『モテる男は忙しい』云々とほざいていた素敵王子様が教室へやって来たのは入学式開始ギリギリの時間だった。

自己紹介なんてものもこの後のHRでやるだろうし、現時点で修の知り合いといえは俺ぐらいのものだ。

「桃から生まれた桃ちゃんだ。隣の席なんだよ」

「初めまして、高西 桃です。出身地は桃の……畑で取れるんです  
たっけ？ あれ？」

ノリが良いのか、はたまた真面目なのか。律義に俺のボケに乗っ  
かってくれたのは良いが、途中から頭の上に疑問符を浮かべる桃ち  
ゃんを見て笑いを堪えるのが大変だった。

「ふむ、なるほど中々……。藍田 修だ。ちなみに桃は木に生る果  
物だ」

「畑じゃなくて木でしたか、あはは。藍田くんは物知りなんだね」

「そうでもない。高西は随分と個性的な感性をしているようだ」

「えー、普通だよ？」

「なるほど、無自覚と言う訳か。フフ」

初めこそ修も呆氣に取られていた様子だったが、個性的な桃ちゃ  
んに徐々に興味を抱き初めているように見えなくもない。

傍から見ると、他の追隨を許さない整った顔立ちの2人がいる空  
間だけ別次元である。何となく、同じ場にいるはずの俺の影が薄い  
気がする。いや、実際薄い。

周囲の大多数の視線を集める2人は、それぞれ男子と女子から注  
目的になっていることに気付いているのかいないのか、楽しそう  
に雑談に興じているが、教室へ向かう生徒達の群れが立ち止まって  
話している2人に見惚れ、俺の存在に気付かずかなりの高確率で  
ぶつかっていきやがる。しかも、自分達からぶつかっておきながら  
まさかの舌打ち。仏の加住も限界だ。

「待てコラア！ 座れ！ 全員座れ！ そして謝れ！」

「あの人めっちゃカツコイイよねえ〜！」

「だよね、だよねっ！」

「あの子どこの中学だったんだろ。やべえ、カワイイわ……」

「あとで話し掛けてみようぜ」

「馬鹿。隣にいる男見てみるよ。勝ち目ないっつーの」

なるほど、集団でシカトですか。散々ぶつかっておいて居ない人扱いですか、こん畜生。

怒りに任せて声を荒げて、周囲が無反応だとびっくりするぐらいの冷静さを取り戻せるらしい。恥ずかしさで。

「高西は中学時代どうだった？ その秀麗な容姿だと気苦労も多かったと察するが」

「や、やだな、私なんて全然だよ」

「謙遜するな。今も視線を感じるだろう」

「え？ あ、あははは……」

「……戻ろつと」

楽しそうに話す美男美女の2人に放置プレイを余儀なくされた俺は、悲しいほどの疎外感を背負いながらトボトボと教室へと戻るのだった。

「ぶわあゝゝ座れるって幸せ」

教室へ帰って来るなり、疲れの溜まった足を癒すべく一目散に自分の席に着いた。

机に顔を擦り付けている所為か、周りから白い目で見られているのは気にしない。むしろ最上級の笑顔で顔を擦り付けてやった。

「本当に幸せそうだね」

「桃ちゃんもやるか？ たまらなく楽しいぞ」

「あはっ、遠慮しとくね」

その後に『遠慮するな』と付け加えるが、頑なに拒否し続ける桃ちゃんを目の前にすれば強要する訳にもいかない。

ますます擦り付けるスピードを上げて誘惑してみても、逆に悲しくなってくるだけだった。

「はい、皆さん席に着いてくださいーい」

悲しみの絶頂に達している頃、教室の扉が開かれると同時に教師らしき男性が入って来たのを境に、それまで雑談に興じていたクラスメイト達が各々の席へと戻って行く。

それを見て満足そうに頷いた男性教師は、見た目に違わぬ爽やかな笑みを浮かべながら口を開いた。

「改めましてこんにちは。このクラスを受け持つことになった、担任の弘田望ひろた のぞむです。親しみを込めて“望くん”と呼んで下さいね。歳は26で彼女はいません。若干幼女趣味の傾向があるのでその所為じゃないのかなって思ってたりますんですけどね。ははっ！」

“ははっ！” じゃねえよ！ 陽気に笑ってる場合じゃないから！  
一見すると爽やか好青年の雰囲気醸し出している望くん先生。結構整った顔立ちだし、普通にしていれば女子に人気が出そうだが、さすがに初対面でこの発言はさすがに不味かった。その証拠に、女子達を中心として少し怯えているようにも見える。

「……………」

案の定、教室は静まり返った。変態教師にとんでもないパンチをお見舞いされた我が1-Cは警戒心剥きだしだが、修だけが唯一不敵に笑っているように見えた。一体何が面白いのか謎だ。

それにしても望くん先生、初対面でこんなに警戒される人間初めて見ました。逆に凄いです。

「おーい、どうしたんです？　じよ、冗談ですよ？」

「……………」

引き攣る望くん先生の表情が本当に冗談であることを物語っていたが、1度失った信用を回復させるにはいささか投じられた爆弾が大き過ぎたらしい。クラスメイト達もそんな望くん先生の様子に薄っすらと気付いているはずなのだが、どうやら僅かに漂う危険な香りを本能的に嗅ぎ取ってしまったらしい。修ではないが、若干焦りを見せる望くん先生を見ていると、少し可笑しい。

そして、まったく警戒心を緩めようとしない生徒達を前に、おろおろと場の収集を図ろうとする望くん先生だったが、徐々にその表情に諦めが見え隠れし始めた時だった。

変態教師と目が合ったのは。

恐ろしく嫌な予感がした。

——目を逸らせ。

俺のシックスセンスがそう告げていた。あ、第6感と言わずにシ

ツクスセンスと言える俺、オシャレ。どうでもいいか。

とにかく、何食わぬ顔で白々しい口笛と共に慌てて視線を窓の外へと向けた。

手遅れとも気付かずに。

「……ウフフ、はいその君！ この空気をどうにかしてください！」

無茶振りいいい！ お願いだから巻き込まないでください！ 幼女趣味の変態教師なんて知りませんから！

「……………」

フフフ、秘技『シカト』。まさかこんなに早くこの技を使う日が来るとはな。あたかも『俺じゃありませんよ？』的な感じでこの場を乗り切ってやるさ。

「無視しても無駄ですよ？」

ハハ、やっぱりな。俺もそんな気がしてました。

俺の秘技が僅か3秒で破られた瞬間であった。

「えーと……加住くん、ですか。残念ですが、もう名前は覚えませんでした」

何だよこの人……入学初日なのに先行き不安過ぎるよ。生徒を陥れて何がしたいんですか。

「早く助けて下さい」

急かさないで！？ 40人もいるのに何で俺なんだよ畜生！

とか思いつつも、何だかんだ言って不本意ながらも立ち上がってしまう間抜けな俺。全員の視線がチキンハートの鏡である俺に一点集中してしまった。

見ないで下さい。出来るだけ違つとこ見て下さいお願いします。必死にキレの悪い頭をフル稼働させてこの空気を打ち払うべく、少ない語彙の中から懸命に言葉を紡ぐ。

「……あの、えと……趣味は人それぞれっていうか……基本的に小さい子供はそんな感情抜きで可愛い存在な訳でして……」

つ、つづかんぞ。というか、生徒である俺が担任のフォローをしなくちゃいけないこの状況がおかしいんだよ。完璧に巻き込まれただけなんだ。なのに何でこんな辱め受けちゃってるの？ みたいな？ あーもう、なんか意味分からないけど腹立ってきた！ 腹立ってきたけど特に何も出来ない自分が情けない！ 強い心が欲しいです！

「だからその……幼女趣味と言っても全然いやらしい考えを持たない訳でしてそれは単なる庇護欲の表れと言いますか……」

そもそも、望くん先生が幼女趣味は冗談だと言っていたにも関わらず、緊張の所為で完璧にそんなことを忘れきっている俺は何とか幼女趣味のイメージアップを狙おうと弁明する。でも、実際そんな特殊な人達の考えていることなんて分かるはずもなく、結局は適当な単語を羅列するだけしか出来ないのだけだ。

「その……なんだ。要するに、子供は大事にする、っていう望くん先生なりの意思表示だと考えれば納得も出来る……かな、多分」

言い終えて、すぐに席に着く。

俺にしては頑張った方だと思う。かなり無理矢理な感じを否めないが、上手くはぐらかせたのではないだろうか。

周囲の反応が気になって、キョロキョロと教室内を見渡してみる。そして、愕然とした。

『で、結局なに?』

みんながそんな目で見えていました。なんだろうね、このアウェイ感。ハハ、もうどうでもいいや!

「……で、加住くん。僕の幼女趣味はいつ否定してくれるんですか?」

「え、違ったんですか……?」

「はい、加住 涼くん留年決定……つと」

「なぜだああ!」

入学初日から留年が決定したらしい馬鹿な新入生である、俺なのだった。

### 第03話 部活見学へ行こう part 1

入学式後、週末を挟んで新しい週の始まった月曜である今日は、新入生、上級生問わず特に授業は無い。したがって、全学年簡単なHRがある程度だった。

HRが終わればそこで学校も終了となる訳だが、それでも帰路に着く生徒の数は疎らだった。

「よし、部活見学へ行こう！ 今すぐ行こう！」

その理由はこれだ。今日から1週間の間は部活見学と仮入部に充てられている。この1週間で色々な部活を見学した後、来週から正式に入部となるのだ。元々、入部する部活が決まっているならば練習に参加する事も出来る為、そういった者にとっては仮入部期間ともいえる。

「涼くんはやっぱバスケットボールやるの？」

桃ちゃんが覗き込む様に、突っ立っている俺の方へと視線を向けて来る。

相変わらずなんて可愛いんだこの野郎！ いや、女の子だから野郎じゃないか。だったら何だろう……ん？ 分からん。

あれ？ そんな事よりも何で俺がバスケットやるって分かったんだ？ これが噂の読心術というやつなのだろうか。

「何で俺がバスケットをやっている事を知ってるんだ？」

「っ！ か、勘だよ！ 多分そうなんだろうなって。うん、そういう事だよ」

な、何だ？ 俺はそんなにバスケ臭がするのだろうか。この不自然極まりない自己解決が怪し過ぎる。まあ、単に俺のバスケットボールプレイヤーとしての資質がそう思わせたのかもしれないが。フフ。

「うむ。俺はバスケ一筋！ これは例え桃ちゃんが相手でも曲げられん！」

「い、いや、別に私は何も言っていないんだけど……。それよりうらやましいな、入る部活が決まってるなんて」

俺の面倒臭い発言を難無く避けた桃ちゃんは、やや俯きがちに呟いた。その様子から察するに、真に羨望が込められている気がしてならなかった。

「桃ちゃんはまだ決まってるのか？」

「うん。中学は手芸部に入ってたんだけど、私、めちゃくちゃ不器用であんまり向いてなかったんだ。でも、だからといってやりたい事があるわけじゃないし……」

言い終えると同時に桃ちゃんはさっきよりもさらに深く俯いてしまった。

おお、なんとという負のスパイラル。それに、何だこの抱きしめたくなる衝動は……。まあ、俺にそんな大反れた事をする勇氣は無いけどな。……ええそうですよヘタレですよ。

「はい決まり。桃ちゃんは俺とこれからバスケ部の見学に行こう」

「え？」

「強制です。何と言おうと付いて来てもらいます」

「う、うん」

思い立ったら即行動。コレ基本ネ。

バスケに興味があるかは分からないが、これも可能性の1つとして桃ちゃんには見てもらいたいと思った。俺は有無を言わずに桃ちゃんの手を引きながらそのまま教室を出るのであった。

その際、『やっべ、手握っちゃったよ！』と内心ハラハラで歩いていたが、桃ちゃんは手を振り解いたりする素振りを見せるどころか妙に嬉しそうにしていたので正直ホッとした。俺の友情がきつと桃ちゃんにも伝わったのだろう。うんうん。

栄稜高校には体育館が3つあり、建てた年代と規模から第1体育館が1番新しく大きく、第3体育館が1番古くて小さい。ちなみに入学式が開かれたのはこの第1体育館であった。新入生を含めた全生徒と、新入生に見合った保護者。さらに教員を含めた全員が難無く入れる規模だといえはその大きさも理解してもらえらるだろう。しかし、何故今この話をしているか。それは――

「ここが第3体育館……？ こ、恐過ぎる……」

俺の眼前にそびえ立つお化け屋敷もとい第3体育館。昭和の時代を生き抜いた感を醸し出しているそれは、取り壊しを強く推すべき建物だった。だが望くん先生曰く、ここで男子と女子のバスケット部が練習しているらしい。

「随分と古いところだね……」

桃ちゃんのボヤキに深く頷く俺。ここまで入るのを躊躇う所なんて、そうそう無い。

半ばとりあえず今日は見学を諦めて後日また心の準備をした後に来ようと考えていた時、鈍い音を上げながらお化け屋敷の扉が急に開かれた。

「新入部員か!？」

扉を開いた主は鼻息をフンフンと噴出しながら、特に俺に視線を合わせながらそう言った。

時間と場所を間違えればそっち方面に勘違いしてしまいそうな頼の赤みと共に。

「い、いや、今日は見——」

「入部おめでとう! さあさあ、中に入れ!」

「ええ!？ ちょ、ちよつと!」

俺が言い終えるよりも前に、このバスケット部の先輩らしき人に無理やり腕を引つ張られ体育館内へと引き摺り込まれるのだった。当然俺も抗ってみたが、先輩の力の強い事なんの。

俺は引き摺られてバランスを崩し、そのままポテっとこけた。その間、桃ちゃんは呆然と後ろから見守っていてくれた。助けて!。

「改めて入部おめでとう! お前の名前は？」

何事も無かったかのように先輩は満面の笑みで自己紹介を促してくる。しかも、もうバスケット部へ入部が決まっているらしい。

「いや、だから今日は見——」

「何いいい！？ 俺の期待を裏切るつもりか！？ この思わせ振りの野郎——」

先輩は泣き真似をしつつ、俺の目の前を空気を切り裂きながらフツクが通過して行った。

危なっ！？ 今の喰らったら意識なんて軽く飛んじゃいますって！ それにしても、勝手に勘違いして何て言い草だ。まあ、あのフツクを見た時はさすがに泣きそうだったけど。この先輩、色んな意味で力強過ぎる。

「は——」

「話を聞いてくれたと！？ 却下だ！」

す、凄いなオイ！ 俺まだ『は』しか言ってなかったんですよ！  
？ 一体何者なんですかあなたは。

「だ——」

「だから話を聞けたと！？ 知らんわ！」

俺……心が折れそうだよ。ここまで喋らさせてくれないなんて拷問だ……。もうあなたの事を凄いと叫びません。

そんな半泣き状態に俺が追い詰められている時、後ろからやや控え目な声を通った。

「あ、あの、涼くんの話も聞いてあげてもらえませんか……？」

恐る恐る先輩の表情を窺うように桃ちゃんがこちらに歩み寄って来た。

「分かった」

あっさりー！？ 桃ちゃんの言葉が遮られるのもどうかと思うが、この先輩が普通に対応してるのを見るとそれはそれで傷付くって！この扱いの差。理不尽です。

「で、何が言いたかったんだ？」

シレっと言い放つ先輩にジト目で返しながら、もう俺は正直この一連の流れがどうでもよくなっていたりした。

「あーもー入部しますーよろしく願いますー」

へへ、適当に言っただけ。元々バスケット部には入部するつもりだったからな。だが、いきなりの事で若干反発してみたい気がしたりしなかったり。つまりはそういう事だ。

「おお！ それでこそ俺の見込んだ男！——俺は男子バスケット部の部長、3年森下<sup>もりした</sup> 健太<sup>けんた</sup>だ。これから力を合わせて頑張ろう！」

俺の適当な物言いには少しも触れず、森下部長は自己紹介と共に何とも暑苦しい抱擁で俺を地獄へと誘った。

あ、暑い！ しかも力強過ぎ！ つ、潰れる……。

それから約数十秒後、顔色が明らかに危険な色へと変色し出した事に桃ちゃんが気づき、俺は辛くも一命を取り遂げたのだった。

「あ、ああー死ぬかと思った……」

初めて天使を見た15歳の春。これは一生忘れる事が無いだろう。

「何だか悪いな。力が有り余ってるもんだから、つい」

森下部長は茶目っ気から少し舌を出して「ごめんね」と付け加えてみるが、俺は著しく吐き気を引き起こす事となった。何を隠そう、この人は修と同等の身長を持っていながら横幅も広い。しかし、ただ太っているだけでなくそれがほぼ筋肉で構成されているからまた厄介だ。その上に坊主というのもまたはまっている。暑苦しいたる所以がそこにあった。

「い、いえ、もういいですよ……忘れますから。それより、1-Cの加住 涼です。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。他の部員は、舞台上で座禅を組んでいるのが2年の澤井 武雅<sup>むが</sup>な。後、こっち向いてピースしてるのも2年の菊池<sup>きくち</sup> 陽<sup>よう</sup>だ」

な、なんと個性的な方々なんでしょうか。誰一人真面目に練習に励んでいないって……。

無表情で目を瞑りながら何か悟りの境地を開きつつある澤井さんは、座っているからこそあまりよく分からないものの、おそらくは中肉中背。見た感じの体型が俺に似ていた。ちなみに俺の身長は172です。さらに、髪が目元を覆い隠さんばかりに長いのも少し気になる。

対して菊池さんのあの身長は如何なものだろう。中学生——いや、小学生にもあの背丈の少年は結構いると思うぞ。とにかく、菊池さんの容姿を良い様に言えば『可愛らしい』。悪く言えば『豆』。これが大変しつくりきます。

まあ、まだ見えないけど他の部員さんはもつと普通の人達だろう。

きつと。

「まあ総勢3名の部活だが、これから一緒に頑張ろう！」

……あ、あれ？ 聞き間違いかな？ まさか人気の高いスポーツであるバスケットボール部の部員がたった3人だってさ。

「で、他の部員の方は？」

「以上！ 総勢3名！」

あ、ありねえええ！ 学校に1000人近い生徒がいるのになんだよ3人って！ 怪しい部活でももつと集まるぞ！？

ここの部活、何かとてつもなく嫌な予感がするのは俺だけだろうか。

それから遅れる事、30分。何食わぬ顔で部活見学にやって来た王子様も、このバスケット部の現状を聞いて開いた口が塞がらなかったとか。

いや、ほんとこれからどうなるんでしょうね？

## 第04話 部活見学へ行こう part 2

現実はどうしてこんなに厳しいのだろうか。夢にまで見た高校での部活。バスケットを始めた時から憧れ、インターハイ。それがまさに今、崩れ去ろうとしている訳なんですよ。

「俺、転校しようかなー」

ポツリと呟いた一言。本気で思っている訳ではないが、現実逃避をしたくなる現状がここにあった。

「加住くん！ そんな事言っちゃ駄目ですよ？ 僕と一緒にインターハイ出場しましょう！」

我が1-Cの担任にして、クラスメイト全員認定の『危ない人』、望くん先生が両手を広げながら少し涙を溢している。

「望くん先生がいなくなれば俺はもう少し頑張ってみます」  
「酷いー！」

大袈裟なアクションと共に地に伏した望くん先生。いや、その歳になつてそういう1つ1つの行動が危ないんだって。

えー皆さんもお気付きだと思いますが、何を間違えたのかこの望くん先生が男子バスケットボール部の顧問なんです。

ついさつき、部員が3人だという悲しい現実には直面したが、俺と修を合わせれば何とか試合には出場出来る事に気付いて少し明るい兆しが垣間見えた。恥ずかし気も無く修と二人で喜び合ったっけなもつとも、俺が無理やり肩を組んで修はもの凄く嫌そうな顔をしていただけ。

——それになのに、なぜ？　これから上手く事が運びそうだったのに、なぜそのタイミングで望くん先生がやって来やがりますか……。

「俺の楽しい青春がこんなにも早く……」

いやほんと泣きそう。大体、望くん先生がまともにバスケットを指導出来るとは思えないんだよな。お飾り的なポジションっていうか何ていうか。それにバスケットの知識が無いだけならまだしも、ちよくちよく練習とかを邪魔してきそうだ。試合前日にレギュラーとかも適当に決めそう。

考えただけでも先が暗そうだ。

「望くん先生はバスケットの経験があるんですか？」

「もちろん。僕を舐めちゃいけない。それでも高校時代は『疾風の望くん』と、周辺の高校では名が通っていたからね」

ダサっ！？　俺そんな通り名付けられたら恥ずかしさで試合に出れないよ！　でも、そんな恥ずかしい通り名を堂々と言える望くん先生……侮れない。

「へ、へえ、なんだかすごいなー」

や、やばい。動揺を隠し切れない。思わず目が泳いで棒読みになっちゃった。この白々しい態度にきつと望くん先生は気付いてしまっているはずだ。

「そうでしょ！？　いやー、やっぱり加住くんは話が分かる子だなー  
うんうん」

そんな事もなかったっすね。薄々そんな気がしてました。俺の手を握りながら満面の笑みを浮かべている望くん先生を見れば、本気で褒められたと信じて疑わない様子だ。

この微妙な光景に俺は何とも乾いた笑いをするのであった。

「ところで桃ちゃんはさ、バスケやるのか？」

俺と望くん先生とのやり取りを、修と共に静観していた桃ちゃんに声を掛けた。

女バスは丁度隣で練習の最中であり、男子とは違って練習にも活気があった。その上、2年生と3年生だけでも関わらず人数も多い。バスケットボールの弾む音と、シューズをキュキュッと鳴らしながら練習に励む様子は見ていて爽快だった。

「うーん、あの練習風景を見てたら私にはちよつと無理かも……」

桃ちゃんがこんなに自信無さ気に言うのも少し分かるような気がした。高校と中学という差ももちろんあるだろうが、ここの女子バスケ部は俺が中学の時に見ていたものよりも遥かに運動量が多かったのだ。それに1人1人の技術やスピードも男子顔負けである。とてもじゃないが、未経験者が混ざっていける雰囲気ではなかった。

「うちの女バスはここ最近どんどん強くなってますからね。今年辺りはインターハイも夢じゃないんじゃないかな」

望くん先生は腕を組みながら嬉しそうに呟く。この男子の現状を見れば俄かに信じ難いが、今の女子を見れば望くん先生の言っている事も納得出来た。

「やっぱり私には無理っぽいね……」

「おいおいそんな悲しそうな顔しちゃ駄目だつて。俺から誘つて何だけど、部活は他にもいっぱいあるんだからさ」

むう、同じ所で桃ちゃんと部活ライフを過ごせればどんなに楽しいだろうか、とはこの際言わない。というか言えない。

「うん、そうだね。ありがと」

そう言うなり眩しい笑顔を向けてくれる桃ちゃん。

ああー！ やっぱり同じ所で部活してえええ！

心の中で叫ばずにはいられなかった。そして、その隣では桃ちゃんの笑顔を見ていた修が珍しくほのかに顔を紅くしていたのだった。

「先生、そろそろ練習始めましょう」

「え？ あ、うんそうですね。——はい、澤井くん、菊池くん集まってー」

森下部長の一声で望くん先生が2年生の2人に召集をかけた。すると、今だに座禅を組んでいた澤井先輩と、どう見てもボールと戯れている様にしか見えない菊池先輩が小走りやって来る。

「早速新入部員も入った事ですし、今日は彼等も混じえて軽く30分3でもしましょうか。2人共いいかな？」

「え？ でも俺達制服のまま——」  
「分かりました」

予想していなかった展開に、準備が出来ていない事を告げようとしたその言葉は修に遮られてしまった。

なんか今日はことごとくカットインされる。言いたい事も言えない日なのか、今日は。

「はい、2人共快諾してくれたようなので軽くアップしましょうか」  
うん、もうツツコミを入れるのは止そう。無駄な気がして仕方がないからね。ここはそっとしておこう。

俺も軽く準備体操をする前に制服の上着が邪魔になるので端に置いておこと脱いだ時、

「あ、私が持つとくよ？」

桃ちゃんがそれに気付いてわざわざ持っておいてくれる事になった。

な、なんてええ子なんや。可愛いだけでなく、気も利くなんて……。ああ、すっごいやる気が湧いて来たぞこん畜生！

絶対良い所見せたる！ 悲しいほどに単純な俺は心に誓った。

「それじゃ始めましょうか。チームは僕と加住さんと藍田くん。それから森下さんと澤井くんと菊池くん」

望くん先生はゼッケンを配りながらそれぞれを指差し、チーム分

けを決めた。

「分かりました」

「了解です」

「……はい」

「おっけー」

「はい！ 望くん先生！」

それに呼応して5人はそれぞれ返事を返す。ちなみに上から修、森下部長、澤井先輩、菊池先輩、そして最後は言わずもがな、俺だ。桃ちゃんのお陰で滅茶苦茶闘志に満ち溢れた俺は右手を大きく上げながら返事をした。

今の俺にとつて恥ずかしいとかそんな事は関係無い。桃ちゃんに良い所を見せる！ ただそれだけである。

「ゼエ、ゼエ……、あ、ありえない……」

肩で息をしながら俺は高校と中学という壁の厚さを実感していた。相手は部員の数が少ない上に試合もろくに出られないような部活の部員。例え先輩であっても負けるはずが無いと思っていた。しかし、現実はそのもいかず――

「まさかこれ程とはな……」

修は小さくそう呟いた。俺とは対照的に息は切らしていないが、

その表情に浮かぶ驚きを完全に隠す事が出来ないでいた。

修は、中学でも地元じゃ結構有名な選手だった。もちろん容姿が良いというだけでなく、PGとしてチームを引っ張って行ったその実力は本物である。それこそ名門のチームに行っても堂々とポジションを勝ち取る程だ。だが、そんな修ですら目立って活躍する事が出来なかった。

「なかなかだったぞ、新入部員達」

「……ナイス」

「先生頑張りすぎだよー」

それもこれも、全てこの人達にとごとく阻まれたからである。ドリブル、シュート、パス。俺はまともにこのゲームで活躍する事が出来なかった。

体の大きさを活かした高いディフェンスと、攻勢時に時折見せる緻密なパスをなせる森下部長。

ミスが皆無で流麗なプレイを見せた澤井先輩。

体の特長を巧みに用いたスピード感の溢れるドリブルで切り込める菊池先輩。

それぞれ全員が何らかの長所を持っていて、それはとても俺では遠く及ばなかった。

「さて、今日はこれぐらいにしておきましょうか」

最後に、両チーム合わせて1番得点を挙げたのは間違いなく望くん先生である。昔、名が通っていた——というのはどうやら本当のようで、1度望くん先生がボールを持てば先輩達は成す術無くほとんど得点に絡んでいた。ドリブルテクニクやスピード、シュートの正確性、どれを取っても敵わないと感じた。

結果としては、森下部長の率いる先輩チームが勝利を収めた。もちろん望くん先生の活躍も素晴らしかったが、それ以上に俺が足を引っ張ってしまったのである。修は目立たなかったとはいえ、自分の果たすべき仕事、スクリーン等は確実にこなしていた。

この時期、まだまだ新しい学期が始まった事もあってか、誰もが“抜いて”プレイをしていた。今もこうして肩で息をしているのは俺ぐらいなものだ。それに気付いた時、俺はむしろ悲しくなった。今までやって来た事は何だったんだろう？ と、柄にも無く落ち込むぐらいに。

「どうした、涼？ 暗い顔して」

そんな俺に、ゲーム前とは明らかに様子がおかしい事に気付いた修が珍しく気遣ってくれた。

「いや、何でもない。……たださ、活躍出来ないならまだしも、足を引っ張ってしまったことがすごい悔しくて」

本音だった。それに居心地が悪い気もした。せめて最低限の働きが出来ていれば、もう少し違う気持ちでいられたかもしれない。だけど、俺は何も出来なかった。

何やら少し考えるような素振りを見せた修は、不敵に笑みを溢しながら俺に視線を合わせた。

「ふむ、俺達のような中学上がりの技術が先輩達に通用すると思っていたのであれば、お前は高校バスケットを舐め過ぎだ。悔しいならこ

れから頑張ればいい。ただそれだけだ」

「あ……」

修の言った事。俺は真理だと思った。自分よりもレベルの高い位置でバスケットをやっていたら当然上手くなる。そんな当たり前の上に気付けたのだから。

か、格好良いぜ、我が親友。現実を素直に受け止めて、それでいて活路見出せるなんてな。やっぱり尊敬するよ。

「ありがとう、修。結婚しよう」

「黙れ。晩飯が食えなくなったらどうしてくれるんだ」

「ええーそんなこと言うなよー。言い方が悪かったのか？ よし、分かった。——同じ墓に入ろう」

「はい皆さーん。下校の時間ですよー」

「さあ、帰ろう」

「……帰るか」

「みんなお疲れー」

口々にそう言いながら体育館を出て行こうとする男子バスケット部の面々。俺は必死に皆のリアクションを求めたが誰一人応じてくれる者はいなかった。

こうして、初めての部活見学は幕を下ろすのであった。

## 第05話 噂の人は危ない人

朝。いつものように我が栄稜高校の校門を潜った。授業開始までまだ余裕のある時間帯なのだが、それでも登校する生徒の数は決して少なく無かった。

上級生と比べてまだ幼さの残る1年生は、まだ学校にあまり慣れていない俺でも容易に見分ける事が出来る。1年、あるいは2年という時間がそれほど大きいようには思えないが、それでも上級生はどこか大人びた印象を受ける。堂々としていて、いつか俺もあんな風になればなあなんて思った。

そんな中で、今日も俺の隣を歩く冷静沈着王子様は他の1年生よりも少し老け——大人びていた。知らない奴はきつと上級生と間違えてしまうだろう。さらに、先日の部活見学での一言が今でも俺の脳内で鮮明に記憶されている。

『ふむ、俺達のような中学上がりの技術が先輩達に通用すると思っていたのであれば、お前は高校バスケットを舐め過ぎだ。悔しいならこれから頑張ればいい。ただそれだけだ』

普通こんな事言えないよ？ 恥ずかしくて。あの時はかなり気が沈んでいたから凄くありがたかったけどさ、今思い出すとやっぱり恥ずかしいって。ただ、それでもこいつが言えば形になるから本当に格好良い奴って特だよな。俺が言ったら間違いなく失笑だもん。

「うんうん、やっぱりそうだよなー」

「いきなり何だ？ 遂に危ない人へ仲間入りか？」

「おい！ お前それどういう意味だよ！」

思わず考え事が口に出てしまいそれに対して修が怪訝な表情浮か

べながら、もの凄く蔑んだ視線を俺へ向けた。

いや、ちょ、ほんと、そういう目で見ると止めて下さい。言葉よりもその目は傷付きますから。俺も一応強気に出てみたけど軽く傷付いてますから。

「ふむ、そのままだが？ そんな事も――ぬ、またか」

不敵な笑みを浮かべながら俺へ言葉の暴力が投げ掛けられようとした時、ふと修は俺とはまた異なった方へと目をやった。

俺もそれに釣られて修の見た方を向き、そこで修の言った言葉の意味を理解した。

「あー……、お前も大変なんだな」

「ああ、すまんが先に行つててくれ。俺もすぐに行く」

「ほいほい」

俺が修を置き去りにしてその場を去った後、「藍田くんおはよう！ 」という大勢の女子の声が聞こえた。少し振り返って様子を見てみれば、修を囲んで女子達がキャーキャー言いながらたくさんの質問を浴びせ掛けており、当の本人はそれでも鬱陶しがらずに愛想良く答えていた。修がモテる要因として、容姿だけでなくやっぱりこういう所も関係しているんだと思う。……もつとも、女子に囲まれて嬉しくない男子なんていないが。

下駄箱で上履きに履き替えてから廊下に出た俺は、女子の波に吞

まれて消えてしまった親友を羨ましく思いながらトボトボと歩いていた。

「くそ」下駄箱から教室までが遠い……」

距離的には近いのだが、あんなものを見せられた後では精神的に遠く感じるというものだ。

それにしても修はモテるな。あいつのお陰で、夢の国でしか存在していないと思われていたリアルハーレムがこの目で見れるんだからな。良い経験をさせてもらったよ。

ただ、やっぱり男は顔なのか？ そうなのか？ どっちなんだよ、コナンくん！ ……ふう、止めよう。悲しくなるだけだ。

俺は肩を落としながら教室へと向おう——として不意に後ろから声を掛けられた。

「おはよー涼くん」

おほほ、いいねその響き。これぞ青春だ。

振り返って声の主を確認した俺は、人には見せられない危険な笑顔と共に挨拶を返す。

「おほほ。おはよう、桃ちゃん」

若干桃ちゃんの顔が引き攣っているのはこの際気にしない。

『加住選手の強引なドリブル！ ああーっと！ 周りはドン引きー！』

「うるさい！ もう一人の俺！」

「も、もう一人の俺……？」

しまったあ、と可愛く口に手を当ててみるが気色悪い事に気付いてすぐに止める。

何で口に出してるんだよ俺！ 修じゃないが、これじゃ俺は本当に危ない人だ。それに、横を通過して行く生徒達の視線が痛い事……。この状況を何とかしなければ。

「い、いやーななな何のことかなー？」

完璧だ。これでこの危機を脱したな。ほら、その証拠に桃ちゃんが白い目で見ているよ。

「いや、ほんとそんな目で見ないで下さい。今日2回目なんです。見逃して下さい」

まさか朝からこんな短い期間に2回もこんな目で見られるとは……。この調子でいけば俺は今日死ねます。ペースが速過ぎます。

「涼くん……、色々と大変だね……」

だからその目止めてえええ！ あと、微妙に距離取るのも！ 悲しみに打ち震えながら辛い現実を受け止めきれない俺は泣きそうになった。廊下のだ真ん中で。

そんな時だった。いたずらっぽく少し舌を出しながら桃ちゃんが、

「なんてね。あはは、やっぱり涼くんって面白いね」

柔和な笑顔で軽く俺のおでこを小突いた。

え、え、え？ 何このドッキリ？ 何この嬉し恥ずかし？

あわわ、と目を泳がせながら状況を徐々に飲み込みながら、からかわれた事に気付いたのはそれから5分後だった。

「落ち着いた？」

「ふう、俺としたが、何という醜態」

出てもいない汗を拭う真似をしながら心底安堵の表情を浮かべる俺。

本気で桃ちゃんに引かれたらどうしようかと思ったぜ。さっきのやり取りで寿命が5秒は縮まったよ。

「もう大丈夫みたいだね。佳苗ー、いいよー」

そう言うなり桃ちゃんは振り返って誰かの名前を呼んだ。

カナエ？ 俺の名前は涼だぞ。まあ、向いてる方向からして俺を呼んでいる訳では無さそうだが。

首を傾げながらしょうもない事を考えつつ、呼ばれた人物が現れるのを待った。

「桃、あんた話長過ぎだって。忘れられてるかと思ったわよ」

「ごめんねー」

桃ちゃんに呼ばれて下駄箱の陰から出て来たのは俺よりやや身長が低めの快活そうな女の子だった。女子にしては身長が高く、その所為かスタイルも良い。また、整った顔立ちからは可愛いというよりも綺麗という表現の方がしっくり来る。

そんな女の子が桃ちゃんに一通り文句を言い終えると、今度は俺の方へと向き直った。

「へえ、君が噂の“涼くん”か。思ってたよりも可愛い顔してるん

だね」

覗き込むように俺を見た後、不敵に笑うカナエとやら。  
け、喧嘩上等ってか！？ ややややってやる！

咄嗟にファイティングポーズをとって見たが、腰が引けて台無しだった。

「佳苗いきなり失礼だよ？ 紹介するね。彼女は滝下たきした 佳苗かなえっていつて、中学からの友達なの」

「よろしくね、加住 涼くん。呼び捨てで全然構わないから」

そう言いつつカナエ、もとい佳苗はそつと右手を差し出した。そして、俺もそれに応えるべく握手を交わす。

「俺も呼び捨てでいいぞ。それにしても、“噂の”とはどういう意味だ？」

あまり聞きたくないような、聞きたいような。さっきの1件もあるし、良い予感はないがそれ以上に気になる。これも悲しき人間の性だ。

「実はね、ここに入ってからずっとあんたの話ばかりなのよね、この子ったら。やっと会えたーとか、やっと名前分かったーとかね。あとは――」

「ちょ、ちよつと佳苗！」

そこで顔を紅くした桃ちゃんがすかさず止めに入った。

「もしか……恨まれてるのか、俺は。」

俺がその考えに至った理由はこれだ。

その1、栄稜高校に入学してついに仇と再会。

その2、仇の名前判明。

その3、仇の発見及び情報を仲間へ報告。

その4、善意で遠回しに逃げる事を促す仲間。

その5、計画をバラした仲間に顔が紅くなる程怒り狂う。

今実感した。俺の脳内は危険過ぎる。

こんな事ありえないだろ！ 何考えてるんだよ、もう1人の俺！  
しかし、ここで我を忘れた俺はさらに失態を重ねるのであった。  
眼前で頭を自分の手で殴打しながらもう1人の自分がどうのこうの言っている少年……俺なら近付きません。

……とにかく話を戻そう。佳苗の言う事が本当ならば、俺は過去に桃ちゃんと会ったことがあるという事だ。随分と遠回りをしてしまったがおそらくそういう事だろう。

「どこかで会った……か？」

だが、俺には記憶に無い。こんな可愛い子と会っていれば間違いないで覚えているはずだから。

「い、いや、会ったっていうか何ていうか、見たっていうか……」  
「見た？」

すれ違ったとかそういう事なのか？ 大した記憶力だ、うんうん。  
今だ顔の紅い桃ちゃんは何やらモジモジしながら俺と佳苗に視線を行ったり来たり。

いい！ そういう仕草最高だよ！ おじさんもテンション上がって来ちゃった！

「涼、あんたバスケやるんだって？」

俺の脳内で危険な発言がされている頃、桃ちゃんの様子に呆れた佳苗が溜息を吐きながら問い掛けてきた。

「ああ。それなりの実力だと自負してる」

「ふん……。じゃあさ、今度一緒にやろうよ」

少し考え込むような素振りを見せた佳苗は何やら思いついたかのようにそう言っと、あからさまに怪しい笑みを溢した。

す、すごい嫌な予感がするんですけど。この笑いは修が何かを企んでいる時の顔と同じだ。ただ一緒にバスケをするというお誘いであるはずなのに、俺の中の防衛本能が大ボリュームで警鐘を鳴らしていた。

ど、どうしよう。その場のノリで返事を返せばいいのだろうか、どうも後悔する結果になりそうである。どうして断ろうか悩んでいた時、運良く始業のチャイムが鳴った。

「ああ！ HRが始まる！ 行かなくては！」

俺は人生最速の走りで教室へと向った。

## 第06話 止せばいいのに

今日から6限みっちり授業が始まった。と言っても、右も左も分らない1年生にいきなり教科書を使った授業をする教師はおらず、オリエンテーションと題した担当教師の自己紹介と、1年を通しての簡単な授業の流れを説明して終わる授業が全てだった。

俺は毎時間のように春の木漏れ日をもたらす強烈な眠気と戦いながら教師達の自己紹介を聞き、たまにコクリ、コクリと頭が上下するのを見兼ねて桃ちゃん小さく「頑張つて」と励ましてくれるもんだから、俺はそれに応えるべく指で両目を全開にして何とか眠気を凌ぎきった。ただ、さすがにこんな事を続けていると6限目が終わる頃には目が真っ赤になって瞬きするのもつらかったりする。

「ああー風が痛い」

授業終了後、今日も仮入部員として部活に励む為に俺は修と肩を並べて第3体育館へと歩みを進めていた。

「痛風か？」

隣でこちらを見向きもせず歩いている修は、若干の半笑いと共に問い掛けて来た。

「俺はどこぞのオヤジか？ 目が痛いんだよ」  
「ふむ、目玉のおやじか」

意味不明だ。言葉のニュアンスだけでそんな事を言われても困るぞ。

俺はおもむろに修の方へと目をやると、何がツボにはまったのか

分らないが自分の言った一言でお腹を抱えて笑っていた。

おいおい、そういう役回りは俺のはずだろ？　って、自分で言うのも何か悲しいけど。お前がそんな様子だと周りの女子達もお前を見る目を変えるぞ？

俺には遠く及ばないが、なぜか爆笑しているこいつは中々に危ない。さらに、入学初日からその容姿で多くの人の視線を釘付けにして来た訳で、こいつはクールの代名詞になりつつある。そんな奴がなりふり構わず笑い転げていれば、当然奇異の視線を向けられるに決まっているのだ。

俺は新たな仲間の誕生を心の中で喜びつつ、ふとすれ違う女子達の反応を窺った。

『そうそう、おかしなものを見るかのように先ず俺を見つつ、次に修も同じように――』

「見ないの！？　どうしてそこで頬を赤らめますか君達は！？」

予想に反する反応に動揺した俺はすれ違った女子達の方へ振り返りながら思わず叫んでしまった。

いきなりの出来事に慌てて振り返る女子。怪訝な表情を浮かべる周囲の生徒。何事も無かったかのように鳴らない口笛を吹く俺。

ハハ、不条理で狂っちゃいそう。

あれか？　普段見せない一面が見れて嬉しいとかそういう事か？　ギャップがいいのか？

悲しい現実と対峙した俺は、次第に遠ざかる仲間の影に心の中で涙するのだった。

肩を落としながらも無事に到着し、相変わらず老朽化が進み過ぎている体育館内に挨拶をしながら入った。

「こんにちはー」

しかし中に先輩達の気配は無く、返って来る返事も無かった。いつもはたくさんいる女子バスケット部員達の姿も少なく数人が軽く準備運動をしている程度であったため、少し早く来過ぎた事を感じながら体育館内にある男子更衣室へ着替えに入った。

カビ臭い更衣室で手早く着替えを済ませ、更衣室を出てまだ誰も来ていない事を確認していると、不意に1人の女子に名前を呼ばれて俺は振り返った。

「涼？ あ、やっぱりそうじゃない。早いよね」

「おお、佳苗か。どうやら俺達は1番みたいだ」

丁度女子更衣室から出て来てジャージに身を包んだ佳苗がそこにいた。

「あんた本当にバスケット部だったのね、ちゃんと出来るの？」

イタズラっぽく笑いながら佳苗は目を細める。

「し、失礼な奴だな。俺だって一応中学に入る前からやってるのに。ただ、ベンチにすら入れなかったけど。」

「人を見かけで判断しちゃいけないんだぞ！」

「ふうん」

反応薄いなあオイ！ まったく説得力無いつてか？ 悪かったな畜生！

無表情でこちらを見る佳苗の視線がかなり痛かった。

まあ、正直言つと佳苗の想像通りの下手さだと思う。事実、先日の3on3がそれを物語っているからな。それに、俺は中学時代ほとんど試合に出た事が無かった。

俺の出身はバスケの弱小中学。でも俺は人数も少ないのに公式戦ではいつもベンチから外され、練習試合でも1度しか試合に出た事がない。もちろんそんな扱いをされるくらいだから顧問の教師に嫌われている事も分かっていたが、それでも俺はバスケが好きだったから部活は辞めなかった。2年の中頃から主将が修に変わり、修は顧問からの信頼も厚かった為に俺を何度か試合に出そうと口添えをしてくれたが、いつもそれはことごとく却下されていた。

そんな中、2年の終わりの事だった。練習試合が決まって他校へと赴く事になったのが、その日に顧問が体調を崩して変わりに違う教師が引率する事になった。その教師はバスケの知識が無く、当然我がバスケ部の実情も知らない。したがって、修がメンバーを決める事になり、氣を利かせて最初から俺を試合に出してくれた。

爽快だった。修の鋭いパスのお陰で相手をかわして次々に得点を決められた。もっとバスケを好きになった。だけど、そんな楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、いつの間にか試合は終わってしまった。その試合は大差で勝つ事ができ、案外うちのチームも強いんだなあなんて思ったりもした。

それからは試合に出る機会も無く、迎えた中学最後の大会前には靱帯を痛めて試合に出れる可能性はゼロになってしまった。はなっ

から試合に出れないと分かっている、怪我をしてしまった自分に  
対して腹が立ったっけな。

「……あつ！　そうだね。ねえ、涼。先輩達が来るまでちょっと勝  
負しない？」

昨日の事のように覚えている中学時代の記憶を懐かしんでいた時、  
不意に何かを思いついたかのように手をパチンと鳴らしつつ、佳苗  
と初めて会った時に見せたあの嫌な笑みを撒き散らした。

き、来たぞ嫌な予感。あの笑みが何よりも怪し過ぎる。ここは断  
固拒否でいこう。

「いや、止め——」  
「いいだろう。話は全て聞かせてもらった。こんな奴で良ければ相  
手をしよう」

いらん事言うな馬鹿野郎！  
横から出て来た修がなぜか勝手に承諾してしまった。俺が嫌がっ  
ているのを見抜いた上での対応である。

「よし決まり！　それじゃ早速始めるわよ」

俺の意思完全無視。へへ、悲しいや。  
妙に軽い足取りでバスケットボールを取りに行った佳苗を目で追  
いつつ、心の中で大きな溜息を付いた。

はあ……やるしかないか。あの嫌な予感も修からの経験則であっ  
て確証がある訳じゃないしな。佳苗も出会って間もない奴に無茶な  
事をさせないだろう。

俺は腹を括り、準備の出来た佳苗の元へと向った。

「1on1で勝負よ」

「よし、分かった」

「ただし、負けたら罰を受けてもらうわ」

一呼吸置いた後、佳苗は続けた。

「あんたが負けたら学校で1日女装をしてもらうから」

はいはいストップー。そんな罰ゲームすんなり受け入れられると思ってますか？ 佳苗さん。

ええ、無理ですよ。そんなもの無理に決まってるでしょうが！

「はい却下。ネクスト」

「これは決定事項よ」。その代わり、あんたも好きな罰を決めていいから」

それが目的だったのか……。でも待てよ？ 俺も佳苗に好きな罰ゲームを決められるという事は、あんな事やこんな事を……。ぐへへ、何だかやる気が出て来たぞ。

「……決めた。もし俺が勝ったら昼飯を1週間奢れ！」

「せこっ」

「こるあ！ 妥当だろうが！」

俺の提案した罰ゲーム内容にケチをつける佳苗。

せこいと言われようが俺は譲らん！ こっちだって負けたら女装が賭かってるんだぞ！

一瞬、佳苗に男装させる事も考えたがあまりにはまり過ぎていて

やめた。こいつなら平然と1日を過ごしてしまいそうで癪だからな。そんな訳で、家庭の事情から普段弁当を作ってもらえない俺は昼飯1週間タダという夢のような日々を狙ったのだ。

もし負けるような事があればそれこそ精神的苦痛で髪が抜け落ちてしまいそうだが、要は勝てばいいんだ。相手は女子。身長差でゴリ押しすればきっと勝てるはずだ。力では……何となく勝てそうにないが。

「ハッハッハ！ 勝算が立ったぞ！ 負ける気がしない！」  
「あっそう？ じゃ始めるわよ」

い、今こいつ笑いやがった。何かすっごい見下された感じがしたんだけど。しかも、あの妙に余裕な笑みが気になる……。

待て待て俺！ ついさっき自分で勝算が立ったとか言ってたじゃないか！ 頑張れ俺！

## 第07話 昼飯と女装 part 1

「状況が呑み込めないんだが、どうなってるんだ佳苗？」

「私に聞かれても知らないわよ。この先生が勝手に決めた事なんだし」

「おい涼よ、巻き込まれた俺はどうすれば良いんだ？」

「知らん。せめて俺の為に最善を尽くしてくれ」

体育館の中央で俺の隣に並んでいる修と知らない1年生。さらに向かい合って立っている森下部長と澤井先輩、それから菊池先輩。そこから少し外れた所に佳苗、望くん先生。さらに周りを取り囲む女子バスケット部の面々。

どうしてこんな構図が出来上がったのか分からない。……ただ、元凶は望くん先生である事だけは分かっている。

「望くん先生、こんな事はすぐに止めて練習をしましょう。うん、そうしましょう」

「駄目ですよ、加住くん。これはちゃんとした練習なんですから」

今日判明した事がある。それは望くん先生が男子と女子の兼任でバスケットボール部の顧問をしているという事。昨年から人数の都合上、試合に出られなかった男子バスケット部。したがって公式な試合の日程で女子と被る事が無く、練習場所も同じである為に顧問は1人となっただけ。今年は俺と修の入部が既に決まっているので、公式の試合にも出場予定であり、今後望くん先生が1人で男子と女子の兼任する事は不可能になる。だから、現在新たな顧問を探している最中で、見つかるまでは望くん先生が現状のまま部員達の指導に当たる事になっており、さらにこのバスケットボール部の最高責任者は部長達ではなく、顧問である望くん先生なのだ。困った事に。

「とか何とか言って、楽しんでませんか？」

「や、ヤダな、加住くんの女装なんて少ししか見たくないですよ」

見たくないと言い切って下さいよ、望くん先生。これで理由がはつきりました。完全に面白半分ですね。

俺は肩を落としながら、どうしてこんな人が顧問なのだろう？という疑問を胸に抱きながらジト目で望くん先生を見た。が、すぐに逸らされてしまう。

「ま、まあ、とにかく始めましょうか。今回は1年生対2、3年生のチーム戦でいきます。1ゲーム10ポイント先取で、先に2勝した方の勝ち。森下くん側が勝てば加住くんは校内で1日女装、逆に加住くん側が勝てば僕が3人の昼食を1週間奢りましょう」

負けられない。俺の名誉の為に絶対負けられない。だって、負けたら校内で女装だぞ？ 今後の3年間どんな顔して登校すればいいんだよ。

ただ、相手が悪い。前の3on3でも分かった事だが、中学と高校という差はあまりにも大きく感じられた。どこにいても通用すると信じていた、修ですら活躍出来なかったのだから。

「修、頼むから頑張ってくれよ。絶対に面白半分で負けるなよ！」  
「善処しよう」

そこはかとなく不安だ。こいつの性格なら本当にワザと負けそうで恐い。口ではこう言ってるが、内心はどう思っているか分かったもんじゃないからな。ここは、俺ともう1人の奴で頑張るしか――

「失礼だがお前は本当に運動が出来るのか？　ここを美術部かどこかと勘違いしてないか？」

「生憎だけど僕はバスケットをやりに来たんだ。何、心配は無用だよ？　僕の中に眠るバスケット魂が今燃え上がっているからね」

ヤバイ、こいつも不安だ。というか、修以上に不安だ。言ってる事もそうだが、何より外見が運動に適していない。現代において高校生がまさかの七三、厚いレンズの眼鏡にシャツはすっかりイン。ほほう、中々の強者だなお前は。『運動は週に1回10分程度です』ってかこの野郎！　こっちは人生に関わる大一番なんだよ！　本読まずに体動かせや！

「僕の名前は吉見<sup>よしみ</sup>孝憲<sup>たかのり</sup>。高校バスケットでその名を残す男だ。よろしく」

うん、言ってる事はいいよ？　自信を持つのは大切だからな。ただ、ただ……外見が残念過ぎる。まずそれをどうにか出来ないものだろうか。え？　人は見た目じゃないってか？　分かった信じよう！　お前の本当の力を見せてくれ！

途中から幻聴の聞こえた俺は勝手に自己解決をした。いわゆる、現実逃避というやつだ。

「さて、それじゃそろそろ始めましょうか。先ず1人目、出てきてくれるかな」

「頼んだぞ、修」

「任せろ」

こちら側は修からいこう。吉見が当てにならない今、1勝をもぎ取るには修の力が必須だ。さっきは不安で仕方なかったが、今の修を見ているとその思いは払拭される。いつに無く真剣な表情で、中学時代でも試合直前になるといつもこんな顔をしていた。頼もしく、味方が何かミスを犯しても必ず修がそれをカバーしてくれていた。チームの大黒柱であり、こいつが上手く機能している試合は絶対に負けなかった。だから、今回もきつとやってくれる。

俺は大切な1勝を親友に託した。

「よろしくー藍田」

そう言いながらトコトコとやって来たのは菊池先輩だった。相変わらずの小ささで、修との身長差はそれはもう酷いものだ。まさしく大人と子供である。

だが、菊池先輩といえばその小ささを活かしたスピード特化のドリブルである。相手の懐に潜り込む上手さは本当に目を瞠るものがあった。実際、修にとってこの身長差が武器にもなるが、同時に欠点にもなるだろう。あまり菊池先輩のペースに吞まれなければいいのだが。

「よろしくお願いします」

普段と変わらぬ様子で修は小さく頭を下げた。

まあ、俺が考え付くような事は当然修も分かっているはずだ。何より、俺が心配するようなタマじゃない。いつもチームメイトの信頼を一身に背負っていたあいつならば――。

「先攻は菊池くんからで。はい、では始めましょう」

望くん先生の一言で、修は先生から渡されたボールを菊池先輩へとバウンドパスした。

出だし、ボールを受け取った菊池先輩は意表を突くかのように一気に速攻をかけた。腰を僅かに落としたドリブルで修へ詰め寄り、2人の距離が縮まっても尚、そのスピードは緩めない。右へ左へ動く訳もなく、その距離で既にトップスピードにまで達した菊池先輩は最短で修の隣をすり抜けようとしている。

修がボールを渡してからの菊池先輩の初動の速さは意表を突くのに十分だった。反応のやや遅れた修は菊池先輩の前方へ回り込む事を断念し、咄嗟に抜かれまいとボールへ向けて右手を大きく伸ばす。しかし――

ボールとネットの擦れる乾いた音がその場を支配した。

修が右手を伸ばした先に菊池先輩の姿は無く、振り返ればボールが既にリングを潜った後だった。ボールを拾い、戻って来る菊池先輩を俺は呆然と見つめる。

凄かった。3on3の時よりも遥かに速かった。それに、あの修がこつもあつさりと抜かれた場面は見た事が無い。修の脇の下を潜り抜けるかのような洗練された動き。あのミスマッチをこつも巧みに使える菊池先輩は上手いと思った。

「菊池さん！ ナイスです！」

佳苗が目キラキラと輝かせながら菊池先輩へと手を振っている。佳苗だけでなく、望くん先生や森下部長達も同様の反応だ。ただその中で、ほとんどの女子があまり良い顔をしていないのはやはり修

の魅力といったところだろうか。悔しそうな表情を浮かべる、佳苗を除いた女子バスケット部員達。理由はどうあれ仲間のようである。

「涼、あんたの女装に1歩近付いたわね」

「う、うるさい！ 修を舐めるなよ！」

「菊池さんのあの動きを見た後でもまだそんな事言えるんだ？」

「な、クソ……」

頼むよ修えもん！ こんな意地悪する佳苗を懲らしめてよ！

俺は膝を着きながら両手を組んで天を仰いだ。

しかしそんな俺の願いも虚しく、修のオフエンスはスピードに長けた菊池先輩にあっさりとインターセプトされてしまうのだった。

「おい！ ちゃんとやれよ！ お前も女装させるぞこの野郎！」

恥ずかし気も無く俺は大声で叫んでやった。いくら菊池先輩が相手だといっても、見ているこちらからは修のやる気が感じられなかったからだ。精一杯頑張つて負けたのならまだ良い。だが、手を抜いて負けるなんて言語道断だ。

俺が沸々と怒りに目覚めようと血走った眼で修を見ていた時、思いがけない一言が俺の耳へと届いた。

「涼よ、今から良いものを見せてやる」

修は不敵に笑みを溢しながらそう言うと、次に備えるべくポジションについた。

え？ 何このドキドキ？ 今の本当に格好良かったんですけど。というか何を見せてくれるんですか修えもん！

修の一言から妙な余裕を感じた俺は、逆境にありながら不思議と

安堵するのだった。

「おい藍田ー、もう少し頑張ってくれよー」

今度は再び菊池先輩のオフセンス。一度修にボールを渡した後、修がそのボールをワンバウンドで投げ返すと、菊池先輩は初っ端見せた速攻に今1度出た。シューズが床と擦れて甲高い音を出しながらのドライブ。先ほどよりも僅かに速い気がする。気が付けば既に菊池先輩は修の眼前にまで迫っており、また潜るかのようなドリブルで修の脇をすり抜けようとした、その時だった。

「え——」

菊池先輩が間の抜けた声を漏らしながら修の脇を通り過ぎて立ち止まった。その手にボールは無い。呆然と自身の手を見つめながらあるはずのボールを捜して後ろを振り返る。

「スピードのみに頼ったテクニクの無いドリブルなんて直ぐに止められるものです。……それに、俺の友人に先輩よりも速く動ける奴がいますから」

先に見せた不敵な笑みと共に修は静かに佇んでいた。

## 第08話 昼飯と女装 part 2

ざわつく体育館内と、その中心に堂々と佇む修。今だ信じられないものを見たかのように呆然と立ち尽くす菊池先輩。修の放った一言が菊池先輩に確かな傷跡を残していた。

「菊池の弱点がバレてしまったか」

腕を組みながら険しい表情を浮かべる森下部長が小さく呟く。

「そうですね、彼はもつと技を磨くべきだった。しかし、あのスピードを止める藍田くんにも驚きましたか」

「ええ、今年は凄いのが入って来ました」

森下部長と望くん先生は、ゲーム中の2人に視線を合わせながら感慨深く頷いた。珍しく望くん先生が大人っぽく見え、また、隣の森下部長も先輩らしく部長という立場で部を背負って立つ人間としての大きさを感じた。

「お、おい、どうせまぐれなんだろー？ さっさと続き始めるぞ」

動揺を隠し切れない菊池先輩と、それに反して落ち着いた様子でボールを手取る修。

今度は修のオフェンスである。ボールをワンバウンドで返された修はゆつくりと菊池先輩の下へとドリブルで歩み寄り、その場で足を止めて対峙した。

言葉は無い。無言で目を合わせながら来るべき動きに身を任せる

だけ。菊池先輩は両手を大きく広げながらその場に立ちはだかる。一方の修はそんな菊池先輩を正面に見据えている。そして一呼吸置いた後、一気に流れが動いた。

右に抜けようと体重移動を行った修。それに対し、あの対峙がいつも以上に集中力を研ぎ澄ませる結果となった菊池先輩は持ち前の運動能力で素早く反応し、コースを無くす為に修の前へと出ようとした。それは誰が見ても賢明な判断だった。だが、塞いだコース上に修はおらず――

ボールがリングを潜り、あの乾いた音が再び体育館内を支配する。それは、修が見せた華麗な舞のようであった。右へのフェイントは研ぎ澄まされた菊池先輩の神経を逆手に取る為の計算上の演出。鋭敏になった感覚がどんな修の小さな拳動をも捉えてしまい、逆に菊池先輩の体を動かしてしまったのだ。故に、その後の俊敏な無駄の無い舞のようなバックロールで修はいとも簡単に菊池先輩を置き去りにしてしまった。

圧巻だった。菊池先輩を抜く事は決して容易でない。それは今までのゲーム内容を見れば分かる事だ。しかし、それを修はあっさりとやってのけてしまった。

あの3 on 3。あれはただの様子見でしかなかったという事。俺はそれを今になって気付くのだった。

「こ、これは驚きましたねえ……。まさかここまでとは」

「本当に凄いのが入って来たみたいですね……」

驚きを隠せない望くん先生と森下部長。笑顔の引き攣りを見ればそれは明白だった。実際この2人に限らず、佳苗を含めた周囲の者は驚きでポカンとしている。

「フッフ、佳苗。修を舐めるなよ」

「すごい……。あんたも見習った方がいいわね」

そう切り返してきたか。でもな、俺にあんな真似出来る訳ないだろ！ 物事を考えながらいちいち計算してバスケなんて出来るか！俺は本能で動くタイプなんだよ！ あ、今俺良い事言った。そうなんだよ、俺とあいつはプレイスタイルが違うんだよ。そういう事にしておこう。

その後、修のプレイは冴え渡り、菊池先輩は本来の持ち味を活かせぬままほとんど一方的なゲーム展開となった。

「ああ、負けちゃったよー」

終わってみれば結果は10-3。しかし菊池先輩は残念そうな表情をしているものの、悔しそうな様子ではなかった。どうやら内面も見た目通りに無邪気らしい。仮にも先輩だが、今のあの状態を見ればどう考えても年下にしか見えない。

「おい藍田ー、今のどうやったんだ？ 俺にも教えてくれよー」

「ぬ？ あ、いや、あれは――」

「えー、いいじゃないかよー」

何と微笑ましい光景だろうか。親戚の子供を面倒見るお兄さんっ感じで。菊池先輩にもし尻尾が生えていたならば、間違いなく凄まじい勢いで振っている。千切れて飛んで行きそうなほどに。

「お、おい！ 涼よ、助けてくれ！」

おお、珍しく取り乱してますな。走って逃げる修の後ろをぴったりと菊池先輩が追いかけている。さすがにあの人は足も速いな。普段いくら修が俺に酷い扱いをしていても、それをそっくりそのまま他人に出来る訳がない。ましてやそれが先輩となれば尚更だ。仮に俺と修ほどの深い愛で繋がっていれば――すいません。言って気持ち悪くなりました。

まあ、つまり、本来の修を曝け出すには相手が悪いって事だ。

「すまん、俺に2人の邪魔をする権利は無い」  
「この薄情者が！」

いつもと立場が逆転し、妙な優越感に浸りながら俺は少しの間2人を眺めていた。

そんな時だった。俺が周囲の異常に気付いたのは。

「な、何だこの宙に浮くハートの群れは……」

実際に見えれば病院へ行く事を強く勧めるが、目の前にいる女子バスケ部の皆さんの目は間違いなくハートでいっぱいだった。両手を胸の前で組みながら視線は1人に釘付け。普通、いくら惚れ惚れしても胸の前で手なんか組まないよ？ そんなの妄想上の世界だけだって。だけど、そこまでこの方達を虜にするイケナイ男の子がここに……。

まさか俺？ うっそ！？ 遂に俺の魅力に皆が気付いてしまったか……。俺ってなんて罪な男なんだろう。必死に隠していたつもりだったんだけど……ここまで魅力的だとそれも無理だったか。

俺は腕を組んでうんうんと唸りながら甘美な一時を過ごした。

「藍田くんってカッコイイよね」

「うん、彼女いるのかな？」

「ああいう藍田くんも何だかカワイイよね？」

へへ、現実引き戻されたぜ。どう考えても話の流れ的に修の事だよな。ええ、分かっただよ！ 俺も心の中でぐらいモテたかったんだよ畜生ー！

妄想癖である事が発覚した瞬間だった。

依然として女子バスケ部の方々が恍惚とした表情を浮かべる中、次のゲームに移ろうと望くん先生が口を開いた。

「何だか桃色の空気ですが、次いきましょう」

「ようやく僕の出番か。鮮烈デビューの時が、遂に……」

何やら怪しい事を口にしながら前へ出たのは吉見だった。中指で眼鏡をクイッと上げながら妙な自信に満ち溢れた吉見は相変わらずの七三である。

「凄い自信だな吉見。緊張しないのか？」

「この僕が緊張？ 笑止、冗談は止めて欲しいね」

しかし、尋常じゃない振れ幅で脚が震えている吉見。ある意味下半身は別の生き物だ。これだけ下半身が動揺しているのにそれを表情に出さないお前は尊敬に値するよ。ある意味凄い。

俺はふき出してしまいそうなのを必死に堪えて吉見を見送った。

隣にいた佳苗は盛大にふいていたがな。

「先輩、よろしく願いします」

「……よろしく」

吉見の相手は澤井先輩である。目元を覆う長い髪で表情は全く窺えないが、いつもと変わらぬ雰囲気を醸し出している澤井先輩に緊張の色は見えなかった。その点で過度に緊張している吉見にとってはマイナスにしか成り得ない。

互いに軽く敬意を称して礼をすると、先攻の澤井先輩へボールが渡った。

真剣な表情で澤井先輩から目を離さない吉見。やや腰を落として両手を広げつつ、その眼鏡の奥に宿る闘志は頼もしく感じられるほどだ。吉見のバスケ経験は知らないが、『高校バスケで名を残す』とはつきり言い切れるのだからおそらくは地元でも有名な選手だったのだろう。俺はなるべく自己主張の激しい下半身を見ないようにゲームの展開を待った。

一瞬揺れる澤井先輩の体。急激に加速を始める澤井先輩に対して緊張の所為か吉見の反応は思わしくない。初動に明らかな差のあるこの2人、明暗はここで既に分かれてしまっていた。吉見が追った先に澤井先輩の姿はそこに無く、リング下で楽々とレイアップを決めていたのだ。

「これで1・0ね」

佳苗が俺の方を嫌味に横目でジロジロと見てきやがる。

ど、ドンマイ吉見。きつとまだお前は本領を発揮出来ていないんだよな。分かっているぞ俺は。これから徐々に実力を出していくつもりなんだよな？ そうなんだよな？

縋る思いで吉見に視線を向けてみると、目が合うなり堂々と親指を立てながら満面の笑顔を返してくれた。

よし、今はあいつを信じよう。例え笑顔が引き攣っていたとしても信じよう。

結局俺は佳苗に何も言い返せないまま、吉見のオフENSEを迎えるのであった。

ボールを受け取った吉見。自然体で構える澤井先輩と向い合いながら目を瞑り、小さく深呼吸をしている。数回、息を吸って吐いたところだった。吉見は目を勢い良く開き、予想を遥かに裏切る速さで切り込んだ。

「し、しまっ——」

あれだけの脚の震え。それは普通に考えてドリブルの邪魔にしかならない。吉見本人は気付いていないようだが、こうなる事は体育館中の全員が分かっていた。

ボールを床につこうと手から離れた瞬間、ボールは間違いなく床に向っていた。それは当たり前だ。しかし、ボールを離して間もなく、凄まじい振幅で左右を行き来する右の脚によってあさつての方向へとボールは飛ばされてしまったのだ。

「確かに鮮烈デビューだな」

「これで1勝はいただきね」

駄目だ。仲間の俺が言うべきではないが、勝てる気がしない。ドリブルすらまともに出来ないなんて話にならないぞこの野郎！普段は無表情な澤井先輩ですら歯を見せながら笑ってるじゃないか！「わぁー、綺麗な歯だね」ってか？ そんな事どうでもいいわ！顎に手を当てながら、なぜボールがあんな方向へ飛んでしまったのか理解出来ない様子の吉見。

分かってないのはお前だけだよ！ 天然か？ お前は天然なのか！？

“天然”という強大なボケをかます吉見相手に、俺は肩で息をしながら応戦するのだった。

## 第09話 昼飯と女装 part 3

誰もが予想していた通りのゲーム結果だった。1 - 10。しかし、それでも吉見が1点を挙げたのは意外である。たかが1点ではあるが、ドリブルをまともに出来ない奴が入れたと考えれば結構凄い。その上、相手の澤井先輩も上手かった。

澤井先輩は菊池先輩のようなスピードを持っている訳でも、修のように身長が高い訳でもない。その中で澤井先輩の強みは“ミス”をしない事。一見すると地味で、派手さの無いそのプレイスタイルは印象に残り辛いかもしれない。だが、ミスをしない事がどれだけ難しいか。それはバスケだけでなく、スポーツを少しでもやった事のある人ならば分かって頂けると思う。ミスを無くす事は基本中の基本。口で言うのは簡単だが、それを実際に出来る人間なんてほとんどいないと思う。どんなに極めた人だって、間違いは必ず起るのだから。

さらにミスが無いという事は、それに見合う集中力と技術を兼ね備えている事にもなる。高い集中力と技術があるならば、ドリブルからフェイント、シュートに至るまでの過程を円滑に行えるのである。無駄の無い動きだからこそ、最小の動きで最大の効果が得られるというものだ。

何やらベタ褒めだが、澤井先輩にはそういった凄味があるのだ。そんな澤井先輩からドリブルの出来ない吉見が取った1点、これは価値があると思う。ただ、それは苦し紛れに適当に放ったのが偶々入っただけだが、それでもまあ、1点は1点だ。

俺はこちらに戻って来る吉見を温かく迎え入れた。

「よくやった吉見。良いゲームだったぞ」

元々は俺がこの不毛な戦いに巻き込んでしまったのである。負け

たとはいえ、頑張った吉見を責める事は出来ない。残りの1勝は自分で勝ち取ればいいのだから。

「加住くん……、僕は……」

俯きながら大きく肩を落とす吉見にゲーム前のような覇気は見られない。俺は居た堪れなくなり、そっと吉見の肩に手を置いた。

「気にしないでくれ。本当は関係無いはずなのに巻き込んでしまつて、ごめんな」

俺の所為で大切な吉見のデビュー戦を苦い思い出にしてしまった――。そう考えると申し訳ない気持ちで胸がいつぱいになった。だけど、今の俺は優しく諭してやる事しか出来ない。

「……僕は」

「うん？」

「僕は今、大きな1歩を踏み出したんだ！ バスケット始めて初の得点！ 今日は記念すべき日だ！」

大きくを両手を上げながら突然はしゃぎ出す吉見。

ああ……良かったね。元々そんなに目標は高くなかったんですね。色んな意味で今の自分が恥ずかしいです。

「佳苗、あいつ滅茶苦茶扱いにくいんだけど」

「あら？ 仲間が出来て良かったわね」

どういう意味だよオイ！ 俺もそんな風に思われてたのか？ そんな目で見えるなよ佳苗さん！

はしゃぎ続ける吉見の横で、俺は心の汗を流しながら気色悪い上

目遣いで佳苗を凝視してやった。

「きもっ」

心の汗が目から零れ落ちた。

迎えた最終ゲーム。互いに1勝1敗であるため、ここで全てが決する。俺の相手はもちろん森下部長だ。その風貌から伝わって来る威圧感の中々のもので、2年という歳月が如何に大きいか窺える。体の大きさからして競り合うのは得策じゃない。となれば、俺の持てる限りのスピードで引つ掻き回すしかないだろう。スピードに關してあまり自信が無いとはいえ、森下部長よりかは幾分小回りが利くはずだ。

「お手柔らかに頼みます」

「嫌だ」

「即答!？」

待て待て俺。相手のペースに乗せられちゃ駄目だ。人を弄ぶかのような、あの笑みを見れば心理作戦である事は明白。落ち着け…。

俺はなるべく目を合わさないようにそっとポジションについた。

先攻は森下部長。こうして対峙してみると自分の力量でどこまで喰らい付いていけるのか不安になる。中学を出て間もない、ベンチにすら入れなかった俺が――。

ドリブルを始めた森下部長はやはりスピードという点で脅威は無かった。迫られてもすぐに反応出来たし、何より菊池先輩や修のそれよりはかなり見劣りをする。しかし、そこは本人も自覚しているといった所。大きな体を上手く遣い、俺がいくら手を伸ばしても体を入れられて阻まれ、ボールは遥か彼方。何とかぴったりマークするのが精一杯だった。

そしてそのままリング下へとあっさり押し切られ、ボードに当ててジャンプシュートを決められてしまった。

まだだ。まだ1点決められただけ。あの攻め方にはきつと綻びはあるはずだ。今はそれを探せばいい。

自分にそう言い聞かせながら、今度は俺のオフェンスへと移る。

丁寧に、且つスピーディーにドリブルを……ん？ 森下部長の足元のあれは……。

どう攻めようかと頭の中で思案していた時、今後のゲームの足掛かりとなる1点目を奪う決定的なチャンスが森下部長の足元に転がっていた。

「もらったー！」

勢いに任せたスピード重視のドリブル。初めのゲームで菊池先輩が痛い思いをした攻め方であったが、今の俺にとっては非常に都合が良い。なるべく森下部長を避けて迂回しながらリングへと向かった。

だが、菊池先輩のドリブルスピードに遠く及ばない俺のドリブルでは、さすが森下部長を抜き去る事は出来なかった。したがって、何かしらの要素をこのドリブルに付加しなければいけない。さっき

はそれを必死に考えていたのだが、今の俺には“アレ”があった。  
既に正面に回り込めれつつある森下部長を横目に、俺は強引にリ  
ングへと向う。

「威勢が良いのは口だけか！ そんなドリ——ぶぐあっ！？」  
「1点ゲット」

森下部長は自分の靴紐を踏んで盛大にコケた。不慮の事故であつ  
たため、横っ腹から鈍い音を立てて床へ直撃。痛みで咽ている森下  
部長の目は涙目である。ちなみに、その間に俺はきつちりとレイア  
ップを決めた。

何という頭脳プレー。まったく、自分の才能が恐ろしいよ。  
俺はサッカーで得点を決めた時のようなパフォーマンスを繰り出  
しながら体育館中を走り回ってやった。

「見たか！ 同点だ！」  
「あんた、ほんとと小さい男よね」  
「狡いぞ、涼」

しかしそのまま修達の元へ駆け寄って行った俺は、手厳しく向え  
られるのだった。

だって仕方ないだろ！？ 俺は勝つ為に必死なんだよ！ 名誉が  
懸かってるんだぞ！

「うるさいお前ら！ 今日の帰り道に黒猫に懷かれる！」  
「……」

おおーこのシーンとした空気、堪りませんね。それにこの身を刺  
すような鋭い視線達……最高です。

俺は現実を受け止められなくなりつつあり、静まり返った鋭い視

線元に背を向けた。

「森下部長、早く続きを！」

視線で射殺される危機にあった俺は、今だ涙目の森下部長へゲームの再開を促す。

早くしないと本当に死んじゃう！ 恐くて後ろ振り返れないんだって！

俺がそんな思いを胸に秘めていると、床に座り込んでいた森下部長はゆっくりと立ち上がった。横っ腹を押さえながら立ち上がるその姿は見ていて痛々しい。

「お前……、叩き潰してやるからな」

恐っ！？ そんなに睨みながら言わないで下さいよ！ 分かりました！ それなりの誠意を見せますから！

「いや、ほんと、すいませんでした。さっきの点は無かった事にしてもらっていいのでそれだけは勘弁して下さい」

奥の手、平謝り。俺は“長いものには巻かれろ”の精神を大切にしているんだよ。というか、目の前でデカイ体した坊主のイカつい奴に『叩き潰す』って言われたらどうよ？ 普通謝るって。本当に命の危機だよ？

何とか明日への光を見出す為に出た平謝り。これで少しは森下部長も落ち着いてくれればいいのだが……。

「よし。狙い通りだ」

待てコラアアア！ シレっと何言っちゃってるんですか！？ 計

算？ 俺まんまとはまっちゃたの？ 格好悪いなオイ！

俺はこうなる運命だったのだろうか。結局俺の得点は振り出しに戻り、0 - 1でゲームは続行するのだった。

そして、迎えたゲーム終盤。現在の得点は4 - 9で森下部長がリード、勝利へ王手をかけている。あと1点取られれば俺の負け。しかし、それでも俺には焦りの色が無かった。

森下先輩の攻め方は終始同じで、自身の体を壁にしながらボールをディフェンスに近付けない安定したポジショニング。俺はそれに今までやられて来た訳だが、ここでようやくその攻め方にも綻びが見えた。つまり、森下部長にこれ以上の点はないのだ。

10回目の森下部長のオフェンス。ここまでパーフェクトに決められ続けた悔しさもあるが、そこは俺との経験や技術の差である。初めて得点を阻む自分の姿を想像しながら持っていたボールを森下部長にワンバウンドで渡した。

「え——」

ボールを受け取った瞬間、急に目の前から消えた森下部長の姿を追えずに間抜けな声を漏らす。その場に呆然と立ち尽くす俺。後ろからは聞き慣れた、あの乾いた音——。

「はい、終了！ 森下くんの勝ちですね」

事の成り行きを見守っていた望くん先生達が、その輪を狭めて歩み寄って来る。視界の端では、はしゃいでいる佳苗の姿が見えた。満面の笑顔で喜んでる姿を見て、俺は負けた事を実感する。

「ノオオオーーー！ 神は俺を見捨てたのかアアア！」

頭を抱えながら膝をつく。何という厄日！ 最も恐れていた展開になってしまった……。

あの時、俺の心の中にあつた慢心。活路を見出した瞬間、もう既に止めた気になっていた。だが、森下部長はそんな俺を嘲笑うかのように、未だ見せた事の無い俊敏な動きで得点を決めてしまった。

完敗である。目先の事に囚われて、森下部長の本質を見極める事が出来なかった俺の致命的な失策。修は見事に破って見せたが、俺にはやはり中学と高校という壁はあまりにも厚かった。

大きな溜息を吐きながら今ゲームの反省をしていると、ふと俺の肩に置かれる魔の手。

「涼〜？ 明日、楽しみね〜？」

「い、イヤアアアーーー！」

俺の絶叫と共に昼飯と女装を賭けた戦いは幕を閉じるのであった。

## 第10話 悪夢の始まり

ま、股がスースーする。妙に風通しの良いこれはどうにかならないものだろうか。あ、一応言っておくが、決してパンツを履き忘れた訳じゃないからな。それだけは断じて違う。

「あんた……性転換手術って知ってる？」

「当たり前だろ？ 何を急に——ハッ！ め、目が怖いよ佳苗さん！」

「本当に女の子みたいだね……」

只今、俺は犯してはいけない領域へと足を踏み入れてしまった。鏡の向こうで顔を引き攣らせている1人の女の子。頬を紅く染めながらこちらをずっと見ているその様子はどこかで見覚えがあった。

「どうしたのよ？ まさか自分に惚れた？」

「そんな訳ないだろう！？ 悲しい現実を必死に受け止めようとしてるんだよ！」

うう……どうして俺がこんな目に……。どうして俺がこんな姿を……。助けてよ、修えもん！

佳苗が口角を吊り上げながら二ツと怪しい笑みを浮かべている。その隣では憐れむように桃ちゃんがこちらを見ていた。

昨日の敗戦から一夜明けた今日、いつもより早く登校させられた俺は佳苗と桃ちゃんの玩具となっていた。佳苗は『罰ゲーム！』と叫びながら俺の制服を無理やり剥ぎ取り、どこから取り出したのか女子の制服をそのまま俺に着させた。それはそれは見事な早業だった。

初めは隣で控え目にその様子を見ていた桃ちゃんもいつの間にか目を輝かせてそれに参戦し、俺にウィッグを付けるなり『新境地だね』と、全く嬉しくない感想を述べてくれた。

「それにしても驚いたわ……まさかここまでハマっちゃうなんて」「そうだね、本当に可愛い……」

この台詞を聞いてこれっぽっちも嬉しくないと思えただけでも俺はまだ正常だ。正直ホツとしている。ここでもし冗談でも、『嬉しいわ』なんて言おうものなら本当にタダで済まされない。というか恐くて想像したくもない。

「そんな事よりもさ、このスカート短すぎないか？ 何か寒いんだけど」

「仕方ないでしょ？ それ私のお姉ちゃんのなんだし。お姉ちゃん、私より小さいからあんたが着るとやっぱそうなっちゃうわよね」  
「ぐう……クソ。伸びやがれスカート！」

ここまで短いと寒い上に恥ずかしい。スカートを引っ張ってみるが、当然伸びる気配は無かった。むしろ、無理に引っ張ったスカートはずるりと滑って床に落ちた。

は、恥ずい。慌てて落ちたスカートを拾って履いたが、こちらを見ていた2人の視線がどうも気になった。俺は咄嗟に、「えっち……」と顔を紅くしながら体をモジモジさせて目を逸らしてみる。

「か、可愛い……」

「涼！ 抱きしめていい！？」

「は？」

うおい！ 反応が違っただろうが！ ここは俺は罵倒するところだろ！？ 余計、居心地が悪くなったわ！

目の前で目の据わった2人に心の中でツツコミを入れる俺なのであった。

「お、おい、変な目で見られてないか？」

「うん、大丈夫みたいだよ」

俺はすれ違う生徒の視線達をひしひしと感じていた。ただ、隣を歩いているのは美少女といっても何ら遜色のない桃ちゃんなのだから、彼らはそちらを見ているのだろっと思っが。仮に俺を見ている奴は昼食が不味くなる事を約束する。ちなみに佳苗は宿題をやり忘れたとかで慌てて教室へと帰って行った。

びくびくしながら1階の廊下を歩き、他の生徒と目が合う度に慌てて逸らす。それを繰り返しながらようやく教室へ辿り着いた頃にはすっかり疲れ果てていた。

「ぶはあゝやっと着いた……。まったく、このままじゃ1日持たないぞ」

大きな溜息を吐きながら教室の扉を開き、その隣では桃ちゃんが苦笑しながら相槌を打ってくれている。俺は思い足取りで自分の席に向おと思ひ、一歩踏み出した瞬間に固まった。

教室中から集まる好奇の視線。さっきまで雑談で溢れていた教室

が嘘のように静まり返った。入学してからまだ間もないとはいえ、机を並べるクラスメイトのいるこの教室は俺にとつてのホーム。しかし、どうもアウェイな感じがして仕方がなかった。

「お、おはよう！」

右手を軽く上げながら、なるべくいつもと変わらない挨拶を試みている。格好は違うが大切なのは心だと信じ、返って来る返事を期待しながら待ってみた。

「……」

な、なるほど、集団無視ね。たった今、俺の繊細な心はズタズタに引き裂かれました。そんなポカンとしながら俺の方を見るのは止めて！ 目の前で泣くぞ？ 泣いてやるからな！

「おはようございます桃さん！ いや、今日も可愛い」

そんな時、突然1人の男子生徒が教室に入ってきた。その男子は入ってくるなり桃ちゃんの前に立ち、爽やかな笑みを浮かべている。長めの髪は毛先をあそばせながら整髪料でお洒落に整えられ、緩やかに着崩した制服姿がまた似合っていた。顔立ちも良く、見ていて正直格好良い。が、どうもチャライ。それが俺の率直な感想だ。

「桃ちゃんの友達か？」

「い、いや、そういう訳じゃ……」

正面の男子に戸惑う桃ちゃんは、やや困惑気味に少し後ずさり。

だが、少し距離を置いて、もまたそれを詰める男子。

「ちょ、桃ちゃん困ってるぞ」

「ん？ おお、君も桃さんに劣らず何て可愛らしい……」

「なっ……おい、寄るな！」

俺が声を掛けた途端、目の色を変えてターゲットを変更する男子。俺が男であるという事にどうやら気付いていないようである。ちなみにようやく開放された桃ちゃんは安堵した様子ではあるが、標的が俺に変わるなり心配そうな表情でこちらを見ていた。

「そんな事を言わずに……あ、名前も知らない奴と話したくないって事ですか？ わかりました。俺は柏木<sup>かしわぎ</sup> 純太<sup>じゅんた</sup>です。どうぞよろしく」

お前の名前なんかどうでもいいわ！ 俺は男だから！ そこ勘違いしないで！

しかし、これを口にする事が出来なかった。いずれはバレると分かっている相手も俺の事を女だと勘違いしている以上、自分から男である事をバラすのも何だか気が引ける。とにかく、俺は徐々に距離を詰めて来る柏木とやらと距離を取った。

「さあ、そんなに恐がらずに」

「だ、だから寄るなっ！ ……ちょ、ちょいちょい！ 手触るな！」

男の手触りながら何ちよつと顔紅くしてんの！？ お前まさかそっち系！？ 待て待て俺はノーマルなんだって！

「朝からやけに元気だな、涼。お前もついに目覚めたという事か？」

「何に！？　つていうかナイスタイミングだ修う！　こいつをどうにかしてくれ！」

俺が迫りに迫られた末、とうとう壁際まで追いやられていた頃、いつの間にやら現れた白馬の王子様が無表情でこちらの状況を考察していた。修の登場に、凄まじい勢いで振り向く女子達。  
マイクラスメイト達、意識あるんだったら助けてくれよ！

「ふむ、お前は出席番号6番の柏木か？」

「知り合いか！？」

「知らん」

全く考える素振りを見せる事なく即答する修。

ちよつて待て……6番つて俺の1つ前じゃないか！　何で気付かないんだよ俺！

「うるせえ！　お前だけには俺の名前を呼ばれたくねえんだよ！」

だが、修に名前を呼ばれた途端態度を急変させる柏木もといカシワ。お前みたいな男か女も区別のつかない半人前に『木』の文字は必要ない！　だからお前は今からカシワだ。

俺の脳内では意味不明なニツクネーム論争が繰り広げられ、その目の前ではカシワが修に敵意を剥き出しにしていた。

「奇遇だな。俺もお前の名前なんぞ呼びたくもない」

「上等だテメエ！　表出やがれ！　このクラスにモテ男は1人でいいんだよ！」

「後悔するなよ、万年発情男」

「ぶっ殺す！」

ああ、そういう事ね。つまり、修をライバル視してるって事が。くだらん、くだらな過ぎるぞカシワ！ しかも俺が言うのも何だが、お前如きのルックスでは修に勝てないぞ。その証拠に、クラスの女子はお前に殺意を抱いているからな。

俺は睨み合いながら教室を出て行くカシワの後姿にそつと手を合わせるのだった。安らかに眠れ……カシワ。

「やっと開放された……」

「朝から大変だね……」

ようやく席に辿り着いた俺は、桃ちゃんと苦勞を共に分かち合いながら大きな溜息を吐く。カシワのあの様子からして、桃ちゃんは過去に何度かあんな目に遭っていたのだろう。我が身で体験した今ならば言える。カシワは面倒臭い。

「不屈の精神だな、桃ちゃんは」

「あはは……」

俺は今日で解放されるからまだ良いが、今後も桃ちゃんがあんな状況に陥る可能性は非常に高い。というか、帰って来たらまた絡んで来るかもしれない。こうして苦笑している桃ちゃんを見ると、どうにかしてやりたい気持ちでいっぱいになった。

無い頭を必死に絞りどうかカシワ撃退作戦を考えようとした。  
が、それはクラスの男子達によって阻まれる事になる。

「な、なあ、さっき藍田が君の事を“涼”って呼んでたけど、もしかして加住なのか？」

「お前、本当は女だったのか？」

「ちよつと話さない？」

周囲に集まり出した男子達。どこか顔がニヤけ、何となくあのカシワと同じ臭いがした。

だから俺は男だって！ 反応が違うだろ？ 普通は『何、女装なんかしてるんだよー』とかじゃないの！？ それと最後の奴、男誘って何が楽しい！ 俺の隣に滅茶苦茶可愛い子がいるだろうが！

結局授業が始まるまでの間、俺に平穏が訪れる事は無かった。

## 第11話 階段からこんにちは

昼休み。開放されている屋上へ何とか逃げ切った俺は、疲れきった体を癒す為に大の字で寝ていた。

栄稜高校は1年生から3年生の教室がある生徒棟と、音楽室や美術室といった特別教室のある特別棟に別れていて、この2つは渡り廊下で結ばれている。またそれぞれに屋上があり、晴天時は清々しい空気の味わえるこの場所で昼食を食べる生徒も多い。しかしそれは生徒棟にのみいえる事で、離れた場所にある特別棟の屋上を利用する者はほとんどいない。したがって、今の俺にとってはまさにパラダイス。

「ああ〜幸せ〜」

空を仰ぎながら締めりの無い声を漏らす。今この場に居るのは俺だけではないが、俺にとっては心を許せる友達しかいないので特に気に留めない。

「ほほう、スカートにボクサーパンツとはまたシユールだな」

「何見てるんだよ!？」

顎に手を当てながらそう呟く修の顔は真剣そのもの。しかしそれがまた恐かったりする。別に今更見られても恥ずかしくない筈なのだが、どうもこの格好ではそれは当てはまらないようである。俺は慌ててスカートを手で覆ってみたりする。

そして、その隣では俺達のやり取りを桃ちゃんが天使の微笑みで眺めていた。

「桃ちゃんも寝ないか? 気持ち良いぞ」

顔だけを桃ちゃんの方へ向けながら軽く手招きしてみる。

「涼、昼間っから大胆な奴だな。もう少し時と場所を考えて――」

「ちょ、誤解を招く言い方するな！ 俺に何の下心も無いから！ 桃ちゃんも気に――って顔紅いし！」

俺の純粋なお誘いを修が横からカシワ発言で被せるもんだから、それを真に受けた桃ちゃんは顔を真っ赤にしながら口をパクパクしていた。

わぁー茹蛸やー、ってそんな事言ってる場合じゃない！ 微妙に俺が言っただけみたいになってるじゃないか！

「ももも桃ちゃん落ち着こう。俺達は健全な女子高生だからそういう意味で言っただけじゃ……」

何言っちゃってんの！？ 間違えて自分の事も女子高生って言うてるし！ 落ち着くのは俺！

冷静な状況判断ゼロの俺は大失態を犯してしまうのだった。

ようやく落ち着きを取り戻した頃にはさつき以上に疲れてしまっていた。顔の紅みが引いた桃ちゃんであったが、どこか俺を見る目が余所余所しい。目が合ってもすぐに逸らされたりしてしまうのだ。俺は全ての元凶である修を睨みつけてみるが、どうやら本人は考え事の真っ最中であった。

「ん……」

唸りながら無駄に凜々しい表情を浮かべる修。相手が女子であれば思わずうつとりと見惚れてしまうだろうが、生憎俺は普通の男子だ。それを見ていて何とも思わない。

「どうしたんだ？」

深く考え込んでいる様子の修を覗き込みながら、俺は返って来る答えを待った。

「いや何、女装したお前のキャッチコピーを考えていた」  
「キャッチコピー？」

修は小さく頷き返すと、その考え付いたキャッチコピーとやらを披露し始める。

「つまりは、こういう事だ。“男出身の転校生”」

ああ……なるほど。これで全て悟った。こいつは今、完全に面白がっている。キャッチコピーというフレーズに少しでも興味を引かれた俺が馬鹿だった。今後も期待せずに聞こうじゃないか。

「却下だ。俺は今でも男だし、そもそも転校生じゃない」

「むう、駄目か。ではこれはどうだ？ “女装界のパイオニア”」

誰が先駆者じゃボケエエエ！ 女装したのは今日が初めてだから！  
俺にそんな趣味ないわ！

「もっとやる気出せコラ。悪意しか感じないぞこの野郎」  
「我儉な奴め。これが最後だぞ？ “偽装女子高生” どうだ、切れ  
ているだろう？」

ん……惜しい。いや、全然惜しくないから！　そもそも“偽装”という言葉に負のオーラしか感じないぞ！　お前は俺に何を求めている！？

「切れてるのはお前の思考回路だろ馬鹿たれ！　もういい！　これ以上余計な事は言っな！」

「フツ、素人にはこの良さが分からんか……」

分かりたくもないから！　　というか素人って何！？　　お前はこのレベルで玄人なのか！？

壮絶な1日だ……。女装してから何も良い事が無い。早く1日が終わらなければ、色々な意味で危険だ。

しかし、やはりこういう時に限って時間の流れは遅く感じるものである。授業時間はともかく、休み時間になる度に囲まれながら話し掛けられ、それに答えるのが面倒で仕方なかった。それに、俺が『加住 涼』だと分かっているても少数の者は真顔で『好きかもしれない』とか恐い事を言ってくる奴もいた。お陰で今後の学校生活に支障が出そうである。

そして、女装をして1番困った事がある。それは“トイレ”だ。女装しているのを忘れていつもの感覚で男子トイレに入ると中にいた数人の生徒が一瞬固まり、その後顔を真っ赤にしながら慌ててチャックを閉めてトイレから出て行った。俺は非常に申し訳なく思いながら、心の中でそんな彼らに謝罪しつつ自分も用を足し始めたが、今度は入って来た生徒が固まった。『間違えました！』と、何の非も無いのに慌てて出て行く彼らはきつと不思議に思っていたに違いない。

「このままここで放課後を迎えるのもアリだな……」

これ以上の辱めを受けるくらいならここで授業をサボるのが得策だ。また教室に帰っても意味不明な質問をされるだけだしな。

「ナシよ！ そんな事は私が許さないから！」

「うお！？ か、佳苗！？」

午後の予定を計画中、大きな音を立てながら開かれた屋上の扉。そこに立っていたのは学年で1、2を争う男前、滝下 佳苗だった。

「本人を目の前に堂々と悪口が言えるとは良い度胸ね？」

俺の馬鹿！ なぜ口に出した！ 慎重にフォローせねば……。

「わ、悪口じゃないぞ。俺の率直な感想だ」

泥沼ああ！ それを悪口って言うんだよ！ わざわざ肯定してどうするんだ！

言ってから気付く間抜けな俺。予想通り、佳苗のこめかみには青筋が立っている。こ、殺される……。

「ま、待て佳苗！ 俺に猶予を——」

「死ね！」

「ギャーーーー！」

佳苗さんからストレートな殺人予告を頂いた俺は、腹部に強烈な衝撃が伝わると共に、そのまま意識を手放してしまうのだった。

「うう、い、痛い……」

これが佳苗の拳か……。お、恐ろしい。時計を見ればいつの間にか30分は経過していた。とつくに午後の授業が開始されている時間であり、周りに修達の姿は無い。しかも、俺は屋上で放置されていた。

「放置プレイか畜生、俺にそんな趣味は無いのに」

桃ちゃんはきつと気に掛けて保健室まで連れて行こうとしてくれたであろうが、おそらく修と佳苗がそれを全力で阻んだに違いないというか、そう願いたい。桃ちゃんだけは俺の味方であると信じている。

“友達とは何か？”これを脳内ディスカッションの議題に挙げながら、俺は屋上を後にするのだった。

幸いにも、やはり午後の授業が開始されているだけあって他の生徒の姿は無かった。誰の視線も感じる事無く、妙な開放感を味わいながら階段を下りて行く。特別棟であるため、微かに聞こえるピアノの音を耳にしながら下手糞な鼻歌を歌ってみたりする。

「ふっふっふん」

音痴ではないぞ。むしろこれだけ美しく耳に届くピアノの音を台無しに出来る俺はある意味天才。流されない鼻歌手。

相変わらずの絶妙な音程で鼻歌を歌い続け、次第に気持ち良くな  
って来たので軽く振り付けを取り入れてみた。

「やっぱりクラシックにロボットダンスは厳しいな……」

見よう見真似で出来るダンスといえば、出来損ないのロボットダ  
ンスしか思いつかなかった。無意味に滑らか過ぎるロボットダンス  
はやっている自分ですら笑えたが。

改めて自分の才能の無さに気付き、丁度2階から1階へと下りる  
階段の中段辺りに差し掛かった辺り、ここで事件が起こった。

「きゃーー！」

「ふっふっふ——ッ！ ひ、人！？」

鼻歌の真つ最中に、階段の上から落ちて来るといふ斬新な遊びを  
している1人の女子生徒。あ、すいません、見えちゃいました。純  
白な優しさをありがとう。ってそんな事言ってる場合じゃないだろ  
う俺！ 明らかに事故だよこれは！

「かかってこいやあああ！」

咄嗟に受け止める体勢に入り、落ちて来る女子を待ち構えた。

「軽っ！？」

パサッ。キャッチした時の音を表現するとこんな感じである。俺  
が階段の中段にいたとしても、高さとしてはそれなりにあったはず  
だった。あつたはずなのに——

「軽っ！？」

2回言っちゃったよ。でも、それぐらい軽い。俺の腕の中で目をパチパチと開閉させているこの女子は、軽いだけあって体が人より小さかった。小動物的な愛らしさと、それに相反した成長を見せている男子の憧れ。な、なんというアンバランス。しかしそれがまた……。

「あ、あの……」

「ふあい!？」

いきなり話し掛けられ、情けない返事を返す俺。顔が真っ赤に染まっていくのを感じながら慌てて平静状態にもっていかうとするが、視線の先にどつしりと構えていらっしやる男子の憧れがそれを容赦なく阻んだ。

「あの、ありがとうございます。そろそろ下ろしてもらっても……」

「ああはいはい!　こちらこそありがとうございますね!」

謎のお礼を繰り出す俺に、目の前の女子は不思議そうな表情を浮かべながらもニツコリと微笑んでくれた。

おお、何と笑顔が素敵な女の子だろうか。小さいけれど、それがまた凄くいい。どこぞの先輩と並ぶと似合いそうだが、それ以上にやはりある1点から目が離せない。アンバランス最高!　それが俺の脳内に強く記憶されるのだった。

「そんなに、コレ気になりますか？」

そう言うなり男子の憧れに視線を落とす女の子。見てるのバレバレじゃないか!　気まずいつすよ!

しかし、無言で頷く俺は変態か、それとも勇者か。

「触ります?」

小さくクスツと笑う女の子は、普段同じ経験をしているのか夢のような一言を返してくれた。

大胆だなあオイ! 初対面の男子にそんな事言ったら襲われますよ!? って、今俺女装してたんだった!

どういう訳か、周りからは女子に見えるらしい俺の女装。目の前の女の子も俺の事を女子と勘違いしているらしい。

『加住選手は触るのかー!? おおーっと犯罪者の仲間入りだー!』

黙れもう1人の俺! お前なんか消えちまえ! 本能の俺はこうまで真っ直ぐだったとは……。このまま流れに身を任せてしまおうか。いや待て待て! 始まったばかりの青春を棒に振る気か!?

『すぐに断らない時点で加住選手は犯罪者の仲間だー!』

ぶっ飛ばすぞお前! 必死に本能に抗おうとする俺をちよつとは評価しやがれ!

「え、遠慮しますよ! それじゃ、俺はこれで!」

「え? あ、ちよつと待って下さい!」

「待てませんって! 追いかけて来ないで!」

泣く泣く夢の楽園への切符を手放した俺は、これ以上この場にいらると何かしらの過ちを犯してしまうと判断し、ダッシュでその場を立ち去ろうとした。が、意外に女の子の足が早く、上手く撒けなかった。

「まだちゃんとお礼言っていないですから！ それに名前も聞いてませんし！」

「加住です！ お礼ならさっき聞きましたから！ さよなら！」

俺は誰もいない廊下を全速力で疾走しながら何とか女の子を撒く事に成功するのだった。

「カスミさん？ 足速い……」  
微妙な誤解を残して。

## 第12話 後先を考えて

先日体験した女装での1日。傍から見れば神聖な学校生活を冒瀆しているようにも感じられるが、実は校長も公認だったらしく、その校長は興味本位で女装したまま部活に励んでいる俺の姿を写真に収めようと、教頭を引き連れて第3体育館にまで足を運んで来た。

ただでさえ女装していて練習し辛いのに、横からカメラを向けられると更にミスを連発してしまい、修からは数え切れないほどの舌打ちを頂いた。

俺のみならず、先輩達や女子バスケット部の人達も困惑している様子だったが、さすがに望くん先生のような若造が校長に意見出来るはずもなく、結局カメラマン気取りで妙にテンションの高い校長が帰ったのは部活終了間際だった。

「昨日の校長には焦った。あの空気の読めなさには焦った」

「ふむ、さすがの俺ですら舌を巻く自由さだった」

学食で向い合いながら昼食を食べる俺と修。その表情には幾分かの恐れも含まれている。さらに俺の斜め前に腰掛けている佳苗も感慨深く頷いていた。

「教頭先生がもつとしっかりしてくれねえ……、あんなに疲れなかったかもしれないのに」

佳苗の言う事は尤もだ。入学式同様、自由過ぎる校長を止めようとしていた教頭。相変わらず頭は寒そうだったが、校長と違って場の空気には敏感だった。無視されようと懸念に止めに入る姿は、俺達の目には救世主のように映ったものである。この分ならばその内校長も観念して帰ってくれるだろうと思っていた。が、しかし。

それまで教頭の言葉に全く耳を傾けなかった校長をおもむろに教頭の方へと向き直り何やら耳打ちすると、何食わぬ顔でまた撮影に戻った。その瞬間、教頭の顔は青褪め始め、それ以降2度と校長を制止する事は無かったのである。

「あれは間違いなく大人の事情だな」

そうとしか考えられない。ついつい目を背けなくなる汚い手法を生徒の前で堂々とやってのける校長の胆力。ある意味凄かった。

「まあ、でもあの状況を弘田先生にどうにかしろっていうのも酷かもね」

残った頼みの綱は望くん先生のみだが、やはり若い故に立場の弱いあの人がどうにか出来るはずもなかった。そう考えると、やはり仕方が無いと思わざるを得ない。

だが、俺の隣で苦笑しながら話を聞いていた桃ちゃんがそこで疑問を口にした。

「どうして？」

「ん？ そりゃ、望くん先生は教頭と違って偉い訳じゃないし、それにここに赴任してからまだ間もないらしいからな」

若いというのももちろんあるが、望くん先生は栄稜高校に赴任してからまだ2年目らしいのだ。校長を止める事が正しいとはいえ、周囲との関係を深めきれない望くん先生には難しいだろう。

「そっか……いくら校長先生の息子さんっていつても学校ではきちんと割り切ってるんだね」

理解を示しながらさらっと桃ちゃんの口から放たれた衝撃の一言。当然俺達はそれを聞き逃すはずが無い。

「ちょ、ちよつと待った！ 今のどついう事だ！？」

「弘田先生が校長の子供！？」

俺と佳苗の喰い付きっぷりに目を真ん丸と見開いて驚く桃ちゃんだが、一呼吸置いた後、身を乗り出していた俺達を再び席に着かせて非常に簡潔な説明をしてくれた。

「だって、弘田先生が最初のHRで言つてたよ？ 『僕は本校校長の息子です。似ているでしょ？』 って。だから佳苗はともかく、涼くんは知つてると思つてただけど……知らなかったみたいだね」

な、何という失態。俺とは対照的に驚いた素振りを微塵も見せないという事は修も知つていたのか……？ ややこしい奴め！

「あんた何で知らなかったのよ？」

「悲しい事に、どうやら俺の耳は飾りらしい」

本当に何で知らなかったんだよ……。あれか？ 望くん先生に巻き込まれて“危ない人”という不名誉極まりない称号を頂いたからなのか？ 言い訳がましいぞ俺！

「と、とにかく、あの校長を止めない望くん先生が1番の問題だろ？」

話がやや逸れてしまったが、大切なのはこの部分だ。俺の耳が飾りかどうかなんて正直どうでもいい。望くん先生がああ自由奔放な校長の息子であるならば止める事は容易かつたはずである。しかし、

をしなかった理由。それは――

「面白がっていたな（わね）」

見事にシンクロして見せた俺と佳苗であつたが、これは間違いない。確かに桃ちゃんの言う通り割り切つて仕事に臨んでいる可能性もあるが、そんなものはあの先生の振る舞いを見ていればゼロに等しい。楽しみながら俺を巻き込んだり女装させたりする望くん先生。そこを考慮するとこの結論に至る事は至極当然なのだ。

「だろうな」

最後に小さく呟かれた修の一言が、それをより一層確かなものにするのだつた。

「望くん先生といえはさ、今朝入部届けの締め切りがどうのこうの言つてたけど、結局桃ちゃんはどつするんだ？」

部活見学の初日に桃ちゃんとバスケ部の見学に行つて以来、既に入部を決めてしまった俺はあれから毎日バスケ部に顔を出していた。だから、その後桃ちゃんがどこの部活見学に行っていたのか知らないし、当然どこへ入部するかも知らない。

「私はその……秘密、かな？」

最後にイタズラっぽく笑ってみせる桃ちゃん。しかし、隠されれば知りたくなるのが人間の性。ここは加住の名に懸けて解き明かしてみせよう。

「桃ちゃん……教えて下さいお願いします」

おい、偉そうな事言ったわりには大した事ないなって思った奴。その通りだ。加住という名前に何の意味も無い上に、もちろん俺にそんな手腕は無い。ただ普通をお願いするのが最善なのだ。

「あはは、駄目だよ。その内きつと分かるから」

最後に「ね？」と付け加えながら眩し過ぎる桃ちゃんスマイル。ああ、もう俺逝つてもいいわ。自然に零れるその笑顔は反則だつて！ 貴女のその笑顔に一体何人のもののふ達が心奪われただろうか。だが、ここで引き下がらないのが俺の誇るべき短所。しつこさはストーカーをも凌ぐのだ。

「そうか……俺はやっぱ桃ちゃんに嫌われていたんだ……。しつこい奴つてやっぱ嫌いだよな……」

どうだ、この桃ちゃんの優しさを逆手に取る作戦は。我ながら天才。俯きながら声を張らずに背中を丸める。これぞ古の太公望も恐れる“自虐くん”だ。

「え？ そんな、嫌いだなんてこれっぽちも思っていないよ？」

面白いように焦り出す桃ちゃん。それを見て少し罪悪感を感じる俺であったが、あまりの引っ掛かりっぷりにつついイタズラ心がくすぐられてしまった。

「いや、いいんだ……桃ちゃんは優しいもんな。これ以上嫌いな奴と一緒にいたくないだろ……？俺、もう逝くよ……」

ミスったあああ！最後の『いく』を間違えちゃった！何か死ぬみたいになつてない？重過ぎるよ！

「ま、待って！そんな事言わないでよ！私、涼くんの事嫌いなんじゃない……むしろ——」

しかし、何も不思議に思っている様子が無い桃ちゃんは純粹なのだろうか。必死に止めようとしてくれる姿は涙ものだった。そして最後の言葉は本人の手で咄嗟に覆われ、俺の耳に届く事は無かった。

「むしろ……？」

俺が聞き返してみてもきちんと返ってくる答えは無い。だが、違う意味での答えが桃ちゃんの表情を伝って返って来るのだった。

「むしろ……その、あの……」

みるみる紅潮していく桃ちゃんの顔。視線はあっちに行ったりこっちに行ったりさせながら急にモジモジを始めた。

その可愛さでその仕草は反則だから！さっきの勢いどこいったの！？ドキドキが止まらないぞ畜生！

桃ちゃんにつられて顔を紅くする俺。心臓がはち切れんばかりにお仕事をなさっている。

だが、そんな俺達は突然現実へと引き戻されるのだった。

「あんた達楽しそうね？」

「フツ、若さとは恐ろしいものだな」

冷やかな目で見守る佳苗と修。さらに、周囲からも妙な視線を感じた。

男女2人が立ちながら青春ドラマを演じているこの場所はあくまで学食。昼食時に活気溢れる憩いの場所。周囲の反応は当然のものだった。

「う、うるさい！」

俺は非常に居心地が悪くなり、周りの目を気にしながらも逃走を図る。渾身のダッシュを見せながら、後ろからは同じ判断に踏み切った桃ちゃんの姿があった。お互いに顔を紅くしながら学食を走り去っていくその姿は、しばらくの間見ていた者達にとってちょっとした笑い話になったとか、なかったとか。

### 第13話 皆さん初めまして

教室を包む静寂。誰も口を開こうとせず、教室内には話し声どころか物音1つ無い。全員が無音の中で妙な緊張感を抱き、その視線は望くん先生に注がれていた。

「さあ、立候補はありませんか？ 無ければ僕の独断と偏見で決めますよ？」

俺の額を伝う一筋の汗。それがこの場の緊張感の高さを示していた。

現在、我が1-Cは学級委員選出の真っ最中。しかし、面倒臭い事この上ない学級委員を自ら志願する生徒はこのクラスにいない。HR開始から既に30分が経過しており、未だに候補者が立たない今、最も恐れていた展開になりそうである。

「僕と馴染みの深い人は覚悟して下さいね……」

ちよつと！ 俺見ながら言つの止めて下さいよ！ もう答え出ちゃってませんか！？

不味い。このままでは本当に俺が学級委員に任命されてしまう。

どうにかしなければ……。

修を推薦するか？ —— いや、嫌われているこの仕事を修に押し付けてしまえば後で女子から撲殺されてしまう。

桃ちゃんはどうだろうか？ —— 恐らく本人は嫌な顔せず引き受けてくれるだろう。しかし、そんな暴挙に出れば今度は男子に撲殺される。

カシワは？ —— 何の問題も無い。むしろあいつの盛りはこういう場で粛清されるべきだ。

決まったな。これで俺はこの危機を脱してみせる！

「私が」

だが、俺が他人を犠牲にするという最低な行為に及ぼうとした時、前の方でやや控え目に手が上がった。

「あ、澤井さんやってくれますか？」

「はい」

澤井さんと呼ばれたその女子生徒は小さく頷くと共に返事する。周りからは盛大な拍手が送られ、中には「ここに英雄が誕生した……」などと訳の分からない事を言う奴もいた。学級委員の決定に伴って嘘のように活気が漲る教室。俺も含めて白状な人間が多いらしい。

「いやー、澤井さん助かりますよ。それじゃこの勢いのままもう一人を決めちゃいましょうか」

「……」

ちよつと待てえええ！ 今さらつと凄い事言いましたよね？ 学級委員つて2人なんですか！？

面白いように静まり返る教室。血走った眼で周囲を見渡すクラスメイト達。この場にいる全員が敵に舞い戻った瞬間であった。

「んー澤井さんは女子ですから、もう1人は男子にしましょう」

クソオオオ！ 何で俺は男なんだ！ あのまま女装しとけば良かったのか畜生！

望くん先生の一言に、緊張から解放された女子達。さらに、桃ち

やんも例外なく安堵した様子であった。

「――よしっ」

小さくガッツポーズを決める桃ちゃん。

ええ！？ そんなに嫌だったのか！？ 隠してるつもりかもしれないけどバレバレだからね！？

そして、それとは対照的により一層殺気溢れる男子達。

『ガールルルウウ……』

何か聞こえてはいけない心の声が聞こえた気がする。き、危険だ。ここは危険過ぎる。これ以上何か刺激を与えたら、こいつらは間違いないで発狂する。

俺は別の意味で冷や汗を掻きながらクラスメイト達を見守る。

「じゃあ、もう一人は――加住くん！ やっぱり君しかいませんね」

なぜだあああ！ 俺しかいないってどういう事何ですか！ 全く嬉しくねえええ！

教室の隅っこで頭を抱える俺と、つい先ほどまで危険な状態だったクラスメイト達が「ドンマイ」と口にしながら優しい眼差しをこちらへ向けて来る。

「お前ら完璧に他人事だろ！」

ニヤリと嫌な笑みを見た気がした。

「俺は嵌められたんだ」

手に山盛り持たされたプリント。学級委員としての初仕事は職員室から明らかに生徒数に見合わないプリントの山を運ぶ事だった。

「これは悪意だ……」

運び出す時にチラツと見てしまった、連絡事項の印刷されたプリントに挟まる大量の白紙コピー用紙。今頃あの先生は教室でほくそ笑んでいるに違いない。

しかし、それでも隣を歩くもう1人の学級委員である澤井さんは文句1つ言わずに運んでいた。

「初っ端から大変だな」

「……」

お、おや？　もしかして聞こえなかったのだろうか。割と大きめの声で言っただはずなんだけど……。

「望くん先生にも困ったもんだよな」

「……」

シカトですか！？　何で！？　……ふう、落ち着こう。きっとシヤイなんだろう。初めて話すからきつと澤井さんも警戒しているに違いない。

「俺、加住。加住　涼。何か面倒な事に巻き込まれた感じだけど、

よろしく」

プリントを抱えているので握手を求める事は出来ないが、俺のー押しスマイルを代わりに作ってみた。

「……嫌なら辞めればいい」

「へ？」

しかし、澤井さんから返って来たのはあまりに刺々しい一言だった。予想していなかった反応に、間抜けな声を漏らす俺。

「嫌なんでしょ？ だったら辞めればいい。私は別に構わない」

そう言い残してさっさと立ち去る澤井さん。俺は動揺して彼女の後を追うことが出来なかった。ただ呆然と後姿を眺め、ようやくその姿が見えなくなった所で我に返る。

……怒っていた。間違いない。だけど、初対面だから心当たりは無いはずだ。だとすればこの僅かな会話で怒らせてしまったという事なのだろうか……？

今更ながら俺は望くん先生に無理矢理指名されたとはいえ、自ら進んで学級委員となった彼女に対する適切な接し方では無かった事に気付く。もしかすると、俺が澤井さんと一緒に仕事をするのが嫌だと捉えられたかもしれない。もちろん俺にそんな気は無かった。だが、彼女がもしそう捉えていたとしたら。

「あとでちゃんと謝らないとな……」

俺は止まっていた足を再び動かし、プリントの山を抱えながら教室へと向うのだった。

放課後。今日は1年生が正式に部活に入部する日である。1週間という期間を経て、意思の固まった1年生が各部活に迎え入れられる。そんな今日は、バスケットボール部も顔合わせとして体育館で男女混合のミーティングが開かれる。

俺はいつものように体育館内へ足を踏み入れ、まだあまり人が集まっていない事を確認すると小さく溜息を吐いた。

「修と吉見以外に1年生来るのかな……」

2、3年生の人数を見れば、この学校におけるバスケ部の人気の低さは窺い知る事が出来る。過剰な人数は必要ないが、それでも6人というのは少な過ぎである。今後の為にも、もう少し人数が欲しいというのが本音だ。

——グイ、グイ

珍しく真面目に考え事をしていると、不意に誰かが制服のシャツの裾を引っ張り、思考はそこで中断した。

ハッハッハ！ 俺はもう騙されないぞ。さすがに小学校から友達をやっていると、こんな時に考えられるのはあいつしかない。シヤツの裾を可愛らしく引っ張るという、男の子ドキドキ作戦を展開する奴といえば——

「修！ お前だという事は分かっているんだぞ！」

俺は勢い良く振り向きながらシャツの裾を引っ張る手を掴んだ。

「俺を欺こうなんぞ、100年はや——何いいい!？」

だが、そこにいたのは修ではなく、驚きで目を見開いている桃ちやんだった。

「ももも桃ちゃん!？」

「あ、う、うん」

戸惑いながらぎこちなく頷く桃ちゃんに、修なんかと勘違いしてしまった事を心の中で謝罪する。ちなみに修はいきなり自分の名前を大声で呼ばれた事に驚いたのか、入り口付近でかなり拳動不審に陥っていた。

しかし、どうしてこの場に桃ちゃんがいるのだろうか？ いや、ここににいるという事は理由は1つ。バスケット部の入部を決めたのか。

「やっぱり、バスケットやるのか？」

「うん、サポート役としてだけど」

女子バスケット部は並のレベルじゃない。そんじょそこらの強豪を凌駕するだけの実力を有していると望くん先生も言っていた。だから、きつと練習も濃密で辛いはずである。

「そうか。それじゃこれから練習頑張つてな！」

「い、いや、あの、私はバスケットやらないよ？」

「え？ どういう事？」

「マネージャーとして、ね」

そっちなか！ いやはや失念していたね。まさかそんな役職があつ

たとは。サポート役っていうのはこの事だったのか。

「マネージャーか、いいなー女バスは。今日俺達の方にもマネージャー来ないかな？」

桃ちゃんのような可愛らしい女の子がマネージャーにいればこちらとしてもやる気が数倍、数十倍にまで跳ね上がるだろう。仕事はしなくてもいいから、とにかくこんな可愛い子に応援して欲しい。それが男子というものである。

「あのー私一応男子のマネージャーなんだけど……」

軽く頬を掻く桃ちゃんは、苦笑しながらそんな男子の願望を叶える一言を発した。

え？ 嘘？ 本当に！？

「フオオオオー！！」

その場で奇声を発しながら体育館中の視線を釘付けにする俺。何だよオイ！ 素晴らしいスタートじゃないか！ 部活が楽しみになっちゃうぞこの野郎！ 今日ほど神様に感謝した事は無い。中々粋な計らいをしてくれるじゃないか！

「よろしく桃ちゃん！」

澤井さんの前では見事撃沈した俺の一押しスマイル。今回はそれが自然と零れてしまった。相手が佳苗だったら間違いないく「きもつ」で済まされそうだが、桃ちゃんは決してそんな事を言わないと信じている。

「……」

お、おふっ……ここに来てまさかのシカトか。オーケイオーケイ、若干傷付いたが想定範囲内だ。言葉にされなかっただけでも良しとしよう。

慌てていつもの表情に戻しながら再び桃ちゃんに話し掛けてみる。

「よろしく」

「……」

だが、それでも返答は無かった。

何で！？ そんなに嫌なのか！？ 俯いて目も合わせられないってのか畜生ー！

どうやら一押しスマイルの所為ではなかったようである。むしろ、俺の存在自体がお気に召さない可能性が出てきてしまった。さっきまで普通に話していたのに――

「なぜだ？」

考えても答えの出ない難問である。

「だったらその手を離せば良い」

だが、その難問は王子様によってあっさりと解き明かされる事となった。

自身の右手の先に繋がれた白くて小さな手。それは間違いなく桃ちゃんの左手だったのだ。

うっそ！？ 何で今まで気付かなかったんだよ俺！ しかもここ

こ、これは……！ 互いに好き合う者同士にのみ許された指と指が絡み合う、かかか貝殻つなぎ！

お、おかしい。今まで気付かなかったのもそうだが、普通に俺は桃ちゃんの手首を掴んだはずだ。しかし、それがいつの間にかこんな形に移行してしまった……。

「ぐ、偶然とは恐ろしい」

「あんた馬鹿ね。確信したわ、馬鹿に違いない」

ひよっこり現れたおとこ——佳苗。俺へ悪口を浴びせかけているが、未だに離せていないこの右手が気になり過ぎてそれどころではなかった。

「も、桃ちゃんごめん！ 色んな意味でごめん！ 俺は洗わないけど後で綺麗に洗った方がいい！」

「これだから男は嫌い」

「さ、澤井さん！？」

後ろから颯爽と現れた澤井さんに刺々しい物言いをされるが、肝心の桃ちゃんに反応は無い。しかも、手は現在も繋がっている。

「桃ちゃん聞こえてる！？ この手を離さないと——」

「加住！？ おい、テメエ！ 桃さんから手を離しやがれ！」

「カシワ！？ うっさいわ！ 今は黙ってる！」

畳み掛けるように現れたカシワは、この現場を目撃するなり血相を変えて走り込んで来る。

俺も手を離そうとしてるけど離れないんだよ！ 嬉しい事に桃ちゃんが離してくれないんだよ！

夢のような一時だが、どうもそれを快く受けさせてくれない現状。

少しづつ半泣きになる俺。

「俺は柏木だ！ 略すんじゃないわねえ！」

「そんな事どうでもいいわ！ ちょっとほっといてくれよ！」

結局桃ちゃんが手を離してくれたのはそれから10分後の事だった。

## 第14話 宣戦布告？

バスケットボール部のミーティングは、特に問題無く終了した。

始まる直前に色々あったが、顔を真つ赤にした桃ちゃんが我に返ったところで嬉しさ半分、寂しさ半分ながらも何とか手を離してくれた。周囲からは様々な感情を込めた視線が向けられていたが、俺自身が現実逃避を決め込んでいたので精神的ダメージも皆無だった。ミーティングでは新たな顧問が紹介された。残念ながら望くん先生は男子の方を担当するため、新しい顧問は女子の担当となったがそれはそれで良かったなど、どこか一安心する自分がいた。俺もいつの間にか望くん先生を慕い始めているのかもしれない。

部員としては俺と修、それから吉見の他にカシワが入部する事になった。どうやら小さい頃からバスケをやっていたらしく、それなりに上手いらしい。結局今年は4人と、マネージャーの桃ちゃんを加えた5人が新入部員として迎えられ、男子バスケ部は総勢8名となった。

「桃さん！ これはきつと運命ですね！」

「あ、あははは……」

「おい、カシワ知ってるか？ ストーカー行為は死刑らしいぞ」

「うるせえ！ 野郎は引ッ込んでやがれ！」

耳元で囁く俺に、中々の裏拳を放つカシワ。もちろん俺に避けられるだけの反射神経は無く、気持ち良いほど綺麗に顔面に決まった。それにしても、こいつは桃ちゃんと他の男子に対する扱いが違い過ぎる。お前ほど欲求に素直な人間を未だかつて見た事が無い。

「い、痛い……」

「ふむ、俺の忠実な下僕に手を上げるとは良い度胸だ。柏木よ、今

「ここで滅してやる」

修め、俺の事をそこまで大切に……って違う違う！ 危ない、流されるところだったぜ。

誰が下僕だ！ そうそうこっちこっち。

「またテメエか……キャラ被ってるんだよ！」

いやいや！ お前が思ってるほど被ってないからね？ 結構それぞれに個性出てるから！ ほら、修もちょっと困惑してるし。

ほんのりと殺気を放っておられる女子バスケ部の方々。カシワよ、お前には味方が少な過ぎる。

「着いて来い。今日をお前の命日にしてやる」

「後悔するんじゃないやねえぞ軟派野郎！」

いつぞやに見たシーンが再現され、俺はまたかと思いつつも2人は睨み合いながら体育館を出て行った。

「『カシワギクロス』」

そして、修とカシワの後を物凄い形相で追いかけて行った多数の女子バスケ部の方々。

あ、あれはヤバイ。今頃外は1対多数のリアルファイトが繰り広げられているに違いない。またしても俺は、カシワに向けてそっと手を合わせるのだった。

人の減った体育館。そこに残っていたのは修とカシワを除いた男子バスケット面々と、望くん先生、それから佳苗と他数人の女子バスケット部員だった。

「あ、澤井さん、あのーちょっといい？」

昼間の事を思い出し、謝罪すべくこの場に残っていた澤井さんを見つけて声を掛ける。が、この場にいる澤井さんは1人だけでは無かった。

「……ん？」

俺の呼びかけに答えてくれたのは澤井先輩の方だった。相変わらず目元が髪で覆われていて不思議な雰囲気醸し出しているが、俺が澤井先輩ではなく澤井さんの方を向いているのに気付くと、澤井先輩は独特の間で口を開いた。

「……加住は凜の友達か……？」

「リン？ え、あ、澤井さんですか？」

静かに頷く澤井先輩。親しげな呼び名。名字も同じという事はもしかすると。

「妹さんですか？」

「……ああ。仲良くしてやってくれと嬉しい」

なるほど、そう言われると分からなくもない。澤井さ——凜ちゃんは雰囲気は澤井先輩に似ている。完全に隠れている訳ではないが、

髪が長くてそれが揺れる度に澤井さんの顔を覆う。それ故に少し暗い印象を受けてしまうが、時折覗かせるその肌は凄く綺麗だった。どう考えてもあの髪が邪魔をしているように思える。

「兄さん、余計な事を言わないで」

「あ、凜ちゃん。さつきはごめ——」

「気安く呼ばないで」

話を聞いていたのか、すぐ近くまで歩み寄ってきた凜ちゃんであったが俺が話し掛けた途端、また踵を返して離れて行ってしまった。どうやら俺は相当彼女を怒らせてしまったらしい。昼間何気なく言った一言が余程気に喰わなかったのだろうか。俺はまともに口を聞いてもらえない。

「……加住、あまり気を悪くしないで欲しい。凜は誰にでもあんなんだ」

「誰にでも？」

「……ああ。男が嫌いらしい」

なるほど、それじゃ昼間の一件は俺が失言してしまった訳ではないという事か。俺はホッと胸を撫で下ろした。

しかし、凜ちゃんが男嫌いである以上、今後も2人で学級委員を続けていくには何とかしてそれを克服してもらわなければならない。凜ちゃんは辞めればいいと言っていたが、もちろん俺にそんな気は無い。

「澤井先輩、何か凜ちゃんと仲良くする方法はありませんかね？」

「……仲良くする方法か……すまないが、正直よく分からない。ただ、凜は中途半端な男が嫌いらしい」

中途半端、か。俺は凜ちゃんの目にそういう風に映っていたのだろうか。外見が男らしくなくて、中身も確かに男ではあるが男らしいとは言いがたい。中身云々は出会って間もないのだから分かるはずもないが、やはりここでも俺の外見は影響していた。まだ凜ちゃんの他の男子に対する接し方を見ていないのでいかんともし難いが。

「ふう、あの万年発情男は存外手強かったな」

着ている制服を正しながら体育館へと帰って来る修と、それに追従する女子バスケ部面々。カシワの姿が無いところを見ると、どうやら本当に天へ召されてしまったらしい。

だが、ここで修が帰って来てくれたのはラッキーだ。少しばかり凜ちゃんと仲良くなる為に手伝ってもらおう。

「修、ちょっといいか？」

「どうした？」

「ちよつと凜ちゃんに話し掛けて欲しいんだ」

「リンちゃん？ ああ、澤井さんの事か。何故だ？」

「いいからいいから。ほら、このボールを転がすから取って来るついでに頼む」

納得いつていない様子だったが、俺がボールを転がすと仕方なくといった感じで修はそれを追いかけて行った。そして、上手い具合に凜ちゃんの足元まで転がって行ったボールは、そのまま足に軽く当たって止まった。

「すまない、ボールを取ってくれるか？」

修が足元のボールを指差す。凜ちゃんもそれには気付いていたらしく、少し修の方を見た後、ボールへと視線を落とした。

どうする？ 修も無視してしまうのだろうか？ 髪の毛の所為で上手く凜ちゃんの表情を窺えない。下を向いたまま、ボーっとボールを見つめている。

「はい、これ」

「ありがとう」

ほんの少しの間ボールを見つめていた凜ちゃんであつたが、すぐに屈んでボールを手に取り、そっと修へと渡した。口調からも分かる通り、怒っている様子もない。

俺とは反する態度。刺々しい感じも無かつたし、何より薄っすらと笑顔が見えた気もした。

「こ、これが王子様の實力……我が親友ながら恐ろしい」

現実とは悲しいものである。前から分かつていたとしても、ここまでまざまざと現実を突きつけられると馬鹿でも理解出来てしまう。顔かあ……修の場合はそれだけでは無いのだが、やはり真っ先に目がいくのはここである。俺も、もっと顔が良かったら……。ついついそんな事を考えてしまった。

「……加住」

短く呼ばれる名前に、慌てて振り向く俺。澤井先輩が何か言いたそうに手招きをしていた。

「……加住、凜は見た目を気にしない。それは昔から言える事だ」

表情に出てしまっていたのだろうか。見透かされたようで少し気恥ずかしかった。

「いや、お恥ずかしい……」

「……あいつもバスケをする身。藍田に愛想が良いのは先日の1on1を見たからだと思う」

俺が女装させられるきつかけとなった、先輩達との1on1。修が華麗なテクニクでスピードスターの菊池先輩を圧倒したゲームを見たから。修のような動きをするのがいかに難しいか、それは同じバスケットボールという競技に身を置く者ならば分かるはずである。

「認めている、という事なんですかね？」

「……恐らくは」

一方の俺はどうだろうか？ ゲームに勝てた訳でも、これといって良い所を見せた訳でもない。それに事実、バスケが上手くない。小学校から始めたとはいえ、試合にもほとんど出られなかったのだから。

しかし、だからといってこのまま何もしないほど俺は後向きでもない。部活見学の時に修にも言われたが、これから上手くなれば良いのだ。何、なんとかなるさ！

「ハッハッハ！ おい、凜ちゃん！」

「気安く——」

「うるさいうるさい！ そんな奴はリンリンって呼んでやる！ しつかり聞きやがれリンリン！ バスケ上手くなっていつか認めさせてやるからな！」

精神年齢が低いという指摘は華麗にかわさせて頂こう。それはご愛嬌である。俺はただ友達の輪を広げただけなのだ。その為にはバスケットを上手くなってリンリンに認めてもらう。単純明快コレ大事。

「勝手な事を……」

何やらリンリンがぶつぶつと言っているが、俺は気にしない！  
明日へ羽ばたけ俺！

## 第15話 天然と鬼と階段落下娘

お、重い……まさか紙切れにこれほどまでの質量があったとは。視界を遮るプリントの山と次第に感覚の無くなっていく腕。ま、不味い。この状況は不味過ぎる。

今日も元気良く爽やかに学級委員としての仕事を果たす俺。相変わらず望くん先生からは白紙コピー用紙でかさ増しをされる日々だが、健気に頑張っている。さらに少しでもリンリンに認めてもらう為、こういう力仕事は全て俺が引き受けているのだ。もっとも、望くん先生が余計な事をしなければ力仕事でも何でもないのだが。

しかし、今日のプリントはいつも増して多い。前が見えないつて相当だぞ。プルプルと小刻みに震えだした腕をなるべく気にしないように教室へと足早に向う。本当は2回に分けて運びたかったのだが、リンリンが見ている手前、ついつい見栄を張ってしまった。

「よ、よし……渡り廊下が終わればもう少しだ……」

職員室は特別棟の1階にあり、教室のある生徒棟まではこの渡り廊下を渡る必要がある。

渡り廊下から廊下に出て、1-Cまではもう少し――

「到着だー！俺はやり切ったぞリンリン！」

「その呼び名は止めて。これぐらいでいちいち騒がないでもらえるかしら」

無表情で淡々と言い終えると、そのままリンリンは立ち去ってしまった。

クソオオオ！だったらこのプリントの山持ってみるやー！腕千切れるぞ？いや本当に！教卓の上に置いたプリントをバシバ

シ叩きながら心の中で叫んだ。

まあ、こういうところが男らしくないんだろうな。これぐらい男ならやって当たり前。周囲の反応をいちいち窺っているようじゃまだまだだ。

俺はその場で大きく深呼吸をして気持ちを静めた。地球に謝罪しながらめいっぱい酸素を吸ってやった。

「えいつ——」

だが、突然押される背中。よろける俺。崩れゆくプリント……。

「ギャー——！」

ヒラヒラと舞いながら落ちてゆくプリント達を止める術はない。ただ、絶叫しながらこの悲しい現実を受け止めなくてはならなかった。だ、誰がこんな酷い事を……。俺は振り向きながらその原因を探った。

すると、そこに立っていたのは俺の心の癒し。いつも柔和な笑顔で活力をくださる桃ちゃんの姿が。

「桃さん御乱心を……うう」

畜生、そんな申し訳なさそうな顔されたら何も言えないじゃないか。

「ご、ごめんなさい！ 私が片付けるから涼くんは——」  
「いけやせん。発端はどうあれ、プリントの山を倒したのはあつしですから。お嬢は気にせんでくだせえ」

ダンディボイスで桃ちゃんを制す。

イカすぜ！ 何だか新しい自分に出会えた気がするよ！ 初めまして新しい俺！

「涼くん……本当にごめんね。びっくりさせようと思って……」

これも考え方によっては桃ちゃんと仲良くなった証。へへ、嬉しいじゃないか！

目の前を埋め尽くすプリントを拾いながら、結局手伝ってくれている桃ちゃんを見て少しばかり暖かな気持ちになった。

「ふむ、作戦成功」

「待てよオイ！ しっかり聞こえてるぞこん畜生！」

結局、『背中を押すと喜ぶ』という謎のアドバイスを桃ちゃんに吹き込んだ修が諸悪の根源だった。ただ、それを真に受ける桃ちゃんにも驚いたが。

「ふう〜桃ちゃんは天然と言われるだろ？」

「え？ 初めて言われたよ？」

うん、こういう事を言う人が1番怪しい。本人に自覚が無いから言われている事すら気付かない。これこそ天然。

やはりあれだけのプリントを片付けるにはそれなりの時間を要した。途中、授業時間に間に合わなかったが望くん先生の授業だった

ために続行。床に散らばっている白紙コピー用紙と望くん先生を交互に見てやったが、白々しい口笛でかわされてしまった。

今はその授業も終わり、丁度昼休みになったので俺と桃ちゃん、それから修と佳苗の4人で特別棟の屋上へと向っている。

「桃？ 私は結構何回も言ってるわよ？」

「ま、またまたー佳苗は」

「桃ちゃん、自覚しようか」

「フツ、無自覚とは恐ろしい」

まあ、このやり取りすらも無駄になりそうだが、一応本人の為にも言っておいた方がいい。なんてたつて、さつき平坦な廊下で盛大にコケていたからな。『何かにつまづいたのか？』と聞いても、『空気につまづいたみたい』と真顔で返された。それを聞いた時はさすがの俺も焦った。どこか一線を越えている気がする。

そんなやり取りをしながらも、俺達は1階から2階へと繋がる階段に差し掛かった。

「空気につまづくとは――」

「きゃー！ー！」

「う、うお！？ デジャヴ！？」

またしても出会ってしまった、階段落下遊びという斬新な遊びをしている女子。チィィ！ 今回は見えなかったぜ！ しかしこのチラリズムがまた……っとそうじゃなかった！

「かかってこいやああ！」

先日同様、落ちて来る女子を受け止める体勢を作った。

——パサッ

相変わらず軽過ぎますね。ご飯をきちんと食べていますか？ おじさんは心配になりました。

「軽っ！？」

忘れてた。何となく言っておかなければいけない気がした。小さい上に可愛い女の子……妖精のようである。しかし、これだけ体が小さいのにどうしてそんなご立派なものを……是非佳苗に分けてあげて下さい。

「丸聞こえ。ああ、拳が血を求めてるわ……」

か、か、佳苗さんの目が据わってるぞ？ 俺の馬鹿ー！ あれだけの惨事を招いておきながらどうして同じ悲劇を繰り返す！ ここを上手く切り抜けなければ俺に明日は無い。

「ぬおおお！？ 大丈夫が見知らぬ女子生徒おお！ まさか今の衝撃で言葉が話せなくなったのか！？ これは一大事だ！ フフ、すまない皆の衆。俺はこの娘さんを保健室まで——」

「つーかまーえた」

「イヤアアア——！」

俺の肩にめり込む魔の手。音の壁を破った拳が俺の頬を打ち抜いた。

「じばおあ!？」

うわゝお花畑やゝ。うち、大きくなったらお花屋さんになるねん。

見事に吹き飛ばされる俺。抱えていた女子は何とか瞬間的に下ろす事に成功。それが不幸中の幸いといったところだろうか。だが、ここは階段である。宙を舞った後は階段の角に直撃。赤い液体が額からこんにちは。

「殺す気かー!」

「チッ」

奇跡的に一命を取り留めた俺は、階段の下から思いつきり叫んでやった。しかし、露骨に聞こえる舌打ちをする佳苗。

お、鬼だ。ここに鬼がいる。平成の世に鬼が現れたぞ! この鬼は人の命を何だと思っているんだ!

「あ、あの……」

そんな修羅場の中央でおろおろする階段落下娘。俺と佳苗に視線を行ったり来たりさせながらかなり困惑している様子である。ちなみに、桃ちゃんも似た反応をしていた。

「鬼よ、今は争いの時ではない!」

「あとで消す!」

親指を立てながら喉を掻っ切るポーズ。ちょ、リアルだから止めて!

俺はガタガタと震えながら階段落下娘に声を掛けた。

「もももつ大丈夫だ。鬼は還った」

ハッ！ 殺気！？ とても人間とは思えない目つきでこちらを凝視する佳苗さん。い、いけない、これ以上は危険だ。本当に15年で生涯を終えてしまいそうである。

「ふう……君は前もここで同じ遊びをしていたな。流行ってるのか？」

「い、いえ、遊んでいた訳じゃないんですけど……前も、ってどうして知ってるんですか？」

「いや何でって言われても……受け止めたの俺だし」  
「は？」

何言ってるのこいつ？ みたいな目で見るのは止めようか。結構傷付くから。それにしても、この子は記憶を消す術でも覚えているのだろうか。こんな短期間で忘れられるとは……俺は印象に残り辛いかもしれない。

「お、覚えてないのか？ ほら、加住だよ、加住」

最後に無理矢理名乗らされたのがここで役に立つとは。だが、相手は記憶を消去出来る妖精さん。本当に名前を覚えているのか心配である。

「カスミさん……？ え、でも、カスミさんは女の子のはずじゃ……」

いや、今日もしっかり男の子ですよ？ ただ、見た目は案外そっちよりですが。

「お兄さんが弟さんですか？」

「え、ちょ、本気で覚えてないんですか？」

小さく頷く階段落下娘。俺はあの日の事をかなり鮮明に覚えているんだけどな……何てったって、人生最大の汚点だった――

「女装かあああ！」

気付かなければ良かったと後悔しつつも気付いてしまったが最後。色々と誤解を生みそうなこの場面では慎重に説明していかないと後々残念な結果になってしまうかもしれない。慎重に、慎重に。

「ふむ、お前の趣味がどうした？」

しばくぞボケエエエ！ 初っ端から邪魔するなよ！ 狙ってたのか？ そうなのかこの野郎！

不敵な笑みと共に覗かせる無駄に白い歯。あ、悪夢だ……。

「え……女装癖ですか？」

「違う！ それだけは断じて違う！ 俺は潔白だ！」

そんな嫌そうな顔しないでくれよ！ 本当なんだって！ このままだとストレスで発狂しちまうよ！

さり気無く俺から距離を取って行く階段落下娘と修達。ちよつと！ 桃ちゃんまで！？

「そういう事だったんですか……本当にごめんなさい」

「いや、分かってもらえればいいんだ。それに悪いのは全部あいっだから」

修め、いらぬ誤解を招きやがって……危うく俺の悪い噂が立つところだった。本当にこいつは油断ならない。

あれから必死の説明の甲斐あってか、階段落下娘はようやく事の真相を理解してくれた。途中、桃ちゃんが説明を手伝ってくれた事もあってか思いのほかすんなり誤解も解け、やっぱり桃ちゃんは良い人だなと再認識した。だが、修と佳苗は一切関知せず、あるうことが無表情でジャンケンを楽しんでいた。

『友達は、慎重に選ぶ、ほととぎす』

階段落下娘も誤解が解けるなり頭を何度も下げて謝罪してくれた。やはりこの子も良い人だなと思いつつながら頭を勢い良く下げる度に上下する男子の憧れについつい釘付けになってしまった。男子である自分を呪いつつ、自分で自分を殴りながらいつまでも謝り続ける階段落下娘に制止を図る。

「もう本当に気にしないでくれ」

「でも——」

「はい、この話はここで終わり！俺の名誉の為にも忘れてくれ。そんな事より、改めてよろしく！1-Cの加住 涼だす」

囁んだああ！最後の最後で囁んでしまった！修と佳苗が失笑しているのがまた腹立つ！お前らさっきまでジャンケンやってただろうが！

「こちらこそよろしくお願いします。宮成 夢みやなり ゆめです。私は1-Dですからお隣ですね」

しかし、噛んだ事には一切触れず、妖精さんの微笑みをこちらに向けてくれた。

お気遣い、感謝します……貴女はやっぱり良い人だ。桃ちゃんに続く良いお友達だ！

俺は夢ちゃんの優しさに感激しながら右手を大きく差し出した。

「夢ちゃん仲良くしよう！」

「はい！」

ガツチリと堅い握手を交わす俺と夢ちゃん。新たな友達の誕生であつた。

「「ちよつと待った！」」

「へ？」

「あ、スケちゃんカクちゃん！ どうしたんですか？」

だが、握手という友達の契りを交わしている最中に突如現れた女子2人。只ならぬ雰囲気を出しながら現れたその2人は、驚きで目を見開いていた。

それにしても、夢ちゃん。さすがにスケちゃんとカクちゃんはないでしょ？ もうあれだね、完璧に助さんと角さんを意識しちゃってるよね。

「ちよつと夢！ どうしてこの男子と握手してるの！？」

「握手なんかして大丈夫なのか！？」

酷っ！？ 初対面でそんな暴言言われたの初めてっすよ！ あの

佳苗ですらもつとマシな扱いだったよ!? スケちゃんカクちゃん  
恐るべし毒舌。

「え——あつ! わ、私……」

慌てて手を引っ込める夢ちゃん。だが、引っ込めた後に恐る恐る  
俺をつつき始めた。

何だ? 新しい遊びか? 階段といい、今回のこれといい……君  
は斬新な遊びが好きみたいですね。

「OH! YES!」

つつかれる度にリアクションをとってみた。すると、夢ちゃんも  
何だかノリ始めたらしく、その後もひたすら俺をつつき続ける。じ、  
時間の無駄だ。

「うん、大丈夫みたいです」

「驚いた……」

「何という……」

スケちゃんカクちゃんは、一通りついでにご満悦の夢ちゃんから  
謎のオツケーサインが出ると再び驚きの表情を浮かべた。俺の事を  
ジロジロと見ながら2人で何やらヒソヒソと話しているが、その会  
話が俺の耳に届く事は無い。

「あ、あの、夢ちゃん? 説明が欲しいんだけど」

「あ、はい! 忘れてました……」

一呼吸置いた後、夢ちゃんはさらに続ける。

「私……どうも男の人が苦手なんです。話す分にはほとんど問題も無いんですけど、触ったり触られたりすると恐いっていうか何ていうか……でも、加住さんは大丈夫みたいです。だからスケちゃんとかクちゃんも驚いているみたいで」

ふむふむ、なるほど。それを聞いて安心した。スケちゃんとクちゃんは俺の悪口を言っていた訳じゃないんだな。良かった……。しかし、そうなる気になる事がある。

「どうして俺だけ？」

「それが、私にも分からないんです……どうしてでしょうか？」

「俺が運命の人だから？」

「えっ？」

俺の小粋なジョークが炸裂するなり、夢ちゃんは顔を紅くしながら俺を真っ直ぐに見据えて動かなくなってしまった。

良い反応してくれるじゃないか！俺まで恥ずかしいじゃないかよ！か、顔が熱い！

「ま、まあ、実際のところ、やっぱり俺が女顔だからかな」

ふう～そんなに見つめられたらおじさん間違いを起こしちゃうぞ。当然そんな気色悪い事を口に出すほど俺も愚かではない。心の中でひっそりと呟くだけに留めた。

「あ……そ、そうですね、加住さん可愛いですもんね！」

その言葉は褒め言葉として受け取っておこう。可愛いと言われて

も素直に喜べない年頃なのですよ。  
俺は複雑な表情を浮かべながら、あははーと乾いた笑いをするのであった。

俺達はそのまま夢ちゃんや、スケちゃんカクちゃんと共に特別棟の屋上へと向かった。彼女達も前から人気の無いここに目を付けていたらしく、何より男子の苦手な夢ちゃんにとっては羽を伸ばせる空間だった。

「あのさ、男の人に触るとどうなるんだ？」

恐いと言われてもどうなるのか気になってしまうのが俺。具体的な反応を見てみたかったりする。

「そうですね……『わあー』ってなっちゃいますね、多分」

素晴らしい表現力ですね。それで伝わると踏んだ夢ちゃんを尊敬します。

「本当か……？」

「本当ですよ？　ねえ、スケちゃんカクちゃん」

「「ええ、『わあー』ってなるわ」」

や、ヤバイ。その『わあー』とやらが見たくなってしまった。どうにかして頼んでみようか？　……いやいや、そんなただの嫌が

らせじゃないか。俺はそこまで人間を辞めていない。しかし、見てみたいのまた事実……。

『加住選手は鬼畜だったのかー！？』

出やがったなお前！ いつも変なところで邪魔するな！ 　　という  
か佳苗と一緒にするな！

「私と一緒にじゃ何か困る事でもあるのかしら？」

ひいひい！？ 責任取れもう1人の俺！ 鬼がこっちに近付いて来るじゃないか！

『……』

居留守かコラアアア！ 肝心な時にシカトするなよ！

「お、落ち着こうか佳苗さん。鬼にも人の言葉は通じるはずだ」  
「死んじゃえ、えへっ」

可愛くないぞ鬼がああ！ 逆に恐いわ！ その笑顔が恐いわ！  
白くしなやかな佳苗の右脚が回転と共に唸りを上げながら俺の右  
わき腹にダウン！ 俺自身も吹き飛ばされながら数回転がったところ  
でフェンスにギューン！ い、生きてますか、俺……。

しかし、そんな生死をさ迷いながらも確かに見えた佳苗さんのア  
レ。

「い、意外に白か……」

顔を紅くしながらすかさず追撃をする佳苗の足元で、俺はひっそ

りと逝った。

へへ、やっぱり白じゃないか……。

## 第16話 凡人対天才

放課後。俺はいつものように部活に励もうと第3体育館に来ていた。外から見たこの建物は相変わらず廃墟と勘違いされそうだが、さすがに毎日見ているとあまり気にならなくなってきた。

慣れとは恐ろしい……。そんな事を思いながらも、錆びついた扉を開けて体育館の中へと入った。

「——付き合って下さい！」

「うん、少しだけなら……」

へ？ こ、告白？

体育館に入って先ず目に入っただのは、満面の笑みで歓喜しながら飛び上がるカシワと顔を紅くしながら俯いている桃ちゃん。

な、何だこの急展開は。というか桃ちゃんもOKなのか！？ カシワと桃ちゃん……そうか、カップルが誕生したのか……おめでとう、2人共。心の癒しであった桃ちゃんがカシワだけのものになるのは少し寂しいが、何より友達として祝福させてもらおうじゃないか。

「おめでとう！ ナイスカップル！」

拍手をしながら2人の前へゆっくり歩んでいく。

クソ！ 羨ましいじゃないか、カシワ！

「おう！ 加住じゃねえか！ サンキュー！」

「え？ か、柏木くん！？ 涼くんこれは——」

「それ以上は言わないでくれ。友達の新たな門出。俺が盛大に祝福してやるんじゃないか！」

へへ、悲しくなんかないやい！ 俺もいつかこんな可愛い彼女をつくるんだい！

俺の目から零れる一筋の涙。これがきつと子を手放す親の気持ちなのだろう。

「加住、お前つて奴は……」

「待てえええい！ 桃ちゃんはお前なんぞにやれんな！」

は？ 誰？ 俺は何も喋ってないぞ。この声は誰？

「何だと！？ てめえさつきは素直に——」

「シヤラップ！ ついては、桃ちゃんを賭けて1対1の決闘を申し込む！」

「何！？ よし望むところだ！ それなら1on1で勝負してやろうじゃねえか！」

「よかろう！」

待て待て！ さらに急展開過ぎて誰も着いて行けないぞこの野郎！ 俺を置いてけぼりにするな！ いいか、『待てえええい！』から後は全て俺じゃないぞ？ ここまで態度を急変させるほど俺はまだおかしくなっていない。も、もしや謀られた！？

「ふう、成功だ」

……今俺の背後から声がした気がする。いや、気のせいかな？ 佳苗に殴られ過ぎて少しばかり幻聴が聞こえて来たのかな？

「否あああ！」

背後にいると思わしき人物に対して渾身の後ろ回し蹴りを放つ俺。

「フッフッフ、見える！ 見えるぞ！」

どこぞで聞いた台詞と共にあっさりと避けるその人物。中々の強者のようである。

「やっぱりお前か！ 何であんな事言うんだよ！ というか声モノマネ上手っ!？」

「この藍田 修に不可能は——無い」

だからお前は無駄に凜々しいんだよ！ 見てて腹立つわ！ ちょっとは分けやがれ畜生！

ひがみが暴走して何か過ちを犯してしまいそうだったが、女子バスケット部の方々が目を光らせていたのに気付いて固まった。

な、何という禍々しい形相。これが女子の力か……。

「涼、よく聞け」

俺が女子バスケット部の方々に気を取られていると、修がそつと耳元で囁いた。表情はついさっきとは打って変わって真剣そのものである。

「この場を利用して澤井さんに認めてもらえ」

1つ、それだけを言い残して修は俺の元から離れて行ったのだった。

対峙する俺とカシワ。周りを取り囲むように男女バスケット部員達。ここに入学してからこういう構図がよくできるのは気のせいだろうか。例によって顧問や部長達は誰もこの騒動を止めようとしない。皆が面白がって傍観している。

「おい加住！ 桃さんは絶対に渡さねえからな！」

「落ちてカシワ。お前は告白して桃ちゃんにOKをもらっただろ？ だったら俺の出る幕じゃないじゃないか。好き合う者同士を邪魔するほど俺は落ちぶれていない」

「す、好き合う者同士！？ お前何言っただ！？」

な、何だこのカシワの焦りようは。そこは焦るところじゃないだろうが。

「おお俺は桃さんに買い物に付き合ってもらっ約束をただけだぜ！？」

な、何てこった！ 大事なところを聞き逃してるじゃないか俺！ ナイスカップルとか言っただけ自分が恥ずかしい！

しかし、見た目に反してカシワも案外純情少年だな。それだけ格好良くてチャライのに彼女が1人もできた事の無い口か？ 仲間じゃないか！ ただ俺は異性に相手にされないだけだけだな！ ハッハッハ！

「どっちにしても俺の出る幕じゃないな。お前はともかく、俺はそんな約束してないし」

「え、あ、そうか……いや！ 1度やると決めたからにはキツチリ

勝負は着けようじゃねえか！」

真っ直ぐな奴だなお前は！ 少し見直したぞ！ でもな、こういう事は本人に確認しないと後々痛い目に遭うんだよ！

「桃ちゃーん！ カシワがこんな事を言ってるけどいいのか？」  
「りよ、涼くんがいいなら！」

ええ！？ 何で俺！？ …… まあ、万が一俺が勝ったら身を引けばいいか。いくら桃ちゃんが優しいとはいえ、嫌々買物に付き合わせるほど俺も馬鹿じゃない。

「分かった。カシワ、勝負だ！」

「後悔すんじゃないぞ！ 先生！ 審判お願いします！」  
「まっかせて下さい！」

目をキラキラと輝かせながら答える望くん先生。俺達は勝負を始める前に準備体操を行った。

勝つぞ。何としても勝つて良い所を見せる。そうすればきつとりンリンだって俺に対する態度を改めてくれるに違いない。桃ちゃんとカシワには申し訳ないが、ここは勝たせてもらう。相手は森下部長と違って同じ1年生。俺でも勝機はあるはずだ。

「はい、それでは始めましょうか。10ポイント先取でいいですね？」

大きく頷く俺とカシワ。その戦いの火蓋が今切って落とされた。

先攻はカシワである。何をしてくるか全くの未知数ではあるが、警戒するに越した事は無い。俺は腰を落としていつでも動ける体勢を作る。カシワへとボールをワンバウンドで渡し、真剣そのものであるカシワが仕掛けてくるの待った。

ボールを受け取ったカシワは、少し間を置いた後、ドリブルで切り込んで来た。徐々に俺との距離が縮まっていく中で、俺はすかさずディフェンスに入り注意深くカシワの動きを探る。瞬く間に俺とカシワの距離は無くなり、カシワは流れのまま右にかわそうと向きを変えた。

もらった。俺はしっかりと確認出来たカシワの動きに合わせて無防備なボールへと手を伸ばす。あと少し。あと少しでこのオフENSEを阻む事が出来る。そんな事を瞬間的に考えながらさらに手を伸ばした。

——だが、俺の視界から突如消えたボール。気が付けば、カシワは逆方向に抜けていた。

ボールがリングを潜る。俺は、取り残されたその場で呆然とカシワのレイアップを眺めていた。

「1点目はもらったぜ」

驚きで少しの間動けなかった。フェイントとロール。俺はこれであっさりと抜かれてしまったのだから。

「よ、よし次だ」

周囲の静けさがまた緊張感を高める。プレー中はそれこそ皆が俺やカシワの名前を呼びながら応援してくれているが、こうしてゲームが再開直前となると静まり返る。

さっきのは事故だ。きつと気を抜き過ぎていたに違いない。ここで俺が得点を決めれば同点。次のカシワのオフENSEを防げばいいんだ。

俺はカシワからボールを受け取ると、勢い良くリングへと向った。少しずつかシワによってコースが削られていくが、まだまだどうにでも出来る。安定したドリブルスピードを保ちながら、カシワのデIFENSEを掻い潜って懸命にリングまでの距離を詰めていく。

ここだ。俺は瞬時にシュートモーションに入った。軽く膝を曲げてボールは頭上に。この距離とこの角度ならば俺でも入れる事が出来る。縮めた体を伸ばしてボールをリングに向けて放った。

「よし——」

入ったと思った。俺は練習だけは誰よりもこなしてきた。練習でもほとんど外した事の無い得意な箇所だ。

しかし、ボールがリングへ向けて放物線を描き出そうとした、その出発地点に近い場所。ボールを放った空中でカシワは手を伸ばしながら跳んでいた。

信じられない跳躍力。驚愕だった。眼前を遮るカシワが楽々とボールをキャッチしてしまったのだ。

「あ……」

入ったと確信していただけに、阻まれたショックはあまりに大きかった。頭の中が真っ白になり、ボールをその手に持っているカシワの姿を呆然と見つめる。

「何だよ？ さっさと次やろうじゃねえか」

「え、あ、ああ……」

い、いけない。ここで相手が調子付いてしまっただけは何としても避けたい。でも、俺にカシワを止める事が出来るのだろうか？あれだけの身体能力を見せ付けられた後で。

俺はカシワに渡されたボールを、再びカシワへと投げ返す。

とにかくやらなければならない。このままではリンリンに認めてもらうどころか、ますます嫌われてしまうかもしれないのだ。腰を落として両手を広げ、カシワを待ち受けた。

カシワの動きは初めのオフエンスよりも速かった。あっという間に俺までの距離が無くなり、止まるどころかそこでもう1段階加速をしてみせる。

キレのあるドリブル。だけど、傍から見ていたあの菊池先輩よりかは少し劣って見えた。実際俺が対戦した訳ではないが、中学の時にも“藍田 修”という天才のスピードを見てきた。反応出来ない訳じゃない。

迷い無く左に切り込むカシワ。今度こそ止める。俺はボールに意識を向けてその前に立ち塞がった。

——不意に、カシワが不敵に笑った気がした。

尚もスピードを緩める気配は無いが、突如、左に抜けようとしている運動のベクトル方向が大きく変わったのだ。

右手でドリブルをしていたカシワだったが、俺の前に到達するなりドリブルを左手に切り替え、体で壁を作りながら瞬く間に右へと抜けて行く。

「クロスオーバー……」

0 - 2。乾いた音のみが告げる、得点。俺は、全く反応する事が出来なかった……。あれは覚えて間もないたどたどしいものではない。洗練された高い技術。同じ1年だからと相手を侮っていた自分を責めた。圧倒的なテクニクの差を痛感した瞬間であった。

その後もカシワのテクニクに翻弄され続けた俺は、1 - 5とリードを広げられる一方となっていた。序盤で見せたロールやクロスオーバーといったテクニクはゲームが進むにつれてさらに鋭く、速くなった。あれが単なる小手調べだった事に気付いた時は、さらにカシワという存在を遠く感じた。

「お、お前何なんだよ……」

自分でも情けない声が出る。見た目とは反する鮮やかプレーを続ける目の前の同級生。正直、格が違う。

「お前は覚えていないのか？」

カシワが答えるよりも前に、ふとそこで修が歩み寄って来た。しかし俺は修の一言が上手く理解出来ず、ポカンとした表情を作り出す。

「……ふむ、柏木 純太。聖院中のSFだ」  
スモールフォワード  
「なっ……」

聖院高校付属中学校。常勝を掲げる全中の常連校である。過去に全国優勝も成し遂げた名門であり、俺達の中学とは同じ県下であるために昨年は準決勝で対戦をした。だが、結果はこちらの大敗。それまで修の多大な働きによって弱小校である俺達は奇跡的に勝ち進んでいたが、聖院中と当たる事によって全国のレベルを思い知った。しかし、カシワがそんな名門のレギュラー。聖院高校の付属なのはどうしてこんな学校へ……？

俺は驚きでしばらく動けずにいた。先ほど感じていた俺とカシワの距離。それがより一層遠く感じた。同じ年なのにどうしてここまで違うのだろうか？ そんな事を考えていると虚しくもなった。

勝てるはずが無い。それに、ここまでまざまざと実力の差を見せ付けられて頑張ろうと思うほど俺は健気でもない。いつそ、これ以上醜態を晒すぐらいならここで止めるか？ それもいい。負けは決まっているようなもんだし、今更どう足掻いても勝てない。俺が負ければカシワと桃ちゃんだって……。

俺は昔からそうだ。昔からこういう所があった。イジメられていて友達がいなかった幼少時代。でも、家族だけは違った。いつも優しく手を差し伸べてくれて、何より俺を大切にしてくれた。だが、そんな家族を失ったあの日。俺は誓ったはずだった。死んだ家族に心配を掛けたくなくて、自分で出来る事は何でもしよう。そう、誓ったはずなのに……。

自分でも呆れるほど情けない。俺はここまで半端な奴だったのだろうか。目の前に大きな壁が現れた途端、こんなにもあつさり……こんな姿を見られたら、せつかくできた友達も減ってしまうかもしれない……。

俯いたままいた俺は、周りが気になって周囲を見渡した。はは、誰も俺の事を見てないや……皆カシワを見てる。それもそうか……こんなに凄い奴がいるんだもんな。俺なんて……。

再び俯く俺。だが、皆がカシワを見ている中で視界の端に映る、俺を見つめる1人の女の子がいた。

え……？ 桃ちゃん……？

——何で、何でそんな悲しそうな顔してるんだよ……カシワが勝てば気兼ねなく一緒に買い物に行けるんじゃないのか？ なのに何で……。

「涼くん頑張つて！」

畜生……そんな事を言われたら諦める訳にはいかないじゃないか——。

## 第17話 加速する想い

「驚きましたねえ……」

「凄い……」

弘田先生と森下さんが口を揃えて称賛しているのは柏木くんだった。バスケの知識が無い私でも分かる柏木くんの上手さ。速くて、何より無駄が無いように思える。柏木くんは序盤から相手を翻弄し続け、中盤に差し掛かった今ではその相手の表情に覇気が無い。

そもそもの発端は、柏木くんから一緒に買い物に行こうと誘われた事からだ。あまり乗り気じゃなかったけど、柏木くんがすごく熱意を込めてお願いして来るので断るに断れなくなってしまった。だから、私も『少しだけなら』という事で了承した。でも、丁度そこで1番見られたくない人が来てしまった。

しかも、彼はどうやら私と柏木くんが付き合うと勘違いしていたらしく、手を叩きながら少し涙を流して祝福すると言い出した。私は咄嗟に誤解を解こうとしたけど、柏木くんやその人に阻まれて誤解されたまま話が進んでしまった。結局、その誤解はすぐに解けたけど、何を思ったのか私との買い物を賭けて勝負する話になってしまった。だけど、それは同時に私にとってもラッキーだった。もし、彼が勝てば――。

「桃？ どうしたのよ？」

「え？ あ、ううん、何でも無い」

今は1 - 5。しかし、彼は負けていた。柏木くんが驚くほど上手く、2人の差は歴然だったのだ。ゲームが進むにつれてその差はさ

らに開き、ますます柏木くんのプレーが冴え渡る一方で、彼は徐々に精彩を欠いていった。

見ていて辛いほどにどんどん元気を無くしていく彼。こうまで一方的になればそれも仕方の無い事かもしれない。私は巻き込んでしまった事を心の中で深く謝罪すると同時に、始まる前に浮かれていた自分が腹立たしくも思えた。

「お、お前何なんだよ……」

彼は柏木くんに向ってそう溢した。だけど、柏木くんが答えるよりも前に藍田くんがその答えを口にする。

「お前は覚えていないのか？」

藍田くんの言葉が上手く理解出来ない様子の彼。すると、藍田くんはさらに続けた。

「……ふむ、柏木 純太。聖院中のSFだ」  
「なっ……」

セイイン？ どの学校なのだろうか。彼は驚いているけど、私はその学校を知らなかった。

「嘘でしょ……あいつが……？」

私が首を傾げる横で、目を見開く佳苗。よく見ると、弘田先生や森下さんも同様の反応だった。皆が驚きで固まっている。

「佳苗、セイインってどこなの？」

「あんたそんな事も知らないの!？」

「ふむ、聖院とは中高共に全国にその名を轟かせる名門校だ」

佳苗は違う意味でさらに驚きながら、ひょっこり現れた藍田くんが分かりやすく説明してくれた。

なるほど、そんなに凄い人がどうしてこの学校に来たのかは分からないけど、彼にとつて相手が悪い事には変わらない。

柏木くんが聖院中の出身である事を知って、より暗い表情を浮かべる彼。名のある選手を前に戦意を削がれたのかもしれない。私はさらに自分を責めた。元気の無い彼を見ていると、私は悲しい気持ちでいっぱいになった。見ていて儂い。どうにかしてあげたいけど、今はただ見守る事しか出来ない。私は居たたまれなくなり、少しでも励まそうと彼の名を叫んだ。

「涼くん頑張つて！」

心の底からそう思った。ついさっきまで隠していた私の本心。涼くんに勝って欲しいと願う気持ち。どれも偽りは無い。だって私は涼くんの事が――。

叫んだ瞬間、涼くんと目が合った。目を真ん丸として驚きながら数秒の間固まる涼くん。でもその後、涼くんを取り巻く雰囲気が劇的に変化した。

「……おい、カシワ。続きだ」

先ほどまでとは打って変わる力のある声色。思わずドキツとさせられる凜々しい表情。威風堂々とその場に立つ涼くんに、先ほどまでの暗い雰囲気は無い。むしろ、その表情からは何か自信のようなものが漲っていた。私は、そんな涼くんを目の当たりにして鼓動が早まるのを感じた。

涼くんのオフェンス。涼くんはボールを手にし、ゆつくりとしたドリブルで進む。微速で進みながら、やがて柏木くんを目前にして足を止めた。ディフェンスの柏木くんの手が僅かばかりに届かない微妙な距離。その中で、涼くんは表情を一切変えない。ただ、柏木くんとリングをボーッと眺めているような、そんな感じ。

少しの間、そんな膠着状態が続いた。依然として動きの無いゲームに、私はふと瞬きをする。——すると、そこでゲームは一気に動いた。

「し、信じられないわ……」

佳苗が絞るように声を漏らす。その目は驚愕で見開かれ、視線の先にあつたのはリング下で易々とレイアップシュートを決める涼くんの姿だった。

「ちょ、あ、藍田！ い、今何したか見えた！？」

ようやく我に返った佳苗は興奮した様子で藍田くんに詰め寄る。目を離さず見ていた佳苗ですら、虚を突かれて涼くんのプレーを捉える事が出来なかったらしい。瞬きで完全に見逃してしまった私は、藍田くんの説明に耳を傾けた。

「ふむ……すまんが、俺も全てを把握出来た訳ではない。……ただ、クロスオーバーを餌に柏木を抜き去った、といったところだろうか。正直、いきなりあんなスピードであれをやられては正確な判断も難しい」

「……インサイドアウト・リバースアングルというやつですよ。藍田くん、彼は何者なんです？　とても高校生がそこまで使いこなせるような代物じゃありません。それに、前とは別人だ」

何だか私にはよく分からないけど、とにかく普段は冷静な藍田くんや、顧問である弘田先生の様子を見れば涼くんの凄みがひしひしと伝わって来る。

「はい……正直俺も驚いています。あれだけのスピードでしたからですが、あれが本当の加住 涼です」

……

「ど、ど、どという事なのよ？」

唸るように涼くんを見つめる藍田くん。意味深な言葉に、佳苗が喰い付いた。

「先日森下部長との１on１を見ただろう？　今のあいと比較すれば違いは一目瞭然。ここまで力を発揮出来る今のあいつが本当の姿だという事だ」

それじゃ、前は抜いていたという事なのだろうか？ でも、涼くんは間違ひなく女装を嫌がっていた。本人もそう言っていたし、見ていた私もそれは分かった。だけど、だったらなぜ？ なぜ、涼くんは負けてしまったのかな……。私はその場にいなかったけど、皆は今の涼くんを見てこんなにも驚いている。

「藍田くん、だったらどうして涼くんは前に負けたの？」

「ふむ……あいつには技術はあっても、それを引き出す自信と集中力が絶対的に足りない。まあ、それは今まであいつを取り巻いていた環境が悪かったんだがな。……だが、自信はともかく集中力はあるきつかけで得られたようだ」

「とあるきつかけ？」

「……ああ、どうやら高西さんの声援が届いたらしい」

「へ？ あ、藍田くん!？」

不敵に笑う藍田くんに、私はついつい取り乱してしまう。顔が熱くなっていくを感じながら、その中でも喜んでいる自分に気付いて苦笑する。私の声が涼くんが届いたのなら――。みるみる自分の頬が緩んでいくのが分かった。

その後、思わぬ反撃を受けた柏木くんのオフェンスは動揺によってか、先ほどまでのキレが見受けられずに涼くんによって阻まれた。涼くんが覇気を取り戻してから2度目のオフェンス。相変わらず集中している様子で、いつもとはまた違ったその雰囲気にとドキドキさせられる。

今度は素早くゲームが動いた。驚くほど速いドリブルで、瞬く間に柏木くんと距離が無くなった。すると、スピードを殺さずに懐へと沈み込むようなドリブル。

「ダッグインですか。良い足腰だ……」

一瞬、私は涼くんが柏木くんを完全抜き去ったように思えた。しかし、さすがは聖院中の出身者。すかさず反応して涼くんを追う。徐々に縮まる2人の距離。リングへと辿り着く頃には少しばかり柏

木くんが先行していた。

スピード感の溢れるドリブルで、それでもお構いなしと言わんばかりにレイアップシュートの体勢に入った涼くん。ジャンプしながらボールをリングへと近付けていく。咄嗟に柏木くんもそれを阻むべく、持ち前の跳躍力を活かして高く跳び上がった。

——だが、空中で1度フエイントを入れた涼くんは、跳び上がったまま柏木くんを避けるようにそのままシュートを決めてしまった。

「ダブルクラッチ……何ていう滞空時間してんのよ……」

私は鳥肌が立った。バスケは体育の授業でしかやった事が無いけど、あれだけ速くドリブルをすることが、あれだけ長く跳んでいられることがどんなに凄いのかぐらいは分かる。

私は涼くんのプレーを見ていて、体が熱くなった。あの時と同じ。あの時もこうして涼くんが得点を決める度に鳥肌が立った。コート上の誰よりも上手くて、誰よりも輝いていたあの時も。蘇る記憶に、再び涼くんの姿を思い出しながら呟く。

「同じだ……」

私の一言に反応したのは藍田くんだった。不思議そうな表情でこちらを窺っている。

「同じ？」

「うん。中学の時に見た涼くんの出ていた試合と同じ……」

「ほほう、高西さんはあの試合を見ていたのか？」

私は小さく頷いた。すると、藍田くんは感慨深そうに頷き返してくる。

あれは、私が初めて涼くんと出会った大切な思い出。でも、それ

はただ私が一方的に涼くんの試合を見ていただけだから、出会いと  
いうのはまた違うかもしれない。だけど、私はあの日の事を絶対に  
忘れない――。

中学2年生の終わり頃だった。その日、私の学校に他校のバスケット部が練習試合に来ていた。いつもは全く興味をそられない私だが、その日だけはいつもと違った。

私が廊下を歩いていると、外に見える見知らぬ男の子。着ていた制服からして、きっと練習試合に来ていた他校生なのだろう。キョロキョロと辺りを見渡しながら何かを探しているその彼は、一瞬女の子と勘違いしてしまいそうな可愛らしい顔立ちをしていた。おそらく迷っているのだろうと思い、私はその人に声を掛けようか迷ったが、偶然そこを通りかかった先生に連れられてその場を去って行った。どこか他の男の子と違う雰囲気を感じ出している彼。頭を掻きながら優しい笑顔で先生の後を着いて行く姿を見て、いつの間にか私の足は体育館へと向いていた。

体育館の中には、大勢の女子生徒で溢れていた。ただの練習試合なのにどうしてだろう？ と、首を傾げながらも、そこにいた友人に理由を尋ねてみた。すると、彼女が指差す方に立っている1人の男の子。皆がその人に向って手を振っていた。『藍田』と呼ばれ、女の子から熱い視線を受けるその人は、確かに格好良かった。でも、私の探している人ではなかった。

試合がもうすぐ始まりそうな雰囲気なのに、依然として彼の姿は無い。別の目的でうちの学校に来たのかな？ という疑問を胸に、

私はそれなら帰ろうとした。しかしそんな時、後から走ってくる1人の男の子。

「す、すいません！ ちょっと通して下さい！」

入り口付近にいた私は、慌てて道を空けた。凄い勢いで中へと入って行く男の子。それは、間違いなくさっき見た彼だった。仲間から口々に『遅い』と口にされる彼。それはどこか見ていて微笑ましい光景だった。

試合が始まると、敵なのに藍田という人に黄色い声援を送る周りの女の子達。その人はとても上手くて、コート上の誰よりも目立っていた。周囲を冷静に窺いながらその人を基点にパスが出され、面白いように味方へと渡る。私の学校のバスケ部は翻弄され続け、ほとんど一方的な展開となっていた。

しかし、ボールを持つ割合が多いものの、パスを受けた味方がごとくそのシュートを外す。決して高いとは言い難い決定率に、結局リードをしていたのは私の学校だった。着実に得点を積み重ねていくスタイル。私の学校も意外に強いのかな？ と思いつつ、後で聞いた話、県下でベスト8の実力を誇っていたらしい。

そんな中でふと気になった、あの彼。最初から試合に出ていたみたいだけど、さっきとは違って表情は強張り、パスを受けてもミスを連発。緊張でガチガチに固まっていた。

「相手は4番のワンマンチームだな」

1人の男子生徒が呟く。4番は藍田という人の付けていた番号。得点のほとんどはその人で、私も分からないなりにそこは理解出来た。他の人が得点を決める場面はあまりなかったのだ。

そして、笛が鳴った。どうやらここで一区切りらしい。一瞬、私はここで帰ろうかなとも思っただけど、何より彼が気になってそれは止めた。あまり活躍していないみたいだけど、どこか他の人と雰囲気の違い。最後まで見ていたいと思った。

再び鳴る笛。休憩が終わったらしく、一斉にコートへと戻っている選手達。でも、その中で向い合いながら何やら話している姿があった。藍田という人と、彼だ。真剣な面持ちで言葉を交わしているが、私の耳には届かない。

やがて、何事も無かったかのようにコートへ戻る2人。試合が再開した。

先ずボールを奪ったのは藍田という人。さっきのように落ち着いた様子で周囲を窺うかと思いきや、奪つてすぐに1人の味方へとパスを出した。その正確なパスは瞬く間にディフェンスの脇をすり抜け――あの彼へと渡った。

静まり返る体育館。それは、彼がコート上を支配した瞬間だった。華麗な動きで次々にディフェンスを抜き去り、信じられないスピードでリングへと距離を詰め、あつという間にシュートを決めてしまったのだ。私は瞬きすら出来なかった。本当に一瞬の出来事。他の選手の誰よりも速く、誰よりも上手かった。

その後も彼の活躍は素晴らしかった。他を圧倒する実力でコート内を支配し続け、最後まで彼を中心に試合は進んでいった。可愛い顔立ちからは想像もつかない凛々しくて逞しい表情。私は心臓の高鳴りを抑えられなくなっていた。視線の先には常に彼が。コート上の誰よりも上手くて、誰よりも輝いていて、そして誰よりも格好良かった。その気持ちに気付いた時、私は実感した。

これが一目惚れなんだ――。

「うおおお！ 勝ったぞおおお！」

大声で叫びながらガッツポーズをする涼くん。いつの間にか表情はいつもの涼くんに戻っていた。その目の前では柏木くんがうな垂れている。

「ま、負けた……こんな奴に……」

ゲーム結果は10 - 9。怒涛の追い上げを見せた涼くんが辛勝した。

「ハッハッハ！ すまんカシワ！」

「ありえねえ……クソ。……分かったよ、桃さんとはお前が行け」

あ……ゲームに夢中になりすぎて忘れていた。ど、どうしよう、涼くんが勝ったという事は――

私は途端におろおろを始める。頭の中がパニックで、少しずつ顔が熱くなってきた。

だが、そんな私とは裏腹に、予想外の一言が涼くんの口から発せられた。

「カシワ、ゲームが終わってからこんな事を言うのもおかしいけどさ、やっぱりこういうのは本人に決めてもらわないか？ 何ていうか嫌々桃ちゃんを付き合わせるのはさ、ちょっと違う気がするんだよ」

「加住、お前……」

「桃ちゃん！ という訳だからさ、俺とカシワのどっちかを選んでくれよ。あ、もちろん選ばないっていうのもありだぞ」

突然話し掛けられて少し驚く私。ますます鼓動が早くなった。体育館が静まり、より一層緊張が高まる。

だ、ダメ……そんなに静かにならないでよ……。でも、もちろん答えは決まってる。あとは口にする勇氣だけだ。

「フツ、涼よ。答えは既に出ているだろう？」

「そうよ。この子の顔見て分かんないの？」

藍田さんと佳苗にはもうバレているらしい。でも、あの声援を送った時点でそれは覚悟の上。頑張れ私……。

「な、何だよお前ら！ そうか、俺を笑いにしたいんだな？ 俺だって分かってるよ！ クソー！ カシワの馬鹿たれー！」

「俺かよ！？」

泣き真似をしながら、涼くんは体育館の入り口へと走り出してしまった。

「桃、あいつ本当に帰っちゃうわよ？」

「う、うん。ふうー……涼くん！」

佳苗の一言に、私は深呼吸をしてから意を決して涼くんの名前を呼ぶ。すると、扉に手を掛けていた涼くんはゆっくりと振り返った。私は涼くんの元へと駆け寄る。

「は、はい？」

「わ、私とね、その……デートしてもらえませんか……？」

言った途端に最高潮を見せる私の真っ赤な顔。今までで1番恥づかしくて緊張した瞬間だった。でも、ようやく言えて一安心する私。あとは涼くんの答え次第だ。

「……」

しかし、その場で固まる涼くん。返答どころか、瞬きすらせずに呆然と立ち尽くしている。

き、聞こえなかったのかな？ でも、これだけ近いんだからそんなはずは無いのに……。

「りよ、涼くん？」

私は、涼くんの目の前で手を振ってみる。すると数秒の後、突然動きが再開した。

「——ハッ！ ももも桃ちゃん！？ お、俺でいいのか！？」

私以上に顔の紅い涼くんを見てついつい笑いを溢してしまいながら、私は大きく頷く。

「フオー——！ 今なら俺は空を飛べる！」

何やら奇声を発すると、涼くんはそのまま体育館から出て行ってしまった。そしてそれを見て、やっぱり笑ってしまう私。

久しぶりに見た、あの涼くんのゲーム中の表情。

少しも色褪せていない私の想い。

中学から抱き続けたその想いは、再びこつして出会えた事によってさらに加速していくのだった――。

## 第18話 おデートです part 1

俺は中学から1人暮らしをしている。家族を失ってから叔父さんの家に置いてもらっていたが、中学入学を区切りにアパートへと越した。まあ、越したと言っても叔父さんの管理しているアパートなんだけどな。いつも大家さんである叔父さんは常に近くにいて、実際は自分の部屋を持った、という感覚の方が近いのかもしれない。初めは慣れない事の連続で戸惑った部分もあったが、案外洗濯や掃除はすぐに慣れた。しかし、料理だけは今でも苦しみ続けている。正直、その日を凌ぐのに必死であり良い物を食べていないというのが現状だ。

そんな今日も、お粗末な朝食を済ませてアパートを出た。

「おう、涼！ お、お前そんなお洒落してどないしたんや!？」

「チツ、見つかったしまったか。こうなったら……ダッシュ!」

背後から呼び止められたが、ここで振り返れば後々後悔する事は間違いない。これは単なる勘ではなく、今まで築き上げた経験則なのだ。何事も無かったかのように走り出す俺。まるで風のような。

「舌打ちとはまた随分——待てやコラア!」

しかし、後ろからありえないスピードで追いかけて来るおっさん（39歳独身）。とてもじゃないが40目の身体能力とは思えない。瞬く間に詰められていく距離。ものの数秒で俺はおっさん（39歳独身）に捕まってしまった。

「ゼエ、ゼエ……りよ、涼……捕まえたで……」

僅か30mほどの距離で息を切らすおっさん（39歳独身）。瞬発力とはかく、持久力は中々にお年を召しているらしい。

「な、何だよ昌太さん。俺は急いでるんだよ！」

「グヘヘ、離す訳にはいかへんなあ。俺に何か言う事があるんちやうか？ん？」

笑い方が個性的過ぎるぜ昌太さん！　　というか腕離して！　地味に痛い！

この人が噂の叔父さん、加住<sup>まさた</sup>昌太<sup>まさた</sup>さんだ。しつこいようだが39歳独身。我がアパートの大家さんとして今日も朝から敷地内の掃除に勤しんでいたらしい。軍手と麦わら帽子という風貌で、手には鎌。どうやら草刈りの真つ最中だったらしい。

凶器を手にする昌太さんに捕まり、逃げるの事が出来ない。

「ぐう……な、何か？」

「グヘヘ……」

ちよつとその笑い方止めて！　恐い！　夢に出てきたらどうしてくれるんだよ！　……あ、ちょ、鎌近い！

相変わらず個性的な笑い方の昌太さんを前に、ついつい表情が引き攣ってしまう。

はあ……この興味津々な目。どこに行くのか言わないと絶対に離してもらえないぞ……。

俺はポケットから携帯を取り出し、時刻を確認した。

「ぬおう！？　もう10時じゃないか畜生！　昌太さん、遅刻しちやうから離してくれよ！」

麗しの桃様との待ち合わせ時間は10時。場所は、ちょうどこの

アパートから学校までの中間地点にある鈴内駅だ。死ぬ気で走れば10分で着く距離である。

「涼く、おっちゃんにどこ行くんか言うてみ？」

クソ……今後のネタになるのは間違いないじゃないか。いや、でも、桃ちゃんを待たせるのはかなり気が引けるな……仕方ない。

「と、友達と遊びに行くんだよ」

「男か？ それとも女か？」

「お、女の子だけど……」

「かぁー！ お前もついにそんな年頃か！ それをはよ言えや！ よっしゃ、これはおっちゃんからの餞別や。ええか、相手に恥ずかしいところ見せたらアカンで？ あ、そうや、何なら今日連れて来いや。おっちゃんが美味しいもん腹いっぱい食わしたるで！」

そう言いながら懷から絶妙に湿った諭吉さんを取り出す昌太さん。よ、喜んでいいのか？ 俺はこんなに汗を掻いた諭吉さんを使う事が出来るのか？ 「この紙幣はちよつと……」って店の店員に言われたりしないか？

微妙に気にするところがズレているが、おそらく気のせいだろう。

「っていつか昌太さん俺以上に料理下手じゃないか！ あれか？ 俺の交友関係を滅茶苦茶にするのが目的なのか！？」

俺は以前、昌太さんの作ったチャーハンで3回病院に運ばれた。形だけなら俺でも作れるお手軽レシピなのに、昌太さんはいずれも2時間を掛けて超大作のチャーハンを作り上げた。見た目は無駄に良かったのだが、味は無味……恐かった。

そして、俺はそれ以降チャーハンを見るだけで吐き気がするので

ある。

「グへへ、涼。人っちゅうんは日々進歩するもんやねん……」

何黄昏てるんだよ！ いい加減認めようよ！ 一昨日の茶碗蒸しであなたお腹壊してたでしょ！？ 真っ青な茶碗蒸しなんか見た事無いわ！

諭吉さんをすっかり財布へとしまい、未だに遠くを見つめて黄昏る昌太さんを置いて俺は駅へと向かった。

まさかの足止めを喰らい、結局駅に着いたのは10時20分だった。

最悪だ……人生初のデートで遅刻なんて……。あの人だ、全部あの人が悪いんだ……。

アパートから懸命に走ったが、遅刻である事に変わりはない。息が切れている状態でも一刻も早く桃ちゃんを探さなければならなかった。

「わ、分かりやすいな」

しかし、案外すんなりと桃ちゃんらしき人物を発見。傍を通る人がかならず1度は振り返る可憐な女の子。俺も慌てて駆け寄って行くが、次第に鮮明になっていくその姿に言葉を失った。

白い長袖のカットソーと、裾にリボンが付いたカーキグリーンのショートパンツ。それから黒いニーソックスがまた似合っていた。

普段の制服姿とはまた違った可愛らしさ。スカートもいいけどショートパンツもいい。いや、桃ちゃんが着ればどんな服でも俺の目には可愛らしく映るだろう。正直、貴女は魅力的過ぎます。

そんな桃ちゃんは周囲からの視線に気付いているらしく、キョロキョロしながら落ち着かない様子だった。俺はいつの間にか足を止め、しばしその状態を楽しむ。

おお、困ってるな。桃ちゃん。かなり挙動不審だぞ。もう少し眺めてみるか？ ふむ、それもいいな。……お？ しまった、目が合ってしまった。

「あつ！ 涼く〜ん！」

こちらに気付いた桃ちゃんは、手を振りながら満面の笑顔で駆け寄って来てくれた。

「桃ちゃん、遅れてごめん！」

「ううん、気にしないで。それより……今日はよろしくね！」

遅刻をしても怒るところか桃ちゃんスマイル！ この優しさ、どこぞの鬼に見せてやりたいな。

俺はハニカミながら「こちらこそ」と返し、和やかな雰囲気包まれながら思わず目の前の女の子に見惚れる。

『ああーつと！ 加住選手が犯罪者の目をしているぞー！？』

犯罪者の目？ 知るか！ この機会を逃したら2度と桃ちゃんの私服姿を拝めないかもしれないんだぞ！？ 目に全神経を集中……。突然現れたもう1人の俺。本来ならば否定をしなければいけないところなのだが、否定できない自分が悲しい。目が血走らんばかりに桃ちゃんを凝視する。確かに今の俺は危ない。

すると、肝心の桃ちゃんの表情が次第に変化していく。一言も交わさずに凝視する俺。照れからかみるみる紅潮していく桃ちゃんの顔。……最高です。照れて落ち着きを無くしていく貴女、最高です。

「りよ、涼くん？ その手は……」

ハッ！ 危ない、危ない！ 知らない間に右手が伸びてしまっていた。俺はカシワじゃない、俺はカシワじゃない……。

危うくあと1歩のところの間違いを起こしてしまいそうなのを何とか堪え、ようやく俺達はその場を後にするのであった。

何という優越感。俺は劣等感の塊のような人間だが、隣を歩く桃様のお陰で未だかつて味わった事の無い優越感に浸っていた。

すれ違う人のほとんどが1度足を止めて桃ちゃんに見惚れる。さらに、それが男の人だけではなくて女の人もだから凄い。憧れ、そんな感じなのかもしれない。

普段から隣の隣を歩く機会が多い俺は、日々似たような体験をしている。しかし、それはあくまで似ているだけであって実際は別物。こんな優越感はない。同性の隣を歩いていれば劣等感、異性の隣を歩いていれば優越感。つまり、桃ちゃんの隣を仲良さ気に歩いていれば俺でも恋人に見えるんじゃないか？ という事だ。

「しかし現実はそうも甘くないか……」

桃ちゃんに見惚れた後、当然その視線は隣にいる俺へと向けられ

る。男の人からはかなり殺気染みたものを感じるがそれも一時的なもので、俺の姿を見るなり男女問わず鼻で笑って行きやがる。

なんという屈辱。自分でも薄々気付いていたがこうして笑われるとそれはそれで傷付く。だが、それでもめげないのが俺。逆にそんな奴らには、桃ちゃんとの距離を詰めて見せつけてやった。フフ、悔しがれ世の男共。

「で、今日はどこに行くんだ？」

知らない間に桃ちゃんとの距離が予想以上に近かったのは気にしない。気にすればまともに会話すら出来なくなってしまうのだ。

俺は何食わぬ顔で今朝から気になっていた事を口にした。

本来、俺がデートコースを決めておくべきなのだろうが、昨日のメールで『まかせて』と言われたので俺は素直にそうする事にした。あ、ちなみにこの前のカシワとの1on1の後、桃ちゃんの携帯番号とメールアドレスを手に入れる事が出来た。嬉しさのあまりイタズラ電話を掛けまくったのはここだけの話だ。修の携帯にだが。

「映画は、好き？」

「んゝ、好きか嫌いかで言ったら好きだな。お、もしかしてこれから映画を見に行くのか？」

「うん。それでもいい？」

「もちろん」

映画なんて久しぶりだなゝ、なんか楽しみになってきたぞ。どんな映画を見るのだろうか？ できればホラーは勘弁してもらいたいところだ。恥ずかしい話、中学生の時に修と見たホラー映画が未だに忘れられない。それから1週間の間トイレの扉をフルオープンで済ませていたほどだ。

「安心して、ホラーじゃないから」

丸聞こええええ！ どこだ？ どこまで聞こえてたんだ？ ま  
さかトイレの件もか？ な、何という失態！

あまりのシヨックに我を忘れた俺は、しばらくの間奇声を発しな  
がら道端の電柱に頭を打ち付けるのであった。

## 第19話 おデートです part 2

今日は日曜日という事もあり、映画館内は家族連れやカップルでいっぱいだった。こんなに人がいるのに席は取れるのだろうか？と疑問に思ったが、場所にこだわらなければ2人並んで座る事が出来た。

途中、チケットを買う為に列に並んでいると前後をカップルに挟まれ、前を見てイチャイチャ、後ろを見てもイチャイチャ。妙に意識してしまった俺と桃ちゃんの間には微妙な空気が流れたりもした。不謹慎ながらもそのカップルに自分と桃ちゃんを当てはめて妄想に浸る俺は、きつと危ない顔をしていたに違いない。

映画が上映され始めると、俺はすぐに映画内へのめり込んでいった。初めは寝てしまう可能性を否めなかったが、実際に見始めてその不安は払拭された。少しベタな展開の映画。しかし、だからこそ引き込まれた。

映画はそろそろ終盤である。

主人公の男の人が恋人とのデートへと向かう途中、人身事故に遭い意識不明の重体で病院へと搬送される。生死を賭けた大手術。その末に辛くも一命を取り留めた主人公であったが、身体的な後遺症は残らなかったものの、3年分の“記憶”というかけがえのない“

繋がり”を失ってしまう。

奇しくも結婚を約束したはずの恋人と初めて出会ったのも3年前つまり、その存在自体が主人公にとっては全くの他人と成り果ててしまうのだった。記憶喪失とは分かっているながらも絶望を抱く恋人はそのショックに耐えかね、主人公にそつと別れを告げる。

別れを告げられた数日後、主人公の記憶は順調に回復していたのだが、日に日に増す喪失感に頭を悩ませていた。見ず知らずの人のはずなのに、毎晩見るのは彼女の夢ばかり。夢の中ではいつも恋人同士で、何の違和感も無い幸せな時間を過ごしていた。

不思議に思いながらも無事退院をする事になった主人公は、久々に帰って来た自宅を掃除中に1つの小さな箱を見つける。見慣れない箱。おもむろにその箱を開けた主人公は自分の目を疑った。

——入っていたのはダイヤモンドのリング。手に取った瞬間、激しい頭痛を起こしながらもみるみる蘇っていく彼女との思い出——。空白の3年間は、あの日に誓いを込めたそのエンゲージリングによって蘇るのだった。

どうして今までそんな大切な事を思い出せなかったのかと、主人公は自分を責めに責めた。後悔の念だけが彼を包み、今更ながらに失った人の存在の大きさを知る。

その後、悲しみで溢れる主人公は無気力なまま生活を送り、ただ時間を消化する毎日だった。既に連絡も取れなくなっていて、彼に残されていたのはあのリングと記憶だけ。それだけが彼の支えであり、生きがいだった。忘れようにも彼女の存在はあまりに大きく、気が付けば頭の中は彼女でいっぱい。何も手に付かなくなっていた主人公は、気分を変えようと、気晴らしに外へと出掛けるのだった。行く宛も無くひたすら歩き続ける主人公。しかし、彼の足は無意識の内に彼女と初めて出会った公園へと向いていた。

桜が綺麗な所で、花見のシーズンには老若男女問わずたくさんの

人で溢れる有名なスポットだ。会社の同僚や上司と一緒に毎年ここを訪れる主人公。3年前もここで同じように夜桜を楽しんでいた。

その日、お手洗いと言つて席を立った彼は、公園内の少し外れたベンチに腰掛けていた。ライトアップのされていない満開の桜。人氣が無く、その場所は彼のお気に入りだった。皆で騒ぐのは嫌いやないが、こうして1人で眺めるのも良い。そんな事を思いながらもちびちびとお酒を飲む彼は、しばし時間を忘れて夜桜を堪能していた。

そして、どれぐらいの時間が経つただろうか。ふと彼の横に腰掛ける1人の女性。見た感じはどこにでもいるOL。あまり異性と話すのが得意ではない主人公なのだが、お酒の力も手伝つてか、何の躊躇いもなく話し掛ける事が出来た。すると、話をしている内に彼女は、桜の下で1人でいる主人公が気になってここに來たのだと明かす。それから世間話や、愚痴も互いに溢したりした。主人公にとってここまで自然に話せる異性は初めてだった。

この出会いがきっかけで2人は連絡を取り合うようになり、付き合うようになったのだ。言わば、あの桜が2人のキューピッドなのかもしれない。

思い出に浸るように再びあの桜の元へやって來た主人公。もう花弁は散つてしまい、青々と茂る桜の木がそこにはあった。遠目から眺めながらもつい昨日の事のように思い出される記憶は彼女を忘れられない確たる証拠。そんな自分に苦笑しながらも桜の木へと歩み寄る主人公は、いつも腰掛けていたベンチを見つけて言葉を失った。そこには憂いを帯びた瞳で桜を見つめる、あの彼女――。その姿を見た瞬間、彼の目からは涙が溢れていた。彼女の名前を呼びながら駆け寄る主人公。それに気付いた彼女は驚きで目を見開いていた。しかし、それも数瞬の間に別の感情へと移ろう。主人公の瞳に映る彼女へ対する確かな想い。それを悟つた彼女もまた、溢れる涙を止

める事は出来なかった。

懷から取り出される、あのリング――。

2人の想いが、ようやく結ばれた瞬間であった。

流れるエンドロール。周囲からはすすり泣く声も聞こえる。その中で俺の頬にも涙が伝っていた。ただ、スクリーンを眺め、瞬きも忘れて止めどなく涙が溢れる。号泣とはまた違った涙。一筋だけで流れているはずなのに、俺はそれを止める事が出来なかった。

やがてエンドロールも終わり、映画館内に光が戻る。そこでようやく俺は我に返った。涙を拭いながら、隣にいる桃ちゃんの泣き顔でも拝んでやろうと思ひ振り返ってみる。

「俺、気持ち悪いよな。男が泣きながら映画観るなんて――ん？」

振り返ると、こちらを見ている桃ちゃん。目が潤んで今にも溢れそうだが、それ以上になぜか顔が紅かった。

「ど、どうした？」

「あ、ううん！ な、何でも無いよ！」

目が合って問い掛けてみても手をブンブン振りながら慌てて取り繕う桃ちゃんに、俺は違和感を感じた。

ははくん、何か隠してるな？ やっぱり泣きながら映画を見るのは不味かったか？ 涙と一緒に鼻水もちよろりとか？ ……うーん、違ったか。

「怪しいな。何を隠してるか素直に言わないと為にならないぞ？ フフ」

自分でも引くぐらいの滑らかな動きを見せるマイフィンガー達。こちよこちよをさせれば俺の右に出る者はいない。あの修ですら裸足で逃げ出すほどのな。無駄な特技を持ったとは思うが、俺にとっては数少ない特技の1つである。

「ほ、本当に何でもないよ？」

あくまで白を切り続けるか。良かろう！ 笑い地獄という名の天国へ誘ってやる！

「ひゃっほう！ 魅せてやれマイフィン——」

「あのー、そろそろ退館して頂けませんかね？」

「——ハッ！ す、すいません！ 今出ます！」

俺の危険な行動を制するかのように映画館のスタッフらしき人が声を掛ける。辺りを見渡せば残っているのは俺達のみ。妙に焦り始めた俺は、桃ちゃんと共に慌ててその場を立ち去るのであった。

「ふうー、食った食った」

「美味しかったね」

映画を見終えた頃には昼時を少し過ぎた時間帯だった。健全な高校生である俺は、空腹を我慢できずに近くファミレスに入ろうと提案した。ピークを過ぎた店内は疎らに席が埋まっており、その中

で俺達は各々昼食を食べた。自分と比べて明らかに食べる量の少ない桃ちゃんが少し心配になったが、『普通の女の子はこれぐらいだよ?』と言われ、いかに俺がそれまで寂しい人生を送っていたかを思い知る事となった。

ファミレスを出た後は特にどこへ向かうでもなく、ブラブラと街の散策。相変わらず周囲の視線を独り占めにするほど可愛らしい桃ちゃんだが、一緒にいて緊張しないのもまた、桃ちゃんの魅力なのだろうか。

「おお、やっぱりこの公園はでかいな」

ビルなどが立ち並ぶ人工的な色合いから切り離された自然の空間。ここに住む人や働く人の憩いの場になっている公園に来ていた。慌ただしく流れる外の時間とは異なり、静かで緩やかな時を過ごす事が出来る。休憩にはうってつけの場所だ。

「何だか落ち着くね」

桃ちゃんは軽く深呼吸した後、大きな伸びをする。

やっぱり何をしても絵になるな、とか思いながら、俺はそんな微笑ましい光景を眺めていた。いつも学校で癒されているが、休日もこうして心休まる時間を過ごせて本当に幸せである。

よ、よし、いいぞ……もう少し手を上げて………きたあああ！  
おへそのチラリズム！

とても口に出しては言えないような事を密かに思っていたりもするが、しかし、先ほども言った通り俺は健全な高校生なのである。目の前でこんな滅茶苦茶可愛い人が魅力的なポーズを決めていたらついつい期待してしまうのだ。自分に正直に生きた結果である。

「グッジョブ！」

思わず親指を立てながら加住 涼、渾身のスマイル。桃ちゃんは不思議そうな顔をしているが、まあ、当然の反応だろう。無駄にテンションが上がった俺の行動が不可解なのだ。

「よし！ 桃ちゃんはここで休憩してくれ！ 俺はジュースでも買って来るから！」

「え？ あ、うん、分かった」

桃ちゃんをベンチに誘導する。ジュースはおへそのチラリズムをプレゼントしてくれた桃ちゃんへのささやかなお返しのもりである。

俺はダッシュで自動販売機まで向かうのであった。

「まさか人生初のデート相手が桃ちゃんとは……俺は最高に運が良いな」

レモンティーとスポーツドリンクを手に、俺はぶつぶつと呟きながら桃ちゃんの待っているベンチへと向かっていた。

これまで付き合うどころかデートも初めてという悲しい人生を送ってきた俺。年齢〃彼女いない歴を表していた。……といっても、好きな人すらほとんどできた事が無いのだから仕方無いのかもしれないが。しかし、それでも当然告白なんてされた事も無いので結局同じである。どこぞの王子様のように片っ端から女の子を虜にする輩がいるので、俺のような人間にはますます彼女が出来にくくなるのだ。ハハ、何という不条理。

「デートに踏み切ってくれた桃ちゃんの優しさに感謝しないとな」

奇跡的にカシワに勝利してしまったがために、今回のようなラッキーが巡って来たのである。負けていればこんな事にはならなかっただろう。

心の中でカシワに謝罪しつつ、桃ちゃんには最大限のお礼を。心の中だけでなく、後できちんと言わないとな。

そんな事を思いつつ、妙に軽い足取りで桃ちゃんの元へと辿り着く。

「ねえねえ、今1人なの？」

「キミ、カワイイね」。友達と待ち合わせ？」

「い、いや、あの……」

な、ナンパされてる。初めてみたぞ……。もしかして、普段からよくこういう状況に遭遇するのだろうか。桃ちゃんのルックスならそれも大いに納得できるけど。

「——あつ！ 涼くん！」

俺の存在に気付いたらしく、桃ちゃんは慌てて俺の元へと駆け寄って来る。

まあ、ただのナンパなら男友達の連れがいれば素直に諦めるだろう。すまんが今回は諦めてくれ。一応、俺にとってはかなり大切なデートなのだ。

「さてとー、行こうか桃ちゃん」

「ちよつて待つてくれるかな？」

その場を立ち去ろうと1歩踏み出した瞬間、明らかに普通じゃない力で俺の肩を掴む茶髪のナンパ師。

「痛ッ……何すか、これ」

「この子は君の彼女？」

「ち、違いますけど」

「だったら君はここまででいいよ。後は俺らがこの子と遊ぶから」

あからさまに俺を邪魔だと言い切るナンパ師を何とか睨み返す。  
何だよその好戦的な態度！ 普通は諦めて他いくだろぅ！？ つ  
ていつかただのナンパ師にしては握力強過ぎるんだよ！

「無理っす。あんたらみたいな人に桃ちゃんは渡せません」

「あつそー、帰れ言ってるのわかんない？」

「俺らもあんまり無理やりは好きじゃないんだけどさあ、仕方ない  
つか」

黒髪でロン毛のナンパ師が指や首の骨を鳴らし始め、そしてそれ  
に続くかのように茶髪のナンパ師も歩み寄って来る。

ま、不味い。こいつらは本気で殴り合いを始めるつもりだ。正直、  
俺は喧嘩に関して小学生と互角の実力だと自負している。つまり、  
目の前の大学生っぽい人達に勝てるはずもなく……。

「涼くん……」

「まかせろ。何とかする」

心配そうに俺を見つめる桃ちゃんに、思わず格好をつけて後に引  
けなくなる馬鹿な俺。しかし、確かに喧嘩は弱いが、この場で意表  
を突く事は可能である。

おもむろに、軽く両手の拳を前に出す。

「何だよ？ やんのか？」

「殴り合いで俺らに勝てると思ってんの？」

何やら言われているが、俺は気にせず続ける。

フフ、喰らうがいいぞナンパ師共。素直に退かなかった事を後悔させてやる……いけ！ 昌太さん直伝の一撃必殺！

「さーいしよはグー、じゃーんけん——チヨキイイイ！」

「ギヤヤヤヤ！」

「目が、目があああ！」

今の時代、誰がジャンケンから目潰しを繰り出すと予想出来ただろうか。昔に漫画で読んだ記憶はあるが、実際に行動出来る人材は俺や昌太さんぐらいのものだろう。

茶髪のナンパ師がジブリーな台詞を吐きながら地面をのたうち回っている。すまないが容赦無く突かせてもらった。回復にはそれなりに時間を要するだろう。今の内に退散だ。

「今だ桃ちゃん！ 逃げるぞ！」

「う、うん！」

“喧嘩は先手必勝や！” by 加住 昌太

「師匠おおお！」

大して白くもない歯を見せながら親指を立てる昌太さんが脳裏に浮かんだ。今回ばかりは本当に助かった。

俺並みに喧嘩が弱いらしい昌太さんが、かつてこの目潰しで初めての白星を飾ったらしい。学生時代に遭ったカツアゲで、相手が話し掛けてきた瞬間に繰り出したらしい。何というチキンハート。あの意味凄いで昌太さん！

「待てコラア！」

「舐めてんのかテメエ！」

後ろから飛んで来た怒号に、首だけ振り返って確認してみると、目を押さえながら追いかけて来るナンパ師達。

ひっ！？ 復活早っ！？ やっぱ只者じゃなかったなお前ら！  
意外にナンパ師達の足が速く、徐々に縮まっていく距離。俺も桃ちゃんも、これ以上速く走ることはい出来ない。

「りよ、涼くん！ このままじゃ追いつかれちゃうよ！」

「諦めるな桃ちゃん！ 後ろを見たら駄目だ！」

当初の爽やかなナンパ師達の面影は無く、今はもの凄い形相で追いかけて来ている。さらに縮まる距離。口ではこう言っているが、内心俺も諦めかけている。いざとなれば捨て身で……。

俺がそんな決意を胸に、あと僅かにまで迫っているナンパ師達の方へと振り返った。

「待てって言うてんだろぅが！ テメエ、死に——どうべし!？」

「な、何——ごぶあ!？」

「フッフッフ、真に魅力を秘めた男はナンパなんぞしくとも自然に女性を惹きつけるものだぞ」

「ちよっと！ あんた達桃に何しようとしてたのよ!？」

俺達が諦めかけた最中に颯爽と現れた2人の学友。

茶髪のナンパ師にドロップキックを決めた王子様。

黒髪ロン毛のナンパ師にローリングソバットを叩き込んだ……鬼。

「何か言った!？」

「ひいいい！？ な、何も！」

これ以上ない頼もしい援軍の到来だった。だが、これで終わるほどナンパ師達は甘くなかった。

「痛え……何すんだよテメエら！？」

「調子に乗り過ぎだぞコラア！」

何という事でしょう。彼らは不死身なのでしょうか。佳苗の蹴りを受けてまだ意識を保っているとは……敵ながらあっぱれ。

「お前達は先に行け。ここは俺と鬼が引き受けよう」

「誰が鬼なのよ！？」

今にも暴れそうな鬼は置いておいて、俺は修の言葉に頷き返し、桃ちゃんと共にその場を後にするのであった。

## 第20話 我家へようこそ part 1

「ゼエ、ゼエ……………さ、災難だったな」

「はぁ、はぁ……………う、うん」

完全に頭に血の上ったナンパ師達から逃げ切る事は容易かった。だが、それは修と佳苗というかけがえのない友達を犠牲にした結果から生み出されたもの。

「俺はあいつらを絶対に忘れない！」

へへ、泣いてなんかないやい！ 俺がここで泣いたら死んだあいつらも浮かばれないんだよ！

右手で涙を拭う振りをしながら、すっかり傾き始めた夕日に向かって叫んだ。

「何で死んだんだ！」

「し、死んではないと思うけど……………っていうか、明日普通に会えると思うよ？」

この茶番劇に終止符を打ったのは桃ちゃんである。的確なツッコミ、痛み入ります。正直、1人で暴走を始めた自分が恐かったです。修は涼しい顔で相手の攻撃をかわすクールガイ。佳苗は如何な戦況をも人外の力でひっくり返す鬼神。……………本人の前で口走ったら血を見そうだが。まあとにかく、今回はあの2人のお陰で助かった。厄介な連中に絡まれていた所をたまたま通りかかったあいつらが助けて——ん？ たまたま？ ぬう……………妙に引つかかるのは気のせいかな。

今日のデートはもちろんあの2人も知っている。俺の親友である

修、桃ちゃんの親友である佳苗。あいつらはどうしてあの場にいたんだ？ 2人で遊んでいたのか？ ……違うな。そもそも今回のデートのきっかけとなったカシワとの1on1を企てたのは修。そして、俺に女装をさせた事もある愉快犯、佳苗。  
さ、最悪だ、あいつらは初めから……。

「どうしたの？」

「あ、ああ、繋がったんだ」

「繋がった……？」

「どうやら俺達は修達に尾けられていたらしい……」

そうとしか考えられない。面白半分で俺の大切なおデートを……畜生！ ナンパ師に絡まれたのを助けてくれたのはありがたいけど、それはそれで腹立つなオイ！

ああ、恐ろしい……明日学校に行けばまず間違いなく電柱に頭を打ち付けていた事とトイレの話をイジられるぞ……。

「明日は精神的苦痛で髪が抜け落ちるかもしれないな………ん？ どうした桃ちゃん？」

「——べ、別に何でもないよ！？ う、うん！ 何でもない！ あ、あははは！」

もうここまで怪しいと問い詰める気にもならんな。あからさまに怪し過ぎる。うん、ここは本人の為にもそつとしておこう。

手をブンブン振りながら全力で否定する桃ちゃんに思わず苦笑する。

「どうして笑うの！？ ほ、本当に何でもないよ！？」

「わ、分かったから！ 桃ちゃん、少し落ち着こうか」

そりゃ、ここまで分かりやすいと誰でも笑っちゃうって。どことなく微笑ましい光景というか何というか……。とにかく、落ち着かないと話にならない。

ナンパ師から逃れる為に懸命に走ったから、少し公園からも駅からも離れたみたいだ。

「それにしても結構走ったな。ここはどこ……あ、俺の家の近くじゃないか」

どうやら無意識の内に自分の家へと走り出していたらしい。見慣れた風景と、遠くに見える我がアパート。まだデートが終わってないのに帰ってきちゃったよ。

「ん？ どうする？ あそこ俺の住んでるアパートなんだけどさ、ちよつと休憩していくか？」

「えっ？ い、いいの？」

ようやく少し落ち着きを取り戻した桃ちゃんが、今度はソワソワし始める。俺はそんな桃ちゃんを見て飽きないなあと心の中で呟きながらアパートへと向かった。

帰って来た我がアパートでは、まだ昌太さんが草刈りをしていた。1人のはずなのに何やら話し声らしきものも聞こえる。

「グヘヘ、雑草はお呼びちゃうねん……オラアアア！」

鎌を振り回しながら、あの危ない笑い。

へ、変質者だ。間違いない。帰って来るところを間違えたか！？隣ではそんな昌太さんを目の当たりにして桃ちゃんが怯えている人として当然の反応だ。俺は変質者に見つからないように、そっと自分の部屋へと歩いて行く。

「おお！ 帰ったんか涼！」

「ひ、人違いです」

「そんな寂しい事言うなや、——うお！？ このべっぴんさんは誰や！？」

ちよ、ちよっと！ 鎌振り回しながら桃ちゃんに近づくな変質者め！ この怯えようが目に入らないのか！？

「やめえええい！ 鎌を下ろして昌太さん！」

俺の一言に『あ』という表情で動きを止める昌太さん。しかし、俺の後ろで顔をだけを覗かしている桃ちゃんの顔は今までに無いくらい強張っていた。

「す、すまんなあ。お前が洩ちゃん以外の女の子を連れて来たからびつくりしたんや」

「……まったく、訴えられたら勝ち目ないぞ」  
「グヘヘ」

コラコラ笑い方！ 癖だから仕方ないけど少しは気をつけてくれよ！

ようやく落ち着いた昌太さんに、少しずつ警戒心が薄れていく桃ちゃん。俺は思わず溜息を漏らす。

「昌太さん、この子は俺と同じクラスの桃ちゃん」

「こ、こんにちは」

「はい、こんにちは。涼の叔父です」

ふう〜、普通の会話が出来るって幸せだな。ここに至るまでに結構疲れたぞ。

「で、桃さんとやらは涼のコレか？」

小指立てんなド畜生おお！ でっかい爆弾落としゃがつて！  
やっぱりまともに会話するのは不可能だな！

「そんな訳ないだろ！？ 恐れ多いぞ昌太さん！ い、行こうぜ桃ちゃん」

「う、うん……」

慌てて桃ちゃんを連れて自分の部屋へと逃げ込む俺は、昌太さんがニヤリと笑っているのに気付く事は無かった。

「ごめんな、変な人がいて。驚いただろ？」

「だ、大丈夫だよ？ た、多分良い人だと思う」

昌太さん、あんたの評価は最悪みたいだぞ。ここまで桃ちゃんを戸惑わせる人材は中々いないだろう。もう2度と姿を現さない事を推奨します。

「そうか。まあ、散らかってるけどくつろいでくれ。俺はお茶でも

入れて来るよ」

大丈夫とは言いつつも、まだ昌太さんから受けたショックが大きいのかソワソワが止まらない桃ちゃんを横目に、俺は台所へと向かった。

お客さんが来るなんて久しぶりだな、最近は修とみーちゃんも来ないしな。というか、みーちゃん以外の女の子が俺の家に来るなんて初めてじゃないか？ 珍しい事もあるもんだな………へ？

お、女の子が俺の部屋に？ し、しかも狭い部屋に2人きり！？ 何という衝撃の事実！ い、今更気付いたのかよ俺。

途端にガタガタと震え出す手。コップにお茶を入れて運ぼうとしていた矢先だったので、床はびしょびしょに濡れてしまった。コップに残った半分のお茶を見て思わず失笑。

「ま、漫画か！」

1人でツツコミを入れる俺は中々の猛者ではないだろうか。

結局、3度目のトライにしてようやく桃ちゃんの元へとお茶を運ぶのに成功するのであった。

お茶を飲みながら徐々に平静状態を取り戻していく。だが、それでも緊張を完全に拭い去る事が出来ないのは桃ちゃんを意識しているからなのだろうか。しばしの間、部屋は沈黙で満たされた。

き、気まずい……とにかく何でもいいから話し掛けてみるか。

「あの――」

「あの――」

全く同じタイミングで被る声に、俺と桃ちゃんは「どうぞどうぞ」と互いに勧め合う。だが、俺は大した話を用意していた訳ではない

ので一心不乱に話を続けるよう促した。

「じゃ、私から。あのね、さっきから気になってたんだけど……」  
「漣ちゃん”って誰なの？」

「ああ、近くに住んでる1つ下の女の子だよ。早本<sup>はやもと</sup> 漣<sup>みお</sup>っていうんだけどさ、修と同じぐらい付き合いがあるんだ」

初めてできた男子の友達が修なら、女子の友達はみーちゃんだ。俺が高校に入ってからあまり会っていないが、中学の時はいつも一緒に学校へと行っていた。1つ下のくせに外見は俺よりも年上に見える、しかし内面は年相応というかそれ以下である。

部屋によく来る事はあるが、みーちゃんの場合は緊張するどころかむしる落ち着く。先ほどの台所でのような事はまずありえない。

「ど、どんな人なの？」

桃ちゃんは少し身を乗り出しながら興味津々の様子である。

「うーん……甘えん坊、かな。それと、やたらボディータッチを試みってくる女の子だ」

みーちゃんと会えば、まず間違いなく抱きつかれる。出会って間もない頃はそうでもなかったが、中学に入った辺りから急にハグとやらの目覚めたらしい。初めは慣れない事に取り乱したりもしたが、『ハグは挨拶』と言われてそんな自分が恥ずかしくなり、それから不思議と何ともなくなつた。

「ふ、ふうん、そうなんだ……」

「まあ、俺にとつたらみーちゃんは大切な人だな。何てったって、初恋の相手だし」

「えっ？」

今だからこそ言える話だ。小学校4年生ぐらいの時に初めて会って、それからすぐに好きになった。初めて“俺”を見てくれた女の子。優しく気遣ってくれて、一緒にいるだけでドキドキした。

でも、いつも修とみーちゃんの3人で遊んでいる中で、俺は目撃してしまった。みーちゃんが修に見惚れる姿を――。

ショックだった。だけど、告白をして拒絶されるよりは遥かに気が楽だったのかもしれない。それで降俺はその気持ちを封印し、いつの間にやらその恋心は色褪せていった。

「今も……………今でもその漑ちゃんの事、好きなの？」

「まさか。今は俺にとって妹同然。そういう意味での大切な人だよ」

どこか張り詰めた様子の桃ちゃんにそう返すと、一気にその表情が緩んでいった。

声に出しては言えないが、みーちゃんは家族ともいえる存在である。修や昌太さんを含めて、俺にとってはかけがえの人達だ。

「そっか、今度会ってみたいな」

「またその内紹介するよ」

微笑む桃ちゃんを前に、和む空気。俺も釣られて表情が緩んでいた。さっきまで張り詰めていた緊張感も既に無く、いつもと俺と桃ちゃんだ。

「そっいえばさ、腹減らないか？」

ついさっき昼飯を食べたと思いきや、緊張が解けたところで俺の腹は空腹を訴えていた。

「あ、そういえばそうかも……どうする？」

「せっかく家にまで来てもらったんだから俺が作ってあげたいんだけど……残念な事に味の保証ができない。また外で食べようぜ」

こんな事ならもつと練習しておけば良かったな……。俺の作った美味な料理達に桃ちゃんも思わずうつとり——今の俺にまず無理だが。それに、万が一お腹でも壊されたらシャレにならない。昌太さんほど下手ではないが、用心するに越したことはないのだ。

外食するにしてもこの近くはやたらとラーメン店が多い。豪快にスープを飲み干す桃ちゃんも見てみたいが、それはまた今度にしよう。昼と同じようにファミレスが無難だな。

「あの、もし良かったら私に作らせてくれないかな……？」

本日の夕食について思案していたところに、桃ちゃんの思いがけない一言。俺は嬉しさで飛び上がりそうになった。

「いいんすか!？」

「うん!」

桃ちゃんの手料理、桃ちゃんの手料理、桃ちゃんの手料理………ハッハッハ！俺は幸せ者だ！すまんなカシワ、明日はたっぷりと自慢してやるから覚悟しとけよ！

「冷蔵庫の中に食材だけは無駄にあるから！ご飯も炊けてるし！

あ、包丁とかフライパンとかはここに入ってるから！」

「わかった。それじゃ、涼くんはゆっくりしててね」

「はい！」

無駄に良い返事を返し、俺は言われるがまま部屋でくつろぎ始める。どんな料理ができるのか期待しつつ、ただひたすら内容も入ってこないのにテレビを見続けるのであった。

## 第21話 我が家へようこそ part 2

部屋からこっそり覗き見た桃ちゃんの料理姿、それは最高に絵になっていた。カシワへの土産話がまた1つできたと感じながら、つまらないテレビを見るよりも遙かに見ていて楽しい。どうも上機嫌だったらしく、時折鼻歌なんかも聞こえたりした。それがまた上手くて、心地良いのだ。いつの間にか正座して桃ちゃんに見惚れていた。

「出来たよ」

桃ちゃんのそんな一言で慌てて座り直す。こんな時に素早く動けるのだから俺って凄い。満面の笑みでテーブルに置かれる料理。良い匂いの立ち込める部屋内であったが、俺はその匂いに嫌な予感を感じた。

「こ、これはまさか……」

な、何という運命のイタズラだろうか。一応、俺は嫌いな食べ物少ない優良少年のつもりだった。しかし、目の前のこれは……。

「これはまさか“ち”で始まって“ん”で終わる食べ物では……」  
「違うよ？ “や”で始まって“し”で終わる食べ物だよ」

ハハ、焼き飯ね。……一緒だよ！ 同じ食べ物を指してる事に変わりはないんだよ！ ちょっとした文化の違いじゃないか！

誰が冷蔵庫内に保管されたあれだけの豊富な食材達でチャーハンを作ると予想出来ただろうか。チャーハン以外の料理だったら間違いないがついていただろう。でも、相手は強者。見るだけで吐き

気を引き起こす豪傑である。どこかのおっさんがあんなものを俺に食べさせさえしなければ……。

「今日のは自信作だよ」

スプーンを手に持つが、尋常じゃなく震えている。だが、吐き気を抑えるのに必死で震えにまで気が回らない。さらに額を伝う冷や汗が俺の危険を知らせていた。目の前では桃ちゃんが自信に満ち溢れた表情でこちらを見ている。

後には引けないぞ……折角作ってもらった料理を無碍にする訳にはいかない。

「いいいただきます」

へへ、声が震えるぜ。そんなに目を輝かせながら俺を見ないでくれ桃ちゃん。感想待ちってか？ 畜生！ 食べばいいんだろ！？ 覚悟しやがれチャーハン！

自棄を起こした俺は一口と言わず一気にチャーハンをかき込んでやった。

「ど、どう？」

先ほどまでの自信はどこへやら、恐る恐る問い掛けてくる桃ちゃん。俺はすぐに答えたかったが、予想以上に頬張り過ぎてまともに話す事が出来ない。

……ぬ？ こ、これは……

「ふふん！」

「え？」

そらそうなるわな。俺でも何言ってるのか分からなかったぞ。だが、あれだけ嫌悪していたチャーハンが以外にも――

「んぐんぐ……………う、美味しい！ これは本当にチャーハンか!？」

どこぞの無味とは違い、これこそまさしくチャーハンだ。しかも、半端じゃなく美味しい。嫌いな物を克服させるほどの美味さがあった。

「ホントに!？ 良かった〜」

桃ちゃんの安堵する表情が窺えた。これだけ美味しい物が作れるんだったらもつと自信を持てばいいのに。ただ、これだけ可愛くて優しくて、おまけに料理も上手い。まさか桃ちゃんがここまで完璧な人だったとは。

「いや本当に美味しいよこれ！ 桃ちゃんには料理の才能があるぞ！」

「あはは、褒めすぎだよ〜」

お世辞でもなんでもない。俺の率直な感想だ。照れ笑いをする桃ちゃんを前に、皿に盛られたチャーハンを勢い良く胃袋に流し込んでいく。途中で咽たりしながらも、瞬く間に平らげてしまった。

「ふう〜、ご馳走様。久しぶりにこんな美味しい物を食べたよ」

「喜んでもらえてよかった。また今度作ってあげるね」

「おお、期待してるぞ」

早くそんな日が来て欲しいものだ。なんならお金を払ってもいい。

桃ちゃんが作った料理はそれぐらいの価値があるのだ。

俺は使った食器達を台所へと運び、部屋へ戻る前にトイレへと向かった。

「ああー一時はどうなるかと思ったけど、何はともあれ良かった」

用を足しながらついついそんな事を溢す。チャーハンの事もそうだが、桃ちゃんを家に招いてから2人きりだと気付いた時は動揺を隠せなかった。今までの女の子に対する経験が無さ過ぎたのがそもその原因かもしれないが、緊張して何を話して良いのか分からなかった。しかし、今となってはかなり自然にというか、いつも通りに話す事が出来ている。桃ちゃんと話していると楽しいし、何より癒される。

もう少し話していたいとも思ったが、トイレに設置してある時計の針は既に8時を指していた。

「さすがにこれ以上は不味いよな」

部屋に戻ったら桃ちゃんを送って行こう、なんて思いながらトイレを出る。夜道に昌太さんやカシワのような人間がいつ出るかも分らない物騒な世の中である。さすがに桃ちゃんを1人で帰す訳にもいかない。

部屋の扉を開け、その事を告げようとした時——俺は固まった。

「も、桃ちゃん……？」

顔を紅くしながら何やら雑誌を見ている桃ちゃん。それだけなら良かった。ただ普通に雑誌を見ているだけなら。だが、それは俺がいつもお世話になっている――

『つ、通勤電車で快樂地獄……！』

……ええ、そうですね。エロ本ですよ！ 高校生なら持つて当たり前じゃないですか！ しかも、あれはマイフェイバリット……！

「は、早くそれをこつちへ！ あ、コラ！ 中を見ちゃいかあああん！」

悲痛なまでの叫びが部屋中に響き渡る。俺は慌てて制止を図るが、桃ちゃんはこちらをチラッと見た後止めるどころか好奇心に突き動かされるまま表紙に手をやった。

「断固阻止じややー！ー！」

そんな桃ちゃんに見兼ねて、俺はエロ本を奪うべく決死のダイブ。そして、何とか通勤電車に乗車する前に桃ちゃんから切符の奪取成功。ここまでは良かった。そう、ここまでは。

「ふう、これで俺の名誉は守ら……れ……た……？」

俺の目標はあくまでエロ本だった。ダイブを決めた先はもちろんそこ。でも、それは桃ちゃんの元にあった訳で……

「あ……」

「え……」

後先考えずにダイブした結果、悲しむべきか喜ぶべきか。俺が桃ちゃんを押し倒した形になってしまったのだ。

2人の顔の距離およそ10cm。互いの息が掛かる至近距離で、頬を紅く染める桃ちゃんの顔が俺の目には凄く色っぽく映った。

部屋は激しく鼓動を打つ心臓の音が聞こえてしまいそうな静寂に包まれ、俺達はしばらくの間動けずにいた。お互いに見つめ合う中で、膠着状態。少し顔を近づければ唇と唇が触れ合う、そんな距離で。

言葉が出なかった。本当に頭の中が混乱していて、どうしていいのかも分らない。ただ、目の前の女の子を見つめるだけ。このまま顔を落としていけば……。

——不意に、桃ちゃんが目を閉じた。

この状態でそれが何を意味するのか、俺でも分かった。流されるままに近づく2人を妨げる障害は無い。

「涼！ ついに完成したで！ 最高傑作——」

確かに障害は無いはずだった。でも、それは部屋の中限定で……。唇が触れ合うその寸前、突如として開かれた扉。そこに立っていたのは言うまでもなくあの人。

無断で家に入るの止めようぜ、昌太さん。バッドタイミングすぎるよ……。

「っ！ す、すまんかったな！ まさかこんな事になってると思わへんかったんや！」

昌太さんの乱入によって我に返る俺と桃ちゃん。俺は慌てて飛び退き、押し倒されていた桃ちゃんも慌てて体を起こした。

「わわわ、私そろそろ帰るね！ きよ、今日は本当にありがとう！  
そ、それじゃ！」

恥ずかしさに耐えれなくなったのか、桃ちゃんは顔を真っ赤にしながらも凄いいスピードで家を飛び出して行ってしまった。あんなに俊敏な動きをする桃ちゃんは未だかつて見た事が無い。

「りよ、涼、すまんかったな……」

申し訳なさそうに頭を掻く昌太さんを見て、俺は小さく溜息を吐いた。

多分、あのままいけば人生初キスを体験出来たと思う。でも、今こうして冷静に考えてみると昌太さんの邪魔が入って良かったのかもしれない。確かに桃ちゃんは可愛いし、こんなチャンスはもう2度と巡って来ないだろう。だけど、雰囲気は吞まれてそのまま……というのは違うと思うのだ。何より、桃ちゃんに申し訳が立たない。もしあのまま続けていれば……後になって冷静に考えた時、後悔するに違いない。好きでも無い人と——きつとそう思うだろう。

「いや、いいんだよ。それより、俺は桃ちゃんを送って来るよ」

逃したチャンスは大きいが、それ以上に桃ちゃんとの関係が崩れなくて良かった。

飛び出した桃ちゃんに追いつく為、俺は駅への道を駆け足で進んで行った。

家を出て間もなく、どこか脱力した雰囲気の桃ちゃんに追いついた。家を飛び出した時の勢いは無く、ゆっくりと歩を進めるその姿はどこか儚く見える。

俺はそんな桃ちゃんにいつもの仕返しと言わんばかりに後ろからこっそりと近付いて驚かしてみた。

「——わっ！」

「きゃっ!？」

予想通りの反応に思わず笑ってしまいながらも軽く右手を挙げて俺である事を告げる。

「りよ、涼くん!？」

しかし、俺の姿を確認した後さらに驚く桃ちゃんは予想外だった。2段階で驚かれ、俺としても若干の動揺。少し間を置いて話し掛けようとしたが、妙に余所余所しい桃ちゃんの態度に気付いてさっきの事が鮮明に蘇った。

無言で歩き出す俺達。やはり、事故とはいえあれは2人の間に微妙な隔たりを作ってしまったのかもしれない。

隣を歩く桃ちゃんをチラチラと見てみるが、本人は俯いてしまっていて表情が窺えない。

あまりの気まずさに耐えかねた俺は意を決して話し掛けてみる事にした。

「さ、さつきはごめんな。あんな事になっちゃって」  
「……」

返って来ない返事に少し肩を落とす。事故とはいえ、桃ちゃんを押し倒したのは何にも代えがたい事実。それが問題だった。

照れや、恥じらっているだけなら全然いいのだが、もし不快感を持っていたとしたら。そう考えると申し訳ない気持ちでいっぱいになり、また同時に悲しくもなった。

「俺の事……嫌いになっちゃうよな」

少し冗談っぽく言ってみたつもりだった。優しい桃ちゃんの事だから、俺もそんな桃ちゃんに縋って何か優しい言葉を期待していたのかもしれない。だけど、返って来た言葉はあまりに残酷で――

「……そうだね」

心臓を一突きされた気分だった。相変わらず表情は分からないけど、俯いたまま目も合わせてくれないその態度が辛かった。

何も口に出す事が出来なくて、ただ呆然と歩き続ける事しか出来ない。2人の間には再び沈黙が充満し始め、1歩1歩を踏み出す度に何かが削ぎ落とされていく気分だった。

「……そうだね。いつそ、嫌いになれたら楽なのに」

不意に、そんな言葉が俺の耳に飛び込んできた。

「え？」

どう捉えて良いかも分からなくて、間の抜けた返事しか返せなか

った。いつの間にか足は止まっていて、俺と桃ちゃんは向かい合いながら立っていた。さっきまで俯いていたはずの桃ちゃんが何かを言いたそうに俺の方を見上げて。

「私ね……あの、その……」

何かを言い淀む桃ちゃんを前に、俺は待つ事しか出来なかった。

何度か言葉にならない言葉を発しながらも俺を見据え、桃ちゃんは少し照れ笑いを浮かべながらふと俺の手を握った。

「……ううん、何でも無い。——それより、送ってってくれるんだよね？」

そう言つと桃ちゃんは俺の手を引きながら小走りに駆け出していた。

本当は何を言いたかったのか気になるけど、今の俺にとってはこの繋がった手を見ているだけで胸がいっぱいだった。少し恥ずかしいけど、それ以上に安心する自分がいたのだから——。

## 第22話 ある意味出会いと別れ

俺は今、大きな幸せを逃そうとしていた。俺の心の癒しである、桃ちゃん。いつも柔和な笑みで生きる活力を下さる彼女の隣というプレミアムな席で、俺は幸せな日々を過ごしていた。

しかし、この度悪しき望くん先生の陰謀により俺の幸せな日々は去ろうとしていたのだ。

「これから席替えを始めます」

朝のHRにそんな事を言う望くん先生が悪魔に見えた。

チツ、望くん先生め……そうまでして俺と桃ちゃんの仲を裂こうというのか。……阻止だ。絶対に阻止してやる。

「望くん先生！ 学級委員の権限に於いて席替えを認めません！」

フフ、まさかここで学級委員という役職が役に立とうとは。あれだけ無駄にプリントを運ばされた恨み、今ここで晴らしてやるぞ。

私欲の為にこの権限を使う俺は中々に小さい。だが、それでも席替えだけは全力で阻止しなくてはならない。なぜなら、学校に来る楽しみを減らしたくないんだよ！

「却下です。さあ、1人ずつ前に来てこの中の紙を取って行って下さい」

あっさりだなオイ！ せめて理由ぐらい聞こうよ！ 俺一応、学級委員なんだからさ！

教室の端っこで1人で吠える俺に、冷たい視線を浴びせ掛けてくるマイクラスメイト。

そうかそうか。お前らも俺をそんな風に見てたんだな。なるほどな……あとで覚えてろよ！ 靴の1つや2つは覚悟しやがれ！

「リンリンからも何か言っつけてくれ！」

頼れるのは同じ役職を持つリンリンただ1人。彼女が口添えしてくれば、さすがの望くん先生も考えざるを得ないだろう。

リンリンは席を立ち小さな咳払いをした後、その口を開いた。

「先生、やるならさっさとやりましょう」

ほほう、裏切り者め。こっそり靴の中に俺のお気に入りミッフィーちゃん消しゴムを入れるぞこの野郎。

俺の変態的な視線に気付いたのか、一瞬リンリンがビクツと体を震わせていた。

駄目だ。切り札があっさり破られてしまった。このまま席替えが行われるのを黙って見ているしかないのか。――否。何としても食い下がるぞ。

「まだ周囲の席の人達と親睦を深め切れていないのに席替えなんて横暴だ！」

「あれゝ加住くん？ 僕には高西さんの隣から離れたくないように聞こえるんだけどな？」

「なっ……」

ば、バレてる。完全に見透かされているぞ。しかも隣で桃ちゃんが照れている。クソ、微妙に恥を掻いてるじゃないか。

実際、前に座るカシワと親睦を深めてもどうしようもない。かと言って右斜め前の徳田っちと親睦を深めようとも思わない。何が悲しくてこれ以上野郎と仲良くならなければならぬのだ。俺の周囲

で親睦を深めたいのは桃ちゃんただ1人なのである。

ただ、桃ちゃんの隣を狙う男子は半端なく多い。カシワを筆頭に、目をギラつかせている男子は危険としか形容出来ない。さらに我らが王子様こと、藍田 修の隣を狙う女子の形相も凄まじい。この中で俺が席替えを拒むのがどれだけ危険か。恐らく理解して頂けるだろう。

「加住ばかりに良い思いさせるかよ！」

「高西さんの隣は俺の物だ！」

「名簿順なんて納得出来ないわよ！」

「先生早く席替えを！」

何だよ何だよ、俺の味方はいないのか！？ 今の席を変えたくない奴だっているだろ！？

俺はそんな思いを胸に席替えに反対する者を募ってみたが、周囲の尋常じゃない殺気に気圧されて手を挙げる者はいなかった。これも一種の強迫ではないだろうか。

「はい！ という訳で席替えスタート！」

結局、孤立無援の俺はこの席替えを止める事が出来ずに端っこで小さく固まるのだった。

「か、神がここまで残酷だったとは……」

そう眩かずにはいらなかった。現在も席を決めるクジは続行中だが、徐々に埋まっていく席を見ている内に切なくなった。

「ふむ、涼よ。やはり俺達の間には何かしらの縁があるようだな」

「何だよ、俺隣に移動しただけじゃねえかよ」

「おつす俺っち徳田っち。今度は加住と隣っち」

ああ、是非とももう1度クジ引きのチャンスを！ このままでは精神に異常が生じてしまいます！ 神よ、お慈悲を！

元々、俺の席は中々の好物件だった。といっても、以前の窓際の最後席から1つ右隣にずれた桃ちゃんのいた所なのだが。それでも窓からは近いし1番後ろだから俺としては気に入っていた。

……しかしだ。俺のイケナイ魅力に惹きつけた男共が周囲に陣取りだしたのだ。俺の前の席にはカシワが、右斜め前には修が。そして右隣には徳田っちがいるのである。さらに俺の左斜め前も男子。教室の一角で男祭りワツショイ。地獄です。

「おい、修！ 席変われ！」

修の隣はまさかの桃ちゃん。2人揃って眩しい微笑みを繰り出すその一帯は、恐らく不浄な心を持つ人間は近付けないだろう。残念ながら修の隣を逃した女子達も、桃ちゃんならという事で文句を言う者はいなかった。似合い過ぎる美形2人。俺はその間に割って入ろうとしたが、それは望くん先生によって阻まれるであつた。

「駄目ですよ、加住くん。変更は認めません」

「え、ああ〜っと、何だかいきなり目が悪くなつたみたいです。1つ前の席だつたら完璧に見えそうです」

こうなつたら強行策だ。突然の視力悪化を理由に男祭りから脱出

してやるぜ！ 待つてろよ桃ちゃん！

「マジか。だったら俺が変わってやるよ」

そんなありがた迷惑な話をくれたのはカシワだった。

黙つとれカシワがあああ！ お前の優しさは嬉しいけど今はいない！ ノーサンキュー！

「あ、やべ、視力が回復してきた」

そう言わざるを得ないだろう。せつかくのカシワの優しさを蔑ろにする訳にもいかない。ああもう！ 俺はこのまま男共に埋もれながら日々を送らなければならないのか！

頭を抱えながら顔を埋め、暗い先行きに大きな溜息を吐く。せめて周りに1人は女子がいて欲しかった。それだけでも随分と俺のやる気は違うのだ。

そんな事を思いながら再び周囲を見渡し、ふとある位置で視線が釘付けになった。

空席のままの左隣。そこはかつて俺が座っていた席だった。男子に包囲されていたとばかり思っていた俺は、途端に手を合わせて祈り出す。

もう男はお腹いっぱいだぞ。来てくれ女子。このむさ苦しい空間に鮮やかな色を……。

祈祷の最中、引かれる椅子。俺の隣に腰掛けようとしている人物がいたのだ。

「り、リンリン……！」

俺にもまだ微かに運は残っていたらしい。祈祷の甲斐あってか、

隣は見事に女子に落ち着いた。しかもあまり面識の無い女子ではなく、若干避けられてはいるが俺の中では仲の良い友達である。

満面の笑みでリンリンの手を取って歓迎する。

「ようこそリンリン！ リンリンが来てくれて本当に良かった！」

「え？ あ、ええ……」

当の本人は戸惑っているがそこは気にしない。この空間に華を添えてくれる人物がやって来た事が素直に嬉しいのだ。

「よろしくどうぞ！」

「よ、よろしく」

ただの席替えなのに大袈裟だとは思うが、リンリンの存在はあまりに大きい。俺の右隣からはそれにつられて「俺っちもよろしくするっち」などと幻聴らしきものが聞こえた。ここは反応しないのが吉だろう。

「はい、全員決まりましたね？ それじゃこのまま来週の、球技大会の出場種目も決めちゃいましょうか」

そういえば先週望くん先生がそんな事を言ってたな。全校生徒の輪を広げる為の球技大会だとかどうか。授業が潰れるだけあって生徒のはしゃぎ様も凄いらしい。もちろん俺もその中の1人な訳で。

「リンリンは何に出るだ？ バスケットか？ それともバレー？」

球技大会の種目は全部で4種。男子限定のフットサル、女子限定

のバスケットボール。男女それぞれ1チーム出場可能なバレーボール。そして、男女混成チームのソフトボール。

なぜバスケットが女子限定なのか。それは過去の我が部を見て頂ければ分かってもらえるだろう。

「そうね……バスケットもいいけど、折角だから私は他のスポーツもやってみたいわ」

「ご尤もだ。自分の得意な種目で活躍する事も出来るが、これを機に他のスポーツに慣れ親しむのもいい。どうせバスケットには出られないし、俺もこの機会に新境地を発掘しようではないか。」

「うーん、と腕を組みながらどの種目に出ようか思案していたところ、ふと引っかかりを感じた。」

「……リンリンって呼んでも嫌がらないんだな」

あと加えて言うならまともに会話もしてくれている。毎度の事ながらリンリンに冷たくあしらわれてきた俺。どうも俺、というか男子そのものがお気に召さないようで、こうして普通に会話のキャッチボールが成立する事は今まで無かった。ただ、女子と修にはそれなりにフレンドリーである。リンリンのお兄さんである澤井先輩が前にも言っていたが、修は認められた存在だとか。

「べ、別に。慣れただけだから」

「ふうーん？」

まさか俺も認められた存在！？ ひゃっほう！ これからは持つプリントの量も半減だ！

妙にどもった所が気になってリンリンをジロジロと見てやったが、慌てて視線を逸らすその姿は中々新鮮だった。相変わらず髪の下を

で表情はよく分からないけど、少し照れを含んだ感じが何となく可愛らしかった。

やっぱりリンリンは良い人だ——そんな事を思いながら自分の見る目は褒め称える。

「よし！ 俺にもあだ名を付けたまえ！」

「は？ いきなりどうしたの？」

「俺だけにリンリンって呼ばせていいのか？ ——駄目だ！ 互いにあだ名で呼び合える仲、プライスレス！」

ちなみにこの会話は最小のボリュームで行っている。さすがの俺も大声でこれを言えるほどイタイ人ではないのだ。

俺の突拍子もない思いつきに若干戸惑うリンリンであつたが、さすがは桃ちゃんや夢ちゃんに続く良い人。真剣に悩み始めた。

「……す……ん」

「ぬ？ 聞こえないぞ」

「かす……ん」

「だから聞こえないぞ」

「か、カスミン……」

恥じらった声色でそう言うリンリンに不覚にもドキッとしてしまった。これまで強気な姿勢でいたリンリンだけに、こういう一面にはぐつとくるところがある。『ギャップは最高の媚薬』不意にそんな言葉が脳裏に浮かんだ。

「それは愛の告白と捉えていいのか？」

「ば、馬鹿言わないで！ あなたがあだ名で呼んで欲しいって言うからじゃない！」

俺の冗談も看破出来ずに期待通りの反応をするリンリン。ここま  
で取り乱すその姿はやっぱ可愛い。

もうあれだ、ぎゅってしたいな。うん、ぎゅってしたい。俺にそ  
んな勇気は無いけどぎゅってしたい。

「ハハーン！ 俺はカスミン！」

「俺っち徳田っち」

隣でつられた徳田っちが嬉しそうにこちらを見ていた。……そっ  
としておこう。

とにかく、俺はリンリンから“カスミン”というありがたいあだ  
名を頂いたのだ。これで俺とリンリンの仲はさらに深いものとなる  
だろう。

さてさて、話は大分逸れてしまったが今は球技大会の出場種目に  
ついてだった。

「で、結局リンリンは何に出るんだ？」

「変わり身早いわね……。うーん……か、カスミンはどうするの？」

恥じらないながらもしっかりあだ名で呼んでくれるリンリンの健  
気な姿には心を打たれるものがあった。

正直、バスケ以外のスポーツはあまりやった事が無いのでどの種  
目に出ても足を引っ張る事はまず間違いない。少しでもいいから運  
動神経を分けてくれ、王子様。

「そつだな……これといってやりたいやつがある訳でも無いんだけ  
ど……まあ、一緒に出来るって意味でソフトボールかな」

ここでの“一緒に”の対象はもちろんリンリンである。男女混成チームはソフトボールのみ。リンリン、カスミンの名を轟かせるにはまたと無いチャンスである。目指すは頂。

「え、それって私も含まれてるのかしら？」

「もちろん！——あ、望くん先生！俺とリンリンはソフトボールに出ます！」

「ちよつと！私まだ何も——」

「はい。加住さんと澤井さんはソフトボール……つと」

隣で盛大に溜息を吐くリンリンの姿にニヤリと笑う俺。多少強引ではあったがそこは良い人のリンリン。「仕方ないわね」と言いながらあつさり許してくれた。

さらに、俺に続いて修と桃ちゃんがソフトボールに参加し、桃ちゃんに釣られたカシワも参加が決定した。あ、あとちなみに徳田っちも。

## 第23話 天然は天才を兼ねる

本日の授業は全て無し。代わりに組まれた球技大会のお陰である。昼間になると少し汗ばむ陽気になってきた今日この頃。若者が汗を流しながら健やかな時間を送るには最適な天気である。

グラウンドや、第3体育館を除く体育館ではそれぞれの種目が滞りなく進行していた。

俺達も初戦を迎え、軽く準備体操をしながら試合開始を待っていた。

「初戦は3-Eか……げ、森下部長のクラスだ」

両チーム整列する中でやたらとゴツイ人が混ざっているなと思いきや、よく見ると坊主でイカついあの人だった。

「ガッハッハッハ！ 誰かと思えばお前達か！」

豪快な笑いが似合うな、この人。その風貌はまさしくスポーツマン。決して狭い密室の中で2人きりになってはいけない暑苦しさを持ち合わせた漢。

若干我がクラスの女子達が浮足立っているが、これもまさか森下部長の策略なのだろうか。

互いに礼をし、先攻である俺達は攻撃準備に入った。

「それでは打順、並びにポジションを発表するわ」

1-C、監督及びキャプテンに任命されたリンリン。彼女にレギュラーを決めてもらったが、学級委員という理由で誰1人反対する者はいなかった。ちなみに俺が学級委員だと気付く者はいなかった。

リンリンの独断と偏見で決定されたスターティングメンバーは以下の通りである。

- 1 番 カシワ (遊撃手)
- 2 番 徳田っち (一塁手)
- 3 番 リンリン (投手)
- 4 番 修 (中堅手)
- 5 番 佐田 (左翼手)
- 6 番 桃ちゃん (二塁手)
- 7 番 鳥宮 (右翼手)
- 8 番 俺 (捕手)
- 9 番 奥谷 (三塁手)

基本的にチーム編成で男女の偏りを無くさなくてはならない。男女どちらでも良いので5:4を遵守するルールがあるのだから。文句は言わないぞ? どうして桃ちゃんよりも打順が下位なんだー? とか。言うのも恥ずかしいわ!

「頑張れカシワ!」

「柏木くん頑張つてー!」

「柏木打てよー!」

等々、こちら側のベンチからは歓声を送られている。バットを手にバッターボックスへと入るカシワ。その顔はとて——ニヤけていた。

「俺は打つ! 桃さんの為にも打つ!」

いきなりのそんな宣言で3年の先輩方を挑発し始めるカシワ。あいつの目は本気だ。

相手方の投手は線の細い眼鏡を掛けた色白先輩。吉見に似た雰囲気醸し出している文化系である。

そこからひろひろと力無さ気に放られたボールは超がつくほどのスローボールだった。

「もらった!」

凄まじい気迫と共に振られるバット。しかし、肝心のボールは捕手を務めていた森下部長のグラブに吸い込まれていた。

「ストライク!」

「なぜだああ!」

崩れ落ちるカシワに冷ややかな視線を送るクラスメイトもといチームメイト。

「す、すごい変化球だね……」

素でそんな事を言う桃ちゃんが恐く感じた。どうやら山なりに放られたボールが桃ちゃんの目には落差の激しい変化球に映ったようである。天然、それは何にも汚されない純真な心。

気を取り直して投じられた第2球。これまた凄まじいスローボールだった。

「もらった!」

カシワの気合も虚しく、その場には空を切るバットの音だけが響いた。

「ストラアイク！」

「なぜだあああ！」

デジャヴ。どうしてあんな奴が1番なのだろうか。俺でももっとマシな働きは出来るはずだ。まさかの采配ミスか？

この後も豪快な空振りを見せつけてくれたカシワ。ボールはバットに当たるところか掠る気配も無かった。ナイスガッツ！

「おいしかったぞ、カシワ」

肩を落として帰って来るカシワに俺なりの賛辞を贈呈してやった。

続く徳田つちやリンリンも遅過ぎるボールにタイミングを狂わされて凡打に終わった。今は攻守変わって3-Eの攻めである。

先頭打者に上手く当てられて出塁され、迎える打者は2番。

「よし来いリンリン！」

かなり良い球を放るリンリンに向かってグラブを構える。リンリンもそれに小さく頷くと、投球フォームに入った。

素人の多い球技大会ではリンリンの球は武器になるようで、2番打者の打ったボールは上手くミートせずにコロコロとショートへと転がっていく。

こ、これはゲッツーコース！

「カシワ！」

あれだけ残念なバッティングセンスを持っているカシワであったが、守備に関して言えば凄く頼りになる存在だった。

「桃さーん！ 行きますよー！」

捕ったボールをすかさず桃ちゃんへ。ここで奇跡的に桃ちゃんが二塁へ入っていたのには驚いた。意外にルールを熟知しているのだろうか。

カシワによって優しく放られたボールは桃ちゃんの元へと。

「ひっ！？」

突然、そんな悲鳴染みた声が桃ちゃんから発せられた。カシワからのボールを見事にかわしてなぜか一塁方向へと走り出す桃ちゃん。そして、ボールを追いかけるように鼻の下を伸ばしながら両手を広げて走り出していたカシワ。

……間違いない。原因はあいつに違いない。

「おいコラカシワ！ 味方を妨害してどうするんだよ！」

その間に一塁にいた走者は楽々と三塁へ進塁。打者もちろんセーフ。あいつは俺達のクラスに紛れ込んだ敵だ。ユダだ。チーム内からさらに冷ややかな目で見られたのは言うまでもない。

次の3番打者の打った球も勢い無く捕手である俺の前に転がったが、妙に焦った俺があたふたとしている間に打者と一塁走者はセーフ。さすがに三塁走者は走らなかったが、俺の痛すぎるミスでピン

チを広げてしまった。

満塁という絶好のチャンスにバッターボックスに入ったのは森下部長。手に持つバットが異様に細く見え、溢れ出る汗を見たうちの女子達が軽く悲鳴を上げている。

バッターボックスに入るだけでこれほどの威力とは……恐るべし  
3-E。

「さっさと放れ、澤井の妹！」

そう言いながら尋常じゃないスピードでバットを振り回す森下部長。

あ、ちょ！？ 恐っ！？ 当たるって！

捕手の俺にとっては迷惑極まりない行動だった。

ゆっくりとしたフォームで投球を始めるリンリン。そこから投げられた球はかなり速い。しかし、森下部長は一瞬不敵な笑みを溢し、豪快なスイングでボールをジャストミートさせた。

「不味いぞ！」

打球は高く舞い上がりながら右中間へ飛んでいく。抜ければランニングホームラン確定のコースである。呆然と球を見送るリンリン。懸命に右翼手の鳥宮が追い掛けるが追いつく兆しが無かった。誰もが長打を覚悟した。

「フッハッハッハ！ 外野は全て俺の守備範囲だ！」

その中で光の如く駆ける1人の王子様。髪を靡かせながら颯爽と打球の落地点に入った。信じられない守備範囲を披露し、呆気に取りられる相手方。無理もない。

「真のレーザービームとはこれを言うのだ……ふんっ！」

抜けると確信していただけに、走者はそれぞれスタートを切っていた。それを見逃さず修は捕球と共に三塁に向けて送球する。それがまた恐ろしく正確で速いのだ。

中継を必要としない見事な送球は瞬く間に三塁へと到達し、走者はあっさりアウト。さらに戻り切れていない二塁の走者も奥谷の機転によって見事アウト。圧巻のトリプルプレーであった。

その場にいた大勢の女子は修に大きな歓声を送る。さらに、右翼手の鳥宮の目もハート。そんでもって奥谷の目もハート。

「やっぱあいつ凄いな」

昔から運動神経は抜群だったが、こうして目の当たりにするとやっぱり凄い。味方で良かったと思うのは俺だけではないはずだ。

カシワが何やら不満そうな顔をしているが、それも仕方ない事だろう。今日の前は全く良い所が無いからな。

2回表。先頭打者は先ほど守備で大活躍した修である。主に女子を中心とした大きな声援にも無表情でバッターボックスに入るその姿は見ていてどこか頼もしい。

ただ、その中でもひがみ暴走中のカシワは『しーきゅーう！しーきゅーう！』とデッドボールを相手投手に要求していた。

この回もやはり超スローボール。遅過ぎてタイミングの合わせ辛い球だが、そこはやはり我らが王子様。

「この藍田 修に不可能は——無い」

鋭い打球が左中間を破り、華麗な走塁で3塁打を決めてくれた。

「ナイスバツティング！」

「藍田くんカツコイイー！」

「キヤー！ 藍田くーん！」

黄色い声援が羨ましいとかは言わないでおこう。悲しくなるだけだ。あいつを一般人の比較対象にしちゃ駄目だ。

「おーい、加住も俺の仲間じゃねえのか」

カシワから死の誘いが……あいつの仲間になっではいけない。人として。

「柏木と加住は仲間うち。そして俺たちも仲間うち」

帰れお前！ 巻き込むなよ！ もつとまともに喋りやがれ！

徳田つちがカシワの隣で奇妙な舞を踊っていた。目を合わせるな……獲られるぞ。

周囲からは浮いた空間になりつつあるカシワと徳田つちのいる一帯を視界から切り離し、微妙に距離を取りながら応援に戻った。すると、どうやら佐田は凡打に倒れたらしく、一死三塁の場面で迎えた打者は桃ちゃんだった。

男子から熱烈な声援を受ける桃ちゃん。俺もそれに続いた。

「頑張れ桃ちゃん！」

どうやら俺の声援に気付いてくれたらしく、こちらを見てコクリ

と頷いたのが分かった。

さてさて、桃ちゃんは一切どんな天然プレーを見せてくれるのだろうか。さすがに打った後三塁へ走ったりはしないだろう。となればスイングと共にバットを投擲？……有り得なくは無い。

期待半分、心配半分で見守っていると、桃ちゃんはあるう事が目を閉じていた。

ええ！？ 打つ気ゼロですか！？ 目開けて！……あ、ほらボール来たって！

目を閉じながらバッターボックスに棒立ちの桃ちゃん。凡人の俺には彼女が何をしているのか理解不能だった。

「——えいつ」

依然として目は閉じているが、そんな可愛らしい掛け声と共に桃ちゃんはバットを振った。

「うつそ！？ センター返し！？」

某イチローさんも真つ青の鋭い打球は綺麗にセンターへ。目を閉じた状態であれだけ綺麗に打ち返せる桃ちゃんは天才なのではないのだろうか。その間に修は楽々ホームを踏み、見事先制点をゲット。だが、打った当人のバットは手が滑って頭上へ舞い上がり、さらにあるう事が当人は三塁に向かって走り出した。

欲張りすぎですが、桃ちゃん……。貴女は俺の想像は遥かに越えていました。天然イズ、フリーダム。

その後、やっぱり桃ちゃんはアウトになったが、打点は彼女の物であり、さらに逆走という笑いを提供してくれたので誰も責める者はいなかった。ちなみに、舞い上がったバットはあの後すぐに落下し、見事森下部長の頭にクリーンヒット。色んなヒットを打つ桃ち

やんはやはり天才だと思う。

## 第24話 痛みと快感

森下部長率いる3 - Eとの試合は接戦の末、俺達1 - Cが3対2で勝利を収めた。3年生相手に勝てるうちのクラスは案外運動神経の良い奴が多いのかもしれない。

修は言わずもがな、カシワも最初こそ残念な結果には終わったもののその後は要所でヒットを打っていたし、何気に守備も上手かった。リンリンも良い球を投げるし、2本もヒットを打っていた。さらに徳田つちや佐田も頑張っていたし、鳥宮や奥谷も時折女子とは思えぬ鮮やかなプレーを見せていた。

最後に桃ちゃんだが……凄かった。最初こそ逆走でアウトにはなったものの、その後はルールも理解してくれて無事打った後は一塁に走ってくれた。ちなみにさっきの試合、桃ちゃんの成績は3打数2安打3打点。つまり、試合の得点は全て桃ちゃんのお陰である。全打席ともお手本のようなセンター返しで、とある野球部員のAくんが尊敬の眼差しで桃ちゃんを見つめていた。

『彼女が目を開けて打席に立った時、球界の歴史が変わる』

とは、野球部主将のBくんの台詞である。

トーナメント方式の今大会。全24クラス中、ランダムで8組がシードに選ばれてトーナメント表が組まれた。1 - Cや3 - Eはシードに漏れた口である。午前の部はシード組の登場する2回戦まで行われるのだ。

何とか勝ち上がった俺達は第2回戦に備えてしばしの休憩。今度の相手はあの佳苗を擁する1 - Aなのである。どんなラフプレーを

お見舞いされるか想像もつかない。五体満足で今日という日を終えられるか不安である。

試合は佳苗達、1 - A 先攻で始まった。俺達のオーダーは先ほどと同じで、試合は意外にも穏やかな雰囲気が始まった。

現在は2回裏。二死で迎える打者は桃ちゃんだった。対する相手方の投手は――佳苗。

「桃？ あんたみたいな運動音痴が打てると思ってんの？」

「うゝん……どうかな？」

きっと佳苗は挑発のつもりで言ったのだろうが、桃ちゃんはそんな事も知らずに普通に答えた。間抜けだぞ、佳苗。

佳苗の投球はリンリンよりも球が速くて正確。あの修も詰まらされたほどである。……ただ、それでも正しい走塁方向を覚えた桃ちゃんの前に敵は無かった。

鋭い金属音と共に打ち返される球。打った本人もその金属音で閉じていた目を開けて走り出す。

「あ、ありえないわ……」

佳苗の頭上を越した球はやはりセンターへ。それを見てこちらのベンチから桃ちゃんへ向けて拍手が送られる。

「ほほう、この俺を凌駕するか……恐るべき才能だ」

「やっぱり彼女を1番にした方が良かったのかしら？」

「桃さんは魅力的すぎる……！」

拍手を受けて塁上で照れる桃ちゃんの愛らしさに周囲の男子は盛り上がっていた。そして、例外でなく俺も。

「桃ちゃん最高ー！」

若干カシワ化してきたと思うのは気のせいだろうか。だが、それでも全く浮かないのだからこの集団は凄い。

「涼く〜ん！　ありがとう〜！」

満面の笑みで手を振ってくれる桃ちゃんを見てときめかない者はいないだろう。名指しで呼んでくれるこの優越感。たまりません。

「何で加住だけ……」

「気に入らねえ……」

「羨ましすぎる……」

お、おい、どうした？　め、目が恐いぞお前達。な、何で近寄って来るんだよ？　……ギャー！　痛い！　足踏んでるって！

決して周囲にはバレないように俺を包囲して揉みくちやにする男子達。恐かった。

その後、鳥宮は三振に倒れて攻守交替。守備もリンリンの好投虚しく、内野のエラーが重なり1点を取られてしまった。

そして、1点ビハインドで迎えた3回裏。この回の先頭打者は俺

である。

「鬼退治じゃー！ さっさとそのきび団子を投げやがれ！」

バットでソフトボールを指しながら、俺渾身の挑発。死期を早めたと気付かずにバッターボックスに入るその姿は無謀としか言えない。

俺の挑発に一言も発さず投球フォームに入る佳苗。『失敗か？』と心の中で疑問符を連発しながら構えていたが、やっぱり佳苗は期待通りの投球を見せてくれた。

「死ねえええ！」

分かり易いほど殺意の籠った球は一直線に俺の顔面へ。この試合始まって以来の剛速球に思わず身が竦んでしまった。

「へぼああ！？」

俺にかわせるだけの反射神経は無いので見事に直撃。その場に伏せる俺に近付いて来る佳苗。

「あれ〜？ 手が滑っちゃった。えへっ」

だから可愛くないぞ鬼がああ！ 前もそれやったよな？ 良い加減にしてくれ！

「し、審判！ 今の危険球だろ！？」

謝るところか反省の色すら見せない佳苗なんか退場にした方がいい。明らかに今の球は狙ってたね。ああ、狙ってた。

確かに俺の挑発も悪いが、あの球は一步間違えれば死人が出てもおかしくない。俺は必死に審判に猛抗議するのだが、どうしても審判は首を縦に振ろうとしない。

「おいこのへぼ審判！ 平成生まれ舐めんな！」

相手が教師だろうと容赦はしない。

だが、審判がおもむろにマスクを外して絶句した。

「加住くん？ これ以上の抗議は成績に関わりますよ？」

お、脅し！？ 何でここで成績の話を出しやがりますか！？ 黙れと？ そういう事なんですか望くん先生！

「……さ、さあてとー一塁、一塁つと」

しかし、ここで引き下がるのが俺の愛すべき短所。校長の息子である望くん先生なら成績操作もお手の物、かもしれない。高校1年生で留年はシャレにならない。

続く奥谷は、さっきの佳苗の鬼気迫る表情に委縮して見送り三振。打席から戻った奥谷は桃ちゃんや鳥宮に抱きつきながら号泣したらしい。同情するぞ、奥谷。

打順は一巡して再びカシワ。修には劣るが、それでも周囲の男子からは抜き出た運動神経を持ち合わせている。上手くいけばカシワの一振りで同点になるかもしれない。

「今度は俺が鬼退治をしてやろうじゃねえ——あうっ！？」

「デッドボール！」

打席に立って挑発を始めたカシワにまさかのアクシデント。絶妙なコントロールで球が直撃したのはタマ。2本目のバットヘディーブインパクト。その場でのたうち回るカシワの姿にそつと手を合わせる男子達。

あの部位への直撃は文字通り“死球”を意味する。精神的にも身体的も。手を合わせる男子達と同じように、俺もまた塁上で手を合わせるのだった。

「ふう〜疲れた〜」

俺は特別棟の屋上で大の字になって寝ていた。佳苗達との試合を無事に終え、何とか命だけは死守出来た。俺が打席に立つ度に飛んで来る悪球。痣を作りながらもチームの為に甘んじてその球を身に受け、お陰で出塁率だけは無駄に高かった。ちなみに、毎度毎度俺がそんな悲劇に見舞われるもんだから、それに恐怖した奥谷が全力で打席に立つ事を拒み、結局すぐに別の女子に交代した。哀れ奥谷。まあ、試合結果としては7対1で1-Cの圧勝。コントロールは良いのに死球の目立つ佳苗が投手をやっていればそれも納得出来ると思うが。

「加住さんはソフトボールですね？」

空を仰ぎながら寝ていると、ひょっこり顔を出して視界を覆う妖

精さん。桃ちゃんを天使とするならば、この方は妖精である。

「おお、よく分かったな。夢ちゃんは何に出てるんだ？」

「私はバレーです」

今は昼休みで、生徒達は昼食タイム。俺は学食で昼食を食べ、その後はいつものようにここへ来ていた。昼食までは修や桃ちゃん達と一緒にいたのだが、修は面倒だからと言って来ず、桃ちゃんも佳苗に連れられてどこかへ行ってしまった。一瞬、1人だったら行くのを止めようかとも思ったけど、堂々と横になれる屋上は中々に魅力的だった。

屋上に行ってみると既に先客がいた。頬を一杯に膨らませながら黙々とお弁当を食べる姿が可愛い、夢ちゃんである。屋上の扉を開いた時にビクツと体を震わせる夢ちゃんだが、俺だと分かるとすぐに表情は緩んだ。

スケちゃんとカクちゃんは球技大会絡みでクラスメイトに引っ張られていき、結局夢ちゃんも俺と似たような境遇だったとか。

「どうだ、勝ち残ってるか？」

「いえ……負けちゃいました。加住さんはどうですか？」

「何とか……かな。見てくれこの痣の数々を」

見れば見れるほど痛々しい痣である。とても1試合でこれだけきたとは思えない数だ。

1つ言い忘れたが、これは死球だけでできた訳ではない。牽制球も込みだ。でもな、佳苗さん。俺の足の速さを知ってるか？ 50mを8秒フラットだぞ！ 鈍足で悪かったな畜生！

「うわゝ凄いですね……大丈夫ですか？」

「まあ、何とか。これ全部佳苗にやられたんだよ。まったく、酷い

奴だ」

「あ、一緒に保健室へ行きましょう。湿布を貼れば少しは和らぐかもしれませんし」

おい佳苗。夢ちゃんはまさにお前と対極の存在みたいだぞ。他人に怪我をさせてニツと笑うお前とは月とスッポン。人しての在り方をもう1度考えてみましょう。

夢ちゃんの優しさに触れながら心の中でひっそりと佳苗に悪態を吐き、俺と夢ちゃんは保健室へと向かった。

保健室内には俺達の他に数人の生徒の姿があった。球技大会というのは結構怪我人も出るらしい。といっても、精々突き指やかすり傷がほとんどだが。

「——くう~~~~！ この冷たさが堪らん！ ひんやりしてて気持ち良い！」

湿布を貼る時の何とも言えないこの快感。15歳にして初めての出会いだった。夢ちゃんが湿布を貼る度に俺がそんな事を言うもんだから、少し困惑しているようにも見える。気が付けば他の生徒はいつの間にやら姿が見えなくなっていた。

「そんなに気持ち良いですか？」

「ああ。3日振りの風呂並みに気持ち良いぞ」

俺の渾身の例えを聞いてもいまいちパツとしない様子の夢ちゃん。さすがに女の子にこの例えは不味かったか、と思いつつも他に大した比喻が思いつかなかった。なのでこの気持ち良さは伝わらず仕舞い。俺にもっと豊富な語彙あれば……と少し後悔した。

「これで……よしと。はい、全部終わりましたよ。でも……」  
「おお！ 随分とまた白くなったもんだなオイ！」

鏡に映る俺はまさにミイラ男もどき。まだ体操着を来ているだけマシだが、それでもこれで公衆の面前に出れば周囲の視線は釘付けである。

「すいません……まさかこんな事になるとは……」

申し訳なさそうに俺を見る夢ちゃんだが、完全にやってしまった感を隠し切れていなかった。これで午後も参加するのはかなり恥ずかしいが、それ以上に折角貼ってもらった湿布達を剥がす訳にはいくまい。

「いやー助かったよ。これでまた午後も出られそうだ。白昼堂々、素晴らしい快感をありがとう」

周りに人がいればかなり誤解を生み出しそうな台詞だが、この場には俺達しかいないので特に問題は無い。幸か不幸か、夢ちゃんもその台詞の真意に気付いていないらしい。

「あ、いえ……こちらこそありがとうございます」

いやいや！　なぜにそこで貴女がお礼を言いやがりますか！　あれか？　ネタでしかないこの格好を見れてご馳走様ってか！？

夢ちゃんのお礼を理解出来ずに苦しむ俺だが、まあ、それは置いておいて前から気になっていたあの話題へ話を移してみた。

「最近どう？　まだ男子は苦手？」

「はい……話す分には問題無いんですけど、あまり近付かれるとやっぱり恐いですね」

本当に不思議なものだ。こうして湿布を貼ってもらっていた時もそんな素振りは1つも見せなかったのに、未だに男子が苦手だというのだから。その点、俺に対して普通に接してくれるのは素直に嬉しいけど、同時に夢ちゃんの中で“男”として認知されていないのか、とも思った。あまり卑屈になる必要も無いと思うが、長年抱えてきたコンプレックスだけに少しは気になってしまう。

「何でかな……」

そう呟きながら夢ちゃんの額を何度かつついてみる。

「うう……ど、どうしたんですか？」

額をつつかれた夢ちゃんは少し唸りながらも不思議そうに俺へ視線を合わせていた。

こうして見るとやっぱり夢ちゃんは可愛い。容姿もそうだが、動きの1つ1つがとても愛らしい。きつと、これまでも男子からの誘いが数多くあったに違いない。だけど、それを夢ちゃんはどう捉えているのだろうか。

“苦手”と“嫌い”は同じ？ それとも別？

言葉の意味だけではなくて、夢ちゃんが“嫌い”ではなく“苦手”と表現したところが少し気になった。

押しつける訳ではないが、恋愛はきつと楽しいと思う。俺自身がまだまともな恋愛を体験した事が無いから確信は持てないけど、見かけるカップルは皆幸せそうに見えるから、やっぱり楽しいのだと思う。

克服する、とまではいなくても、好きな人ができれば男子に対する構え方も少しは違ってくるのではないだろうか。

「うゝむ……夢ちゃんは好きな人いるか？」

「い、いきなりどうしたんですか？」

「いや何、単なる好奇心だ」

確かに唐突な質問だったが、それでも夢ちゃんは少し考え込みながらも答えを返してくれた。

「……いませんね。今は」

なるほど、『今は』か。

過去に好きな人がいたけど、『今は』いない。

『今は』まだいないけど、気になる人がいて、その人が好きな人へと変わるかもしれない。

どちらにも取れると思う。でも、何だかそこに突っ込んではいけない気がした。易々と踏み込んではいけない領域。そう感じた。

あまりお節介にならないようにと心に刻みながら俺は「そっか」と短く返し、直後に鳴ったチャイムで再びグラウンドへと戻るのがあった。



## 第25話 ビターな下駄箱

先日の球技大会、ソフトボールでの優勝クラスは2-Dだった。あれから午後の部に入って俺達が始めに対戦したのがこのクラスで、それなりに善戦はしたものの、結局は負けてしまった。相手方には見知った人もいて、それが菊池先輩と澤井先輩だった。

菊池先輩は毎度毎度、持ち前の俊足を活かしてセーフティーバントで出塁し、その後に続く澤井先輩は桃ちゃん並みの安打製造機だった。あつさりとこの2人に点を取られ、それで終わりかと思いきやクラスメイトの人達も凄かった。リンリンの投じる球が面白いように打たれ、守備そっちのけでカシワは桃ちゃんへストーキング。佳苗の世にも恐ろしい野次で俺と奥谷が縮こまり、それを見ていた徳田っちが爆笑。内野陣は全滅だった。

打撃面でも修と桃ちゃんが頑張ってくれたが、その他が続けなかった。不幸にも相手方の投手は初戦で対戦した投手並みのスローボールの持ち主。やっぱりカシワはかすりもせず、俺も見事にセンスの無さを痛感した。

俺にはやっぱりバスケしか道が残されていないと感じた。

「この感触が堪らん」

部活開始までの一時、俺はボールと戯れながらそんな事を呟く。

「何ていうか肌触り？ このゴツゴツした感じが堪らないんだよ」

誰に話す訳でもなく、ただの独り言。強いて言うならボールと話している。丹念にボールを撫で回しながら会話を楽しむ俺だが、当

然返事は無いので単なる独り言になってしまっただが。

「あ、加住が壊れた」

「末期だな」

カシワと修が失礼極まりない事を口にしながら俺と微妙に距離を取っていく。

お前達の気持ちは分からなくもない。俺だってボールと楽しいそうにお喋りしている友人がいたら同じ態度を取ると思う。

「俺の友達はお前だけだぞ、でへへ」

「もう少し離れた方が良いな」

「同感だ」

「だからか」

一瞬ぴくつと反応する俺。カシワと修に紛れて非常に気になる一言が混ざっていた気がする。何が『だから』なのかさっぱり理解出来なかったが、何事も無かったかのようにボールを再び撫で始めると、その人物は続く言葉を放った。

「だから彼女もいないんだね」

「おいコラア！ 今誰が言いやがった！」

それは俺が容姿の次に気にしている事。モテない男子の俺としては赤面ものの言葉の暴力である。慌てて誰が言ったのか周りを見渡してみる。

「お前か吉見い！」

「そうだけど？」

カシワと修のいる所から少し外れた所で佇む1人の七三分け。眼鏡をクイツと上げながら『僕は別に何も悪い事言つてませんけど?』みたいな顔でこっちを見ているのがもの凄く腹立つ。

その問題はな、俺にとつて滅茶苦茶デリケートなんだぞ! 気安く触れちゃいけないんだぞ!

「天誅!」

持っていたボールをすかさず吉見へ投げる。その時、ニヤツと吉見が不敵な笑みを浮かべたので避けるかと思いきや、わざわざ自分から飛び込んで顔面ブロック。

「ッ! 読まれたか……」

「何を!？」

思わず突っ込まずにはいらなかった。幸いにも眼鏡は無傷だったが、髪型が乱れてセンター分けになっていた。あまり変わらないと思つたのはきつと周りもだと思ふ。

「僕の避けるコースを読んでボールを投げるとは……侮り難い存在だね、君は」

もう馬鹿! 俺がボール投げてからお前が避けたんだろ!? 凄いなその勘違い! お前の方が侮り難いよ!

吉見が桃ちゃんに限りなく近い存在だと感じた。ある意味ポジティブな物の考え方の出来る存在、それが天然。

「あ、ありがとう」

ここでお礼を言う俺はかなり混乱しているらしい。吉見が「どう

いたしまして」と言っている辺りから察するに褒め言葉だったようだが。顔面にボールをぶつけられても怒るところか賛辞を贈る吉見は案外器が大きいのかもしれない。

「……それにしても、彼女がいなくらいでそこまで取り乱す必要も無いと思うけど？」

「うるさいわ！ 俺にとっては大問題なんだよ！」

『僕の恋人は推理小説です』みたいな感じのお前には分からないだろうな！ 修の隣で過ごしてきた俺の寂しい人生を！

中学と比べて、見かける同年代のカップルが増えたと思う今日この頃。他校生も含めた高校生カップルが人目もはばからずイチャイチャする光景を見る度に心の中で『殺つたるか……』と思う俺は末期としか言いようが無い。しかも、修という魅力溢れる王子様の近くにいると俺には見向きもしてくれないのだ。比べないで下さい、お願いですから。

「そんなに気にしてるならつくればいいじゃないか」

「できるならとつくにつくってるよ！ というかお前にだけは言われたくないわ！」

修はもちろん、カシワだってあんなのだが、結構女子に人気があると最近知った。元々容姿は申し分無いし、桃ちゃんに対する態度が酷くて敬遠されがちだが、それを差し引いてもかなりモテるらしい。しかも、運動神経抜群だから体育の時も一際輝く。あまり認めたくはないが、正直言って男の俺から見ても格好良いのだ。

そうなると、必然的にこの場にいる1年生男子で俺の仲間といえるのは吉見しかいなくなる。俺と中々良い勝負をしているのではないだろうか。

「失礼な。僕だつて彼女ぐらいいるさ」  
「――へ？」

思わず耳を塞いで走り出したい衝動に駆られた。間拔けな声を漏らしながら呆然と吉見を見つめる。

仲間だと思つていた吉見のまさかの裏切り。まさか本当に推理小説が恋人とか言わないよな？ 人間にすっかり興味を持つてるよな？ 『俺と中々良い勝負をしているのではないだろうか』とか言つてた自分が恥ずかしい！ 完敗だよオイ！

「う、嘘だよな？」

「本当だよ。付き合つてもう2年になるかな」

「畜生おお！」

悲しいかな、バスケ部内で孤立した瞬間であつた。

いつもなら練習に励んだ後も爽やかに帰り支度をする俺だが、さすがに今日だけはブルーな気持ちでいっぱいだった。吉見の“彼女います宣言”が俺の心に確かな傷を負わせていたのだ。しかも、普段なるべく気にしないようにしていた“彼女いない歴〃年齢”の等式を思い出して泣きそうになった。ここで涙を流さないだけでも褒めて欲しい。

分かり易いぐらいに肩を落しながらトボトボと歩き、今後の部活内における自分の立ち位置を臆気に想像しながら下駄箱に向かつていた。

「だからお前が悪いんだろ!？」

「それはお互い様。あなたに謝る理由が無いわ」

「はあ!？ お前良い加減にしろよ?」

すると、1階の廊下から何やら言い合う男女の声が聞こえて来た。穏やかとは言い難いそれを覗き見ると、そこには男子2人と女子1人の姿が。不運にもそんな状況に遭遇した俺だが、正直こんなブル―な日に関わりを持ちたくなかった。何事も無かったかのようにその場を立ち去ろうとしたが、その内の1人に見覚えがあつて足を止めた。

「私は何も間違つた事を言っていないわ。どうしてそんな事も分からないの?」

「お前が謝れば丸く収まるんだよ。俺は何も悪くねえ!」

「自分勝手ね」

「ッ! お前調子乗ん――」

「はい! ストップストップ! 落ち着け!」

2人の男子の内、1人は静観しているようで止める気配が無かった。何が発端かは分からないけど、淡々と言い放つ女子に対して憤怒した男子を慌てて制止する。

「お前誰だよッ!？」

「カスミン……?」

おお、この状況でもそのあだ名で呼んでくれますか、リンリン。驚いた様子を隠しきれないリンリンと、俺の介入でさらにご立腹の男子。その男子の鋭い視線に射殺されそうになりながらも何とか堪え、この状況に陥つた理由を尋ねてみる。

「この子のクラスメイトだ。何でこんな事になったんだよ？」

「関係ねえだろ！」

「ま、まあまあ、もう少し冷静に話そうぜ？ リンリン、何があったんだ？」

男子はかなり興奮状態のようで、あまりしつこく尋ねると手を出される危険があったので次はリンリンに尋ねてみた。

「……ぶつかったのよ、そこで」

ぶつきら棒答えるリンリンもかなりお怒りの様子だった。でも、それでも話してくれるあたりはまだあの男子よりも冷静らしい。

ぶつかった所はどうやら渡り廊下と廊下の合流地点らしく、恐らくはどちらとも不注意の事故。どちらにも非が有って無いだけに、厄介だった。

お互いに謝れば万事解決なのだが、男子の方はそんな気ゼロ。リンリンは男子が謝れば謝り返すと思うが、それはかなり難しい。

「——よし！ 無かった事にしよう！」

そんな中、俺が考え付いた結論はそれ。謝るのが嫌なら謝るな。忘れちまえ！ というのが、俺の脳内で弾き出された結果である。

「はあ！？ お前馬鹿か？」

だが、当然男子は俺の突拍子もない提案に喰って掛かる。いきなり関係の無い第3者が現れてそんな事を言い出したら当然だとは思うが。

「そ、そう熱くなるなよ。お前だってこれ以上こんな事で時間潰したくないだろ……？」

「こいつが謝ればそれで済むんだよ！」

全く譲らない男子に困惑しながら俺は無い頭を絞って何とかこの場を抑えようとするが、結局大して良い言葉が浮かばなかったため、その場で思いついた事を口にするだけだった。

「そんなにこの子が気に入らないんだったら尚更早く忘れた方が良いと思うけどな」

「でもよッ——」

「お前だって色々忙しいだろ？」

男子が何やら言おうとしているが、間髪入れずに言葉を被せる。

『どうせ暇だろ？』と言われるとついつい反発してみたくなるが、これを言われると『お、おう』と思わず肯定してしまう。主に俺があくまで俺の価値観だが、見栄を張りたい年頃だし、同じ男子だったら案外通じるかもしれない。

「ッ……分かったよ。おい、行こうぜ」

あっさり通じて拍子抜けする俺。ようやく少し落ち着いた男子は、舌打ちをしながらももう1人を連れてその場を立ち去ってくれた。

一時はどうなるかと思いきや、話の分かる相手で良かった。もし殴り合いの喧嘩に発展していたら、間違いなく瞬殺されていたからな。もしかすると、相手も引き際が分からなくなっただけかもしれない。

ホッと胸を撫で下ろしながらリンリンへと向き直る。

「んー……何か腑に落ちない感じが？」

「……別に構わないわ。あのままずるずる続くよりはマシだったと思うから」

そう言いつつも、やっぱりリンリンは納得いつてない様子だった。出しゃばるべきじゃなかったかな、とも思ったが、派手な喧嘩になる前に止めただけでも良かったと思う。

その後も口を開かないリンリンに苦笑しながら頬を掻き、気まづさに耐えかねた俺は「それじゃ」と軽く手を上げてその場を去った。

ようやく辿り着いた下駄箱。先程の一悶着でどつと疲れが増した気がする。今日は帰ってすぐに布団へ直行と心に決め、せめて明日は平和な1日であるようにと心の中で願いを込めながら靴を取り出そうと下駄箱を開けた瞬間、鼓動が高鳴った。

「……………」

下駄箱の中に何やら見慣れぬ物、というか手紙。靴の上にちよこんと置かれたそれは甘い言葉の数々を綴ったラブレター……らしきものが入っていた。人生で1度は体験したいシチュエーションだ。

「……またか」

だが、鼓動が高鳴ったのはあくまで一瞬。その手紙を見て俺は大きく溜息を吐いた。

ここで勘違いしないで頂きたいのは『俺が普段からこういった類

の物を受け取っているから慣れた』とかいう訳ではなく、この手紙の宛先が問題だった。もつとも、『そんな勘違いするはず無いじゃん。馬鹿じゃね？』的なご指摘は止して頂きたい。素で傷付きます。残念な事に、俺の下駄箱の位置は素敵王子様の右隣。これが何を意味するのか、お察し下さい。

高校入学当初、家路に着こうと下駄箱に来た俺は、その中に一通の手紙が入っているのに気付いて飛び上がった。

『ひゃっほう！ これで寂しい人生ともおさらばだぜ！』

とか大声で叫びながらはしゃいでいると周囲からは白い目で見られ、でも、それでもあまりの嬉しさに我を忘れた俺は気にする事も無く手紙の宛先に目をやった。

……数秒ほど固まったよ、俺は。だってさ、滅茶苦茶可愛い字で“親愛なる藍田様へ”って書いてあったんだぞ畜生！ トラウマになったらどうしてくれるんだよ！俺の喜びを返しやがれ！

それ以来、現在に至るまで間違い投函が頻発しているのである。今となつては慣れてしまったが、最初はそれこそ『間違っちゃた、てへっ』とかもし言われてたら間違いなくデコピンの嵐をお見舞いしていたと思う。

俺は乱雑にその手紙を修の下駄箱にポイし、余計にブルーな気持ちになりつつも学校を出た。



## 第26話 スウィートな手紙

今朝、たまたま登校時間が重なって修と出会った。お互いに軽く挨拶を交わし、肩を並べて歩いていると時折すれ違う女の人が隣の王子様に目を奪われる。本人はそれに気付いているのかいないのか、基本的に無表情だが、目が合うと気まぐれに優しく微笑み返していた。すると、その人達は『はう！？』と普段は出ないような声を漏らして頬を紅く染める。

俺も1度でいいから自分の微笑みでそんな声を引き出したいと思った。どこぞの佳苗に『きもっ』と言われるのはもう嫌だ。

「……涼よ」

「ん？」

一種の憧れを抱きながらも眩しいオーラを撒き散らす王子様に呼ばれて視線を向ける。

「今日はお前に素敵な贈り物がある」

そう言いながら不敵な笑みを浮かべる修に寒気がした。これはフリではない……長年付き合ってきた勘がそう告げていた。全く嬉しくないサプライズに表情を引き攣らせる俺。

「へ、へえ」

動揺を隠しきれなかった。惨事を回避する為に慌てて逃走を図ろうとしたが、腕を力強く掴まれてあえなく断念。結局俺は腹を括るしかなかった。

「ほら、これだ」

どんなパンチの利いたプレゼントが来るのだろうかと身構えると、制服の上着から取り出されたのはあまりに拍子抜けな物だった。一瞬、はて？ と首を傾げたが、見れば見るほどそれは1通の手紙。しかも、割りと馴染みの深いあれだった訳で。

「どうだ、驚いただろう？ 恐らくは恋文だぞ」

「え、あー……ある意味驚いたな」

期待通りの反応をしなかった俺を見て若干不満そうな修だが、すぐに表情を和らげると手紙を読むように促してくる。

今更ながら、手紙のかなり分かり易いところに“加住くんへ”と書かれていた。それを確認してから恐る恐る手紙を開封する。形はどうあれ、これが俺にとって人生初のラブレター。緊張しない訳が無かった。高鳴る鼓動を抑える事も出来ずに、書かれた内容に目を通していく。

『ハローファッキン加住。明日ノ放課後、特別棟ノ屋上で待ッテルゾ。——1ねんくくみ 竹中ボブ』

「——何じゃこらアアア！」

思わず手紙を地面に投げつけてしまった。

誰だよこいつ！？ 屋上で何するつもりだ！ というかボブって誰じゃやや！ そんな奴クラスにおらんわ！

勝手にラブレターだと勘違いしてただけに、この意味不明な文章に対する怒りは並みではなかった。明らかに怪し過ぎる差出人“竹中ボブ”。少なくとも我がクラスにそんなハーフは在籍していない。

悲しい現実を思い知って思わず涙が溢れ出しそうになった。

「俺のドキドキを返せえー！ー！」

朝から道の真ん中で咆哮する。コソコソと話している連中が視界に入ったが、今はそんな事どうでもいい。怒り半分と、勘違いさせられた恥ずかしさ半分。

「何という精神攻撃……」

膝を付いて頂垂れる。どういう用件で呼び出されたかは不明だが、先制攻撃としては素晴らしいの一言に尽きる。敵ながらあっぱれ。ただ、何の敵かは知らないけど。

「……………ふむ。まさかこれ程まで愉快な反応をしてくれるとは……」

ピクッと動く俺。小声で呟かれたその一言に、そこはかとなく悪意を感じた。

咄嗟に言った本人の顔を覗き込む。

「どういう意味だこの野郎」

「——バレたか」

悪びれる様子もなく肯定する修。若干ニヤけているので反省の色すら無し。しかし、そのニヤけている修を見て『はうあ！？』と、さらに不可解な声を漏らすレディース。彼女達にはこの表情に込められた悪意を感じ取れないようである。

「ボブに対する怒りはお前に向ければいいんだな？」

「落ち着け。ほんの戯れだ。……これを見る」

どんな仕返しをしてやろうかと思案していると、そんな俺とは裏腹に落ち着いた様子で懷からさらにもう一通の手紙を取り出す修。さつきと全く同じ手紙と、瓜二つな文字。またもや竹中ボブなのか。

「さすがの俺も、同じ手に2度引つ掛かるほど馬鹿じゃないぞ」

吉見や桃ちゃんのようなタイプの人間なら露知らず、一応俺は普通の人間として生きてきた。引つ掛かるはずが無い。渡された手紙を修へ突き返した。

「安心しろ。俺はこれを真似て先程の手紙を書いたのだ」

「これを……？」

という事は、これはまさか本当に……？　もしかするのか？　期待して良いのか？

突き返した手紙を再び受け取り、僅かな期待と共に封を切った。

『突然のお手紙ごめんね。だけど、私の想いはもう止められそうにないの！　明日の放課後、特別棟の屋上で待ってるね。えへっ——  
2 - F　七井　玲』

「フォー——！　これこそまさしく青春！」

切り替えの早いところが俺の数少ない長所である。ただ単に単純なだけかもしれないが、今の俺はそんな事を気にしない。

止められない想いだぞ！？　俺が受け止めますお姉様！　俺の胸にカムヒヤアア！

ついさっきの地獄から一転、今度は天国にいるような気分だ。も

う何ていうか会わなくても分かる。この人は可愛い。字が可愛い。そんなもって佳苗が使ってたお陰で『えへっ』がより可愛い。さすがはマイナスからのスタート。

「これは本物なんだな？ 信じていいのか修う！」

「纏わりつくな鬱陶しい。残念ながら本物だ」

人生初のラブレターを受け取った俺は、素晴らしく軽い足取りで学校へと向かうのだった。

「大人の階段の～ぼる～ 君はまだ～シンデレラさ～」

午後に入って昼食を食べ終えた俺は、いつものように修と桃ちゃん、ついでにカシワと共に特別棟の屋上へ向かい、弁当をつついていた夢ちゃんとスケちゃんカクちゃんを加えた面々でのんびりと心地良い時間を過ごしていた。

「何だよアイツ。マジで壊れたんじゃないの？」

「あ、それ私も同感だわ。前から変な奴だとは思ってたけど、今日はより一層変ね」

カシワと佳苗が呆れた様子でそんな言葉を投げ掛けてくるが、俺は異常なまでの高揚感で守られているので全てシャットアウト。歌いながら満面の笑みで両手を広げる。

今日も陽射しが気持ち良いなあオイ！

「高西さん、加住さんどうしたんですか？」

「うゝん……どうも今朝からあの調子みたいで」

おうおう天使さんと妖精さんのコンビは見てて映えるねえ！もうあれだ、今日は気分が良いから手振っちゃう！ひゃっほう！引くほどテンションの高い俺が手を振っても、振り返してくれるから彼女達はやっぱり良い人だ。その勢いでカシワと佳苗、それから修にも振ってみたが鼻で笑われた。

「何かヤバい宗教にでも手え出したのかもしんねえな、ありゃ」

「ちよつと、あんた本当にどうしたのよ？」

そこでピタッと動きを止め、待ってましたと言わんばかりに懷から1通の手紙を取り出す。

フフ、しっかりその目に焼き付けろよお前達。

「諸君、よくぞ聞いてくれた。見たまえ……この神々しい純白の手紙を！」

俺を突き動かす愛の燃料、ラブレタアを天に掲げる。発音大事だから気をつけて。

「何なのそれ？」

「ラブレタアだよ。ラ、ヴ、レ、タア」

「発音がウザすぎて聞き取り辛いわ」

おい失礼だろお前！謝れ！俺の短い舌に謝れ！

「ふう……これだから日本古来の妖怪は困る」

「何か言った!?」

「あ、いや、何でも無いです……」

物凄い形相でこちらを睨みつけてくる佳苗に動物として抗えない大きな壁を感じた。さすがはアレなだけある。誤って口に出してしまいかねないので念の為、頭の中だけであつても名前は伏せておこう。

「……で、結局それは何なのよ?」

「だから、ラブレターだつて」

「あんた宛に?」

「そうそう」

「自作自演?」

またしても失礼な奴だなお前は! その目が腹立つ! すっごい馬鹿にされた感じの目が腹立つ!

こいつは俺をおちよくる事に無常の喜びを感じているのかもしれない。心までアレなのだろうか。

「そんな訳ないだろ!? これは正真正銘、恋する乙女からの送り物だぞ!」

「ねえ、本当なの藍田?」

「認めたくはないが事実だ」

「へ、へえ……」

俺の言葉が余程信じられないのか、修に確認を取るとすんなり信じる佳苗。若干悲しい気持ちになったがそれは置いておき、佳苗の表情からは驚きも見てとれた。

修は最初から知っているので当然微動だにしないが、カシワもほとんど反応を示して来ないので少し意外だった。夢ちゃんも驚いて

いたが、スケちゃんカクちゃんに至っては話すら聞いてなかった。  
案外俺という存在はどうでもいいのかもしれない。ハハ。

「りよ、涼くんそれどうするの……?」

少しばかり心の汗が溢れ出そうしていた時、俺を一心に見据えて  
歩み寄って来る桃ちゃん。少しドキつとした。

「彼女いない歴15年。ついにモテない男から脱却! 桃ちゃんも  
是非祝ってくれ!」

「……………」

「あちゃー……………」

俺が1人でバンザイを始めると、途端に言葉を無くして俯く桃ち  
ゃん。聞いておいてシカトとは中々の技量だなオイ! さすがは佳  
苗の親友。良い感じに掌の上で転がされたようだ。

それでも1人バンザイを続ける俺の視界の隅で、ふと頭を抱える  
佳苗が映った。それに気付いてようやくバンザイを止める。

「何が『あちゃー』なんだよ、佳苗」

「え、あ、別に? それより、差出人は誰なのよ?」

いきなり話題転換する佳苗をかなり怪しく思ったが、それ以上に、  
差出人に関する情報を全く持っていなかったで、少しでも情報を集  
める為に教えてみる事にした。

「えーと、2年の七井 玲さんって人だ」

「嘘っ!?!」

え、何その驚き!?! 滅茶苦茶気になるんだけど。というか知り

合いなのか？ チャーンス！

「知り合いか！？ どんな人だ！？」

「あんた知らないの！？ 女バスの先輩よ。それで……凄く可愛い人」

「よっしゃやや！」

大きなガッツポーズを決める俺。ツイている。今日の俺はとことんツイている。自然とニヤけ始めた顔を気にも留めず、体全体で喜びを表現してやった。

その真ん前ではかなり表情を引き攣らせた佳苗が、何やら桃ちゃんに耳打ちを始めた。

「おい佳苗。もつと詳しく教えてくれ！」

「……あんた、七井さんと付き合うつもり？」

佳苗が耳打ちを終えてから、さらに七井さんとやらの情報を聞き出すべく催促する。しかし、さっきまで俯いていた桃ちゃんを伴った佳苗が、やや表情を強張らせて問い掛けてきた。

「い、いきなり何だよ？」

「答えなさい。3、2、1——」

「はいはい答えますよ！」

命令口調の後に始まったカウントダウンが異様に恐ろしく感じた。あれは最後までカウントされてたら危なかったね。ああ、間違いない。指の1本や2本は持っていかれてたかもしれないな。

急にそんな態度に出た佳苗や、隣にいる桃ちゃんがどこか気まずそうにこちらをチラチラと見ていたのが気になったが、俺は軽い感じで答えた。

「そんなもん、お断りするに決まってる」

「は？」

「え？」

「ふう……やれやれ」

ポカンとする佳苗と桃ちゃん。そして、呆れた様子の修。悲しい事に、スケちゃんカクちゃんに続いて夢ちゃんとカシワまでもが話を聞いてなかった。ちよっぴり切なかった。

「何ですよ？ 七井さんは凄い可愛い人なのよ？」

「えー、だって知らない人だぞ？ お前は知らない人について行ったら駄目って教わらなかったのか？」

「あんた馬鹿じゃないの!？」

うん、俺もそう思う。でも、そんなに可愛い人なら是非ともお付き合いたい！ とか思えるほど俺は素直じゃないですよ、フフ。かといって、『大切なのは外見よりも中身』なんて格好良い事を言うつもりは無い。お断りする理由は単純に“好き”ではないから。分かり易そうで分かりに難いだろう？ 曖昧だからこそ俺が今まで寂しい人生を送って来たのかもしれないけど。

「え、でも、さっき私にお祝いして欲しいって涼くんが……」

「それはあれだ、人生で初めて俺に好意を持ってくれる人ができたお祝いだ」

彼女ができそうだから祝ってくれとは一言も言っていないぞ。ただ

俺にもそれなり魅力があつて良かったね、的なお祝いが欲しかった訳で。

「そっか、良かった……」

「ああ、良かった。俺のイケナイ魅力が健在で本当に良かった」

「あんた達噛み合つてないわよ」

疑問符を浮かべる俺と、少し顔の紅い桃ちゃん。なんとも言えない微妙な空気で形成された空間で、残りの昼休みを過ごす俺達なのであった。

## 第27話 ドキドキの屋上

俺は恐ろしく緊張していた。かつて体験した事の無い足の震え。若干飛び出しているのではないかと思える心臓。過去に出場したバスケの試合以上である。

屋上へと続く階段を上って行き、時折踏み外したりもしながら何とか目的地へと到着した。

——ボタン

「ハッ!? ……何だ、今開けた扉が閉まっただけか」

我ながら恥ずかしい場面である。だが、ここにいるのは俺だけ。屋上に出た時に人の気配を感じなかったから、きっと待ち人はまだ来ていない。

ふう……やれやれ、浮き足立ちすぎだぞ俺。もし、こんなお茶目な一面を他人に見られでもしたら——

「今のは忘れて下さいお願いします」

いました。物陰からひょっこり顔を覗かせてました。

元々、気配云々とか言っている時点で間違っていた。そんなに鋭敏な感覚なんて持ち合わせているはずもなく、さらに緊張で視野の狭くなっている俺が物陰に潜む待ち人に気付けるはずがなかった。

「ぶっ」

笑われた!? 初対面で笑いを取れる俺は凄い! ——って馬鹿! 笑いを取ったんじゃないかって笑われたんだよ!

物陰から覗きつつ笑いを堪える待ち人。残念な事に、耐えてるつもりかもしれないけど貴女完全にふいてるから！

「あ、あの……七井さんですか？」

「ぶふっ！？　ぶっはっはっは！」

何でそこで爆笑！？　普通に名前を尋ねただけだから！　顔か？

俺の顔がツボなのか？　畜生！

目の前で豪快に笑う爆笑娘。口を手で覆ったりとかそんな可愛らしい仕草はなく、いつの間にやら近寄って来て俺の肩をバシバシ叩き始めた。

「か、加住くん最高！　何か面白いよね！　ぶっはっはっは！」

喜んでいいのか？　怒った方がいいのか？　それにしてもあれだ、ここまで爆笑されたら逆に気持ち良いわ！

全く嬉しくない第一印象を述べてくれた爆笑娘は、肩を叩く力をさらに強めてきた気がした。この人がこの学校の生徒じゃなかったら喧嘩に発展していたかもしれないぐらい痛かった。

「ちょ、ちよつと落ち着い——でぐおあ！？」

痛みに耐えれなくなり始めた俺は何とか殴打のラッシュをかわそうとしたが、中途半端にキレの悪いフットワークが災いして顔面に張り手が炸裂した。

一瞬、意識が飛ぶかとさえ思った。頬がほんのりとヒリヒリする。

「あ、ご、ごめんね！　怒った？」

「い、いえ、割りと慣れてますから」

さすがに人の顔面を張ると、爆笑娘の笑いは収まった。あのままもし、殴られたまま爆笑されていたら俺は本当に泣いていたかもしれない。一種のイジメだと思う。

少しフラフラする体を立て直して苦笑する。感謝はしないけど、佳苗の暴力も案外役に立ったのかもしれない。ただ、感謝はしないけど。

「そっかそっか。私は2年の七井なない玲れいだよ。よろしくどうぞ」

「あ、こちらこそ。1年の加住 涼です。それでこの手紙の事なんですけど……」

互いに軽く自己紹介を終えた後、懐から例の手紙を取り出す。今この場にいるという事は、この人で間違いないのだろう。

すると手紙を見せた途端、爆笑娘の表情が変わった。

「あ、それねーうん。あのねー加住くんに教えて欲しいな………」

凄くドキツとした。1番大切な単語が抜け落ちている気もするが、爆笑娘もとい七井さんの態度を見ればある程度理解出来たからだ。

森下部長顔負けの豪快な爆笑を披露してくれたついさっきとは打って変わって急にしおらしくなった七井さんは、胸元で手をモジモジさせながら、あろう事か上目遣い。佳苗の言っていた通りの可愛らしい顔立ちでそれをやられては、異性に対して免疫の無い俺が冷静でいらなくなるのも時間の問題だった。

「ななな、何をですかな？」

突然口調が変になったのは俺が動揺している証拠だ。時折七井さんが自分の胸元を見ながら「教えて欲しいな……優しく」と、微かに聞こえる声で呟いていた。

自然と鼻息が荒くなる俺。もうこの状況でそんな事を言われたら1つしかないだろ！ 幸いここは人気ひとけの無い特別棟の屋上。告白を乗り越してまさかの展開か！？

「ゲヘヘ」

いつの間にやら昌太さんの笑い方が伝染してしまったらしい。

あゝ昌太さん！ 俺にはその気が無いつもりだったのに体が自然に動いちゃうよ！ 天国にいる父さん母さん兄さん、見ていますか？ 俺は今日、大人になります。

「さささ、さあ！ 俺が手とり足とり教えます！ まったくのド素人ですが全て教えます！」

「本当！？」

「もちろんです！」

パアッと花咲く七井さんの笑顔にますますだらしのない顔つきに変化していく。いつから俺はこんなに分かり易い人間になったのだろうか。緩やかなウェーブのかかったロングヘアを靡かせながら、大きな瞳に柔らかな光を映して駆け寄って来る七井さん。もう、ドキドキが止まりません。

「やった！ 本当にありがとう！ 加住くん」

「いえいえ。俺も男ですから！」

「良かった！ それじゃ今日の部活後早速教えてね、バスケ」

「まかせてください！ 俺がバスケを——ヘ？」

両手を広げながら七井さんを迎える準備をしていた俺は、とてつもなく恥ずかしい勘違いと共に間抜けな声を漏らす。

ば、バスケ……？ そういう新しい戯れか……？ と、自分なり

に前向きな考えを巡らせてみたが、結局俺の知っているバスケットは1つしかなかった。

「どうしたの？」

不思議そうにこちらの様子を窺う七井さんと、慌てて視線を逸らす俺。

い、言えない。七井さんのあられもない姿を想像していたなんて口が裂けても言えない。何て馬鹿な男なんだ、俺は。

皆さん、これからは俺の事を“むつつり勘違い野郎”とでも呼んで下さい。いつそ、笑ってくれた方が楽です。

『ああーっと！ 加住選手はとんだむつつり勘違い野郎だー！』

いきなりこんにちはもう1人の俺！ でもお前に言われたくない！ 他は許すけどお前にだけは言われたくない！ というかお前と俺は2人で1人だって事に気付け！

『ハッハッハッハ！』

笑うなボケエエエ！ お前に笑われると無性に腹立つ！ 頼むから消えてくれ！

『ああーっと！ 加住選手はとんだむつつり勘違い野郎だー！』

聞いたわそれ！ 2回目だから！ 喧嘩売ってるのかこん畜生！

「上等だもう1人の俺！ 今日こそ無に帰してやるからな！」

俺は見えない敵と戦った。自分の右手で自分を殴りつける。傍か

ら見れば危険極まりないこの行動。頭に血の上った俺が目撃者の存在に気付くまで、あと3秒。

「ここか！　ここがお前の弱点か！？　だったら——」  
「ぶふう！？」

目の前で復活を遂げた爆笑娘。それに気付いてようやく自分の危険さを自覚した。精神異常者、と言われれば誰もが首を大きく縦に振る俺の奇行。それを恐がらずに爆笑で包んでくれた七井さんには感謝しなくてはならないのかもしれない。

ただ、1つ言いたい事がある。

「ぶっはっはっは！」

……ラブレターとか言った奴あとで謝れ！

第3体育館までの道のり、それはそれは遠く感じた。お恥ずかしながら、てつきり七井さんから愛の告白があるとはかり思い込んでいた俺。少し間延びした喋り方が凄く愛らしくて、潤んだ瞳で見つめられる度に鼓動が高鳴っていたが、実際に蓋を開けてみればただの勘違い。バスケットについてのコーチ依頼だった。しかも、これは2人の秘密だとか。例外的に女子バスケット部の顧問には話を通してあるらしく、練習後に体育館が使える、と七井さんは言っていた。

ようやく辿り着いた体育館で小さく溜息を吐きながらも、今後し

ばらくの間は七井さんと2人つきりで練習に励む事が出来ると思うと、少しばかり楽しみになった。俺も、部内で足を引っ張らない為にも頑張らないといけない。目指すはレギュラー。

「はい皆さん。今日は重要なお知らせがあります」

練習開始直前、望くん先生がそう前置きしながら1枚の紙を手にして現れた。それをきっかけに、望くん先生の元へと集まる男子バスケ部面々。

「望くん先生、どうしたんですか？」

「実はですね……遂に決まったんですよ、組み合わせが」  
「組み合わせ？」

首肯する望くん先生と、首を傾げる俺と吉見。修や森下部長達は何か勘づいたらしく、興味深そうに次の言葉を待っていた。

「それではお待ちかね！ インハイ予選、初戦の相手を発表します」  
「！」

望くん先生自演のドラムロールが流れ始める。そこでようやく俺は得心がいった。遂にインターハイ予選が始まるのだ。俺達1年生にとっては初めての公式戦であり、これまで培ってきた己の実力を試す最高の舞台。中学時代に有名だった修が、カシワがどれほど活躍出来るのかは俺としても知りたい。そして、自分自身の力量も。

鳴り終わったドラムロールの後、望くん先生がその口を開くのを待った。

「聞いて驚いて下さい……初戦の相手は——白土です！」  
「……えー」

「マジかよ……」

「難儀な話だな……」

俺、カシワ、修が大きく肩を落とす。その知名度の高さから、先輩達も全員が同じ反応である。唯一、吉見だけが疑問符を浮かべていたが。

白土しらど学園高校。現在、我が県からインターハイ本選への出場枠は2校。その内の1校が聖院であり、その聖院と双壁を成すのが秋徳しゅうとくという高校。過去数年はこの2校の独走状態であったが、一昨年、その秋徳を破って本選に出場を果たしたのが白土である。毎年トーナメントを勝ち上がってリーグ戦に姿を現すその実力は本物。昨年こそ本選出場を逃したが、今年はどうなるか分からない。

つまり、俺達は初戦からこんな怪物染みた奴らのいる高校を相手にしなければならぬ訳で。

「クツクツ……この僕が世に出るまたとない機会じゃないか。白土……相手にとって不足は無しだね」

吉見が何やら盛り上がっているが、ここはそつとしておこう。吉見を除くその他の人達は、初戦突破がいかに困難か理解していた。今年で最後となる森下部長は頭を抱え、菊池先輩も珍しく元気が無かった。

「何だか皆さん元氣無いですねえ。でも大丈夫、負けませんよ！」

自信満々にそう言い放つ望くん先生。これだけ部員が意気消沈している中で、それだけの自信を持ってられるこの人は暢気なのか、それとも何か裏付けされたものがあるのか。十中八九前者だとは思うが、念のために聞いておく。

「どうして言い切れるんですか？」

「……ふっふっふ、よくぞ聞いてくれました加住くん！」

不覚にも、望くん先生が頼りがいのある大人に見えた。まさかこの段階で打開策でも用意しているのだろうか。もしそうだとすれば、これほどに頼もしい顧問はいない。相手は我が栄稜高校よりも遥か格上。しかも、こちらは昨年人数の都合で出場すら叶わなかった弱小校である。この差をひっくり返す策があるのなら、是非とも教えて欲しい。

不敵に笑いながら一通り部員を見渡す望くん先生。いつの間にか肩を落としていた森下部長達が、目を輝かせながら望くん先生に釘付けになっていた。

「ズバリ言いましょう……頑張ればいいのです！ 相手方よりも！」

「……」

うん、馬鹿だこの人。教師に向かって言うべき台詞じゃないけど、馬鹿だ。こんな事を自信満々で言える望くん先生はやっぱり凄い。ある意味期待を裏切らない数少ない教師だ。

まあ、一瞬でも貴方を頼もしいと思った俺も馬鹿だけだね！

「お、おう皆！ さっさと準備しろ。練習始めるぞ」

あからさまに引いている森下部長の掛け声で、望くん先生と吉見を除く俺達はそそくさと練習を始めるのであった。

## 第28話 秘密の特訓

部活終わりの体育館。バスケット部員達が練習に励んでいた時の活気は消え失せ、閑散としたそこに俺と七井さんはいた。一旦はバレないように周りと一緒に帰る振りをしたが、またもう1度ここに戻って来たのだ。そこまでする必要があるのだろうかとも思ったが、七井さんはどうしても内密にしたいとの事らしい。

「そろそろ始めよっか」

「そうですね」

静まり返る体育館に響く七井さんと俺の声。廃墟並みの建物であっても、2人だけだとかかなり広く感じる。

「よろしくね〜コーチ」

「は、はあ……」

よろしくと言われても、俺は今までバスケットを他人に教えた経験など無い。中学時代も、後輩への指導という役割の大半を修が器用に担っていた。初心者でも、あいつが教えればあっという間に形になっていくのだから凄い。

とにかく教える云々というよりも、まずは七井さんの实力を見たい。となれば、やはり1on1でもするのが妥当である。

「とりあえず、1on1でもしましょうか」

「はい」

はい、元気にお返事出来ましたね。と思わず言いたくなるような相槌に、少しばかり頬が緩む俺。これがこの人の魅力なのだろうか。

先攻は七井さん。お世辞にも運動が得意だとは思えない独特の雰囲気、俺は少しばかり気を抜いて構えていた。

だが、一気に動き始めたゲームの中で七井さんが見せたのは、俺の想像とは異なった軽い身のこなし。瞬く間に詰まる距離の中で、不意に見せた滑らかなバックロール。

完全に意表を突かれた俺は、慌ててボールに向けて手を伸ばしたが、既に遅くて――

「いえーい」

振り向いた先でピースサインをする七井さん。リングを潜ったボールを手に、ニカッと笑っていた。

あつという間の出来事。写真のようにカット毎のシーンでしか知覚出来ていない。俺はポカンと七井さんを見つめるだけだった。

「次は加住くんだよ」

「え、あ、はい」

気の抜けた返事と共に、七井さんからボールを受け取る。

予想していなかった七井さんの動きに若干動揺しながらも、気が抜けていた所為だと思って俺は密かに拳を握った。

俺がリングへ向けてドリブルを開始すると、七井さんの執拗なディフェンスがそれを阻んだ。

上手くかわせない。おそらく160を超える七井さんの身長。それでもまだ俺の方が高いが、どこか威圧されている俺の目にはその身長以上に七井さんが大きく見えた。

それでも何とかリングへと詰め寄る中、上にも横にも伸びる七井さんの手を掻い潜って咄嗟に後ろへ飛びながらシュートを放った。つまり、フェイダウェイ。

放物線を描くボール。若干無理はあったが、リングへ激しく当たりながらも何とかボールは吸い込まれていった。

「悔しい〜！ 次、ね？」

胸を撫で下ろしながらボールを拾いに行くが、無邪気に悔しがる七井さんを見て自然と頬が緩む。七井さんのコーチ、そしてこの1on1は実力を測る為の名目だという事を思い出して思わず苦笑する。もう少し肩の力を抜くべきだと感じながら、目の前の先輩と再び対峙するのであった。

ゲームが進行していく中で、得点に表れる実力の差。2-6という展開に俺は焦っていた。勝敗は関係ない。だけど、これではどちらがコーチを頼んだのか分からない。

肩で息をしながら七井さんを見つめ、なぜこんな事を俺に頼んできたのかますます理解に苦しむ。

「七井さん、ちょっといいですか？」

「どうしたのー？」

「他にもっと適任な奴がいたと思うんですけど……」

事実、我がバスケ部には上手い連中が多い。しかも、女子バスケ部はかなりの実力だと望くん先生も言っていた。だとすれば、その中でピンポイントに俺が選ばれた理由が分からない。それこそ、色んなオプシヨンを備える王子様にでも頼んだ方が良いと思う。というか、俺が女子ならそうする。

「うーん……他の人じゃダメなんだよねー。どうせなら、とびつきり上手い人に教えて欲しかったから」

随分とまあ、買収されているようである。大方、カシワとの１on１を見てそう思ったのだろうか。しかし、俺は過去に森下部長に負けている。しかも大差で。

俺はその事を告げる為に口を開こうとしたが、その前に七井さんに制され、彼女は真剣な面持ちで俺を見据えた。

「とにかく、もう少し続けよ？」

俺は驚いた表情を浮かべ、力無く頷く。考えが顔に出ていたのかと、少し恥ずかしくもなった。

「ただ、ここからはもっと真剣に……ね？」

そう付け加えられて何を今さらと思ったが、七井さんの表情を見て冗談ではないと悟った。これだけの差をつけて、彼女はまだ手を抜いていたという事なのだろうか。少なくとも、自分は一生懸命やってきたつもりだ。最初こそ気を抜いていた事は認めるが、それ以

降は気持ちを切り替えた。

きつと、互いの士気を高める為に言ったのだろつと自分なりに納得し、俺は七井さんの正面に立った。

オフENSは七井さん。言葉の通り幾分か表情が引き締まって見えるが、俺は気のせいだと思い込んだ。

これだけ翻弄されておいてさすがにそれだと自分の立場が無い。そう楽観的に考えて七井さんの様子に気を配った。

——しかし。

一瞬、悪い冗談だと思った。

七井さんが今まで見せたオフENSよりも、純粹に速かったのだ。もう1度言うておくが、気を抜いていたのはあくまで最初だけ。

ならば、目の前の彼女がこんなにもキレのある動きが出来るのはなぜか。

額に滲む嫌な汗。俺は慌てて七井さんの前に立ちはだかつて事なきを得たが、あとほんの僅かに判断が遅れていれば完全に抜き去られていた。

そして、先ほど七井さんが言っていた『真剣』の意味がようやく理解出来たと同時に、自分の悪い癖が出てしまった事に気付く。

毎度のように相手を見掛けで判断し、それで実力を決めつける悪い癖だ。相手がその気になって初めて自分の拙さに気づき、後悔する。高校に入ってから何度か経験した。

成長していない自分に自嘲するが、それに気付いた頃には既に遅かった。

七井 玲さん。俺にコーチを頼むぐらいだからどれほど自信に欠

けているのかと思っていたが、この人は決して下手な部類に入るような人じゃない。むしろ――

「クソ……」

振り向き様に、リングを潜るボールの様子を呆然と見つめる。

彼女を足止め出来たのは僅かな間だけだった。その後、あっさりとかわされた俺は成す術無く棒立ち。

先日のカシワとの一戦。まぐれでも聖院から来た奴に勝利し、自信も持っていた。再戦すれば勝てる見込みは無いが、それでも逆境に屈せず逆転を果たした自分はそれなりの実力があるのだと思っていた。しかし、目の前の彼女にそんな俺の自信は打ち崩されてしまった。

「加住くん。1つだけいいかな？」

依然として引き締まった表情でゆっくりと歩み寄って来る七井さんに、俺は声も出さずに頷く。

「教えてもらう側として言うのも何だけどね、加住くんはちょっと私を舐め過ぎかな」

その後呆れた表情を浮かべる七井さん。まさにその通りだと思いつながら俺は俯き、七井さんから視線を逸らさざるを得なかった。完璧に見抜かれていた。コーチを頼まれた時点で七井さんが俺にどんな期待をしていたのかは知らないが、あの呆れた様子をみれば少なからず幻滅しているのも分かる。

……だけど、自分でも理解していた。ようやくさつきそこに気付いたのだ。

俺は体育館中に響き渡るほどに思いつきり両手で自分の頬を叩いた。それを見て七井さんが驚いていたが、景気づけにもう1度叩いたやった。

うん、俺は馬鹿だ。でも、このまま何もしない奴はもつと馬鹿だ。後悔で終わらせずに反省してこそ改善出来る。フフ、馬鹿も馬鹿なりに頑張ってみようじゃないか。

頬がひりひりと痛い、俺の胸中はもう晴れていた。七井さんに教えるどころか、逆に俺が教えられたようである。ずっと背筋を伸ばして七井さんを見据えた。

「……七井さん、続きを」  
「う、うん……」

ほんのりと頬の紅い七井さんからボールを受け取る。

ドリブルを始めた俺はついさっきまでの自分が嘘みたいに頭がクリアーになっていた。いちいちどう攻めようか思案しなくても分かる。自分のモノではないかのように軽やかな体が、自然と俺を突き動かしていた。

同じだ。中学の時に出た練習試合。カシワとの1on1で体験したあの時と全く同じ感覚。

なぜだろうか、止められる気がしない。自然と動く体は、今まで体にすり込めれてきた練習の賜物なのだろうか。

七井さんが懸命に手を伸ばしてボールを奪おうとしているが、先ほどまで感じていた七井さんの動きからはかけ離れていて――遅く感じた。

「も、もうダメ……限界だよ……」

「ふう……お疲れ様です。それじゃ、今日はこれぐらいにしときましようか」

体育館の床に倒れ込む七井さんを横目に、俺はタオルで汗を拭っていた。

何だか、あの不思議な感覚のお陰で普段よりも疲労が少なく感じた。いつの間にかあの感覚は途切れているが、あれも集中力からくる何かなのだろうか。

人間って不思議な生き物だなあ、とか思いながら、息を切らせて寝そべる七井さんの復活を待った。

それから5分後。

ゆっくりと体の起こす七井さんと目が合った。

「加住くん上手過ぎだよ、私自信無くしちゃった」

「いやでも、途中まではボロ負けでしたし」

「うーん……そうだけど、やっぱり藍田くんが言ってたことって本当だったんだね」

「え、修ですか……？」

なぜにこのタイミングであいつの名前を？ 俺の知らない間に周囲に何を吹き込みやがったのだろうか。……気になる。滅茶苦茶気になる。

「何を言われたんですか？」

「気にしない、気にしない。それよりもさ、どうして途中からあんなに見違えたの？」

おお、滅茶苦茶気になるのにあつさり流しちゃったよこの人！  
マイペースだなオイ！

何事も無かったかのように違う疑問を口にする七井さん。ここま  
で華麗に流されれば話を戻すのも躊躇う。仕方ない、明日にでも修  
を問い詰めるしかないようである。

「いやー、自分でもよく分からないんですよ。急に体が軽くなっ  
て自然に動いたっていうか何ていうか……」  
「え？ 魔法？」

そんなファンタジーな事を言う七井さんの表情は真剣そのものだ。  
物怖じせずに『魔法』という単語を繰り出せる七井さんは結構純粋  
な人なのかもしれない。

『魔法バスケット少年 カスミン』

………わ、笑えない。一瞬でもこんなキャッチフレーズが浮か  
んだ俺は一体どこへ向かいたいのだろうか。

「ち、違いますよ！ 俺は普通の高校生ですから！ ……でもまあ、  
実際のところは自分でもよく分からないんですけどね。ハハハ」

ただ、魔法ではないと言い切れる。それだけは断じて違う。魔法  
バスケット少年なんてダサすぎるぞ。

「そつかそつか、加住くんは頭おかしいんだね」

ちよつと！ 貴女には言われたくなかった！ 平然と魔法って言  
う貴女には！

七井さんの中で、俺は早くもそんな位置付けになってしまったらしい。不名誉極まりない。

「おかしくないですから！ 普通です！ ふ、つ、う！」

「ぶっ！？」

「何でそこでふくの！？ 笑いのツボがまったく掴めない！」

「ぶっはっはっはっ！」

「はぁ……」

昼間を彷彿させる豪快な笑いに、大きな溜息を吐く俺。さすがにここまで爆笑されるともう突っ込む気にもなれない。あんなに大声かつ、お腹を抱えて笑っているのに怒る気にもなれないのはやっぱり七井さんが可愛いからなのだろうか。

可愛い人、綺麗な人、格好良い人。何をしても絵になるのだから凄いと思う反面、せこい。

「ぶっはっはっは……はぁ、はぁ……」

「落ち着きました？」

「ご、ごめんね。……でも」

そこで区切る七井さんに首を傾げる俺。肩で息をしながら笑いを静めていたついさっきとはまた違った表情をする七井さんに戸惑った。

「……でも、間違えてからの加住くん、凄く格好良かったよ」

「は、え、な？ な？」

恐ろしく動揺した。「冗談混じりで言われれば笑って流せる話なのだが、七井さんが妙に優しく微笑むもんだから恥ずかしくて仕方なかった。普段から言われ慣れていたら少しはこの間抜けな動揺つぶ

りも和らいでいたかもしれないが、生憎と俺だ。平静でいられるはずもなかった。

「普段は可愛い顔してくるくせにどうしてあんな顔するかな」

「い、意味が分からないっす」

「まあ、気にしないで」

気のせいでなければ、七井さんの頬が少し赤らんでいるように見えた。それを見てさらに首を傾げる俺であったが、七井さんがそっぽを向いてしまつて結局はよく分からなかった。

ともあれ、少しの謎と俺の新たなキャッチフレーズが生まれた秘密の特訓初日はこうして終わりを迎えた。

## 第29話 フラれる純情少年

秘密の特訓から一夜明けた翌日の昼休み。

昼食をとった俺は、例のごとく屋上にいた。

今日も晴れ。

暑くもなってきたが、やっぱりここは食後の一時を過ごすのに申し分ない。

それに、まだ当分先とはいえ確実に近付いて来ている夏の微かな気配を感じ取れて心が騒ぐ。今年の夏は楽しい夏になるといいなー、なんて密かに思ったりもする。

去年の夏は楽しかった。同じバスケット部の友達と海に行ったり、自転車で琵琶湖まで行こうとしたりもした。

『海なんか俺には小さ過ぎる！ やっぱ琵琶湖しかない！』

と、我ながら頭の悪い発言をした事は記憶に新しい。修は鼻で笑って一緒に来なかったが、俺並みに頭の愉快な連中が意気込んで参加してくれた。まあ、結局は出発直後に豪雨に遭ってしまつて断念したのだが。

そんな友達がいた中学時代。俺や修とは別の高校へ進んだ彼ら。

今年はせつかく新しい出会いがあつたのだから、去年を上回る夏にしたい。

……でも今のこの状況を見れば、それも何だか先が思いやられる。

「ギャハハハ！ お前、とんだ勘違い野郎じゃねえか！」

「フツハツハ！ お前もついにそこまで落ちたか」

「あつはつはつは！ 何がラブレターよ、どうりでおかしいと思っ  
た！ あの七井さんがあんたごときを好きになる訳ないもんね！」  
「ぐう……俺ごときとはまた失礼な奴め」

俺を囲む、カシワ、修、佳苗。全員が腹を抱えて笑ってやがるの  
だ。

事の発端は例の手紙について。どんな告白を受けたのか？ とい  
う質問を最初に投げ掛けてきたのは佳苗だった。

そして、それに便乗し始めた修、カシワ、桃ちゃん。興味津々と  
いった感じで俺の話聞き、真相を知って現在に至る。秘密の特訓  
については伏せたが、屋上に行った途端爆笑されたところは馬鹿正  
直に話してしまった。今さらながらに少し後悔している。

依然として修達が笑い転げる中、唯一その輪に入って来なかった  
桃ちゃん。やっぱり良い人なんだなあ、と感心しながらおもむくに  
その姿を探した。

「——よしっ」

が、しかし。俺達の輪から少し外れた所で小さくガッツポーズを  
決める桃ちゃん。その姿はとても可愛らしかったが、現状では悪意  
があるようにしか見えなかった。

ナイスガッツポーズ！ 他人の不幸を喜ぶなんて桃ちゃんは小悪  
魔さんだね！

俺なりに前向きに考えてみた。少し、というか、かなり無理があ  
るのと言わない約束だ。

そんな桃ちゃんだが、俺がその小悪魔ガッツポーズを見ている事  
に気付くなり、慌てて悲しそうな表情に切り替えて歩み寄って来た。

「涼くん、残念だったね……」

この言葉だけ聞くと確かに同情してくれているようにも聞こえるが、残念ながら――

「桃ちゃん目が笑ってるから！　しかもさっきのガッツポーズも見てたから！」

「……あはっ」

バレちゃった？　みたいな顔で照れ始めた桃ちゃん。ガッツポーズを見られてるのに、この娘は本気で誤魔化せると思ったのだろうか。末恐ろしい。

そんな桃ちゃんを生温かい目で見つめ、依然として耳に入ってくるイジメっ子達の笑い声で段々と逃げ出したくなってきた。

「お、お前達笑い過ぎだ！　俺が純情少年だって知らないのか！？」

“通勤電車で快樂地獄”……そんなドエロい雑誌を嗜むお前が純情だと？　フツ、笑わせる」

「ちよっ！？　それ言っちゃ駄目だって！　というか“嗜む”って言うな！」

修の思わぬ反撃に遭ってさっきよりも逃げ出したい衝動に駆られた。だがそんな俺の心を読んだのか、修がすかさず俺の腕を掴んで身動きを封じてきやがった。さすがは我が親友。全てお見通しのようである。

そして、その場から動けなくなつた俺にさらなる悲劇が襲いかかった。

……心なしか女子達の視線が痛い。それまで仲良く弁当をつついていて、こちらには干渉してこなかった夢ちゃん達までもが俺を蔑

む目で見ていたのだ。

「あんたサイテーね」

「ご、誤解なんだよ佳苗さん！」

「あ、私もこの前それ——」

「シヤラアアアップ！」

桃さん貴女何を言おうとしてるか分かってます！？ あの工口本絡みで嬉し恥ずかしのハプニング起きたでしょ！？ 家であんな事があつたなんてバレたら、俺もう死んじゃう！

「あんな事……？ 何よそれ？」

お口の馬鹿ああ！ 自由すぎるっていうか緩すぎる！

修のあの一言を皮切りに、まさかこんな展開になるなんてこれっぽちも思わなかった。ふと修に意識を向けてみると——笑っていた。どこか楽しそうに。

あとで最大限のお礼を返すとして、今はどうかこの状況切り抜けなくてはならない。万が一、2人っきりの家で桃ちゃんを押し倒したという事実が目前のこいつらに知られ、しかもそこからさらに桃ちゃんに想いを寄せる数多の男子達の耳に入りでもしたら、間違ひなく加住 涼という人間はこの世を去るだろう。

自然と頬を伝う汗。下手な説明をすれば事態は悪化する。失敗は許されないのだ。

「いや、別に何も無いけど」

「ふうん、隠すと為にならないわよ？」

「ひ、卑怯だぞ！ 暴力反対！」

指をポキポキ鳴らしながら少し距離を詰める佳苗。卑怯だが、確

かに口を割らせるには良い手段である。

今ここで佳苗の殺人拳を甘んじて受けるか、それとも正直に話した後日不特定多数の男子から時には直接的に、時には陰湿な間接的イジメを受けるか。

……どちらにせよ、向かう場所は同じだ。となれば、辛い事は早目に終わらせてしまう方が良い。

「黙秘権！」

「そんなの無いわよ！」

最後の抵抗も虚しく、佳苗はさらに強く拳を握った。自然と後退る俺。

「で、言つの？ 言わないの？」

「い、言わな——」

「——佳苗！」

俺が覚悟を決めて佳苗という名の鬼に抗おうとしていた時、そこで不意に桃ちゃんが佳苗を呼んだ。

何事かと思い、2人して桃ちゃんの方へ視線を向ける俺と佳苗。すると、そこには異様に焦った桃ちゃんがいた。

「ほ、本当に何も無いんだよ？ 本当に何も無いの！ ほ、本当の本当に何も無いの！」

「……………」

「……なるほど、そんなに重大な何かがあったのね？」

隠すの下手くそおお！ 桃ちゃんワザとらしすぎる！ バレバレじゃないか！

それは思わぬ伏兵の出現だった。ついさっきまで気付いていなか

った桃ちゃんが、ようやくあのエロ本絡みで起こったハプニングを思い出したらしい。だから、桃ちゃんなりに隠そうとしたみたいなのだが、それが残念ながら裏目に出てしまった。

そんな桃ちゃんの自爆行為に本人は気付いていないらしく、佳苗が何かに勘付いたのを目の当たりにして「え、エスパー……」と呟いていた。彼女は結構幸せな人間なのかもしれない。

「ふふ、これはますます何があったのか聞きたいわね」

「……ぬう」

不味い……この状況は非常に不味い。好奇心旺盛の佳苗を止める術が見つからない。しかも、今気付いたのだがカシワも桃ちゃんに想いを寄せる数多い男子の内の1人である。もしここでカシワにもバレたら……や、殺られる。

さらにさらに、このまま思案している時間も危ない。自爆娘である桃ちゃんが存在が、俺に半端じゃないプレッシャーを掛けているのだ。彼女が喋り始めたらもう終わりである。

……仕方ない。最終手段だ。

「ぬおおお！？ 幻聴っぱいけどチャイムが聞こえた！ 早く教室に帰らねば！ うお！？ 桃ちゃんも聞こえたのか！？ フッフ、皆の衆。そういう事で我々はお先に失礼する！」

「え？ え？」

「——あつ、ちょっと！ 逃げるな！」

もう1秒たりともここにいるのは危険と判断した俺は、桃ちゃんと共に屋上を後にするのであった。

「危なかった……」

勢い良く屋上を飛び出した俺達の後を、佳苗は追い掛けて来なかった。また後で会った時に色々と聞かれるだろうが、カシワのいたあの場よりは大分マシだ。

それにしても、まさか七井さんの手紙からあんな話へと流れるとは思わなかった。俺の慌てっぷりを見て笑みを溢していた王子様は後でグーだ。

「あれ？ 加住くん？」

密かな決意を胸に特別棟の階段を下っていると、聞き覚えのある声に呼び止められて意識をそちらに向けた。

「あ、七井さん。こんにちは」

「やつほ。加住くんはデート中なのかな？」

一瞬、いきなりそんな突飛な事を言う七井さんの頭を疑った。しかし、彼女は素で魔法の存在を信じるファンタジーな頭の持ち主。何かまた大きな勘違いをしているであろう事はすぐに分かった。

「いや、ただ友達と普通に歩いてるだけなんですけど」

「え、それじゃキミはいつも女の子と手を繋ぎながら歩くの？」

「へ？」

何を馬鹿なことを……俺は普通にして——ギヤヤヤー！  
しっかり繋いでるし！ 何で気付かないんだよ！ 俺の触覚もつと

しつかりしやがれ！

俺はもしかして何か大きな障害を抱えているのだろうか。前にも1度こんな事があった気がする。

隣で俯いたまま何も言葉を発さない桃ちゃん。俯いたままでも、時折繋がっている手をチラチラと見ているのが分かった。

だが、桃ちゃんも気付いているなら教えて欲しかった。というか、無理にでも振り払ってくれば良かったのに。

俺は慌てて繋いでいた手を名残惜しく思いながらも離れた。

「あ、いや、これは事故っていつか何ていうか……無意識の内に」

「ふゝん、無意識の内に手を繋げるほど慣れてるんだね」

「ちよっと！俺の顔見てから物言って下さいよ！」

「えゝ？ことう？」

違う！俺の顔覗き込んでも意味無いから！こんなルックスで手を繋げる相手が見つかる訳ないって意味だよ！

七井さんはワザとやっているのだろうか。だとしたら、人をおちよくるセンスは修に匹敵する。

「違いますって！ちよ、桃ちゃんも何か言ってやって！」

「……えっ？」

そこでようやく顔を上げた桃ちゃん。だが、その顔は恐ろしく紅かった。

「うわゝ顔真つ赤だね。可愛い」

「あ、い、いえ……」

何事もなかったかのように今度は桃ちゃんに興味を持った七井さん。彼女は少しばかり自由な人間だと理解した。

それにしても、七井さんの言う通り顔を紅くする桃ちゃんが滅茶苦茶可愛かった。初めて見た時から可愛い人だと思っていたが、ここ最近はまだ強くそれを思う。

「キミは加住くんの彼女なのかな？」

「嫌っ！　ち、違います！　止めてください！」

「ひ、酷い……」

桃ちゃん、本人が目の前にいるぞ？　いやまあ、否定するのは当たり前だけどここまで露骨に嫌がられると泣きたくなるよね。普段は優しい桃ちゃんがここまで拒絶するとは……そういった意味で俺は中々の猛者らしい。

「っ！　ご、ごめんなさい！」

いきなり謝りながら逃走した桃ちゃん。なぜかフラれた気分だった。告白もしていないのにフラれる俺はついにその領域にまで達してしまったのだろうか。

「何か俺、フラれたみたいですね」

「みたいだね」

「七井さん」

「うん？」

「……泣いてもいいですか？」

「あはは、ドンマイ」

次に桃ちゃんと合わせる顔がないと感じた昼休みの一時だった。

### 第30話 インハイ予選

ピリリリ——　ピリリリ——

毎朝聞き慣れた目覚ましとはまた違った電子音。眠りの中にいた俺の意識が微かに反応して枕元を弄る。

電子音と共に、振動が伝わって来るこれは……

『王子様』

手にした携帯のディスプレイにはそう表示されていた。数秒の間、未だ覚醒しきっていない頭でボーっとディスプレイを見つめる。

ピリリリ——　ピリリリ——

「……はい」

寝起きのせいか、普段よりも僅かに低い声が出る。しかし、別に不機嫌という訳でもない。どちらかというと、朝でもそれなりに元気を出せるのが俺という生き物である。

「おい、まさかとは思うが、寝起きか……？」

「うん？　ああ、そうだ」

俺が答えると、電話越しに大きな溜息が聞こえてきた。何をそんなに呆れているのか理解出来なかった俺は、小さく首を傾げる。

「……どうしてそんなに余裕でいられる？　もう9時前なのだが」

「いや、だって今日は土曜だし寝ててもバチは当たらないだろ」

さらに大きな溜息が聞こえた。休日の朝っぱらから人をおちよくるこいつは一体何がしたいのか意味不明である。そんなに俺という存在が恋しいのだろうか。

「ほほう、確かに今日は土曜だ。しかし、ただの休日という訳でもあるまい。念の為確認するが、今日が何の日か本気で忘れているのか？ それとも周囲の人間に迷惑を掛けることに喜びを感じる性質なのか？」

「今日？」

俺達が友達になった記念日だ！ とか言わないだろうな？ お前の口からそんな台詞を聞いた日には、空から槍が降って来ても文句は言えない。

それと、周囲の人間に迷惑を掛ける云々のところがさっぱり分からない。いきなりそんな事を言われてもこの顔を整形するにはお金も時間も足りないぞ。

「俺達が友達になった記念日か？」

「……やはりお前の脳は二ワトリ並みか」

「っ！ ちょ、失礼だろう！？」

確かにお手軽な食材として二ワトリさんの存在は偉大だが、それとこれとは話が別だ。俺も一応は人間。もし目の前に修がいたらデコピンの嵐をお見舞いしてやるほど失礼な比較だが、生憎と電話である。

「覚えてろよ！ デコピンでクリリンみたいにしてやるからな！」  
「果てしなく謎だ」

この内容の無い会話に無駄な時間を割いたと後悔しながら、携帯の電源ボタンに親指を掛けた。

「それじゃあな。切るぞ」

「待て馬鹿者。やや話が逸れてしまったが、まさか本気で今日の試合に来ないつもりか？」

「誰が馬鹿——へ？」

修のあまりに衝撃的な一言に、ついつい間抜けな声を漏らしてしまう俺。完璧に表情が引き攣ると同時に、忘れていた記憶が蘇る。

本日、9時30分から県立体育館で栄稜高校対白土学園高校の試合があるのだ。つまり、インターハイ予選の初戦。俺はたった今、遅刻の危機に瀕しているのである。

ようやくその重大な事実を思い出した俺は、言葉にならない声を漏らしながら慌てふためいた。その焦りっぷりに、電話の向こうでは少しばかり笑い声も聞こえる。

なぜ忘れていたのかは不明である。が、俺の脳は決して二ワトリに引けを取らないと判明してしまった。

「お、おい、修う！ 助けてくれ！」

「フフ、頑張れよ。お前がワールドレコード並みの走りを見せれば何とかなるかもしれん」

「無理！ 足が千切れるくらい走っても無理！ 俺の鈍足さを知ってるだろ！？」

「ああ、それともう1つ。俺達は先に学校を出たが、入れ違いにならないよう、高西さんには学校で待機してもらっている。合流してから来いよ。——さらばだ」

「え、ちょ、おい！ 学校まで行ったら2度手間じゃないか！ も

しもし、聞ってるのか!？」

プーップーップーッ――

「き、切りやがった……」

桃ちゃんを迎えに行く為に家から学校まで全速力で走って20分。そして、その中間地点にある鈴内駅までは学校から10分。さらに県立体育館までは電車で20分。今はおおよそ8時50分――

「アウトオオオ! 遅刻決定じゃボケエエエ!」

誰もいない家で叫ぶ俺。着く頃には既に試合が開始されている時間帯である。不味い。これは不味過ぎるぞ。

とにかく大急ぎで着替えを済ませて出発の準備を整える。こういう時に限って中々準備がはかどらないのは焦り過ぎだからなのだろうか。1分、1秒が惜しまれる状況下で、思い当たる荷物を片っ端から鞆に詰めていく。

「よし、こんなもんだろ。――待ってるよ桃ちゃん!」

大切な試合前にこれだけ全力疾走をして大丈夫なのかという疑問を胸に抱きながらも、遅れてしまえば本末転倒だと気付いて走り続ける。

「クソ、こんな時に自転車があれば楽なのに！」

俺の自転車は昨年の夏休みに大破した。琵琶湖を目指して豪雨に遭ったあの時に、慌てて自宅に引き返す道中で激しく転倒し、慣性で自転車は道路へするすると滑って行ってタイミング良く走って来た大型トラックに踏み潰されたのだ。さらば我が脚……と、そつと心の中で別れを告げてそのまま逃げた。ご遺体は放置だ。

それから走り続ける事およそ10分。駅を素通りし、学校へと向かう中でふと、遠目に見慣れた姿が見えて足を止めた。

「あれは……」

「おい！ 涼くん！」

「桃ちゃん？」

向こうも俺の姿に気付いたらしく、軽く手を振りながらこちらへ駆け寄って来る桃ちゃんを見て少し安堵する。

「おお、やっぱり桃ちゃんか！ でも、何でここまで？」

「えっと、涼くんの家からだ、学校よりも駅で待ってた方が早いかなって思ってた」

「ナイスだ桃ちゃん！」

少し息を切らす桃ちゃんの好判断に、どうやら救われたようである。これで20分は短縮出来るはずだ。このまま上手くいけば試合開始に間に合うかもしれない。最大限のお礼を桃ちゃんに言い、俺達はそのまま駅に入った。

ここで嬉しい誤算があった。鈴内駅から県立体育館のある原崎駅までを20分と読んでいたのだが、実際はそこまで掛からなかった。しかも、県立体育館は駅を出た目と鼻の先。準備諸々を考えれば遅刻に変わりはないが、それでも試合にはどうやら間に合いそうである。

心にゆとりのできた俺と桃ちゃんは、歩いて目的地を目指していた。

「案外大丈夫そうだな」

「うん、そうだね」

暢気に会話を楽しみながら歩を進め、時折白土の制服を来た生徒が視界に入って自分の表情が強張った。

彼らは応援にやって来たのだろうか。部員でもないのにこの休日に制服を来ているあたり、応援団か何かなのかもしれない。

そんな彼らを見て、緊張感の高まる自分を感じた。もうすぐ始まる。昨日のミーティングが終わった後、望くん先生はこっそりと俺に期待していると言っていた。もちろん、それは全員に掛けている言葉なのだろうが、それでもやっぱり嬉しかった。中学ではありえない話だ。中学時代の顧問にとって俺は空気のような存在だったらしく、部員の1人として数えられていたかどうかも怪しい。そんな俺に、嘘でも『期待している』と言ってくれる望くん先生にはやっぱり応えたい。今日は、与えられた仕事を一生懸命こなしたいと思う。

「緊張してる？」

「うん？ あ、うん」

どうやら露骨に表情に出ていたらしく、心配そうにこちらを覗き込む桃ちゃんと目が合った。

「そつか。……あのね、涼くん。こんな時に何だけど……ちょっといい？」

「ん？」

少し微笑んだ後、一変させて改まった真剣な表情を浮かべる桃ちゃんの問い掛けに、何かと短く返す。

「この前のことなんだけどね……」

「この前……？」

沈んだ表情の中にどこか決意に満ちた色を見せる桃ちゃんに、つついっし身構えてしまう。この後に待ち受ける展開が、あまり良いものではないと直感的にそう思った。だが、あくまで直感。思いついた通り、簡単な自己解決に至った。ゴクリと息を呑む。

「……私、涼くんのこと、全然嫌じゃないから！」

「……………」

……いきなりこの人は何を言い出すんだろう、というのが俺の率直な感想だ。それに、その言葉の真意が分からない。唐突にそんな事を言われて反応に困る俺だが、もしそのままの意味ならばどうやら嫌われていないらしい。

「そ、そつか。嬉しいな」

どう答えて良いか分からなかった俺は、それなりに素直な気持ちを口にしてみた。桃ちゃんが俺にどんな言葉を期待しているかは知

らないが、問題は無いはずだ。

だが、それが桃ちゃんにとって満足のいく答えではなかったのか、それとも腑に落ちない俺の様子を悟ったのか。事の詳細を説明してくれた。

「あのね、この前先輩に『涼くんの彼女？』って聞かれたことがあったでしょ？ あの時は咄嗟のことで気が動転しちゃって……」

ああ、なるほど。そういう事ね。それを聞いてようやく得心がいった。脊髄反射で俺を拒絶してしまったのは誤解だと、つまりはそういう事だろう。だからさっき『嫌じゃない』と言ったんだな。

正直、あれは笑って流せる話だと思ってたけど……かなり桃ちゃんは見目な人間らしい。しかし、事の発端は七井さんだ。あの人がいらん事を言わなければそもそもこんな事にならなかった訳で。

……よし、先輩だけどデコピン決定。クリリン2号の誕生だ。

「ああ、あれね。大丈夫！ 割と慣れてるから気にしないでいいぞ」

自分で言ってる悲しくなるが、イジメを克服してから俺は女子から恐ろしく人気が無かった。友達としての関係は良好だったが、所詮はそこまで。男らしくない＋王子様の隣にいた所為でより際立つ情けない容姿。そして、青春真っ盛りの中学時代に面と向かってこんな事を言われた。

『ええー、加住くん？ 友達としてはいいけど、それ以上は何か無理』

おい“何か”って何だよ！？ せめてちゃんとした理由ぐらい拳げやがれ！ というか、お前らみたいな奴らはこっちから願ひ下げだけだな！ 畜生！

これも踏まえて、俺は数々のそういつた発言を浴びる事で免疫ができた。迷惑な事に、『加住なら本音言っても傷付かないんじゃない？』的な空気が蔓延していたのだ。まったく、あいつらは俺を何だと思っていたのだろうか。まあ、笑い飛ばせるだけの器の大きさを俺が秘めているという事なのだろうか。フフ。

「でも——」

「大丈夫大丈夫。今さら嫌われてる云々言われても動じないぞ、俺は。——お、今の内に渡ろう」

桃ちゃんの言葉を遮って、信号の点滅し始めた横断歩道を足早に渡り始める。

本当に気にしなくても大丈夫なのだが、桃ちゃんの言葉をやや投げやりに遮ってしまった自分に少なからず違和感を感じた。桃ちゃんは懸命にこの前の事を撤回しようとしてくれているのだが、なぜかそれを聞きたくなかった。

今までのように軽く流せば済む話なのだ。現に、桃ちゃんに言われるまでこの前の事も忘れていた。しかし、今日またその話になって桃ちゃんが弁明しようとするの僅かに胸が痛む。これが一体何なのかは分からないが、これ以上不可解な胸の痛みが続くならそれを止めたいとも思う。

桃ちゃんと距離を取る為か、自然と歩調が速くなる。

「涼くん待つて！」

駆け足でやって来る桃ちゃんに呼ばれて振り返る。が、その時。ドクリと胸の鼓動が高鳴り、不意に嫌な予感がした。

振り返った先で、何かを言いたそうに悲しげな表情を浮かべる桃ちゃん。そして、その口を開いた時だった。

「……本当に誤解して欲しくないの。だってね、あの――」  
「――危ないッ！」  
「え――？」

直後。路面とタイヤの擦れる甲高い音とブレーキ音。鈍い音と鋭い衝撃が俺の体を襲った。

周囲から臆気に聞こえる悲鳴。それを、俺は地に伏しながら他人事のように聞いていた。

「……………」  
「嘘っ…………嫌…………涼、くん…………？」

耳に届くのは、駆け寄って来た桃ちゃんの泣きそうな声。それを聞いて一言、“大丈夫”と言って安心させてあげたかったのだが、口が上手く動かなかった。声にならない声を漏らし、倒れ伏す俺の頭の周りからは何か温かい液体が広がっていた。激痛の走る自由の利かない体は、とても自分のモノとは思えなかった。どうにも意識がはつきりしない中で、何とか少しずつ状況を呑み込もうとするも、上手く頭が働かない。

「だ、だいじょ、ぶ、か…………？」

言葉に出来たのはそれだけだった。まともな発音かどうかも怪しいその声に、より桃ちゃんの表情が曇った。

それでも、どうやら桃ちゃんは無事らしい。今でこそ晴れない表情をしているが、外傷は無いようである。

「うん、大丈夫だよ…………？ でも…………でも涼くんが…………！」

それを聞いて俺はホッと胸を撫で下ろした。一安心すると、急激に眠くなった。さつき起きたばかりなのに不思議なもんだと思いつながら、軽く寝返りでも打とうとしたが、やっぱり体は上手く動かない上に、再度激痛が走った。

瞳に涙を溜める桃ちゃんが、俺の目にはすごく儚く映った。遠退く意識の中で最後に何とか懸命に言葉を紡ぐ。

「だ、いじょう、ぶい」

ピースサインをつくり、その後にニカッと笑って見せる。我ながら寒い事を言うなーと、少し思ったけど、それに釣られて桃ちゃんも微笑んでくれた。

それを見てどこか安心した俺は、迫る異常な眠気に抗えぬまま俺の意識は暗い淵へと落ちていった。

「涼、くん……？ 嫌、嫌……嫌ああーっ！」

そしてそれは同時に、初めてのインターハイ予選が幕を閉じた瞬間でもあった――。

### 第31話 戻らない時間 part 1

それは、私の不注意が招いた惨事だった。

「——危ないッ！」

「え——？」

それまでの会話から一変して突然声を荒げる涼くんに、私は驚きながらも彼の言った言葉の意味が理解出来なかった。ただ間の抜けた声を漏らし、棒立ちで涼くんを見つめる。

すると、みるみる彼の表情が強張り、焦燥が滲み出てくるのが分かった。

涼くんのあまりの豹変っぷりに首を傾げる私だったが、その瞬間。彼は私の元へと駆け寄って来ていて、その勢いのまま私を突き飛ばしていた。

「っ……いたた……」

あまりに突然な出来事に、ますます状況の理解出来ない私は尻もちをつきながら涼くんの方へと視線を向ける。

直後。

路面とタイヤの擦れる甲高い音とブレーキ音が辺りに鳴り響いた。それも、そこは私がさっきまで立っていた所。

周囲に響く悲鳴。私はその中で、自分自身の目を疑わずにはいられなかった。

「嘘っ……嫌……涼、くん……？」

……認めたくなかった。こんな光景を受け入れられる訳が無かった。

頭から血を流し、虚ろな目で倒れ伏す涼くんの姿を――。

時折ゆっくりと体を動かし、その度に苦痛に歪む涼くんの表情が堪らなく痛々しかった。

私はそんな涼くんの元へ慌てて駆け寄ったけど、どうして良いのかも分からなくて、ただ涙を堪えながらおろおろとする事しか出来なかった。

「だ、だいじょ、ぶ、か……？」

不安げな表情を浮かべる涼くんが、心の底から私を心配してくれているのが分かった。こんなに大きな傷を負っているのに、どうして彼は私の心配をしてくれるのだろうか。

強く胸を締めつけられた。助けてあげたい――でも、目の前の涼くんに何もしてあげられない無力感が私を苛み、苦しめた。

「うん、大丈夫だよ……？ でも……でも涼くんが……！」

幸い、私は涼くんのお陰でかすり傷一つ無かった。でも、それはあまりに大きな犠牲の上にあつて……。

涙が溢れそうだった。だけど、この涙を流してしまえばきっと涼くんは心配してしまう――そう思っただけで懸命に堪えた。

それは確信。彼という人はそういう優しさと思いやりを持ち合わせた素敵な人。だから私もそんな彼に――。

「だ、いじょう、ぶい」

——ほら、今でもこうして何でもないかのように振る舞って……。

ピースサインをつくってニカツと笑う涼くんのその笑顔が本当に輝いて見えた。それに釣られて私も思わず笑ってしまう。

彼のその笑顔を見ていると、本当に大丈夫なのではないのだろうか、という気さえした。

だけど――。

「涼、くん……？ 嫌、嫌……嫌ああーっ！」

そつと目を瞑った涼くんが、その後目を開く事は無かった。

「おい！ 涼は！？」

勢い良く病室へと入って来たのは、普段の姿からはかけ離れて動揺する藍田くんだった。

その後、それに続くかのように男子バスケ部の人達と、少し遅れて佳苗や凜ちゃん達数人の女子バスケ部員がやって来た。

「お医者さんが言うには、何をしても無駄だろうって……」

「っ！ ちよつと、涼！ 起きなさいよ！」

病室のベットで、様々な医療機器に囲まれながら頭を包帯でぐる

ぐる巻きにされて横たわる涼くに駆け寄って声を荒げる佳苗に、私はそっと肩に手を置いた。

「……それと、今は静かに寝かせてあげた方が良いつて……」

少し青ざめた顔で力無く座り込む佳苗。声も出ないみたいだった。

「マジかよ……桃さん、加住はどういう状態なの？」

「……詳しくは教えてもらえなかったの。たぶん、まずは涼くんの身内の人に話してからだと思う」

珍しく柏木くんにも元気が無かった。よく見ると、少し震えているような気もする。

凜ちゃんや、この前の先輩。弘田先生や森下さん達も皆、衝撃で言葉を失っていた。

病室の中に重苦しい空気が立ち込め、しばしその中で口を開く者はいなかった。

「……あの、先生。試合はどうだったんですか？」

私は依然として重い空気で満たされた病室内で、今日の試合結果が気に掛かった。相手は強豪、白土学園高校。想像もつかないような相手だと涼くんも言っていた。

「あ、ええ……」

弘田先生は虚を突かれたみたいだったけど、すぐに我に返って続

けた。

「負けちゃいました……かなりの大差でしたよ」

私は大きく肩を落とす。俯きながらいた藍田くん達も悔しそうな表情をしているのが分かった。

きつと、試合結果を聞かされたら涼くんも凄く悔しがるんだろかなあ、なんて思った。彼の悔しがる様子も思い浮かべてみたけど、それ以上に次に向かってひたむきな姿で努力をしている光景が浮かんだ。練習中も、誰よりも声を出して1番足を動かしているのはマネージャーの私がよく知っている。

思えば、高校に入学してからすぐ涼くんと再会して、短い間だったけど未だかつて経験した事の無い充実感があつた。一緒に勉強して、部活して、行事があつて……。そんな、何気ない一時を思い返して思わず笑みが零れてしまう。

「桃……？」

「あ、ごめんね。少し考え事したら、つい」

そんな私を見て訝しげな表情をする佳苗だったけど、笑みもそのままに少し照れてしまう。

まだまだ高校生活は始まったばかり。これから、彼の近くでそんな充実した毎日を送っていきたい。

「……ちよつとあんた。涼がこんな状態なのに不謹慎だと思わないの？」

「佳苗……？」

決して戻らない時間の中で、今も眠り続ける涼くんを見て『頑張れ』と心の中で呟いていると、突然佳苗が普段は出さないような低

い声で私へと詰め寄って来た。

少しの驚きと共に、私は僅かに仰け反る。

「ど、どうしたの？」

「……どうしたもこうしたもないわよ。何で……何でこんな時にあんたはへらへらと笑ってられるのよ!？」

「ちよつと、滝下さん止めて下さい!」

もの凄い剣幕で私の胸倉を掴む佳苗に慌てて弘田先生が止めに入ろうとしたけど、佳苗は一向に止める気配が無かった。

中学で知り合った私と佳苗。あまり積極的に物事に取り組む事が得意ではなかった私は、誰とでも分け隔て仲良くなれて友人も多く、課外活動にも率先して参加出来る佳苗が羨ましかった。憧れ。初めはそんな感情に近かった。知り合ってから1番の友人となった私は、喧嘩なんてした事も無かった。

佳苗が怒るのも分かる。この状況で笑みを浮かべる私も悪いとは思う。だけど、それ以上に私は佳苗へ対して腹が立った。佳苗こそ何も分かっていない、と。

「……どうしてそんな事が言えるの？」

「あんたが空気も読めずにいるのが腹立つのよ! 本当にこの状況分かってんの!？」

「佳苗こそ分かってるの!？ 涼くんは私を庇ってこんな怪我をしちゃったんだよ!？ 本当なら私がここで寝てたはずなのに……私が……っ!」

溢れ出す涙を止まる事が出来なかった。

救急車に乗って涼くんと一緒に病院へ来たのは私。

お医者さんの沈痛な面持ちを目の当たりにしたのも私。

そして、そもそもの原因を作ったのも私。

なのに状況が分かっていると言われて本当に頭にきた。病院に着いた頃は常に最悪の事態が脳裏を掠め、涙が止まらなかった。

だけど、それではいけないと思ったのだ。涼くんはきっと元気になってくれる。逆を言えば、そう信じていないと落ち着いていられなかった。だからこそ、これからの事を考えていると笑みも零れた。彼の存在は日を追うごとに大きくなり、私は彼に夢中になっている。止まらない。彼に万が一の事あれば、私はどうなってしまうのか想像もつかない。

「……だったら。だったらあんたがもつと涼の事を気遣ってあげなさいよ！」

「少しでも良い方向を見据えようとして何が悪いの!？」

一歩も退かない佳苗に私もますます熱くなっていく。こんなに大きな声で怒りを露わにするのは生まれて初めてだった。

折れたくなかった。ここで私が退いてしまえば私の想いが薄っぺらいものに成り下がってしまいそうで恐かったのだ。

私も負けじと佳苗の胸倉を掴み返しさらに大きく息を吸い込んで喰って掛かろうとした。――が。

「あんたはただ現実から目を背けてるだけでしょ!？ 屁理屈ばかり言つて……!」

「っ！ それは……！ でも、だからって私が心配しているのに変わらない！ 私だって――」

「――2人とも良い加減にしなさいっ!」

ますますヒートアップする私と佳苗の間に声を荒げながら割って入ってきたのは弘田先生だった。

お互いに肩で息をしながら相手を睨みつける私達。

「あなた達はここをどこだと思っているんですか。2人がここにい

がみ合つてもどうにもならないでしょう？」

窘めるようにそう言い、私と佳苗を交互に見る弘田先生に怒気は無かった。

別に佳苗が憎い訳じゃない。ただ、私の想いを誤解していたのが我慢ならなかったのだ。

本当に、涼くんの事が心配なのは確か。だけど、どうして佳苗はそれを理解してくれなかったのだろうか。

未だに怒りは収まる気配が無かったけど、徐々に沈静化していくのを感じ取る事は出来た。私達は無言のまま弘田先生に向けて小さく頷き、気まずさからか、その場には再度沈黙が立ち込め始めた。

沈黙はついつい物思いに耽ってしまう。時間が経つにつれて怒りは収束を見せたけど、依然としてベッドの上で眠り続ける涼くんを見ているのが辛かった。

私が招いた惨事。この現実から目を背けてはいけない。でも、だからといってこの状況を平静なままで受け入れられるはずもない。蘇るのは、今朝涼くんが寝坊をして、大慌てで試合会場へと向かった事。試合開始には間に合うと分かってからはホッと胸を撫で下ろし、他愛のない会話をしながら会場へと向かった。

思えば、あの時に交わした言葉が最後だったのだ。事故に遭つてからも彼は私を気遣うような言葉ばかり。

私は悔しかった。自分の所為で好きな人が痛苦を抱える事になる

のが堪らなく辛い。

極力考えないようにしていた最悪の事態がいつの間にか頭を過り、無自覚に涙が溢れていた。

「涼くん……」

誰にも聞こえないよう、ポツリと彼の名前を呼んでみる。返答が無いと分かりつつも、その後にもう1度。

もう一度彼の笑顔が、声が、聞きたい。静かに眠る涼くんの傍らで、私はただ奇跡を願う事しか出来なかった。

「涼、くん……」

弱々しく紡ぐ彼の名前。だけど、それを掻き消すかのように病室の扉が叩かれた。

「どうぞ」

短く応える弘田先生と、それに合わせて入室して来たのは涼くんを診た女性のお医者さんだった。注がれる視線に軽く会釈し、病室内を見渡すお医者さん。沈痛な面持ちは相変わらずだけど、開口一番に出た言葉に私達は戸惑った。

「……ミスったな」

何を指しているのか分からず、当然のごとく全員が疑問符を浮かべる。妙な空気の中で頭を掻きながら佇むお医者さんは、居心地が悪そうに続けた。

「あー……皆さんは患者のお知り合いで？」

「あ、はい。僕は加住くんの担任兼部活顧問で弘田と申します。…あの、それで加住くんの容態はどうなんでしょうか？」  
「あー、先生でしたか。いや、実はですね…大変申し上げ辛いのですが——」

その後続く言葉を遮って、反射的に耳を塞ぐ自分がいた。聞きたくない。聞かなければならないはずなのに、体が勝手に動いてしまったのだ。

嫌な汗と共に鼓動が異様に速まるを感じつつ、思いの外あっさりと涼くんの容態を告げようとするお医者さんを少し不思議に思ったけど、緊張感の高まった病室内でその事を口にする者は誰一人いなかった。

しかし。

それ以上をお医者さんが口にする事は無かった。静寂の中で皆が息を吞んで待っていたけど、お医者さんは気にする様子もなくおもむろに涼くんの元へと歩み寄ったのだ。

私と佳苗は思わず顔を見合わせた。理解し難いお医者さんの行動をただ見守るだけである。

「……なるほど、やはりそれ相応の手段でなければ目覚めは厳しいか。では——」

そして、私は自分の目を疑った。

「——チェストオオオ！」

「——ギヤヤヤヤ！——い、痛えええ！？」

「え……」

「は……」

「涼……？」

一瞬、私はその場で固まってしまった。

お医者さんが涼くんの元へ歩み寄ったかと思うと、何やらぶつぶつ呟いた後、突然スネ目掛けて拳を繰り出したのだ。

私は目の前の光景に思考が追いつかなくて、ただ呆然とする。

スネを押さえながら凄い勢いで起き上がる涼くんの姿は、私が心の底から待ち望んでいたモノだった。叶わないと思っていた祈りが通じて、本当に奇跡が起こったのだと思った。

……だけど、本当にこれは現実なのだろうか？

分かり切っていた。あれだけの重傷の中で、普通に考えてそんなに簡単に目覚めるはずがない。

それは悲しい現実直面して事態を受け止めきれなくなってしまう私の作り出した幻で、もう1度彼の元気な姿を見たいと望んでしまったがために空想世界にでも逃避してしまったのではないのかとさえ思った。

「な、何！？ 何事！？」

でも。

「おい、涼！ 無事なのか！？」

「加住くん！？ 体は！？」

「加住……てめえ、大丈夫なのか！？」

「無事じゃないって！　す、スネが！　俺の弁慶が！」

これは夢でも、幻なんかでもない。

「カスミン……ここは病院よ」

「あんだ、車にはねられたのよ！？」

「やっぱり弁慶折れたの！？　というか、俺は弁慶を折る目的で病院にいたのか！？　準備良いなオイ！　事故関係無いし！」

それは、私が願った何気ない日常の再開。

「涼くん……！」

「おお！？　桃ちゃん、無事か！？」

彼の手を取れば、その温もりが伝わってくる。

「……………」

「……心配かけちゃったみたいだな」

これが現実だと実感出来る事がこんなにも嬉しい。

「……………うん」

「ハハ、ごめん」

そして、何より――

「……でも、桃ちゃんが無事で良かった」

――涼くんが無事で良かった。



### 第32話 戻らない時間 part 2

しばらく俺は、うるうるした瞳で上目遣いの桃ちゃんにマイライトハンドを握られている事に気付いて固まっていた。

どうやら今日は俺の触覚もすっかり働いているらしい。桃ちゃんは何を血迷っているのか知らないが、そんなに魅力的な瞳で見つめられて尚且つ手まで握られたら固まるのも無理はないと思う今日の頃。

勘違いするぞ？ いいのか？ 責任とつてくれよ！

「……………」

「……………」

「……………痛い」

それにしても、先ほどから感じる不可解なスネの痛みは何なのだろうか。

痛い。尋常じゃないぐらいに痛い。ついさっき皆からの視線を浴びつつ散々騒いだが、やっぱり痛い。スネにダンベルを落とされた感覚に近かった。

ほんの少し前まで病院のベッドで爆睡を決め込んでいた俺。車にひかれようとした桃ちゃんを目の当たりにして無意識の内に突き飛ばしていたのは記憶に新しいが、まさか意識を失ってしまうとは思いいにもよらなかった。何となく、病院に搬送されて来たのは理解出来る。が、正直ピンポイントで右のスネを強打した覚えはない。

しかも、俺の周りに陣取る無駄に威圧感のある医療機器の数々。たかがスネの打撲にこれだけ大層な設備が必要なのだろうか。謎だ。現代医療の謎だ。

「どこが痛いのだ？」

「す、スネがちょっと痛い」

「スネオがどうした、少年」

「いや、スネオじゃなくてスネだよ。ス、ネ」

「オ」

「いい加減にしやがれ！ こっちは弁慶が号泣してる……んだ……  
よ……？」

俺にやたらとスネオの話を振って来る人物の方へ勢いよく振り向く。が、その人物が不敵に笑っているのを目の当たりにして本日2度目の硬直を味わう事になった。

「よう、少年。久しいな」

「なっ……」

それは俺にとっての天敵。かつて、小さい頃の俺を何の躊躇いも無く泣かせていた大人の風上にも置けないような人。

5年前に越したと聞いていたのに、なぜこの人がここにいるのだろうか。昔から医者をやっているとは聞いていたが、まさかこんな所で再会するとは――

「お、叔母さん！？」

「……おい、少年。その呼び方は止せと言ったはずだろう？ 何なら、もう1発スネにお見舞いしてやろうか？」

「ちょ、これおば――翔子さんの仕業なの！？」

「気にするな、サービスだ」

「何のサービスだよ！？」

やっぱりこの痛みは事故の所為じゃなかったんだな！ 医者が患者に手を上げるってどんな状況だよ！

翔子さんが悪戯っぽく笑う姿を見て過去のトラウマがチラリズム。俺の忌まわしい過去の記憶の大半がこの人なのだから警戒心を剥き出しにして身構えるのも頷けると思う。

ちなみに、“叔母さん”と呼んではいるものの、父さんの妹でも母さんの妹でもない。あくまで俺が幼少期に勝手に呼んでいただけである。

というのも、実は翔子さんは叔父である昌太さんと滅茶苦茶仲が良かったりするのだ。父さん、昌太さん、翔子さんは幼馴染だったとかで、その腐れ縁が大人になっても切れずにちよくちよく家にも顔を出していた。俺も昔はよく遊んで――訂正。イジメられていたのだ。

そんな中で、それを温かい目で見守っていた父さんとは対照的に、俺と同様、翔子さんの玩具になっていたのが昌太さんである。それはそれは酷い仕打ちを受けていたが、どうやら昔からそういう構図がよく出来上っていたらしく、それはある種の仲の良さを彷彿させた。

同じ学年（今年39歳）でもある昌太さんと翔子さんは一見すると主とペットのような関係だが、時折2人きりになると肩を寄せて座っていたりするのは盗み見で確認済みである。フフ。

だから、幼い俺はそんな昌太さんと翔子さんは夫婦なのだと勘違いし、“叔母さん”と呼んでいたのである。今思えば、あながち見当違いという訳でもなさそうなのだが。

「……ほう、私の紹介をしてくれるのは結構だがな、聞き捨てならない単語がいくつか耳に入って来たのだが？」

翔子さんについての情報を掘り下げていると、少しばかり冷たさの籠った声色で俺へと一歩詰め寄る翔子さん。

ハッ、と思いながら病室内を見渡してみると、修達が知っている

はずもない単語があちこちから聞こえて来た。

『玩具』

『39歳』

『主とペット』

『盗み見』

『フフ』

「止めるおおお！ 俺の命に関わるから！ 何か違う連想しちゃうから！」

「さて、少年。昔を思い出すなあ……」

「止めて！？ 裾めくってスネを出して——っってもう弁慶は勘弁して下さいよ！？」

先ほどと同じ右足の裾をめくって軽く変色しているように見えなくもないスネがこんにちは。それを見てニヤッと笑って見せる翔子さん。

……恐かった。俺の緩すぎる口が原因なのはよく理解している。本当に申し訳ないと思ってもいる。

でもな、翔子さん。同じ部位は不味いつて。現時点でそこが1番重傷なんですよ？ どうせなら別の場所——

「——チエストオオオ！」

「ギャアアアア！？ ととと、とれた！？ 足とれた！？」

せめて心の準備ぐらいさせてくれよ！ というか膝から下の感覚がないのは気のせいかな畜生！ 痛みすら無いし！

病室内でまさかの切断事故か！？ と内心冷や冷やで右足を摩る俺と、かなり満足気な翔子さんが無駄に良い顔で笑っていた。

「さて、それでは本題に入ろうか」

「……シレつと何言ってるんだよ」

「何か言ったか、少年」

「い、いえ……」

小さな声でボヤクも、翔子さんの並々ならぬ殺意の籠った視線であえなく射殺された俺はベッドの上で縮こまっていた。

翔子さんは僅かに姿勢を正し、それまで呆然と俺と翔子さんのやり取りを傍観していた修達に向き直って咳払いをひとつした。

「あー皆さん、先にお詫びしておきます」

唐突な前置きに当然皆は疑問符を浮かべ、その中で互いに顔を見合わせる桃ちゃんと佳苗。疑問に思いながらも誰もそれを口にしないのは、翔子さんの言葉を待っているからなのだろう。

「あー大した事ではないのですが、少年が病院に搬送されて来てからの処置について、1つ。……特に、君にはきちんと謝罪しなければならぬ」

その後翔子さんは病室内を一通り見渡した後、桃ちゃんへ視線を合わせながら続けた。

「この度の過剰な演出と煽り——本当に申し訳ない」  
「……………」

「……………」

シーン——という表現がここまでしつくりくる場面は滅多に無いのではないだろうか。翔子さんの言いたい事が分からない人間が多数、というか全員らしく、ただポカンとした表情をするだけだった。しかも、その中で桃ちゃんを特別視した意味も分からず、いきなり話の中心になりつつある本人はあたふたとしていた。

「…………えっと、どういう事なのでしょうか？」

病室内に流れる微妙な空気の中、軽く頭を下げていた翔子さんに頬を掻きながら望くん先生が尋ねる。

「おっと、これは失礼。つまりぶつちやけて言うとか、大した怪我でもないのに大袈裟な処置してすまん——という事です」

随分とぶつちやけたなオイ。気持ち良いぐらいにノリが軽いこの人を見てみると、ちよっぴり医者イメージが悪くなったような気がしない事もない。

「…………と、これはまた…………」

さすがの望くん先生も翔子さんの奔放さに少し困惑している様子である。

ほらほら望くん先生からも何か言っちゃってくれよ。このままだと仕事を舐める学生が増えちゃいますよ？　ここはガツンと言ってやって下さい！

「…………さすがは加住くんのお知り合い、といったところですかね」  
「そっちなか！」

俺が“変な人”みたいな感じで捉えられてるのが凄く悲しい！  
どこでミスった俺の人生！

ふんだんに込めた期待をあっさり裏切る望くん先生に思わず嘆息する俺。

「しかしまた、どうしてそのような事をされたんですか？」

「いや何、少年の知り合いにちょっとしたサプライズを用意したかったのだ」

「なるほど」

不謹慎だろヤブ医者！ 望くん先生も納得してる場合じゃないから！

こういう大人が身近にいる俺だけはせめてまともに生きたいと思う。しかも、家には変質者といっても差し障りのない叔父までいるのだ。笑い方とか笑い方とか。

もう既にその道を進みつつある、というご指摘は華麗にかわさせて頂く。若者の希望を奪っちゃいけませんぜ。

『フッフ』と笑いながら何やら妙な盛り上がりを見せつつある大人2人と、その一方で置き去りにされたバスケット部員達。そんな構図の中で俺は、ただ頭を抱えていた。

「……っと、それでは私はそろそろ失礼する」

「そうですか。ご苦労様です」

ふと腕の時計に目をやった翔子さんは、何かを思い出したかのよう望くん先生との会話を遮った。

どうやら相性の良かったらしいこの2人。いつの間にやら2人の

世界に入り浸ってしまい、終始俺達は傍観を余儀なくされていた。面識の無い修達なら露知らず、翔子さんが会話を楽しむ最中に俺がカットインすれば後の報復が恐ろしくて下手に話し掛ける事が出来なかったのだ。理不尽に屈するヘタレの鏡。

「また機会があればお話ししたいものですね」

「ふふ、少年と関わっていればいずれそんな機会もあるだろう」

横目でチラッと俺の方を見る翔子さんに寒気がした。この偶然の再会が、今後の生活にどんな支障をきたすのだろうか。昌太さん、助けて。

その後に「では」と軽く会釈をした翔子さんは、機嫌良さそうに病室の扉へと向かう。

最後の言葉がかなり引つ掛かるが、これ以上の被害が無く翔子さんがこの場を去ってくれる事にホッと胸を撫で下ろす。

「ああ、最後にもうひとつだけ」

と、そこで急に足を止め、振り向き様に桃ちゃんへと視線を向けた。どうやら俺の方は向いていないらしいが、一瞬ドキッとしたのはここだけの話だ。

「その君、これから少年をよろしく頼む。何分、恋愛には不慣れな奴なのだな。恋人としては落第かもしれないが、良い奴なのは確かだ。どうか大切にやってくれ」

不敵に微笑みながらそれだけを言い残して病室を後にする翔子さん。……いや、“それだけ”と表現するのはかなり語弊があるのかもしれない。

「え、え〜と……翔子さん、な、何か勘違いしてたみたいだな」

気まずい。前もどこぞの先輩が同じ事をしでかしてくれたが、今回はその比じゃない。翔子さんの勘違い発言を聞いたオーディエンズに加え、今朝も桃ちゃんがその事絡みで俺に謝罪してくれたばかりだ。何となく、沈黙だけは絶対に避けたい。

「……………」

お、おふつ……微妙に視線が痛い。だが、桃ちゃんを一心不乱もとい変態的ともいえる目で凝視する俺は周りを見渡す余裕がまったく無い。ただ『返答を!』という念力をひたすら送るだけだった。

「あはは……そつ、そうみたいだね。さっきは手とかも握っちゃったし……本物の恋人同士みたいだったかな? とか言っちゃったりして。えへへ……」

照れながら笑う桃ちゃんが凄く可愛くて、俺の顔がだらしく緩んでいくのが分かった。それと、冗談でも“恋人同士”と言ってくれて嬉しかった。普段の俺なら『ひゃっほう!』と、飛び跳ねて喜んでしまうほどの吉日だと思う。もしかすると、今朝の事故はこれの代償なのではないのかと疑ってしまう。

しかし、だ。

「——ハッ! 殺気!？」

病室の中で明らかに危険なオーラを撒き散らす1人の男子。もうなんていうか、一目見ただけで分かる。こいつは危ない。というか、目が据わってる。

「ああ……納得いかねえ。無意味に手が滑りそうだぜ……」

そんな事を呟きつつ、おもむろに椅子を持ち上げるカシワさん。微妙に笑っているのがさらに恐い。

仮にも俺は怪我人。特に、スネに致命傷を負っている俺はあまり身動きがとれなかったりする。さすがに、そんな奴その椅子を振り下ろしたりはしないだろう。などと楽観的にカシワさんの奇行を見つめていた俺だったが、その直後。

「手が滑ったあああ！」

「ひっ！？——の、のど！ 今、のど狙っただろ！」

椅子の脚で的確に俺ののどを貫こうとしたカシワの一撃を、俺は横に転がって何とか事なきを得た。手が滑ったとか古典的な言い訳を抜かすカシワに尋常じゃない悪意が込められていたはきつと気のせいではないはずだ。

「チッ」

「悪魔かお前は！」

露骨に残念そうな顔をした上に舌打ちまでするカシワと佳苗の姿が何となく重なった。口にした瞬間に意識が飛びそうだが、どうやらこれから桃ちゃん絡みでカシワを怒らせない方が賢明らしいと、俺は胸に刻み込んだ。

最後の最後にとんでもない爆弾を放置していったそもそも原因である翔子さんにほんのりと怒りすら覚えたが、おそらくは偶然。だが、あの人の性格からしてこれも計算の内だとさえ思ってしまう。

結局その後、俺は危つく傷をさらに増やすところだったが、柔和

な微笑みで仲裁に入った桃ちゃんのお陰でカシワは一瞬にして沈黙したのだった。

少し肝を冷やした今回の一件。だけど、桃ちゃんも俺も無事で本当に良かったと思う。

翔子さんとやや不幸な再会をした上にスネの痛みも気になるが、今こうして不意に目が合うと照れくさそうに微笑む桃ちゃんの笑顔を守れたのだから万事オーケーだと思う。あの時、咄嗟に動けた自分を本当に褒めてやりたい。いや、まったくだね。

何だか少しだけ、俺と桃ちゃんの距離が縮まった気がした。……  
気のせいかな。ハハ。

### 第33話 前向きに頑張りました

「森下部長……」

「もう気にするな。お前が悪い訳じゃないだろうが」

「でも……」

「はあ……ったく。冬が出れないとは言ってもな、暇があれば練習は見に来るぞ」

週明け月曜の部活時間中、インターハイ予選の打ち上げとして部室でささやかなプチパーティーが開かれる中、呆れた表情を浮かべながらもどこか諭すように俺を見つめる森下部長。俺はそんな森下部長に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

先日行われたインターハイ予選。栄稜高校対白土学園高校の試合で、我らが栄稜の惨敗だったと修から聞かされたのは俺が無事に退院した翌日の日曜だった。

序盤こそ修やカシワの活躍によって優勢かと思われていたのだが、そこはやはり強豪校と弱小校の選手層の差なのだろうか。試合がある程度経過した頃合いにレギュラー組が姿を現し、瞬く間に形勢逆転。さらに、試合途中に俺の事故の連絡が入り、皆の士気がガタ落ちになってしまったらしい。まさかこんな所でも足を引っ張ってしまうとは思いにもよらなかった。本当に不甲斐ない。

そして、3年生である森下部長にとって今年は最後のインターハイ。残念ながらそれも初戦で潰えてしまい、さらに学業上の理由で冬のウィンターカップにも出場しないとの事なのだ。つまり、森下部長にとって今回が最後の大会だったのだ。

「俺が事故にさえ遭わなければ……」

「事情は聞いた。でもな、高西の前でもう1度同じ台詞を言えるのか？」

「そうですね、加住くん。大会の結果としては非常に残念なものになりましたが、人命には代えられません。もつと誇りなさい」

「……………」

男子バスケット部員達がそれぞれお菓子や飲み物を片手に談笑を楽しむ中で、ふと席を外していた桃ちゃんの写真が蘇って言葉に詰まる病院のベッドの上でも感じた事だが、あの時に咄嗟に動けた自分は褒めてやりたい。それは素直に思う。だが、だからと言って試合での敗因を担ってしまった自分を許す事が出来ないのもまた、事実だった。

「………… 森下部長はそれで納得出来るんですか？」

「無理だ」

「即答っすか…………」

やっぱり、最後の大会となれば良い結果を残して、良い思い出として残せるように頑張るのが普通だと思う。例え相手が強豪だとしても、万全の状態で臨んでそれでも敵わないのなら後悔なんてものはそうそう残らない。でも、その逆は言わずもがな。

だから、森下部長には申し訳ない気持ちでいっぱい、また同時に何とも言えない苛立ちが俺の中にはあった。

「………… そこで、だ」

胸中のモヤモヤに陰鬱な思いを抱きながらもそのモヤモヤを取り払おうと格闘してみるのだが、抗えば抗うほど高まってしまふ苛立ちに成す術無く頭を抱える俺。

森下部長はそんな俺を真剣な面持ちで見据えた。

「俺と1つ、約束しろ」

「……？」

「お前が引退するまでに、白土に一泡吹かせてやれ」

言い終えた森下部長の眉間にシワが寄る。いつの間にか、それまで談笑を楽しんでいた修達の笑い声も消え失せていた。

妙に重い空気が漂い、一変した部室内の雰囲気に着いて行けず呆ける俺。

「バスケットは中学から始めたがな、俺はあんなに己の無力さを痛感した事は無い。——同じ高校生なのになぜ？ 試合後も未だにその疑問が頭から離れん」

その後、森下部長はさらに続けた。

白土にあれだけの実力差を見せつけられ、それを単に才能差だと言って片付けられない自分。

180と少しの身長を持ちながらも白土の平均身長を僅かに下回っているものの、跳躍を含めると決して引けをとらなかった自分なのに、ことごとくりバウンドを取られ、シュートを阻まれ、パスさえもが通らない。

そんな技術差を埋める為には才能も大きく関わるかもしれないが、それ以上に“努力”に因るところが大きいのではないのだろうか。

部員数や弱小校という響きや枠に収まってしまっていた自分がそもそも敗因。だから、事故の知らせを機に落ちた士気はまったく関係が無いと言ってもいい。

個人的な見解ではあるが、士気云々を言うよりもまず、根本的に各々の力量が至らないという点では間違いない——と。

「森下部長……」

森下部長の言った事。それが、森下部長自身の意識の低さによるものだ和理解しつつも、やはりどこか励ましてくれているのと同時に、男子バスケット部の今後を案じて先を指し示してくれているような気がしてならなかった。

「己の怠慢が招いた結果なんだろうな、きっと。その責を後輩になすり付けるなんて恥ずかしくてでせん」

「あははー、部長がカッコつけてるー」

「……後輩に良い所を見せたいんだろうな」

「う、うるさい！ お前らは黙つとれ！」

菊池先輩や澤井先輩の茶々で一氣に和んでいくその場。そして、それを見て思わず笑ってしまう俺。

ついさっきまで胸に渦巻いていたモヤモヤがいつの間にか嘘のように晴れ渡っていた。これも、恥ずかしそうに誤魔化そうとしている森下部長の優しさに触れたお陰なんだと思う。いつか、俺もこんな先輩になりたいと強く感じた。

「森下部長……やばいっす。俺、泣きそうです」

「ガッハッハ！ 大袈裟な奴め。それにだ、今こうしてこの部室を使えるのは高西のお陰だろ。マネージャーは大切にしないといかん！」

そう言いながらムキムキの腕で俺の首を拘束する森下部長。息苦しさともさ苦しさで色々と大変だったが、その中で俺は大きく頷くだけだった。

入部したての頃はこのカビ臭い部室で着替えをするのが嫌で仕方なかったが、それもほんの数日、その話を聞いていた桃ちゃんの手

によって瞬く間に変貌を遂げ、今となつては寛ぎの空間となつている。衣類や靴、ホコリやゴミがあれだけ散乱する部室内の掃除なんて苦痛以外の何物でもないのに、文句1つ言わずに片してくれた桃ちゃん。それからも定期的に掃除してくれているし、部活中にスポーツドリンクを用意してくれたりゼッケンを洗濯してくれたり、森下部長をはじめとする男子バスケット部員は桃ちゃんに頭が上がらないのだ。しかも、練習開始前、練習中、練習後に見られる天使のような桃ちゃんスマイル。そのお陰で練習効率が上がっているのは決してカシワだけではないはずである。

「桃さんは最高だ！ 偉大だ！」

高揚状態にあるカシワが両手を上げながら何やら叫んでいるが、今日ばかりは俺もそれに乗っかろうと思う。

「まったくだな。本当に感謝しきれない。何より、桃ちゃん可愛いだもん！」

テンションが上がって『だもん』とか言う俺は中々にイタイ。が、今はそんな事を気にしない。

試合結果や森下部長への後ろめたさが解消された今、変に気持ちが高ぶるのはよくある事である。

「よく言った加住！ だがめえに桃さんは渡さねえけどな！」

「上等だオイ！ 俺の方が桃ちゃんを可愛いと思ってるけどな！」

「俺も負けてねえ！ 俺なんてもう既に桃さんと1回チューしてるけどな！ 妄想で！」

「きもっ！？ いっぺん断罪される！ 変態予備軍め！」

何だろうか、この醜いやり取りは。本人がいたら卒倒ものだと思

うのだが。俺もかなりの大声で恥ずかしい事を言ってしまったが、カシワはさらにその上をいってしまった。本当に恐ろしい男である。現に、その他の男子バスケット部員は俺達を完全に視界から切り離しているらしく、妙な距離感を感じたりする。ナイス判断。

「だ、誰が変態だてめえ！ それはNGワードだろうがコラ！」

気にしてたのかよ！ だったら自重しやがれ！

変態という言葉にあからさまに取り乱すカシワ。もしかして彼は何か前科があるのでは？ と、一瞬疑ってしまった。さすがにこの年でその道を進んでいないだろう。うん、きっとそうだ。そう信じよう。

それからもプチパーティーは暗くなるまで続いた。カシワと俺が暴走を続ける中で、それまで席を外していた桃ちゃんが帰って来たところで瞬く間に沈黙。部室に入った途端、固まる2人を目の当たりにした桃ちゃんはさぞかし不思議に思った事だろう。

あと、締めとして望くん先生が話し始めると、ジューズ片手に突然吉見が『白土戦で僕をほとんど起用しなかったのが敗戦の原因』と呟き始め、なぜか吉見は望くん先生を責め出した。まあ、修曰く試合に1番出ていなかった吉見が最も汗を掻いて脱水症状ギリギリの状態だったとか。

ともあれ、俺は森下部長との約束を果たすべく“打倒 白土”を胸に今後の練習に励んでいくと誓ったのだった。

「ふっふっふん」

閑散とした家路。街灯に照らされながらいつぞやの鼻歌を歌いながら軽い足取りで歩を進める俺。

今後の課題は大きい。俺のような凡人が打倒白土を掲げているのだから、生半可な努力では達成する事も難しいだろう。まだ2年あるとはいえ、悠長な事を言っていては上達できるかどうかとも怪しい。天才は努力を努力と感じていない、的な事を修が言っていた気がする。何だか意味不明だが、要するに凡人が天才に打ち勝つには発狂するぐらい努力しろ——という事だろう。

安直な結論だが、俺の優秀な頭脳が弾き出した答えなのだからきつとそうに違いない。

「とにかく、期末までに練習量を見つめ直してみるか」

ここでの“練習”というのはもちろん自主練習の事だ。素敵王子様やカシワのような輩に追いつくには部活以外で頑張るしか俺には道が残されていないかったりする。

明日の朝もランニングだー、と意気込みながらさらに歩を進め、今晩は久々に料理でも作ってみようと献立を考える。するとそこでふと、夜道にはあまりに不釣り合いな喧騒が耳に飛び込んできた。

「ちょ！？ それだけはあかんって！ それは刃物——ぎゃあああああ！」

何かとてつもなく凶悪な事件の香りがプンプンとする、どこかで聞き覚えのある男の断末魔。しかも、自宅に近付けば近付くほどのその声が大きく、鮮明になっていく。

「け、毛が、俺のオシャレ髪が！　おい翔子！　これどないしてくれんねん！」

「おい、昌太。私の散髪に何か不満でもあるのか？　返答次第ではこのハサミが火を噴くぞ」

「噴かへんわ！　武器とかせこつ！？　——ってコラコラ！　ち、近いわ！」

な、何なんだろうか、この光景は。すごい斬新な髪型をした昌太さんがシャンプーハットをかぶりながらハサミを手に不敵に笑う翔子さんから逃げ惑うという……。

き、危険だ。やっぱりこの人達は危険だ。なぜ翔子さんがここにいるのか非常に気になるけど、ここは一時退避がベターだろう。見つかるその後々厄介だからな。

2人に見つからないよう、そつと後退する俺。

「——ぬあ！？　おい涼！　ええとこに帰って来たな！　た、助けてくれ！」

ハハ、何となくバレそうな気がしてたけど。……お決まりつてやつか畜生！

「む、無理！　あんな殺人鬼相手にしてたら命がいくつあっても足りないから！」

「ほほう、少年。今流行りの昌太ヘアーは如何かね？」

「ちよつと！？　そのハサミ何か違う！　枝とか切るっばいやつだろ！」

2mほどの高枝はさみを手にして少し息を乱す翔子さんと、肩で息をしながらつむじを中心に4分割された、それぞれ髪の長さが違う昌太さん。

この人達はいい歳をして何をやっているんだろう、というのが俺の率直な感想だ。散髪にしてもハサミやらシェンパーハットやらと、色々とツツコミ所満載である。

「小さい事は気にするな。おい、昌太。少年を確保しろ」

「まかせとけ！」

「ちょ、ちょいちょい！ う、裏切るのか昌太さん！」

「あのハサミ火を噴くらしいで」

「噴かないから！ 翔子さんみたいな事言っなよ！」

「「そーれ、ばっさりー」」

何だその掛け声はあああ！ という叫び声と共に、このあと悲惨な断髪が行われたのは言うまでもない。

### 第34話 とある梅雨の日の朝

梅雨というやつは毎日雨は降るわ、湿気が多くてジメジメするわ、洗濯物は乾かないわでかなり毛嫌いする人も多いのではないだろうか。

雨が續くと何だか気分が沈むし、爽やかさの塊と言っても何ら遜色の無い俺が僅かに霞む。

夏を迎える準備をしている、と言われれば我慢できなくもないのだが、正直梅雨なんて無いに越した事はない。まあ、夏のカンカン照りで水が干上がってしまうのも考えものだけど。

「きやつ もお、サイアクー」

しかし、そんなありがた迷惑な恵みの雨を降らせまくる梅雨。苦手意識を持つ人も多いと思うが、場合によっちゃアリと思える場面もある訳で。

「アハハ、あんたびしょ濡れじゃん」

「もつとゆっくり走れてって感じだよねー、あの車」

土砂降りの中、とある女子生徒達の登校風景。雨なんてお構いなしに水溜りへ突っ込んだ車の跳ねた水が容赦なく女子生徒達に飛散する。

衣替えの時期を迎え、ブレザーを着用していない彼女達は学生シャツ。しかもその学生シャツというやつは案外薄いようで――

「ブラボー……！」

彼女達の後ろを歩く俺は傘を手放して盛大な拍手を送る。

「……カシワさんや、時には雨も乙な事をしてくれますな」  
「……まったくですな。朝から燃え滾るものを感じますな」

その後「『ほっほっほ』とジジ臭く笑って見せる俺とカシワ。登校時にたまたま出会った俺達は、顔を合わせるなりぶーぶー雨についての愚痴を互いに言い合っていたのだが、ここにきて一転。水を滴らせながら尋常じゃない色気を放つ女子生徒達との出会いが雨に対する評価を一変させていた。

「透けとりますな」  
「スケスケですな」

これはあれだ、普段から善行を欠かさない俺へのご褒美に違いない。具体的に何をやったかまったく思い出せないが間違いない。

先日刈り取られた俺の同志達（毛髪）への弔いになるのではないだろうか。今となつてはそれになり髪も伸びたが、それこそ、刈り取られた翌日はクラスどころか学校中の笑ひ者だった。

俺が廊下を歩けば、笑いという名の刃が容赦なく突き刺さり、顔も名前も知らない生徒達からすれ違い様に『ウケる』という感想を多々頂戴した。

そして我らが鬼神、佳苗さんは俺の頭をバシバシ叩きながら涙を流してお喜びになり、迂闊にも『鬼の目にも涙』と意味を多分に違えた台詞をポロリするや否や、笑いながらも器用にボディブローを放ってきた。当然、懸命の回避も間に合わずに直撃だったが。

まあ、そんなこんなで、“苦痛”の2文字に限る個性ヘアーの日々を無事に終えた訳である。今はそのご褒美という事で、目の前の光景が広がっているのだと思う。

「だぁー畜生！ 雨の野郎、最後の最後で強くなりやがった！」

ダッシュで昇降口へと駆け込む俺の制服は、突然激しさを増した雨脚によって悲惨なものに成り果てていた。傘を差していても何のその、制服から滴る水滴と張り付くシャツに僅かな不快感を覚える。ちなみに、カシワは持ち前の俊足を活かして俺を置き去りにしていった。白状な奴め。

「何てこった、体操着にでも着替えるかな……」

雨を存分に吸って重さをプラスした制服に身を包みながら、教室へと向かう。途中、雨によってか髪が濡れてセクシーさ3割増のイケメン男子とすれ違った俺は、自分もおそらくフェロモンを撒き散らしているに違いないと確信し、トイレに駆け込んで鏡に映る自分を確認したが、予想以上に微妙過ぎて1人で失笑してしまった。あれはイケメン限定だと悟った。きっと、あの素敵王子様も今日は一段と女子の方々を惹きつけているに違いない。

「おっはよう！」

「おはよー」

「おっす」

「はよっ」

教室の扉を開いて元気良くクラスメイトと挨拶を交わす。雨に濡れたところで何のセクシーさも生み出さないのならば、せめて爽やか路線で攻めようという浅はかな考えを胸に秘めながら。

クラスの中にも、俺と同様に雨に打たれてずぶ濡れになった連中が何人が居たらしく、各々タオルで髪や制服を拭いている姿がチラホラ見受けられた。ほんの少し、ほんの少しだけ女子達をチラ見したのは男の性だから仕方ない。

「あんたもあの雨にやられたの？」

爽やか路線で攻めると決めた矢先に決意のブレを感じていると、髪をタオルで拭いながらこちらに近付いて来る女子に、俺は勢い良く視線を合わせた。

「……何だよ、佳苗か」

「……何よ、そのガツカリした感じは」

心の奥底で麗しの桃様が雨に濡れた色っぽい姿で俺に話掛けて来てくれる姿を想像していたのだが、現実というやつはそう上手くいかないらしい。

声の主が佳苗だと分かるなり、分かり易いぐらいに肩を落とす。というか、こいつは別クラスのはずなのだが。

「いや、別に。それよりさ、俺にも――」

「やだっ」

「聞けよ!」

俺の言いたい事を察したのか、言葉の途中で遮った佳苗の清々しい表情は見ていて爽快だ。どうやら、俺の制服から滴る水滴が彼女の目には映っていないらしい。

タオルぐらい貸してくれても良いと思うのだが、佳苗はタオルを自分の後ろへと隠してしまった。

ちなみに余談だが、繊細な仕草で濡れた髪を拭う彼女の姿に少しばかりドキッとしたのは心の中に秘めておこう。

「せめて最後まで聞こうか、佳苗さん」

「ったくもう……で、何よ？」

やれやれ、と口にしながらかれたご様子の佳苗さん。傍から見ると、俺が駄々をこねているようにも見えないのが不満で仕方ない。

「だから、その夕——」

「やだっ」

「畜生！」

腹立つ！ やってやった、みたいな顔してる佳苗が腹立つ！ 最初からお前に頼んだ俺が馬鹿だったよ！

確信犯に違いないこいつへ対する憤りを隠す事もせず、その場で地団駄を踏んで怒りを存分に表現してやった。

地団駄を踏んだ際、水滴が飛び散り、周囲の生徒があからさまに不快感を露わにしていたが、そんなものは当然の如く黙殺。不満があるなら佳苗に言って下さい。

「だいたいね、あんたなんかタオル貸したらどんな使い方するか分かったものじゃないわよ。……ああ、考えただけで寒気がするわ」

人を変態みたいない言い方するなよオイ！ 俺はカシワか？ カシワなのか？ 違うわ！

というかね、タオルにそんな特殊な使い方があるとは思えない訳

だよ、俺は。

「こんなイケメンに使ってもらえるんだから嬉々と差し出……………」  
さなくてもいいです、ハイ」

途中から、佳苗の眼差しが鋭くなるのを俺は見逃さなかった。悲しい事に、ほとんど脊髄反射だった。

そんな俺の反応を見て満足したのか、佳苗本人は、じゃねーと軽い口調でそそくさと俺達のクラスを後にしたのだった。あいつを見ていると、俺は優しい人間になろうと誓うことが出来そうである。

「うええ……………気持ち悪い」

結局、佳苗からタオルを借りられず仕舞いだった俺は、やはり着替えるしかないと自分の席に向かった。

あの後すぐ、俺達のやり取りを見ていたらしい桃ちゃんが気を遣ってタオルを貸してくれるという話になったのだが、タオルを受け取る瞬間、俺の前を1つの影が横切った。

影の正体は本物の変態、カシワ。満面の笑みで桃ちゃんから奪ったタオルに顔を擦りつける姿は一見無垢にも見えるが、カシワの本性を知っている身としては悪寒を感じずにはいらなかった。もっとも、桃ちゃんはそれを見て優しく微笑んでいたが。

正直、桃ちゃんの香るタオルは滅茶苦茶興味があったのだが、カシワを敵に回さずに済んで良かったとも思った。

「あら、おはよう」  
「おっはよう」

席に着くと、そんな声が聞こえて軽く挨拶を返す。声の主はもちろん、隣のリンリンである。

「あなたも随分雨に打たれたようね」  
「そうなんだよ、雨が急に強くなってさ」  
「お互い大変ね」  
「だな」

鞆から教科書を取り出して机に突っ込みながら、特にリンリンの方を見る訳でもなく相槌を打つ。どうやらリンリンもあの雨にやられた内の1人らしい。  
お互い運が悪いなー、なんて話しながら、あらかた教科書を机に移し終えた後、リンリンの方へと向き直った。

「……結構ひどいな」  
「ええ。お陰で下着も濡れてしまったわ」  
「そ、そうか」

臆することなくリンリンはさらっとそう告げたが、それはそれでこちらが照れてしまう。

それをきっかけにリンリンの足下から頭まで一通り見渡してみたが、その姿を目の当たりにして俺は絶句した。

「な……」

何というか、その……魅力的なのだ、彼女は。水滴が胸元や太股

を伝って床に落ちる光景は、純情少年である俺には刺激が強過ぎた。暫しの硬直状態に陥り、失礼だとは理解しつつもリンリンを凝視。肝心の彼女は、そんな俺を前にして首を傾げていた。

「どうしたの？ 少し様子がおかしいようだけれど」  
「——ハッ！ なっ、何でもないですぞ？」

口調が変になったのは俺が動揺しまくっている証だ。だが、正直に言おう。リンリンに見惚れていた。相も変わらず彼女の長い髪で表情は隠されてはいるものの、濡れた髪から普段よりも若干露わになっている顔。

それが何より、綺麗だった。

もちろん魅力的な胸元等にも興味を惹かれたが、それ以上に、彼女の髪の内側が気になって仕方がなかった。

完璧に隠れている訳ではないのだから——いや、少し露わになっているからこそ、余計気になるのだ。その髪の所為でリンリンはどうにも損をしているような気がしてならない。

俺なりに彼女へアドバイスを試みるか？ とも思ったが、修ならともかく、乙女心を欠片も理解していない俺が口を挟むと何かわけがまわりが残りそうだと思う躊躇してしまう。

興味本位でお節介を焼くのも悪いし、折角リンリンとは仲良くなれたのだから、少なくとも今はこれでいいのかもしれない。

「そう、あなたは私をそんな目で見ていたの……少し幻滅したわ」

思考に耽っていると、一瞬考えが読まれたのかとドキつとした。途端にソワソワを始める俺だったが、リンリンの指していた言葉が俺の思い悩んでいた事ではないと気付き、ホッと胸を撫で下ろし

た。

「所詮、男子なんてそんなものよね」

が、しかし。

何だろうか、この感じ。リンリンから放たれる途方もないガツカリ感と、ものすっごく蔑んだ目。

どうやら別の誤解は生まれてしまったようだった。

違う、違うぞリンリン。俺は断じてそんな目でリンリンを見ていないぞ。いや、見てたけど仕方がないんだ。だって思春期だから！

「違うんだよ、違うないけど違うんだって、いや、違うない！」

「違うないの？」

ミスった！ 認めてどうする俺の馬鹿！ しかもかなり自信满满！  
リンリンが少し距離を取ったのは気のせいだろうか。しかも、チクチクと視線が痛い。とにかくこの状況は居心地が悪い事この上ない。

「あの、リンリン？ そんなに引かないでもらえませんか？ とても傷付くのですが……」

敬語を使っているあたり、俺の心情を察してもらえるのではないだろうか。おろおろと挙動不審に陥っている俺は傍から見れば間抜けかもしれないが、クール要素なんて持ち合わせていないのだから仕方がない。

「き、聞いてますか……？ そろそろ限界——」

「ふふっ　うふふっ」

身を刺す視線に限界が訪れた頃、それまでの様子から一変して突然笑い始めたリンリン。そんなリンリンを目の前にして訳が分からん、と俺は首を傾げた。

もちろん、それはそれでこちらとしても有り難いのだが、正直なぜ笑い始めたのかまったく理解出来ない。

その場で数秒固まった俺は、依然として笑い続けるリンリンの様子を探った。

「り、リンリン？　どうした……？」

「うふふっ……ごめんなさい、あなたがあまりに面白いからつい、ね？」

「は、はあ……」

えーっと、それはつまり、何だ、俺がからかわれていたという事か？

いや、待て。全てにおいて同世代からは逸脱した落ち着き具合と達観した装いを持ち合わせた俺をからかうだと……？

……あ、違うわ。これ俺の事じゃないよな。むしろ修の事だ。

という事は、やはり俺は――

「からかったのか!？」

そうそう、ようやくそこへ辿り着けました。よく頑張った俺！

「あなたを見ていると飽きないわ。好きよ、あなたのような人。ふふっ」

聞いたかオイ！ 好きだつてさ、これはもう告白だよ！ モテ期到来バンザイ！ —— って違えええ！ どんだけ愉快な頭してるんだよ俺！

自分がアホだとうやく気付いた、15の梅雨時。何だかちょっぴり成長した気がしました。

リンリンの悪戯に、ものの見事に翻弄された俺は、不幸にも自分の新しい一面を垣間見る事が出来たが、リンリンってこういう性格だったか……？ と、疑問を抱くようになるのは、まだもう少し後の話なのだった。

### 第35話 気持ちが分かるから

「お前、C組の澤井って知ってる？」

「え、誰それ？」

「ほら、あの髪が長くて気味悪い奴だよ」

「あーあいつね。それがどうしたよ？」

「なんかさ、また黒木と言いつつてたみたいだぜ。って言っても、完璧に黒木の言い掛かりみたいだけ」

「はっ、またかよ。軽くイジメ入ってるよなー、あれ。見てる分にはおもしれーからいいけど」

「ハハ、だよな」

制服が生乾きで臭さ全開の昼休み。今日も絶好調で降りしきる雨を、階段に腰掛けながらボーッと眺めていると、そんな不穏な会話が聞こえて思わず眉間に皺を寄せた。

C組の澤井といえばもちろんリンリンで、黒木という奴は……知らない。

目の前を通り過ぎて行く男子生徒達をこっそり睨みつつ、ふと当事者のリンリンが気に掛かる。

初めてリンリンと出会った時もそうだったが、彼女自身、男子に対する態度というのが少しばかり厳しいところがある。きっと、不器用なんだと思う。

だけど、それを快く思っていない人間も少なからずいる訳で、こうして陰口を叩かれるのも少なくないと本人から聞いた。リンリン自身は気にしていないと言っていたけど、リンリンの人柄をある程度知っている身としては正直腹立たしい。

今朝も……リンリンにおちよくられたな。そんな新たな一面を見せてくれてるのは、仲良くなっていつている証拠だ。

だったら、少しでも何かしてあげたいと思う。

俺は立ち上がり、去って行く男子生徒達に向かって大声で叫んだ。  
俺の覚悟をしっかりと見ていてくれ、リンリン。

「バーカ、バーカ！ ボケエ！」

言い終えてすぐ、走り去る俺を勇者と呼ばずに何と呼ぶ。これこそが俺の本気だ。

振り返った男子生徒達がすごい微妙な顔をしていたが、俺の巧妙かつ大胆な精神攻撃に彼らの精神状態は崩壊寸前に達していない。  
満足気な顔をして廊下を疾走する俺は達成感に満ち溢れていた。  
更にスピードアップだ。

……しかしだ。雨が降ってる日の廊下って凄いな。何が凄くて、恐ろしく滑るんだよ。

「——ぬ、ぬお！？」

それに俺ってさ、ほんの少しだけ運動神経にマイナス要素あるだろう？ だからね、顔面からいっちゃった。鼻血が出ていないことを切に願うばかりだ。

そのまま意味もなくそのまま寝そべる俺。そんなお茶目な俺に更なる悲劇が起こった。

「ぎゅふ！？」

「あら、ごめんなさい」

「ひつ、人を踏むとは何事だリンリン……」

「この場合、廊下で暢気に寝ている方が悪いと思うのだけれど。違ったかしら？」

「……いや、常識的に考えてそうっすよね」

廊下ダイブを決めた矢先に、教室から出て来たリンリンに踏みつけられた俺は鼻血を垂らしていた。

いやいや、ちよつと待て。廊下でこけたのもあの男子生徒達に仕返しをしてやろうと思ったのがそもその始まりだろ？

だったらリンリンの……アホだな俺は。それじゃ意味無いだろ。

「大丈夫？ 鼻血が出ているようだけれど。……これ、使って」  
「お、すまねえ」

そう言っただけで受け取ったのは純白のハンカチ。しかし、何となく高価そうなこれを真つ赤に染める勇気が微塵も無い。

さもハンカチで鼻血を拭っているかのように、エアーで高い演技力を見せる俺。結局拭けていないのだから、バレるまであと数秒なのだが。

それにしてもだ。よく見やがれ、さっきの見知らぬ男子生徒達よ。なぜにこんな優しい子の悪口を叩く。

少しばかりいたずらっ子だが、普段クールなリンリンがそんな一面を見せてくれるとそれはそれで可愛らしいものがある。

なのに気味が悪い……。と。リンリンのお肌がとうるつとうるのスベスベだと声高らかに言いたい。そしてセクハラ覚悟で触りたい。俺が。

「……この手は一体何なのかしら？」  
「——ハッ」

無意識の内に手を伸ばしていた俺の将来が猛烈に不安になった。そして、頭にチラッと浮かぶ叔父の影。

これで悪寒を感じない人間が一体どこにいるのか知りたい。

「ところで……ひとつ聞きたいのだけれど、いいかしら？」  
「ぬ？」

意地悪な微笑みから一変、少し表情の強張るリンリン。そんな彼女を前にして俺は首を傾げた。

「……さっき、あなたはどうしてあんなことを叫んでいたの？」

少し、ほんの少しだけドキとした。教室の中にいたリンリンがさっきの男子達が話していた内容を知っているとは到底思えないから、何となく、そのことをリンリンに知られたくないと思ったのだ。だから、俺は咄嗟に思い浮かんだ出鱈目を口にすることにした。

「そのーなんだ、最近雨ばかりだろ？ いい加減にして欲しいから雨雲を思いっきり罵倒してやっただよ」

「……………」

「たぶん、明日から晴れるぞ。フフ、俺に感謝しろよ？ リンリン」  
「……そう」

言い終えて、リンリンはその場から立ち去ってしまった。

はつきりは見えなかったが、最後にチラッと窺うことの出来たりリンリンの表情——それが、とても悲しそうな気がした。

確信はないけど、あるいはさっきの出来事も気付いていたのかも

しない。

前は気にしていないと言っていたくせに、あんな表情をされてしまつとどうにかしてあげたいと思つてしまふ。

例え本人が望んでいなくても、あの表情を取り去ることが出来るのであれば——ついついそんなことを考えてしまふ。

「……やれやれ」

誰に聞こえるでもなく、俺の呟きは周囲の喧騒に消えていった。

「えー、ですのでこの時代における新たな潮流が現代における基盤となり、今でも深く根付いている訳で——」

翌日の授業。しかしどうにもその授業に身が入らないでいた。いつも通りじゃん、という指摘は無しで。

「……………」

ふと隣の席に意識を向ける。

隣の住人は授業そっちのけで窓の外へと目をやっていた。

机の上に開かれたノートはまだ真っ白のまま、授業が始まるなり今の状態だ。

普段の彼女は勤勉で、ノートも漏れなく取っている。授業中に寝るなんて以ての外で、こうやって余所見をするなんてことも滅多に無かった。

そんな彼女が今、ノートも取らずに上の空なのは、心苦しいが昨日の出来事に他ならない。

何を考えているのなんて当然分からないが、あまり良い方向での考え事でないことだけは確かだと思う。

普段から真面目に授業を受けているリンリンではあるものの、ふとした瞬間に何気ないお喋りをしたりすることもちよくちよくあるでも。

元気出せよ、なんて気軽に言ってしまうことが無神経な気がした。今、この瞬間に何も出来ない自分。経験値の低さというか、咄嗟の機転の利かなさに辟易する。

もしかして、昨日の出来事なんて全然関係無くて、ただ単に機嫌が悪いだけなのかもしれない——そんな考えが頭を過ぎって、すぐにそれを取り払った。

それは、そう考えるにはあまりにも——リンリンのあの表情が悲しそうだったから。

あの髪で顔があまり見えていなくとも確信出来たのは、昔に鏡で見た小さい頃の自分に似ていた気がするから。

そして何より、こんなのリンリンじゃないと思うから。

ただ単に、いつもの、普通の、ありのままのリンリンがいい。

そんな子供染みた、身勝手かもしれない俺の願いを実現させる為には。

考える。彼女を元気にさせる理想的な方法。根本的な解決方法を。……考えてみるのだが。

「……駄目だ。思い浮かばん」

何のアイデアも捻り出せない情けない頭をぐわつと掻いて机に頭垂れた。

「涼！ こっちに回せ！」

「ふぁ？ お、おう！」

廃墟——もとい第3体育館で部活に励む放課後。これだけ外では雨が降りしきっているのに、この見栄えで雨漏りをしていないという事実。

俄かに信じ難いが、これはこれでラッキーに違いない。つるつる滑る体育館なんて危な過ぎて使えたもんじゃない。もっとも、目の前でパスを要求するこの素敵王子様なら顔色変えずに普通に練習してそうだが。

修の放ったシュートが放物線を描きながら、リングに触れること無く綺麗に潜っていった。相変わらずの安定感を見せやがる。

「はい、それじゃここで一旦休憩でも取りましようか」

修のシュートを区切りに、望くん先生が2回手を叩いてそう告げる。

「涼、どうした。今日は何時にも増して集中を欠いているようだ」

「……いや、何でも」

「ふむ……。まあ、言えるようになったら言え」

「悪いな」

「ふつ、構わん」

それだけ言葉を交わして修や、各々の部員が桃ちゃんから渡されたタオルとスポーツドリンクを手にながら休憩に入っていく中、ふと隣で練習を続ける女バスの方へと意識がいった。

佳苗や七井さんを始めとする見知った人達が男子顔負けの動きで練習に励んでおり、その中でも特に七井さんの動きが尋常じゃない。なぜにノールックパスがそんなにポンポン通るんですかと言いたいぐらいによく通る。決してその他の女バスの方々が下手な訳じゃない。むしろ俺の数倍は上手いと胸を張って言える。……へへ、自虐最高。

多分、七井さんは目が7つあるんだと思う。七井さんだけに。

「……何で佳苗さんがこつち睨んでるんですか」

俺の寒過ぎるギャグに佳苗さんから手厳しいお叱りを受けたが、その佳苗も何と言うか……豪快だ。ドリブルが半端じゃない。見よによっては他の部員を弾き飛ばしているように見えなくもない。テクニクというよりも、パワーとスピードで強引に抜き去っている感じ。さすがは鬼のドリブラー。性格に違わぬ男前なプレイスタイルだぜ。

「……だから何でこつちを睨むんですか、あんたは」

練習中だというのに、器用にこちらを睨んでくる佳苗。まるで俺の心の声を聞き取っているかのようである。恐ろしい。

しかし、七井さんの真似なのか、睨みながらのノールックパスは味方のいない明後日の方向へと出され、無常にもボールは体育館の壁に当たってコロコロ転がっていた。

「ぷっ」

思わず笑ってしまった直後。絶対的な過ちを犯してしまったと後悔した。件の佳苗さんが、口パクで何かを言っているのだ。

『明日才前死ヌ。コレ絶対』

何か禍々しいジェスチャーと共にそんなことを言っている気がしてバっと勢い良く視線を逸らしたのはきつと正解に違いない。あれだけの殺気を現代の女子高生が放てるとは到底思えないぐらいの恐怖感。うん、明日は休もう。

しばらく視線を外して冷や汗が引いたのを確認した後、もう一度女バスの方へと視線を戻す。男子とは違って人数の多いその中から1人の部員を探してみる。

「今日もない、か」

だが残念ながら、昨日に引き続いて今日も部活に姿を見せていない彼女。最低限学校へは来ているが、やはり部活に臨むモチベーションまでは持てないようである。あの気の沈みようを見ていれば、それも納得出来てしまうのだけれども。

これだけリンリンのことが気に掛かるのは何でかな……いや、決まってるか。今日の授業中にも感じた通り、リンリンが昔の自分にダブって見えたからだ。

あの辛さを1人で取り去るのは至難の業だって知っている。だから、誰かがリンリンの手助けをしてあげなくちゃいけないと思う。

——偽善？

大いに結構。結果として全てが上手くいくなら偽善でも何でも良い。放っておけない人がいたら助けてやれ——あまり見習ってはいけない部分もあるが、それ以上に尊敬出来る叔父の言葉だ。

今は亡き叔父の言葉を心の中で反芻する。俺が昌太さんや修にしてみらったように、今度は俺がリンリンにしてあげる番だ。

フフ、何だか今日の俺はナイスでダンディだ。待ってるよりリン、イケてるメンズ代表の俺が何とかしてやるからな！

1人よがり全開な俺は、休憩が既に終わっているとも気付かず、ただただ1人でニヤけていた。

ちなみに。

『涼、おっちゃんをはまだまだ現世に健在やで！』by加住 昌太

### 第36話 自重って大切

おはようございます。加住 涼です。今日の私はいつもより早起きです。

まだ人通りの少ない通学路を傘を差しながら歩き、学校近くのコンビニで少しばかり立ち読み。

決して時間の使い方が下手なのではなく、只今待ち伏せ作戦を実行中なのです。

実際、本なんて読んでいません。私の視線の先にあるのは、コンビニ前を通る人達。ターゲットはリンリンです。

人の群を私ご自慢の鋭い眼光で観察。さながら、獲物を見定める狩人のよう。

そんな私の威圧感に圧倒されたのか、コンビニの前を通る人達が怯えた表情で去って行きます。

生まれ持った才能、というやつでしょうか。こればかりは誰にも真似出来ません。及ばずながら、食物連鎖の頂点に到達してしまつたようです。

人間観察というのは面白いものです。数多の個性を垣間見ることが出来ます。

ほら、また1人、私の前を通って行きます。

「もういいっち、いい加減にして欲しいっち。さつさと梅雨っちも終わるっち。さすがの俺っちもご立腹っち」

おやおや、見慣れた顔ですね。ですが、普段は温厚な徳田っちも長く続く梅雨にご立腹の様子。大変珍しい光景です。

「ちっちっちっち………！」

もう、何を言っているのか理解が及びません。何か、天災の前触れなのでしょうか。私も心構えをしておくことにしよう。

「この制服って翔学女子のだね？　ね？　そうだね？　カワイイじゃん！」

奇声を発しながら去って行った徳田つちから数分後。何やら華やかな女子生徒達の集団に紛れ込む雑草こと、カシワを発見しました。次第に険しくなる女子生徒達の表情などお構いなしの彼は、その身に突き刺さる彼女達の殺気を感じ取れないよう。

無視という最大限の拒絶をものともしない彼の精神力は、最早人間に許された領域を逸脱しています。

「めっちゃタイプだわ。ね、連絡先教えてよ。あ、今日の放課後にさ、どっか行こうよ。俺がおごる——」

「——っるさいのよさっきからッ！　あんたバカじゃないの？　5、6回死ねばいいのに」

おやおや、手厳しいお言葉を頂いていますね。私だったら1週間は立ち直れないことでしょう。

ですが、優れ過ぎた存在というのも辛いものですね。

「あつ、そうか。放課後っていつでも部活の後だと結構遅くなるもんなあ。分かった。んじゃ、また明日にしようか！」

全く、恐ろしいものです。彼の思考を占める正の感情が負の感情を圧倒しているようです。都合の良い展開へと強引に誘導せんとするその行動に迷いなど微塵ありません。

彼の見ている世界は私達のそれと同一なのか、謎は尽きません。

「さーて。今日も桃さんにちょっかいかけるぞっ！……いや、夢さんもあらか？　ありに決まってるだろ！」

高らかな宣言と共に天へと突き上げられた拳に宿るのは、まごうことなき欲求への渴望。見目麗しい女子に対する想いが彼の動力源になっていることは想像に難くないでしょう。

「ふむ……やはり今日も雨か」

お次は我らが王子様こと、修の登場です。彼の歩く後ろには、いつも女子の影が見受けられます。

「あの人が藍田くんじゃない？」

「ウソ！？　想像以上にカッコイイんだけど！」

「ね、ね、話し掛けてみようよっ」

「ええー、ダメ！　緊張しておしりから心臓出そうだもん」

「アッハッハッ！　どうせならヘソから出しなさいよ」

「ヘソは茶を沸かすのに精一杯だって話よ？」

「てか、何この会話。アタシらってめっちゃイタくない？」

「いつもじゃない？」

どうやら、この世界の闇を覗いてしまったようです。近い将来、彼女達は本当におしりから心臓を出す日が来るかもしれませんね。今日から欠かさず新聞には目を通すようにしましょう。

「やかましい奴らだ」

ちよつぱり個性的な乙女を引き連れている素敵王子様も少しげんなりなご様子。雨の中、空を仰いだ彼の瞳に映っているものは一体何のでしょうか。推察するに、エロいものですね。というよりも、そうであつて欲しい。いや、そうでありなさい。

……ごほん。私としたことが、少々取り乱してしまつたようですね。忘れて下さい。

失言に対して咳払いをひとつ。前を通り過ぎて行く素敵王子様の集団を見送りつつ、何となく私も空を仰ぎます。厚い雲に覆われた空はどんよりとしていて、私ほどの人間でも気が滅入つてしまいうになります。

私と地球の戦い。地球も中々にやります。これだけ長期に掛けて精神へ重点を置いた攻撃には感服します。並の人間ならば精神崩壊を起こして心の声までおかしな言葉遣いになることでしょう。負ける気はしませんが、さすがに今回ばかり分が悪いようですね。不本意ながら、ここは身を引いておきましょう。

とは言つても、私はまだまだ生物としては頂点。さすがに惑星そのものの相手は荷が重かつたようですが、地球上の存在ならば屈することはありません。私の存在もつくづく罪ですね。ふふ。

「あーもう、嫌になつちゃうわよ。いくら梅雨だからって限度があるでしょ……日本規模で水攻めでもしようつていうの？ 良い度胸してるわね、地球も」

「あはは、さすがにもう雨はいいよねー」

ですが、そんな私を脅かす規格外が身近にいたのです。私の鋭い眼が捉えた2人の女子。1人は、続く雨で沈んだ気分を天使のような微笑みで優しく包み込んでくれる天然系美少女、桃様。彼女の存在により地球温暖化が軽減しているとかいけないとか。

そして、もう一方の女子。佳苗。以上。

「語ることは何ありません。朝も早くから物騒な物言いの彼女を花も恥らう女子高生と呼べるのでしょうか――否。ただの鬼に性別など不要。拳で全てを語る野蛮な生き物なのです」

「――ハッ！ とんでもないプレッシャーです……！ 一体、何が起こったのでしょうか。体の震えが止まりません……！」

「いけない、目が合ってしまった！ 生物の頂点であるこの私が怯えている……？ ……どうやら驕りが過ぎたようです。近付いて来る彼女こそが最強の漢。これがげんじ――」

「――全部口に出てんのよ、バカ涼！」

言い終える前に、私の意識は鬼さんに刈り取られたのでした。

「ん……」

「あつ、大丈夫？」

目を覚まして最初に視界に飛び込んできたのは桃ちゃんだった。俺の眠っているベッドの横で、椅子に座った桃ちゃんが優しく微笑む。

ボーっとしてしまいち覚醒していない頭をボリボリと掻きながら状況を整理しようと試みる。

ふむ……こんな朝から桃ちゃんのモーニングスマイルを見ることが出来るとは。昨日、我が家に桃ちゃんを招待した記憶もないし、

余程のきつかけが無い限りそんな勇氣も出ない。

となれば、いよいよ俺も見えてはいけないものが見え始めた年頃なのかもしれない。ついに、幻を創り出すスキルを手に入れてしまった訳だ。

人として何かを失った感是否めないが、考えようによつてはこれはこれでアリかもしれない。

「おはよう、桃」

調子に乗って桃ちゃんを呼び捨てにしてみた。目の前の桃ちゃんが俺の創り出した幻なら、彼女いない歴〓無限大と噂される俺のやりたかったことを叶えてみたいと思う。

「どうしたんだ、そんなに顔を紅くして。可愛い奴め」

言つて、ベッドから体を起こして幻版桃ちゃんのぷにぷにな頬をつついてみる。実際に本人にやったら、警察を呼ばれても文句を言えない。

俺の想像力も中々に豊からしい。俺が恥ずかしい言動を起こす度に、幻版桃ちゃんが顔を真っ赤にして可愛い声漏らすのだ。反応まで理想通りだぜ、グッジョブだ俺。

「あつ あの……涼、くん？」

「どうした、桃」

「ううゝ。その、いつもと様子が違つていうか……」

「俺はいつも通りだぞ？」

ニカッと笑つて幻版桃ちゃんの頭を撫でてみる。わぁー、この子髪の毛サラサラやでー。

傍から見れば、きつと俺はただの変人だろう。この幻版桃ちゃん

は俺にしか見えていないのだから、俺は独り言を言いながら何も無い空間をついたり撫でたりしている訳だ。

……大分恐いな。これじゃ、カシワのことをとやかく言う資格なんて欠片も無い。まだ正気を保っている人間なら、ここで自分の異常さに気付いてブレーキが掛かるところだ。

しかし、さらに加速するのが俺なのだ。

「こっちおいで」

ベッドをポンポンと叩いて俺の隣に来るように促す。

シングルのベッドって結構小さいもので、幻版桃ちゃんが腰掛けると俺と密着してしまうだが、さすがは幻。特に嫌がる様子も見せなかった。

「ちょっと恥ずかしいね、あはは……」

恥じらいながらモジモジする幻版桃ちゃんと、その一言で幻相手に急激に鼓動が早くなる危ない男子、俺。

ああもう、可愛いな畜生！ ドキドキが止まらない！ 幻なのに何かこの桃ちゃんいい匂いまでするし！

途端、自分から隣に来るように言っておきながらソワソワを始める。

待て、落ち着け俺。相手は桃ちゃんとはいえ、幻だぞ？ 幻相手に何を緊張してるんだよ。むしろここは優しく抱きしめるところだろ。フフ、幻とはいえ桃ちゃんは桃ちゃんだ。そうと決まればさっそく――

「……お楽しみ中に悪いんだけど、ちょっといいかしら？」

暴走を始めた俺は固まった。いきなりカーテンが開いたかと思うと、その開いたカーテンから佳苗が呆れた表情で登場したのだ。

待て待て！ 人の家に勝手に入り込むなオイ！ むしろあれか、お前も幻か！

若干気まずそうな佳苗を前に、しばしテンパった俺は気付いてしまった。自宅にベッドが無いという事実と、開いたカーテンの先に見えた薬品のある光景がどこであるのか。

今の俺はまさに顔面蒼白。こんな光景を見られては社会的に死んだも同義。俺は覚悟した。残りの長い高校生活はイジメで真っ暗に違うことを。

「かかか佳苗っ、これは違うんだ。あれだ、あれなんだよ、アレ！」  
「どれよ」

「察しろ！」  
「無理でしょ！」

動揺しまくる俺に良い言い訳なんて浮ぶはずも無く、ただただあたふたするだけ。

ちなみに幻版桃ちゃんは佳苗の登場でおとなしくしていてくれたのが不幸中の幸いといったところだろうか。俺の創り出した幻な訳だし、佳苗には見えないのだから幻版桃ちゃんが喋り出してうっかり返答してしまうともう佳苗には言い訳出来なくなってしまう。ふう、セーフセーフ。

「で、佳苗は何しに来たんだ？」  
「あ、そうそう。さっき弘田先生が呼んでたわよ、桃」  
「アウトオオオ！」

もう俺の理解出来る範疇を越えていた。意味がワカラナイ。目の前の勇ましいこの子は一体何を言っているんだろうね。

まさか、佳苗にもこの幻版桃ちゃんが見えるのか……？ 俺の幻はそんなクオリティを実現してしまったのか……？

そんな訳ないだろ愉快的な頭した俺！ とうかここが保健室だって分かったときに気付いとけよ！ この桃ちゃん本物だから！

「……佳苗のバカ」

「ああもう、悪かったわよ。あとでちゃんと埋め合わせはしてあげるから」

そして、なぜか不機嫌なオーラを剥き出しにしてカーテンの向こうへと去って行く、本物の桃ちゃん。

不味い。このまま佳苗と2人になってしまふのは非常に不味い気がする。何とか緊急離脱せねば。

「佳苗ちゃんのお馬鹿さん！ もう知らないんだからねっ！」

ブンブンと可愛らしく怒っている演技を見事に表現して、桃ちゃんに続いてカーテンの向こうへと歩き出す。

フフ、知能の低い佳苗ごとき、俺の聡明さをもつてすれば意図も容易くかわせるのだ。1人その場で取り残されとけ、お馬鹿さん。

「……待てゴルア」

「ひっ！」

鼻歌交じりで佳苗の隣を通り過ぎた直後。突然、俺の制服の襟を後ろから掴んだ佳苗と、威圧感たっぷりの巻き舌で危うく失禁しそうになった俺は短く悲鳴を上げた。

「あ、あらら？ 佳苗ちゃん、ご機嫌は……いかが？」  
「最低」

「ハハ、ですよー」

その後、しばらく俺は佳苗のご機嫌が回復するまでサンドバックになった。

「はあー、スツキリしたっ」

再びベッドインを果たすことになった俺の隣で、大きな伸びと共に清々しい表情を浮かべる佳苗は見ようによっては快活な美少女。素材は素晴らしいんだから、脊髄反射で拳を繰り出すのさえ止めれば男子も寄って来そうなものなのだ。

「……結局、お前は何しに来たんだよ」

「ちよっとその前に、あんたにお願いがあるんだけど」

「もうサンドバックは嫌なんでそこそこよろしく」

「わかってるわよ。人の話は最後まで聞きなさいって」

枕を抱きしめて怯える俺の前に、呆れた表情を浮かべる佳苗。大きな溜息を吐いた後、少しバツが悪そうに口を開いた。

「……さっき、桃の機嫌悪かったでしょ？」

「あー、そう言われるとそうかもしれない」

「だから、これからはあんたも桃のことは呼び捨てで呼んであげてくれない？」

「佳苗さん。意味不明だ」

珍しく桃ちゃんの機嫌が悪そうだったのは分かる。でも、そこから桃ちゃんを呼び捨てにするという、ファンタスティックな結論を

導き出す佳苗の頭の中は小宇宙が広がっているに違いない。

テストも途中式が大切だとこの子は学ばなかったのだろうか。今からでも遅くないから学んでおきなさい。

「そうねえ……私が来るまでの桃の機嫌はどうだった？」

「んーまずまず？」

「何よ、その煮え切らない答えは」

正直、照れやら何やらであまり覚えていない。ただ、悪くなかった——という曖昧な印象しか残っていない訳で。

俺のそんな状態を察した佳苗はやれやれと、またしても大きな溜息を吐いた。

「いい？ この狭い空間で何をしてたのかは知らないけど、残念ながら声は聞こえてたわけ」

「なっ……」

一瞬、心臓が止まりそうになった。羞恥で。

「その時あんた、桃のこと呼び捨てにしてたでしょう？」

「さ、さあ？」

「……………」

この往生際の悪さに自分でも失笑。全部バレているのに惚けてみたが、佳苗が無表情を貫いてきたので俺の心があっさりと折れた。

「……………呼び捨てでした」

俺の自供に、満足気に頷く佳苗。そして、この俺ですら気付かなかった事実を告げた。

「じゃあもう分かるでしょ。あんたに呼び捨てにされた瞬間の桃のあの声、私の方が付き合い長いけど、あんなに嬉しそうな声は初めて聞いたわよ」

……む、むむむ。どの瞬間だ……いや、本能的にはきつと分かっているはずなんだよ？ 頭で理解出来てないだけで、本能的は絶対に今まで付き合った女の子が両手両足じゃ数え切れないこの俺が分からないはずがないんだよ。男子からは恋愛の神様と称され、常に周囲に女子の取り巻きが絶えない、この俺が。

……ハハ、やめよう。変な見栄を張るだけ悲しい。どうせ、今まで付き合った女の子数えるのに指1本でも余りやがりますよ！

「悪かったな畜生！」

「何でいきなりキレてんのよ、あんた」

突然キレながら枕を床に叩きつける俺の奇行に佳苗が顔を引き攣らせる。

しかし、桃ちゃんも呼び捨てにされるのが嬉しいのなら初めからそう言ってくればいいのにと密かに思う。

「よし。それなら修やらカシワやら、その他諸々の連中にも教えてやらないとな。フフ、きつと桃ちゃんも嬉しさのあまり涙するに違いない」

やっぱり良い事をするのは気持ちがいい。どうやら俺は根っからの善人らしい。見ていますか、神様。他の奴はどうでもいいから俺だけは天国行きでお願いします。

「……あんた見てると桃の代わりに殴り飛ばしたくなるわ」

「ぶ、物騒なことを言うな。——さあ、早速カシワあたりから教えてやるか！」

「あ、ちよっと、待ちなさいよっ！」

本日3回目にして最大の溜息を吐いた佳苗が盛大に呆れながら恐いことを言っていたが、緊急回避の意味合いも込めて保健室から脱出し、そのままカシワがいるであろう教室へとダッシュする。

俺の鈍足は周知の事実だが、佳苗が俺を追いつけて保健室を飛び出した際、出会い頭に100kg超級の男子とぶつかって——弾き飛ばしていた。

さすがだ、と心の中で拍手を送りながら、意外に優しい佳苗は男子生徒を起こして頭を下げていた。その間に何とか振り切ることができたのは非常に有難かった。

ようやく辿り着いた我が教室。保健室からそう遠くないのだが、少し息が乱れてしまった。どうやらリアル鬼ごっこは心臓に悪いらしい。

1回大きな深呼吸をして呼吸を整え、この教室にやって来た目的であるカシワの喜ぶ顔を想像してみる。

うん、気持ち悪いな。そう思えるだけ正常だ。本人の了解を得て桃ちゃんを呼び捨てに出来るのだから、カシワの第一声には注目だ。確実に裏返る。

そんなことを考えながら、少し意地の悪い笑みを浮かべて教室の扉に手を掛ける。

そこでふと、違和感を感じた。教室の中が静か過ぎるのだ。しまった移動教室だったか——少し残念に思いながら教室の扉を開く。

「――」

突然、目の前を椅子が遮った。

椅子は宙を舞い、やがて落下すると耳を劈く大きな音を立てながら派手に転がっていく。

俺も思わず耳を塞ぎ、転がっていく椅子を注視する。

そして、椅子が止まった先の光景を見て、言葉を失った。

「な……」

1人の机が滅茶苦茶にされ、教科書が周囲に散乱していた。

3人の男子が悪びれる様子もなくケラケラと笑いながらその場に座り込む机の主を冷たく見下ろしていた。

驚きに思わず目を見開く。言葉が出なかった。状況が上手く飲み込めなかった。得体の知れない恐怖で体が硬直した。

しかし。

「死ねよ、ブス」

その言葉を聞いた瞬間。

俺は近くの椅子を手にし、クソったれな台詞を吐いた奴らに椅子を投げつけていた。

### 第37話 初めてのキモチ

男子はあまり好きになれない。

中学に入ってからより一層そう思うようになった。

初めて男子への不快感を感じたのは小学校の高学年になったばかりの頃。その頃は、私も今とは随分と違い、快活で笑顔を絶やさない小学生だった。

自分が笑顔でいれば皆も笑顔でいてくれる——少なくとも、その頃の私はそう信じていた。

小学生時代、時折私は男子達に混じって昼休みのバスケに参加していた。教室で友達と談笑するのも楽しいけれど、体を動かすのは小さい頃から好きだったし、男子にも負けない運動神経で足を引く張ることもなく、むしろ毎回のようにシュートを決めて活躍していた。当然、一緒にバスケをやっていた男子達とは仲が良いのだと、私は思っていた。

しかし学年が上がるにつれ、それまで仲良く遊んでいた男子に異変が起きたのだ。

ある日。

私はそのバスケ仲間の1人に告白をされた。

好意を抱いてくれることは素直に嬉しかった。けれど、好きな人のいなかった私は告白を断わり、返答を聞いて大きく肩を落とす彼に何度も謝罪した。

告白を断ったことへの罪悪感。間違ったことはしていない。でも、ひどく胸を締めつけられた。

次の週。

今度は別のバスケット仲間から告白をされた。返す答えは同じ。ただ、嬉しさは半減し、その分だけ罪悪感が倍になった。

それから更に、2人に告白をされた。もう、初めのような嬉しさは無かった。バスケット仲間を裏切ってしまったような錯覚。

私がバスケットに参加すると、気まずさからか、告白してくれた4人は参加しなくなった。それが何よりも辛かった。

自分が彼らの輪をかき乱してしまっているという事実。それを自覚した時、体育館へ足を運ぶことを止めた。

それどころか、意識的に男子を避けるようになったのだ。

あの胸の痛みを二度と味わいたくない為に、男子には極端な態度で接して、拒絶。

心の中では常に抱いていた、仲良くしたいという気持ちを押し殺して生活することにした。

それから数年。心と体が急成長を遂げる思春期に自分を偽ることの愚かさを、私は思い知った。

男子を拒絶し続けた結果、ある種の嫌悪感を抱くようになってしまったのだ。

女子を外見で選別する性根。

面と向かって想いを言葉に出来ない軟弱さ。

先走った知識で不純な行為に及ぶ愚かさ。

言っなければ、最低。

どうやら、私はこの数年の間に大きく捻じ曲がって成長してしまっただけ。

かつての真つ直ぐな想いは色褪せ、高校生になった今ではその影は見る形も無い。

おそらく、あの頃の想いを取り戻すことはないだろう——そんな自嘲を繰り返す。

後悔、という表現が一番しっくりくるだろうか。成長と共に、さらに捻じ曲がっていく自分にじわりと恐怖が沸き上がる。しかし、その胸中を知るのは私1人だけ。

それはこれからずっと同じで、誰も気付いてはくれないものなのだと、そう思っていた。

梅雨。

太陽が顔を覗かせることは少なくなり、いつも暗くて寂しい雰囲気が漂う。

私はこの時期が嫌いだ。それは自己嫌悪に似ている。

厚い雲で覆われた空を見上げても、暗く、暗く、闇が埋め尽くす。まるで、自分の心の中を覗いているような気がして、ひどく胸を締めつけられる。

光が差すことも叶わず、ひたすらに孤独。誰かを頼ればいいのか、それとも、この孤独から誰かが救いの手を差し伸べてくれるのを待てばいいのか。

いや、他人の手を借りるという選択肢は最早無い。

そもそも、自分の撒いた種なのだから、それを自分で刈り取るのは当然。他人に頼ろうとするのが甚だおかしいのだ。

ならば——と、少し強めに拳を握る。

昨日の出来事も頭の中から消し去ってしまおう。それが心を晴らす為の近道であることは想像に容易い。

いつも因縁をつけられ、突っ掛かってくる男子。部屋の鏡を前に、それも仕方がないのかもしれない、と苦笑する。

鏡に映るのは、小学校以来変わらない姿の自分。身体の発育は一応見て取れるが、あの頃に生まれた独特の雰囲気は今も変わらない。

不気味。

一言で形容するならば、そういったところだろうか。自分でもそう感じてしまうのだから世話がない。

簡単な話、この髪を切れば少しでも何かが変わるのだと思う。しかし、それを実行に移す勇気を持ち合わせていない。

つまるところ恐いのだ、私は。変化を恐れているのだ。

現状を打破するには、他人に頼るのではなく、自分で何とかしなければならいと分かっている。

結局、私は誰かの助けを求めているのだ。

そんな矛盾を、もう何年も繰り返している。

自分の心の弱さにほとほと呆れてしまう。だから、私は今日もいつものままで1日を送る。何も変わり映えのない日常を。

高校に入学しからもう2カ月ほどが経った。

興味が失せたのか、私へ奇異の視線をぶつけてくる生徒も大分減ったきたように思える。

それでも、やはりゼロという訳ではないのだが。

昼休みに入り、教室から出ようと扉に手を掛け、それを躊躇した。

『お前、C組の澤井って知ってる？』

『え、誰それ？』

『ほら、あの髪が長くて気味悪い奴だよ』

『あーあいつね。それがどうしたよ？』

『なんかさ、また黒木と言いつ合ってたみたいだぜ。って言っても、完璧に黒木の言い掛かりみたいだけど』

『はっ、またかよ。軽くイジメ入ってるよなー、あれ。見てる分にはおもしろーからいいけど』

『ハハ、だよな』

別段、気にしてはいない。他人が聞けば、きっと強がりだと思いかもしれないが、こんなことがもう何年も続いている。

高校入学を契機に、こういった陰口も無くなるかと淡い期待を抱いていたのだが、やはりそうそう甘いものでもないらしい。

一時のことを思えば数も減ったし、そもその原因を生み出したのは他でもない、私だ。

当時、立場が一変して私が拒絶される側に立ったあの瞬間。

初めてその身に悪意を受けた時は、悲しみや怒り、恐怖などの感情が絡み合って頭の中が真っ白に染まったのを覚えている。

しかし、それまで何の落ち度も無い男子が、私の身勝手な自己防衛に巻き込まれて不快な思いを抱いていたのは間違いない。そう思うと、これぐらいのしっぺ返しなら——と、甘んじて耐えた。

辛くないと言えば嘘になるし、交友関係も荒れてそれまで持っていたものは大半失ってしまった。だが、それが贖罪だと今でも信じている。

要は、私がぐっところえればそれで済む話。ただ、それだけで丸く治まるのである。その為の覚悟も、月日を重ねてようやく出来た。

いや、せざるを得なかったといえは語弊がないだろうか。

自分で何かを変えようとせず、ただひたすらに誰かが都合良く手を差し伸べてくれるのを待つしか出来ない私に、自然と出来た覚悟むしろ、覚悟とは名ばかりの、諦念。

そんな偽りの覚悟を胸に、私は扉に掛けていた手を力無く離れた。無自覚に、手が震えていた。

気にしていない、もう慣れたはずだ。

そう思っているにも、結局心の奥底では恐怖している自分に苦笑する。

その場で俯く。

心の弱さがここでも露呈してしまったのだ。

高校に入り、ほんの僅かながら私にも新しい交友関係が構築されていく中で、またそれが荒らされてしまうことへの恐怖。

誰が好き好んで誹謗される人間と関わろうとするだろうか。私といることで、いつその矛先が自分に向くかも分からないのだ。

私は喪失感で埋め尽くされながら、自分の席に向かって踵を返す。そして、重い足取りで一步を踏み出した時だった。

『バーカ、バーカ！ ボケエ！』

こんな子供染みた言葉を平然と放つ彼に、いつの間にか私の足は再び廊下へと向いていた。

「ぎゅふ！？」

廊下へと出た私の耳に飛び込んできたのは、そんな苦悶の声だった。

た。

「あら、ごめんなさい」

平静を装いながら、普段通りの状態を意識して私の足下に転がっている彼へと視線を落とす。

というか、あの後に何故このような状況へと至ったのか理解不能だ。

「ひつ、人を踏むとは何事だリンリン……」

「この場合、廊下で暢気に寝ている方が悪いと思うのだけれど。違ったかしら？」

「……いや、常識的に考えてそうっすよね」

そう言っで制服を手で払いながら立ち上がる彼の鼻から、一筋の鼻血が流れていた。

「大丈夫？ 鼻血が出ているようだけれど。……これ、使って」

「お、すまねえ」

彼は私が差し出したハンカチを受け取ったものの、何故か拭う仕草だけで一向に鼻血を拭こうとしない。

それなのに、『ふう……よく落ちるハンカチだぜ』と小さい声でぶつぶつと呟いている。別に汚れなど気にしなくてもよいのだけれど。もともと、それも彼なりの気遣いなのかもしれない。

あらかた鼻血を拭き終わったそうなので（本人曰く）、最後の仕上げに制服の裾で豪快に鼻血を拭った彼を見て、一瞬ふき出してしまいそうになりながらも何とか堪える。ここでふき出しては彼の不自然極まりない気遣いが水の泡になってしまいそうだ。ただ、台無しにするのも面白そうだけれども。

たが、そこでハツとする。

おかしいのだ。

自分がこんなにも自然に男子と話していることが。

大概の男子とはまともに口すら聞かない、この私が。

例外があるとすれば、それは男子バスケット部の藍田ちゃんと柏木くんぐらい。彼らはバスケという点で尊敬に値するほどの技術を持っているし、特に、藍田くんに関しては学力も同様だ。

私の抱く男子へ対する固定概念に収まらない彼らとは普通に会話をする。この数年で性格が捻じ曲がってしまった為に、嫌味な言い回しにならないよう気を付けながら。

しかし、目の前の彼と話している時はそれが無いのだ。

気を付けながら言葉を選んで話しているつもりはないし、むしろ、いたずら心が働くまでの自然体で接している。

それが解せない。

私は、理解し難い自身の胸中に、頭を振って無理矢理考えるのを中断した。

「ところで……ひとつ聞きたいのだけれど、いいかしら？」

話題を変える。自分自身で答えを出せないのなら、少し彼に手伝ってもらおう。

「ぬ？」

「……さっき、あなたはどうしてあんなことを叫んでいたの？」

一瞬、彼の表情が強張ったのを私は見逃さなかった。

彼は何の意図があつて、私の陰口を言う男子にあのような台詞を口にしたのか。

ただの正義感から来るものならば、それでいい。

少し黙考した彼は、ようやく口を開いたかと思うと、明らかに不自然な笑顔を浮かべて外へと目をやった。

「そのーなんだ、最近雨ばかりだろ？ いい加減にして欲しいから雨雲を思いっきり罵倒してやったんだよ」

「……………」

「たぶん、明日から晴れるぞ。フフ、俺に感謝しろよ？ リンリン」  
「……………」

彼が言い終えて、私はその場から立ち去る。

そして、悟った。

これは甘えでしかないのだと。

下手くそな嘘で誤魔化そうとする彼が最後に見せた表情は、優しさに溢れていた気がした。

朝一。音楽の授業がある為、クラスメイト達は特別棟へと移動していく。

最近では極力周囲の生徒と顔を合わせないよう、登校時間もぎりぎりまで遅らせている。

まるで中学に戻ったようだ、と苦笑する。

あの彼と顔を合わせなければ良いだけなのだけでも、いつの間

にか他の生徒と顔を合わせるのも億劫になってしまった。

最近は部活にも参加していないし、同じ女バスの友人とも話す機会が少ない。

いよいよ、私も中学時代に逆戻りしてしまったようだ。

あの日を境に、私の日常が急激に色褪せていった。

常に襲う、倦怠感。ふと視線を窓の外に向けてみると、その先にはどんよりとした暗い空。嫌味なくらいに私の胸中を投影している。この数日間、自分の取った行動に後悔がない訳ではないのだけれど、私に対する誹謗が彼に飛び火しない為にはそれが最善だと思うから。

他にもっと上手い方法があったのかもしれないが、他の選択肢を選ぶ権利を、生憎と私は持ち合わせてはいない。

他力本願でしかないその選択をしまつと、もう私は自分自身の足で前に進めないようにで恐かったのだ。

だから。

彼が話し掛けて来ても、全て黙殺。

視線を合わせることもしない。

そうすれば、自然と隔たりも生まれる。

これで、彼は私から離れていくはずだ。

……離れていくはずだ。

そう思うと、不意に胸を締めつけられた。

不可解な胸の痛み。それは今まで体験したのこともないものだった。

昔からこうして拒絶して人を遠ざけていたのに、今回に限ってこんなにも胸が苦しくなってしまう。

彼を遠ざけようとすればするほど、彼と話したいという願望がこれでもかと湧き上がって来る。

こんなに切ない気持ちになったのは生まれて初めて。

まさか——そんな考えが頭を過って、すぐにそれを否定した。

いつの間にか誰もいなくなった教室で、大きく深呼吸をして気分を落ち着ける。

どうせ、考え込んだ所で確かな答えは出ないのだ。こんな想いなど一時の気の迷いだと思い込み、私も音楽室へと向かった。

「おい、扉閉める」

教室を出ようとした時だった。

ある意味聞き慣れた声がして、一瞬体が硬直する。

私の前に立ちはだかる男子の名前は、確か黒木といったか。その後ろには見知らぬ男子が2人立っており、内の1人が教室の後ろの扉を閉めに行った。

「何の真似かしら？」

「うるせえ」

つかつかと歩み寄って来る黒木は、私の横を通り過ぎて行く。それに少しほっとしたが、次の瞬間だった。

後ろから、思わず耳を塞ぎたくなるような派手な音が聞こえ、慌てて振り返る。

「……もう一度聞いわ。何の真似かしら？」

「憂さ晴らしに決まってんだろ？」

私の机がひっくり返し、中に入っていた教科書が周囲に散乱して

いた。

黒木は悪びれる様子もなく、冷めた目で私を睨む。

「うつひゃ。黒木、そんなデカイ音出したら扉閉めた意味ねーじゃん」

「てか、こいつが澤井……だっけ？ うわーマジでないな、こりゃ」

黒木の後ろに立っていた男子と、後ろの扉を閉めに行っていた男子がケラケラと笑いながらこちらへ歩いて来る。

物珍しそうに私をジロジロと見ているが、その実、蔑むような目。私も負けじと2人を睨み返した。

「はいはい、邪魔だよバーカ」

「きやつ」

そんな私の精一杯の威嚇も、2人にとっては何の効果も無い。

私をただの障害物のごとく突き飛ばし、バランスを失った私は散乱した教科書の上に座り込む。

「ぶつ、今の聞いたかおい。いっちょまえに女みたいな声出してるぜ、こいつ」

「おいおい、そんなに睨むなよ。ぶつ飛ばしたくなるだろ？」

「あれ、何？ もしかして震えてんの？ ハッハッ、ダセエ」

好き勝手言われて腹が立たない訳が無い。恐怖で震える体を自分で抱きしめながら、効果が無いと分かっているにもかかわらず3人を睨む。

「……こんなことをされる理由が分からないのだけれど？」

声が震えていないだけ褒めて欲しいところだ。可能な限り気丈に

振る舞い、これ以上相手が調子付くのを防ぎたいという思惑があったのだが。

しかし、彼らはそんなことを大して気にする様子も無く、鼻で笑って吐き捨てるようにこう言った。

「理由？　んなもん、初めからある訳ねえだろ。……ああ。強いて言うならお前の存在自体が気に入らねえ」

理不尽だと思った。彼らの気分次第で私はこんな仕打ちを受けなければならぬのだ。

黒木の指す言葉の中に私の容姿も含まれているのは分かっているつもりだが、だからと言って、それを許容出来るはずもない。

近頃、久々に出来た男子の友人。彼らは、私がかつて抱いていた男子に対する嫌悪感を払拭するぐらいに魅力的で素敵な人達ばかりだった。

だが、徐々に男子に対する見方も変わり始めていた矢先に、今回のこれ。

口惜しいけれど、良い出来事よりも、悪い出来事の方が記憶に残り易い。

やはり私の思った通り。やはり男子なんてものは――

「――最低ね」

「お前、自分の立場分かっている？」

「うぜっ。こいつマジでうぜえ」

1人の男子が近くの椅子を手にし、投げつけた。それは威嚇なのか、大きな音を立てながら転がっていく。

私の顔から感情が消えていくのを見て、さらに怯えていると勘違いしたのか、その男子は得意気に笑い声を上げた。

もう、いい。

もうこれ以上、幻滅させないで欲しい。

目の前の光景が全てではないと頭では理解していても、今この瞬間に深く刻まれていく彼らの一挙一動。

つい先程まで素敵だと感じていた男子の友人ですら、思い返すとそんな想いは錯覚であつたのだと簡単に納得出来てしまう。

「死ねよ、ブス」

こんなにも相手が私を拒絶するのなら、何を躊躇う必要があるのだろうか。

私も彼らと同様に、彼らを、男子を拒絶する。

「——今なんつツたこのクソ野郎オオオ！」

……つもりなのだけれど。

椅子を振り回している彼の登場に、不覚にも私の胸は高鳴ってしまつた。

「だれ、お前？」

「あ？ こいつ加住か？」

「……しろ」

「は？ もっとデカい声で言えよ」

「……撤回しろ」

「あー、悪い。やっぱり聞こえねえ」

「撤回しろって言ってるんだよッ！」

彼は憤りを隠すこともせず、その瞳に激情を映していた。

普段、無邪気な笑顔を浮かべる彼とはかけ離れていて、そのギャップに思わず息を呑む。

「おいおい、いきなり出て来て何だよ。お前関係なくない？」

「うぜえなオイ。邪魔すんなよ」

「聞いてんのか？」

彼の登場で驚いていた3人だったが、それも一瞬の間だけ。すぐにあっちへ行け、と言わんばかりの態度で呆れた表情を浮かべる。

「……………」

彼はこちらに向かってゆっくりと歩き出す。

少しも冷めない怒りの籠った眼差しが、彼の心情を明確に示していた。

「な、何だよ」

「お前馬鹿か？ さ、3対1って分かってんの？」

立ち止まろうとしない彼。3人は徐々に近付いて来る彼に、咄嗟に身構えた。

初めは威勢の良かった彼らも、少しも物怖じしない彼に気圧されているように見える。

しかし、彼は3人の横を素通りすると、私の前で片膝をつき、不意にいつもの笑顔を見せながら手を差し伸ばした。

「行こうぜ、リンリン」

「……………ええ」

彼の手に自分の手を重ねようと、ゆっくりと手を伸ばす。

「すかしてんじゃねえよこの野郎ッ！」

だが、その直後。私の視界から彼の手が消えた。

ふと見上げた先には、胸倉を掴まれ、鈍い音を立てて窓に押し付けられる彼の姿があつたのだ。

「加住デメエ…………俺らの気晴らしを台無しにしゃがつてッ…………デメエもこのブスみたいにされてえのか？ あ？」

黒木は幾分低い声で齒をギリギリと食いしばりながら彼に怒りをぶつける。

脅すような物言いに、得体の知れない迫力があつた。

3人で私を一方的に気晴らしの対象にするつもりだったのが、彼の登場によって思い通りの展開にならないことへの焦燥か。

更に力を込めて彼の胸倉を掴む黒木の目は激情を映していた。

そんな黒木を前にして、彼は震えるほどに拳を力強く握り締めていた。

直後。

私は言葉を失った。

けたたましい音と共に、粉々に碎かれる窓ガラス。

「…………リンリンのことを何も知らない癖に馬鹿にすんなよオイ」

それは、彼が怒りで窓を割ったことなどではない。

「……リンリンに優しくされたことも無い癖に馬鹿にすんな」

私がブスだと言われたことでもない。

「……リンリンが抱えてるものを知らない癖に馬鹿にすんな」

そんな些細なことは、もうどうでもいいのだ。

「俺も多分、まだまだ知らないことは多いけど……少なくとも――」

きつと、私はこんな人が現れてくれるのを待ち望んでいたのだ。

「――俺の知ってるリンリンは滅茶苦茶可愛いんだよ馬鹿野郎っ！」

瞬間、私の顔が真っ赤に染まった。

同時に、高鳴る胸の鼓動を押さえる術など無い。

こんな私を、私は知らない。

彼を前にしているだけで、思考が鈍り、落ち着きを無くしてしまう。

耳触りなほどに鼓動する胸がはちきれそうだ。

けれど、嫌な感情ではない。

むしろ、温かくて、幸せな気持ちで満ち溢れている。

彼の気迫に圧倒されたのか、それとも人が集まって来るのを恐れたのか、足早に教室から去って行く3人。

去り際に何か言っていたけれど、今の私にそんな言葉は届かない。

「リンリン」

「どうしたの？」

「ガラス、怒られる……よな」

「頑張ってね」

「あ、ありがとう。え、他人事……？」

「ふふ、冗談よ」

静まるどころか、さらに早まる鼓動を悟られないよう、ゆっくりと深呼吸をする。

ガラスの心配をする彼の横顔に、私はただただ熱っぽい視線を送るのであった。

窓の外は、いつの間にか雨が止み、夏の到来を予感させる太陽が少しずつ顔を覗かせていた。

### 第38話 梅雨明けで嵐来た

無事に梅雨明け宣言がなされ、気だるい梅雨から解放された7月中旬。

例年より少し早い梅雨明けだそうだが、あれだけたっぷりの雨をもたらししてくれば今年の夏も安泰だろう。

空にはこれまでの分を取り戻すかのようにいきいきとお仕事をなさっている太陽。

ぶっちゃんけ暑い。しかしジメジメした暑さに比べれば遥かに心地良くて心が奮う。

「夏男、加住です」

特に意味は無い。言ったもん勝ちだ。

そんな中で、俺は眩しい陽射しを背に受けながら珍しく快足を披露していた。

噴き出すような汗を気にも留めず、ただただ脚を動かすその表情に余裕など微塵も無い。

最近、非常に迷惑な話だが、ヤブ医者 of 叔母である翔子さんがうちのアパートに住みついた。

少し前からちよくちよく顔を出すなー、なんて暢気をことを考えていたのだが、先週ついに本格的な侵略を開始したのだ。

何でも、家賃の要らない都合の良い寢床を探していたらしいが、そんな世間を舐めきった所なんてあるはずもなく、必然的に残るのは翔子さんの子分と言っても差し障りのない昌太さんが大家をつとめる我がアパート。

当然、昌太さんはどうせ住むならと家賃を要求したが、鋭い眼光

で睨まれて瞬く間に沈黙。

ふてぶてしい翔子さんの態度に不平たらたらの昌太さんだったが、結局『家賃を払うぐらいならお前と同じ部屋に住む』と言い出した翔子さんを拒むことも出来ず、妥協案ということで二人の同棲生活が始まった。

妥協とか言いつつ、翔子さんもそれを狙って来たような気がするのは俺だけだろうか。どうやら2人とも満更じゃないっぽい。

正直、それだけなら何ら問題は無い。むしろあるべきところに収まった結果だし、2人が幸せに暮らしてくれば俺としても嬉しい。しかしだ。

傍若無人な叔母さんが、素晴らしい魅力を秘めたイケナイ男子の俺に喰いつかない訳がない。

不幸にも、たまに暇を持て余した叔母が子分の叔父を伴って俺の部屋に襲撃して来るのだ。困ったことに。

『おい少年。私が暇をしている。何かしろ』

『そつやそつや、何かしろ』

これが昨夜のこと。

若干ほろ酔いの叔母と、シラフの叔父。苦情を出したいけど、肝心の大家がこの様ではどうしようもない。

そんな二人に早く帰るように促してみても、無茶振りを連発してくる叔母達が帰ったのは結局日付が変わってからだった。

荒らされた部屋を片付け、さっさと眠りに着いてから特に夢を見ることもなく、爆睡して起きたら遅刻寸前の微妙なライン。

なぜかアラームの鳴らなかった目覚まし時計に悪態を吐きながら、とにかく急いで支度をする俺の視界に1枚の紙切れが目に入った。

『我が身可愛さにより、この時計の短針はおっちゃんが頂戴します。』

追伸——翔子にはもつと優しい人間に育って欲しかった」

もう何か意味が分からなかったけど朝から俺の咆哮がこだました。最後の一言に異様な重みを感じたりもしたが、おっさんの愚痴なんぞ知ったことではない。こっちは叔父叔母コンビの所為で学業に支障が出るかもしれないんだよこん畜生。

とりあえず目覚まし時計を布団に叩きつけてチャック全開のまま家を飛び出し、今に至る訳だ。

「ゼエ、ゼエ……自転車がつ……ゼエ、ゼエ、欲しい……！」

寝起きであつたことや持ち前の鈍足にも屈せず、何とか遅刻寸前で学校に無事到着し携帯を見てみれば朝のHRまでまだ余裕がある時間だった。

乳酸が溜まって脚はだるい上に息も切れて制服も汗でびっしょり。不快指数は高いが、それでも何とか間に合つて気分を良くした俺はセンス抜群の鼻歌を奏でながら教室へと向かった。

「ヒヤッハーっ！　なんてけしからん光景ですかー！　ハッハッ！」

シャツをぱたぱたと仰いで暑さを和らげながら廊下を歩いていると、そんな奇声を上げながら無駄に廊下と教室を出入りしている男子に遭遇した。

この暑さで頭をやられたか？　と一瞬思ったが、その人物がカシワだと気付いてどうでもよくなった。放っておいても害は無さそうだ。

それにしても、いつもより教室に人が多い気がする。というか、教室内の密度が地味に高い上に廊下から教室内を覗き込む生徒達も少なくない。

「な、何だこの地獄は……」

通勤電車のような密集陣形ほどではないのだけれど、ただでさえ暑いことから、正直この教室という決して広くはない空間に人が集まって欲しくないと思う訳で。

私立のくせに今のご時世にエアコンを設置していないこの学校の環境に愚痴を溢しながらも、校長があのだん任の父親だったと思い出して溜息が出る。

これで校長室や職員室にだけエアコンが付いていたら汚い大人の世界を垣間見ることになるのだが、まあ、知らぬが仏。

授業中にフラつく年配の教師を見ていると冷や冷やしてある意味涼しくなれているのも事実だ。当の本人からすれば命を賭した職場になってしまっているけど。

少し話は逸れたが、とにかくここは退避がベストだ。何が悲しくてこんな地獄に飛び込まなければならぬのだ。

教室に入るのを断念し、とは言いつつも少し興味を惹かれた俺は顔だけ教室内を覗き込みながら歩き出す。

「朝から随分と間の抜けた顔ではないか」

俺が口を半開きにして歩いているところを目撃したらしい素敵王子様が、不敵な笑みを浮かべながらやって来た。

この暑さだというのに、汗ひとつ掻いていないこの男の身体の構造がすごく気になる。

「間の抜けた顔でも俺はイケメン——」

「この集団は何だ？」

「人の話は最後まで聞こうか」

修は件の集団を眺めながら顎に手を当ててしばしそれを観察する。自分から話掛けて来たくせに俺はほったらかしだ。切ないぜ。

「ふむ。何やら愉快的イベントの匂いがしているな」

「そうか？ こんな暑苦しい集団に興味なんて持てないけどな」

「ならば我が親友よ。主に代わり偵察へ行つて来い」

「ちよつ、俺の知ってる親友の定義と違う！」

不敵な笑みを浮かべた後、何の躊躇いもなく俺を突き飛ばす非情な王子様。よろよろと集団へと突撃する様を見てご満悦の様子だった。

俺の絶妙とは口が裂けても言えないバランス感覚では、態勢を整えるのにかなりもたつくのは道理。

目の前の集団の中にいた3、4人にタックルをお見舞いしてしまった訳だが、彼らはそれでも変わらず集団の中心を熱心に眺めていた。

とりあえず修に悪態のひとつでも吐いてやろうと思ひ振り返ってみる。だが、やはりと言うべきか……そこに奴の姿は無かった。

代わりに、期待もしていないのに鼻息の荒いカシワとぼつちり目が合ってしまった俺は数歩後退さる。

「うおつ 加住加住！ やべえ、マジでやべえんだよ！ 衝撃的過ぎて俺もう頭おかしくなつちまいそうだぜ！」

安心してくれ。初めからだ。

そんな俺のアドバイスを心の中でカシワにプレゼントしながら、

迷惑極まりないテンションで絡み始めたカシワから更に距離を取る。

「とりあえず落ち着こうか、カシワ」

「かーっ！ 落ち着いてられる訳ねえだろ！ お前もちょっと来てみるって、ハハ！」

何が面白いのか分からないが、急に笑ったカシワの感受性に敬意を表しながらも、逃走を画策していた俺の腕を掴み有無を言わず教室内へ引きづり込む奴さん。

強引に集団の中を突き進むもんだから、フィジカルにも問題を抱える俺へのダメージが尋常じゃない。不本意ながらも俺の弱点が露呈してしまったようだ。

「おいおいおいおい加住、加住、加住い！」

「何だよ鬱陶しいな」

特に強打した鼻を押さえながら、何とか集団を突破した俺はカシワが一心不乱に指差す方へと視線を向ける。

「あら、おはよう。待っていたのよ？」

一瞬、自分の目を疑った。

艶やかな長い黒髪が後ろでひとつに束ねられ、一般的にいうポニーなテールが風に揺れてすごく良い香りが鼻腔をくすぐる。

きめ細やかな白くて綺麗な肌と、均整の取れた鼻と口と眉。少し切れ長の目が、彼女を可愛くも綺麗に見せているような気がした。太陽が眩しいなあオイ！

「……駄目だ。暑さで目をやられた」

「ふふ、あなたの目には私がどう映っているのか知りたいものね」

言って、微笑む彼女。

前髪が分けられ、露わになっている顔から表情を読み取るのも容易い。

本格的に自分の目を疑ったが、俺が隣の席の住人を見誤るはずがない。

「イメチェンか？ 自分を縛りつけていた印象という名の鎖をデストロイ。これぞまさしくイメージジチェーン！ ……なんちゃって」

絶好調にふざけて後悔を噛みしめる。周囲のアホの子を見るような視線が堪りません。帰りたい。

「あら、おはよう。待っていたのよ？」

これは彼女の優しさなのか。俺の渾身のおふざけを無かったことにしようとしてくれている。単にシカトでないことを切に願うばかりだ。

「イメチェンか？ 自分を縛りつけていた印象という名の鎖をデストロイ。これぞまさしくイメージジチェーン！ ……なんちゃって」

終わった。一字一句間違えずに同じことを言ってみせる俺の勇氣にはせめて拍手をして欲しいところだが、とりあえず終わった。

暑さでやられていたのは俺の頭らしい。しかし、周りが露骨に引いている中でカシワだけが腹を抱えて笑っていた。俺が言うのも何だが、笑いのツボが既に変態だ。

「あら、おはよう。待っていたのよ？」

「……あーおはよう、リンリン」

目を合わせられなかった。今し方の俺の失態もある訳だが、それ以上に目の前のリンリンの変わり様を目の当たりにして驚きやら照れやらで動揺しきっていたのだ。

雰囲気は俺の知っているリンリンに相違ないのだが、そのリンリンがこれだけのルックスを秘めていたとなると、これだけギャラリーが集まっているのも頷ける。

「そのーなんだ、イメチェンか？」

「そうよ。イメージチェーン、だったかしら？」

「……そのネタは勘弁して下さい」

「ふふっ」

心底おかしそうに笑うリンリン。いつもより機嫌の良さそうな彼女が笑う姿は、本気で冗談にならない。

周囲の男子がざわついているけど、男子として正常な反応なんだろうと思う。

もちろんその男子の中には俺も入っている訳で、これでもかというぐらいに浮足立っているのは間違いない。現に、イメチェンの件で既にやらかしている。

でも、これまで地味な分類に入っていたリンリンが実は美少女でしたー、なんて事実には戸惑いを隠せない自分もいたりするのだ。

「周囲の反応が随分と変わったな」

俺の一言に、リンリンは笑うのを止めて周囲を見渡した。

「そうね。初めからこうしていれば、何も悩むことは無かったのかもしれないわね」

「まあ、どう転ぶか分からないもんな。でも、もうこれでクロキン

グミたいな奴は出て来ないだろ。むしろこの集団の中で熱い視線を送ってたりしてな。ハハっ」

クロキングとは黒木のことだ。散々リンリンにちょっかいを出して来たのだから、俺なりの仕返しとしてこの恥ずかしいあだ名をくれてやったのだ。

今後も場所を選ばず使っていくつもりだ。高校生にもなってクロキングって……ぶっ。名付け親の顔が見てみたいわ。

「凜ちゃん……？ わあ、どうしたの急に！」

我ながら頭の悪いことを考えながら心の中で失笑していると、教室内が更にざわついた。

リンリンを一目見ようと集まっていたギャラリーが道を開け、そこからいつも周囲の視線を釘付けになさっている天然系美少女がご登校されたのだ。

「あら、高西さん。おはよう」

「うん、おはよう……じゃなくて！　すごいよ凜ちゃん、すっごく可愛いっ！」

あんたもね、という周囲の声が桃ちゃんに届くことはない。

リンリンの装いに興奮した彼女は目を輝かせながら興味津々の様子で忙しなく質問を浴びせる。

リンリンも機嫌が良いだけなのか、はたまた根っから愛想が良いのか、別段気にする様子も無く丁寧を受け答えていた。

「あつ、何かいいことでもあったの？」

「ふふっ　そうね」

「え、なにになに？　好きな人でもできたのっ？」

「あら、意外に鋭いのね」

他愛の無い質問を何度か繰り返した後、桃ちゃんの切り込んだ質問に教室内の空気がガラリと変わった。

遠巻きに美少女2人の会話を眺める同志達は一変。敵を見るかの如く険しい表情で威嚇を始めるのであった。

「どんだけ分かり易いんですかあんなら……」という呆れと共に、同意を求めてカシワの方を向いたのだが、彼は必死の形相で隣の男子に500円玉を握らせていた。

この歳でそんな汚い手法を用いるカシワの腐り具合に失笑し、しかし500円玉を投げ返されている彼の将来が猛烈に不安だ。

熱気を帯びる集団の中で、今のところまだ何とか冷静さを保てている俺は周囲を観察していると、教室の入口に笑いを堪える素敵王子様が視界の端に映ったが、とりえずスルーしておいた。

何にせよ、周りがこんな状況だと自然と自分だけは、という思いになるのが普通だと思う。他にも数人ちらほらそういう人いるし。けれど、だからといってリンリンのハートを射抜いた男子が誰なのか気にならない訳がない。むしろかなり気になる。

恋をすると女は変わる、というが、リンリンはあまりにも顕著過ぎる。

男子嫌い——みたいな空気を放っていた彼女を恋する乙女へと導いた男子を是非とも師匠と呼びたい。どんなテクニクを使ったのか知らないが、完全コピーで俺も何とかならないものだろうか。

「ね、ね、誰なのっ？」

「ふふっ、さあね？」

「ええっ！」

もったいつけられて頬を膨らます桃ちゃんに心から癒される。

俺は無益な争いを続ける集団から離れ、自分席に腰を下ろした。

「ううゝ気になってしょうがないよ!」

「さあ、誰かしら。ねえ——涼?」

「えゝ」

外野を決め込んでいた俺の顔は、中々渋い顔をしていたと思う。

### 第39話 コッペパン68円

人を見掛けで判断することは決して褒められたことではない。

そんな言葉を頭の中で無限ループさせながら、黒板につらつらと書かれた文字をノートへと複写させていく。

窓の外から聞こえるセミの大合唱をもともせず、授業にのめり込む俺。

時折、開け放たれた窓から扉へと通り抜ける風が何とも心地良く、一層集中力も高まる。

これがいつも授業風景——なんてことがあるはずもなく、本日限定でこんなにも殊勝な姿勢で授業へと臨んでいるのである。

「なあ」

「何かしら。授業中よ」

俺は動かしていた手を止め、綺麗にノートを取る隣の席の住人に声を掛けてはみたものの、彼女は黒板とノートに視線を行ったり来たりさせながらそう窘める。

普通に考えれば、このやり取りに何の違和感もなく、真剣に授業を聞いているリンリンの邪魔をしている俺が全面的に悪い。

でも、今この状況を普通と呼ぶにはあまりにも違和感びんびんだった。

「……なぜにそんなにくつつく？」

「日陰に入りたかったのよ。窓際も良いことばかりじゃないわね」

確かにリンリンの席だけ直射日光が当たっているし、俺の席周辺は日陰だ。

だが、そういう状況を見越して偉い人はカーテンという便利グッズを開発したんだよ。

「だったらカーテン閉めればいいじゃないか」

「駄目よ。カーテンは生理的に受け付けないわ」

聞いたことねえよ！ カーテンのどこにそんな要素があるのか小一時間問い質してやろうか畜生。

まあしかし、太陽も東から西へとゆっくりと移動している訳で、窓から差し込むこの強烈な日光も一時的なものだろうから、今だけは机がくっついていいるのを百歩譲って許そう。

でもな、リンリン。なぜに椅子までくっつける必要がある？ あれか、肩と肩がぶつかって『あ、ごめんなさい……』『いいえ、こちらこそ。ジューチーム？』ってか？ 意味分らないから！ ジューチームって何だよ！

「ノートに落書きするのはよくないわよ」

その一言でハッと我に返った俺は自分のノートへと視線を落とす。呪いのように“ジューチーム”の文字がひたすらに羅列されていた。俺は頭を掻きながら大きな溜息をひとつ吐き、半ば諦めた渋い表情をしながら頬杖をつく。

「……とりあえずは周りの連中を何とかするか」

授業中だというのに、教師をほったらかしにして向けられる敵意の視線。

ちよいちよい飛んで来る消しゴムのカス。

時折微かに聞こえる『死ね』という単語。

何かを勘違いしているらしいクラスの男子達から現在進行形で受

けている陰湿なイジメに思わず頭を抱える。

こっちだつて好きでこんな状況になつてゐる訳じゃないのに……訂正。今も表面上は渋い表情をしているものの、内心はドキドキで気を抜いた瞬間に顔が綻んでしまいそうではあるが、俺自身が意図的にこういう状況にしたのではないというのを分かつて欲しい。

それにリンリンのことだ、俺をおちよくつて楽しんでゐるのかもしれない。というか、あのいたずらっ子は自分のルックスを考慮した上でこんな状況を作り出しているに違いない。まったくもつて末恐ろしいのと同時に傍迷惑だ。

しかし、そこは仏の加住さん。

彼女もどこか吹っ切れた様子だし、機嫌も良い。ここは寛大な心で優雅に腰を落ち着けようではないか。

「加住なんて死ねばいい」

「加住死ねっ、ハナクソ」

「加住死ねっ、そしてハゲろ」

……落ち着け、落ち着くんた俺。今握り締めてゐるこの拳を引つ込めるんだ。ここで怒つてもどうにもならないぞ。心を静めるんだ。周囲から意識を切り離して大きく深呼吸をする。

あークソ、何かシャンプーの良い香りがするぜ。今度は違う意味で落ち着かないじゃないか。

悟られないよう、目だけを隣へと向ける。

ここでもうやく冒頭に戻る訳だが、外見が変わつただけでこれだけそわそわしてしまつてゐる自分にちよつと嫌気がさした。

自分の外見に自信が無いから、それで良し悪しを判断されることを嫌う俺だけは周りと違つて人の内面を重視した見方が出来るんだと格好つけていた訳だ。けれど、実際は何てことのない、周りと同

じどこにでもいる男子高生。

特別なのは、やっぱりこの騒ぎでも動じない修みたいな人間だけだ。今朝の騒ぎに少し興味を持っていたみたいだけど、結局それはリンリンへの興味ではなく退屈を凌ぐ為の暇潰しに他ならない。

誰しもが自分を特別視する気持ちを持っている訳で、その中でもいかに自分が平凡な存在であるのか思い知らされた。

つまるところ、自分の持っていないものを持っている人が現れたから、嫉妬しているのだと思う。

まったくもって、ダサい。

ようやくリンリンが新しい一步を踏み出したのに、それを100%祝福出来ない自分の器の小ささに思わず自嘲が零れる。

もつなんかハナクソとか言われてもあながち間違いじゃないような気がする。なかなか鋭いところを突いてくるじゃないか畜生。

考えれば考えるほど負のスパイラルへ真っ逆さな自分が恥ずかしくて、小さく溜息を吐く。

「……ん？」

リンリンが更に体を寄せて来て、一瞬首を傾げた。

でも、一層強まる敵意の視線が、これがただのいたずらであると気付かせてくれた。

ちよつと、我慢出来ない。

一時はこの幸運に狂喜乱舞の勢いだったが、人を小馬鹿にしたようないたずらは良くないと思うのだ。

『リンリンのことがもつと知りたい』

そんなメッセージを乗せたノートの切れ端を、彼女の机に置いた。目には目を、歯には歯を。

純情少年へのいたずらとしては少しばかりリンリンの行動は目に

余る。

だから、俺は自分が今持っている武器を最大限駆使するのだ。  
つまり、ストーカーチックとも言える俺の熱視線と、暑苦しいことこの上ないこのボディーをすり寄せてやったのだ。今晚にでも悪夢にうなされやがれ。

一瞬、ビクつと肩を震わせた彼女の反応を見逃さなかった。これに懲りたら2度と俺の心を弄ばないことだ。

リンリンの反応を見て満足気な表情を浮かべる俺の人間的小ささには誰もが舌を巻くこ――

「なっ……」

不意に、リンリンが俺の手を掴んで白い太股の上に乗せた。

俺の思考回路は瞬く間にパンクし、体は硬直したまま微動だに出来ない。

なぜ彼女が突然こんな行動に出たのか理解出来るはずもなかった。だけど、それもほんの数秒。

リンリンが今朝からの一連で俺にしてきたことを考えれば、すぐに冷静さを取り戻すことが出来たのだ

何てことのない、これまたただのいたずら。

無性に腹が立った。そんなに人をからかって何が楽しいのか教えて欲しいものだ。

無神経にも思えるリンリンのほくそ笑む顔を驚きに変えてやろうと、自分の机を叩くべく右腕を振り上げる。

そして、そのまま固まった。

「あ？ この問題やってくれるのか、加住」

「は、げっ えー……ポリエチレン？」

「……加住よ。数学とポリエチレンの関連性を教えてくれるか？」

クラスから失笑が零れる。

しかしそんなことはどうでもいい。

今肝心なのは、俺をからかっていたはずのリンリンが頬を紅く染めているということだ。

おかしいじゃないか、話が繋がらない。

これではまるで、リンリンが俺を意識しているみたいではないか。

「……………」

僅かに聞こえるリンリンの声に反応した俺は、覗き込むように聞き返した。

「何？」

「……あまり見ないでと言っているのよ、恥ずかしいから……」

おいおいどうしたどうした、可愛いじゃないかオイ！

頬を染めながら恥じらうリンリンに思わずキュンキュンと胸が高鳴る。

早まる鼓動が心地良い。今の彼女を目の前にしていると見当違いな思い込みなんて一瞬で吹き飛んでしまう。

少し修にも似て、落ち着いた雰囲気を持っているリンリン。その彼女がこんなにも恥じらって動揺している姿は、普段の印象からかけ離れていて、あまりのギャップに思わず息を呑む。

だから、ここは男子代表として言うておかなければならないと思う訳だ。

「いい！　そういうのすごくいい、可愛いな畜生！」

確認しておこう。今は授業中だ。集まる視線が気持ち良い。嘘だ。別に目立ちたがり屋さんではないぞ？　ただ、内から湧き上がるものを押さえきれなかったんだ。つまり、リンリンの恥じらいにはそれぐらいの威力があった訳で。

しかもその姿を他の男子とは違って、これでもかというぐらいの特等席で拝見。ハハ、迫力が違うぜ！

「……………」

「……………」

依然として『何だこいつ』みたいな視線は集まり続けているが、リンリンはあれ以降、顔を伏せてしまった上にととう席も所定の位置へと戻してしまった。

それを寂しく思いながらも、本来のポジションに落ち着いたことによつて周囲の男子達は興味が失せたのか、何事も無かったかのよう

に授業へと意識を戻していく。  
気分が落ちていた状態から一気に高揚した所為か、未だに落ち着く様子を見せない左胸の奥。

頭の後ろで手を組みながら、姿勢悪く天井を仰ぐ。今の俺の顔はきつとだらしなく緩んでいるに違いない。

あゝ、という声にならない声を漏らしながら更に椅子に浅く座る。

授業なんて欠片も耳に入って来ないが、この時間だけはそれもいいだろう——なんて暢気な考えを秘めていた。

「ぶわあゝ……………——痛っ」

だけでも、そんな優雅な時間は、突如飛来した新品同様の消しゴムによつてあっさりと終わりを迎えたのだった。

これまでの消しカスなんて比べ物にならない質量の物体が俺の眉間へと突き刺さったのだ。

床に転がる消しゴムを拾い上げ、慌てて教室内を見渡す。

「……なんでそうなる」

まあ、何というか、すっごい形相で桃ちゃんが睨んでいた。

ほんの数m太陽に近づいただけで、これだけ体感温度というものは上がるのだろうか。

照りつける太陽はちょうど真上へと差し掛かり、今日という日も後半戦に突入を果たした昼休み。

直射日光をもともせず屋上で昼食をとる俺達って中々の猛者ではなかるうか。

正面に修。修の隣に佳苗。少し離れた所で夢ちゃんと、夢ちゃんを挟んでスケちゃんカクちゃん。さらに離れたところで目を血走らせたカシワ。

それでもって、俺の両サイドにまさかの桃ちゃんとリンリン。

「……どうして凜ちゃんもいるの？」

「今日から私も一緒するわ」

「ふん」

これでもかというくらいに飛び抜けたルックスの2人に挟まれていつも以上に彩り豊かな昼食を楽しんでいる訳だが、微妙に桃ちゃんの機嫌がよろしくないのは、はてさていつからか。今朝はあれだ

けリンリンと仲良さそうにしているのに、何だか空気が重たい。

「涼？ あなたはいつもそんなものばかり食べているの？」

俺が無邪気に頬張るコッペパンをそんなもの呼ばわりするとは何事だ。素朴な味に秘められた素材本来の旨味を冒瀆するのか。

「68円を舐めるなよ？」

安いから食べているに決まってるじゃないか。味なんて二の次だ。学生の財布は深刻であること林の如くなんだよ。我ながら意味不明だ。

「そう。よかつたらどう？ 私も意外に料理は得意なのよ？」

「おっ、是非下せえ！」

有り難いこと山の如しだなこれは。果てしなく謎だが。とりあえず俺の間違った風林火山の引用は置いておいて、リンリンの有り難い申し出に遠慮なく箸を伸ばす。

「んぐんぐ……美味しいこと火の如し……！」

別にマイブームとかではないぞ？ 武田信玄が好きな訳でもない。というか、そんなことはどうでもいい。

それよりも何だこの旨味の塊は……！ 弁当にロールキャベツとはけしからんな。抜群だぜ。

俺の物欲しそうな視線に気付いたのか、微笑みながら更に促してくれるリンリン。遠慮も忘れて次々おかずへと喰らい付いた。

「ふわぁー！ 店なんかで食べるよりも遥かに美味しい、美味過ぎる」

夏の陽射しにやられないように保冷材で冷やされていたリンリンの弁当だが、冷めても美味いとなると、できたてはこの数段上をいく訳か……将来の旦那さまが羨ましいぜ。

「そんなに褒めても何も出ないわよ？」

「いやいや、本気で美味かった。ごちそうさま」

「ふふっ どういたしまして」

はあ、何だろうか、このふわふわとした心地の良さは。俺の持っているリンリンへの印象がとんでもない勢いでプラス方向へと走り出している。

どこか上品に箸を運ぶリンリン。彼女を見ているとついつい頬が緩んでしまうのも仕方がないと思うのだ。

「ふはは……」

「ああ、加住がすっげえエロいこと考えてる時の顔してやがる！きめえ！」

「ししし、してないからっ！ いきなり何だよお前！」

幸せな時間って長続きしないもんだな。カシワが無駄にでかい声でそんなことを言うものだから、主に女子からの視線が痛い。

咄嗟のこともあるが、言われてみればそんな顔をしていたかもしれないと微かに思う訳で、あまり強く否定出来ない自分が恨めしい。挙動不審になりつつある俺の視線を恐れたのか、彷徨わせていた視線がたままいきついた先にいた夢ちゃんを守るようにスケちゃんカクちゃんが立ちはだかる。

「待て、待ってくれ誤解だ。この顔は生まれつきなんだ」

「おいおい加住、何だその卑猥な手つきは？」

「普通にグーだよ！ 力強いグーだよ！」

ただのグーにあらぬ想像を掻き立てられるのはお前だけだよカシワさんよお！

一体この空気をどうしてくれやがるんだ。地味に1番引いているのが佳苗だというのも腹立つ。

ともあれ、カシワの意図は見え見えだ。リンリンの弁当が羨ましいのなら、素直にそう言えばきっと彼女も承諾してくれただろうに。

「あんたのキモさ加減にようやく警察も重い腰を上げました、と」「上げてないから！ 密かに笑うな修う！」

佳苗の発言に合わせてクツクツクと笑いを堪える王子様。

当の本人である俺からすれば、こんな不謹慎ギャグを平然と成立させるこいつらこそ悪人だと思う。

それより、佳苗と修がカシワの突飛な言い掛かりに乗っかってくるのはある程度予想出来ていた。

こんな時に頼りになるのは、俺認定の良い人である夢ちゃんと、桃ちゃん。

夢ちゃんは残念ながら立ちはだかる2人の目が血走っているので助けを求める前に殺られる。

となれば、やはりこの状況を静めてくれるのは桃ちゃんしかない。救いを乞うような目で桃ちゃんの姿を探した。

「……………」

隣にいた桃ちゃんと目が合って、一瞬の沈黙。

だけでも、すぐに俺の心情を察してくれたのか、表情が変わった。

「……どぞっ」

「何がですか！」

恥ずかしそうに視線を逸らした桃ちゃんは確かに可愛かったけど  
そんなことはこの際どうでもいい！

アイコンタクトで挑んだ俺が馬鹿だったよ畜生！

そんなどさくさに紛れて、視界の隅に映るカシワがリンリンに弁当のおかずを要求していたが、若干喰い気味に断られていた。  
ちよっぴり嬉しかったです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3036g/>

---

最高の日々！

2011年10月5日11時41分発行